

はじめに

独立行政法人国際協力機構（JICA）では、国際協力に関する知識の普及と理解の推進、海外と国内の課題を繋げて考えられる人材と社会課題の解決を目指す人材の育成を目指し、開発教育・国際理解教育を推進しております。

文部科学省、教育委員会や教師、自治体、NGO等のみなさまと連携しながら、① JICAの海外での協力現場における「知見の（国内への）還元」、②地球規模課題等への取組を紹介し「考える機会の提供」、③国内の地域の課題と地球規模の課題を結び付ける「橋渡し役」となり、その解決のために行動する児童・生徒を育てていただく、の3点に重点を置き、「持続可能な社会づくりの担い手を育てる」国際理解教育・開発教育の支援に取り組んでいます。

JICAは、学校教育の現場で次代を担う児童生徒の教育に携わり、国際理解教育・開発教育に関心を持つ教師のみなさまを対象として、教師海外研修を実施しています。教師の方々に実際に開発途上国を訪問いただき、開発途上国が置かれている現状や国際協力の現場、開発途上国と日本との関係に対する理解を深めていただき、その成果を、学校現場での授業実践等を通じて、教育活動に役立ててもらうことを目的とし、この研修を約60年にわたり継続して実施しています。

今年も昨年に引き続き JICA 東京・JICA 北陸での合同開催となり、1都6県からの24名の教師のみなさまタンザニア・バングラデシュの2コースに分かれての参加により実施しました。両国ともに、「教育」「保健」「インフラ整備」など、さまざまな切り口で JICA 事業や海外協力隊の活動現場、現地で活動する団体などを訪問しました。研修の中で色々な人と出会い、交流することで、「国際協力とは何か」「幸せとは何か」「物事を自分の尺度で測ってしまっていないか」など、改めて考えるきっかけとなりました。

例年、10月～12月には、教師のみなさまが研修の成果を活用した授業を実践しています。本報告書は、今年度の研修の概要及び参加者の勤務校における授業実践の実例をまとめたものです。教育現場の第一線で日々生徒たちと向き合っている教師の方々が、それぞれの教育現場で実践を行ってくださることは我々の大きな励みとするところです。これらを通じて、持続可能な社会実現への児童・生徒たちの理解が深まり、周りの方々にも波及していくような好循環が生まれることを期待しています。

結びに、本研修の実施にあたりご支援をいただいた各教育委員会並びに関係諸団体みなさまに感謝を申し上げますとともに、今後とも JICA が取り組む市民参加協力事業にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2026年3月

独立行政法人国際協力機構（JICA）

東京センター

北陸センター

所長 紺屋 健一

所長 折田 朋美

目 次

はじめに	1
1. 参加者一覧	3
2. 教師海外研修とは	4
3. 派遣前研修	5
4. 海外研修（タンザニア）	7
5. 海外研修（バングラデシュ）	14
6. 派遣後研修	21
7. 授業実践	23
8. 授業実践報告会	167
9. 総括研修	170
10. 研修参加者より	172
11. アドバイザーの先生達から	176
12. JICA 開発教育教材案内	177
13. フォトランゲージの実施法	179
おわりに	180



参加者一覧



タンザニアコース参加者

氏名	都県	学校名	担当教科・科目
有賀 早也香	群馬	ぐんま国際アカデミー 中高等部	技術
井土 恵美里	埼玉	埼玉県立幸手桜高等学校	国語
北村 望	東京	世田谷区立千歳中学校	英語
澤田 将智	埼玉	埼玉県立大宮東高等学校	地理
執行 稜	千葉	市川市立宮田小学校	全教科
田中 利奈	群馬	伊勢崎市立赤堀南小学校	複数教科
堀越 日南子	東京	東京都立西高等学校	英語
松本 あゆみ	埼玉	埼玉県立上尾特別支援学校	全科
水島 一真	石川	白山市立東明小学校	複数教科
南沢 青和	長野	長野県千曲市立屋代小学校	複数教科
渡邊 大介	東京	八王子学園八王子高等学校	公民
綿貫 誠	千葉	千葉県立津田沼高等学校	地歴公民

バングラデシュコース参加者

氏名	都県	学校名	担当教科・科目
浅野 恭子	東京	東京都立町田総合高等学校	外国語（英語）
太田 祥子	東京	駒場東邦中学校・高等学校	社会科（地理、公民）
大槻 研	東京	東京都立大江戸高等学校	公民
大野 健一	埼玉	埼玉県川口市立飯仲小学校	外国語、日本語指導
木谷 隆太郎	東京	東京都立駒場高等学校	地理
清水 歆奈	東京	東京都立南多摩中等教育学校	英語
鶴岡 美沙	千葉	八千代市立村上小学校	全教科
西家 久美子	新潟	魚沼市立湯之谷小学校	全科
萩原 英輝	埼玉	学校法人開智学園 開智所沢小学校	全科
山本 有起	千葉	千葉県立犢橋高等学校	情報
吉元 恵那	千葉	千葉県立桜が丘特別支援学校	社会科 各教科等合わせた指導
渡辺 和宏	東京	青梅市立第七小学校	音楽、外国語活動、図書

アドバイザー

氏名	所属
佐藤 真久	東京都市大学 教授（JICA 東京 教師海外研修アドバイザー）
白水 始	国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長
畑 文子	教育環境デザイン研究所 研究員

JICA 運営

氏名	所属
古賀 聡子	JICA 東京センター 市民参加協力第一課
三井 久美子	JICA 東京センター 市民参加協力第一課（～2025年9月）
高橋 雪子	埼玉県国際協力推進員（～2025年7月）、JICA 東京センター市民参加協力第一課
小倉 健	JICA 東京センター 学校教育アドバイザー（埼玉県教育委員会より派遣）
高橋 理恵	JICA 北陸センター 業務課
ムーア 美紀	長野県国際協力推進員（～2026年2月）
佐藤 利春	長野県国際協力推進員
柳井 亮人	群馬県国際協力推進員
岡本 多永	千葉県国際協力推進員
大山 達也	新潟県国際協力推進員
湯本 礼士	埼玉県国際協力推進員
橋本 流詩亜	埼玉県国際協力推進員（総合教育センター配属）
松井 和久	東京都国際協力推進員（JICA 東京センター配属）

2

教師海外研修とは

教師海外研修の歴史

1965年、日系移住地に高校教員を送ることから始まり、現在は小学校・中学校・高校・特別支援学校の先生を対象に実施しています。一般教員コース・行政主幹コース（教育委員会指導主事以上、教頭、校長等）あわせて、これまでに全国から約3,500名の教員を開発途上国の現場に派遣しています（2025年現在）



目的

1. 国際理解教育 / 開発教育の実践と推進に意欲のある教員が、本研修を通じ、開発途上国の現状・課題、日本との関係、国際協力の意義について理解を深める。
2. 研修参加者が本研修の成果を活用し、各地域で学校教育関係者等への国際理解教育 / 開発教育の理解促進を図り、情報を共有し、ネットワークを構築する。



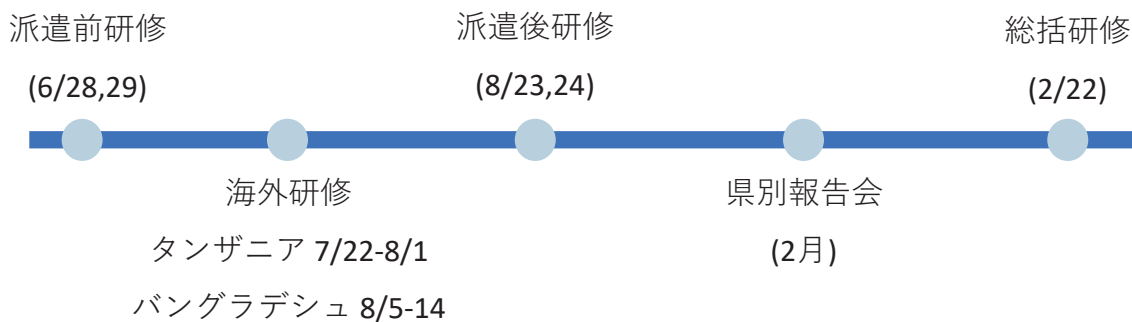
主催

独立行政法人 国際協力機構 東京センター（JICA 東京） / 北陸センター（JICA 北陸）

後援

外務省、文部科学省、東京都教育委員会、一般財団法人東京私立中学高等学校協会、埼玉県教育委員会、さいたま市教育委員会、一般社団法人埼玉県私立中学高等学校協会、千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、一般社団法人千葉県私立中学高等学校協会、群馬県教育委員会、群馬県私立小・中・高等学校協会、新潟県教育委員会、新潟市教育委員会、新潟県私立中学高等学校協会、長野県教育委員会、公益社団法人長野県私学教育協会、石川県教育委員会、富山県教育委員会、福井県教育委員会

スケジュール（2025年度）



継続的な実践・地域への還元



派遣前研修

6月28日(土)、29日(日)

自分の変容・児童生徒の変容をみとる1歩目

6/28 (土)

時刻

プログラム

● 10:00

開会、自己紹介

● 11:00

【見学】 JICA 地球ひろば体験ゾーン見学

展示からヒントを…

地球ひろばの体験ゾーンを見学しました。SDGsのダッシュボードや多文化共生をテーマにした展示を見て、授業のネタやヒントになりそうなものを探します。



● 11:45

バスで TIC 移動

● 12:30

昼休憩

● 13:30

【講義】 国別説明会

訪問国を知る

タンザニア・バングラデシュのコースに分かれて、それぞれ訪問国の歴史や経済、JICA 事業について JICA 職員から話を聞きます。皆さんメモを取りながら説明に聞き入っていました。



● 14:20

【説明】 コース / 役割分担について

● 15:20

休憩

● 15:35

【講義・ワーク】 反転学習セッション～自身の経験と関連づけた学びほぐし
東京都市大学教授 佐藤 真久先生

研修に必要な視点を学ぶ

本研修のアドバイザーである、東京都市大学の佐藤先生による講義です。事前課題だったオンデマンド学習教材(※)の復習をしながら、四つのレンズ・多様なグローバルのものの見方など、この研修に必要な視点についてお話いただきました。



● 16:20

【チームづくり】

● 授業案の共有 ● チーム決め

チーム作り

今日の最後はチーム作り。授業実践で何をテーマにどんな授業をしたいかを共有しながら、近いテーマの人同士でチームを作っていきます。今年はどうなチームができるのでしょうか…!



● 17:50

諸連絡

6/29 (日)

時刻

プログラム

● 9:30

事務連絡

● 9:40

【ジグソー体験】タンバンジャパン

国立教育政策研究所 白水 始先生
教育環境デザイン研究所 畑 文子先生

体験①知識構成型ジグソー法

今日の午前中は児童生徒になって授業体験！1コマ目は「知識構成型ジグソー法」を体験しました。グループでどんな旗をデザインするか、たくさん対話しながら活動をしていました。



● 11:00

休憩

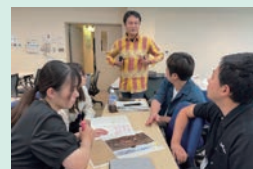
● 11:10

【授業研究（過年度参加者）】フォトランゲージ

田仲 永和先生（君津市教育センター 指導主事）

体験②フォトランゲージ

グループごと1枚の写真を選び、そこから想像できること・疑問などを出し合います。海外研修でこんな写真を撮っていると授業にできるのか！のヒントになりました。



● 12:15

【講義】子ども達の学びにつなげる授業

国立教育政策研究所 白水 始先生

● 13:00

休憩

● 14:00

【チーム活動】

- 授業実践の中でやりたいこと
- チームに分かれて現地で得たい教材等のまとめ

集める材料を考える

海外研修に行く前に、どんな情報やネタを集めてきたいのか整理することは大切です。こんな授業をしたいから、これは聞いてきたい！こんな情報が手に入れられるといいよね、をチームごとに話し合います。



● 15:15

【共有】各チームから

● 15:35

派遣前研修振り返り

● 16:05

事務連絡・写真撮影・中締め

● 16:20

国ごとの打合せ（適宜解散）

【オンデマンド教材】

オンデマンド研修①

持続可能な社会の担い手づくりへ
～学びの作戦変更、持続可能な
開発のための教育 (ESD) の経験



オンデマンド研修②

持続可能な社会の担い手づくりへ
～グローバルなものの見方を活かす





海外研修（タンザニア）

タンザニア連合共和国

(The United Republic of Tanzania)



[首都] ドドマ（法律上の首都であり、国会議事堂が置かれている）
※商業中心：ダルエスサラーム

[面積] 947,000 平方キロメートル

[人口] 68,560,157 人（2024 年、世界銀行）

[民族] スクマ、ニャキューサ、ハヤ、チャガ、ザラモ等（約 130）

[言語] スワヒリ語（国語）、英語（公用語）
成人識字率：資料により差があり、78%（2022 UNESCO）、
83%（2024 国内統計）とされている

[宗教] イスラム教（約 40%）、キリスト教（約 40%）、土着宗教（約 20%）

[主要産業] 農業、鉱業、観光、製造業

[GDP] 788 億ドル（2024 年、世界銀行）

[一人当たりの GDP] 1,186 ドル（2024 年、世界銀行）

[経済成長率] 5.5%（2024 年、世界銀行）

[タンザニアの対日貿易]

対日貿易

(ア) 貿易額（2024 年、外務省）

輸出：177.73 億円 / 輸入：764.98 億円

(イ) 主要品目（2022 年度）

輸出：コーヒー、ゴマ、タバコ、貴金属

輸入：自動車、鉄鋼、機械類

[通貨] タンザニア・シリング (TZS)

[日本の援助実績（～2023 年度）]

有償資金協力：1,252.58 億円、無償資金協力：1,854.51 億円、
技術協力実績：1,014.51 億円 (E/N 累計)

[在留邦人] 224 人（2024 年 10 月、外務省）

[在日タンザニア人数] 650 人（2024 年 12 月）

[外務省ホームページより]

タンザニア日程

日			内容
1	7/22	火	・羽田発→香港着
2	7/23	水	・香港発→ヨハネスブルク→ダルエスサラーム着→ホテル
3	7/24	木	・事務所ブリーフィング ・【協力隊（コミュニティ開発）】活動先 チャリンゼ見学
4	7/25	金	・【協力隊（小学校教諭）】活動先 Muwanbao primary school 見学 ・【協力隊（看護師）】活動先 バガモヨ県病院見学
5	7/26	土	・ダルエスサラーム→ザンジバル島（フェリー） ・【無償資金協力】マンディ魚市場見学 / 奴隷貿易博物館見学 ・ザンジバル島→ダルエスサラーム（フェリー）
6	7/27	日	・市内散策、市場見学、ミーティング・振り返り
7	7/28	月	・【協力隊（体育）】活動先 Azania junior high school 見学 ・【協力隊（障害児・者支援）】活動先 Yonbo vocational training schools for children and adults with disabilities 見学 ・ダルエスサラーム発→キリマンジャロ着（旅客機）
8	7/29	火	・【有償資金協力】Kenya-Tanzania Power Interconnection 見学 ・【技術協力】KAIZEN プロジェクト 実施企業 A to Z 見学 ・マイクロバスでモシに移動
9	7/30	水	・【協力隊（PC インストラクター）】Vocational school (VETA) 見学 ・【技術協力】農業 TANRICE Lower Moshi Irrigation Scheme Kilimanjaro Agricultural Training Center 見学
10	7/31	木	・研修振り返り、報告会 ・【有償資金協力】アルーシャ-ホリリ間道路改修事業/協力隊員記念碑への献花 ・キリマンジャロ発→アジスアベバ→
11	8/1	金	・成田着

7月27日(日)

アフリカンアートの現在から ○○○○○○○○○○学校

渡邊 大介



訪問先 / 場所：ティンガティンガ村

「そりゃそうだよな。」

芸術作品は、生きているアーティストから買ってほしい。死んだアーティストに金は必要ない。アートや芸術にはどこか余裕が漂うものだが、ティンガティンガ村に余裕はない。あるのは、生きるため、生活のための作品。廃材を用いた「アフリカンアート」には、まだ貧しいアフリカの現状と、今を生きる遅しさが象徴されている

7月27日(日)

わかりそうでわからないこと ○○○○○○○○○○学校

南沢 青和



訪問先 / 場所：Dar es Salaam 市内

現地のマーケットには新鮮な野菜や果物が並び、生活の息づかいが感じられた。でも私は何も買えなかった。衛生環境に迷い、手に取ったのは富裕層や外国人向けのスーパーの商品と観光客向けのお土産だけ。触れたいのに触れられない日常。現地の生活を知ろうとしても、結局私はまだ何もわかっていない気がした。

7月28日(月)

Grass Roots 草の根 ○○○○○○○○○○学校

堀越 日南子



訪問先 / 場所：ヨンゴ障害者職業訓練校

訪問先は草の根・人間の安全保障無償資金協力により支援を受けていた。協力隊の木村さんによる学校行事やパソコン教室の運営は、まさに草の根の実践。生徒たちの笑顔が印象的だった。一方で、卒業後や学校へ行けない障害者への支援の課題も感じた。協力隊がタンザニアの地で蒔いた種が、今後も花を咲かせ続けてほしい。

7月30日(水)

農業開発での変容とは？

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇学校
有賀 早也香



訪問先 / 場所: KATC(キリマンジェロ農業研修センター)

「KAIZEN」を取り入れたことで、無駄を省き、スペースを確保し、作業効率を向上させることができた。ジェンダー研修では、男女格差を可視化することで、男性が自分たちの改善に関心を持つようになった。共通する課題は、持続可能性である。教育現場も、同様の状況ではないだろうか。

7月31日(木)

maisha ni safari

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇学校
堀越 日南子



訪問先 / 場所: タンザニア事務所報告会

毎日の振り返りを集め、10日間を共にした仲間へ言葉を紡いだ。浅井次長の言葉のとおり、私たちが見たタンザニアはすべてではない。この地で得た視点を自分に落とし込み、日本でも学び続けることを決意した。スワヒリ語で「maisha ni safari 人生は旅だ」。それは学びの旅でもある。

7月31日(木)

To you on Mount Kilimanjaro –R.I.P.–

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇学校
綿貫 誠



訪問先 / 場所: Moshi Japan Overseas Cooperation Volunteers Memorial Monument / Moshi

1985年11月21日、他国に青年海外協力隊として派遣されていた隊員がタンザニアを訪問した際、交通事故に遭い命を落とした。彼らが愛したキリマンジャロが見える方向に慰霊碑が建てられている。志半ばで亡くなられた方々の「国際協力」への想いを、後世に伝えていきたい。



海外研修（バングラデシュ）

バングラデシュ人民共和国 (People's Republic of Bangladesh)



- [首 都] ダッカ
- [面 積] 14万7千平方キロメートル（日本の約4割、バングラデシュ政府）
- [人 口] 1億7,356万人（2024年、世界銀行）
- [民 族] ベンガル人が大部分を占める。ミャンマーとの国境沿いのチッタゴン丘陵地帯には、チャクマ族等を中心とした仏教徒系少数民族が居住。
- [言 語] ベンガル語（国語）、成人（15歳以上）識字率：77.7%
(2022年、バングラデシュ統計局)
- [宗 教] イスラム教徒91%、その他（ヒンズー教徒、仏教徒、キリスト教徒）9%
(2022年、バングラデシュ統計局)
- [主要産業] 衣料品・縫製品産業、農業
- [G D P] 4,501億ドル（2024年、世界銀行）
- [一人当たりのGDP] 2,593ドル（2024年、世界銀行）
- [経済成長率] 7.10%（2022年度 ※最新確定値 2022年度・バングラデシュ統計局）
- [バングラデシュの対日貿易]
 - 対日貿易
 - (ア) 貿易額（2022～23年）※単位：百万ドル（US\$）
輸出：1,901 輸入：2,030
 - (イ) 主要品目（2022年度）
輸出：縫製品、ニット製品、革・革製品、靴・帽子、革製品等
輸入：鉄鋼、船舶、車両、鉱物性燃料、原子炉、ボイラー、機械・電気製品
- [通 貨] タカ
- [日本の援助実績（2021年度）]
 - 有償資金協力：3,105.64億円（累計総額 27,063.93（E/Nベース）） /
 - 無償資金協力：39.63億円（累計総額 5,055.63（E/Nベース）） /
 - 技術協力実績：41.43億円（累計総額 999.45（JICA経費ベース））
- [在留邦人] 1,122人（2023年10月1日現在）
- [在日バングラデシュ人数] 24,940人（2023年6月、入国管理局）

[外務省ホームページより]

バングラデシュ日程

日			内容
1	8/5	火	・羽田発→ダッカ着 ・JICA バングラデシュ事務所訪問 ブリーフィング
2	8/6	水	・Metrorail Exhibition and Information Center 訪問 都市高速鉄道ダッカメトロ (MRT) 乗車 (有償資金協力・技術協力) ・教育省 Ministry of Primary and Mass Education: MOPME 表敬訪問
3	8/7	木	・公立学校 Azamapur Government Primary School, Uttara 訪問 ・イングリッシュメディアム (私立の英語教育学校) International Hope School Bangladesh 訪問 ・教育局配属の亀井専門家 (教育アドバイザー) によるバングラデシュの教育についてのレクチャー
4	8/8	金	オールドダッカ (旧市街) ・NGO エクマッタのストリートチルドレン支援 取り組み視察 ・Aarong、Jattra など手工芸品店やスーパー訪問 教材収集
5	8/9	土	ノルシンディ県 ・非感染性疾患対策強化プロジェクト現場視察 ・PAPRI (シャプラニールのパートナーNGO)活動現場(私立学校)訪問
6	8/10	日	・BKSP (Bangladesh Kira Shikkha Protishtan : 国立スポーツ研究所) 訪問 隊員活動視察 (職種: サッカー) ・Primary Teachers Training Institute (PTI) : 初等教育訓練校訪問 ・BRAC Kumon Ltd.教室視察 (JICA 民間連携事業活用事例)
7	8/11	月	・EPZ (export processing zone) 日系企業丸久訪問 ・Narayankul Dream Model School & College (私立・日系 NGO 学校併設) 訪問
8	8/12	火	・桶谷式桶谷式母乳技術強化プロジェクト (草の根技術協力) 訪問 ・ダッカ大学 日本語科授業見学・交流 ・JICA バングラデシュ事務所にて振り返り
9	8/13	水	ダッカ発
10	8/14	木	羽田着

8月9日(月)PM

密林の先に…

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇学校
萩原 英輝



訪問先 / 場所：ノルシンディ ニホンボランティアサポートスクール

ダッカから車で2時間、ノルシンディの私立学校を訪問。NGO PAPRI や NBS が関わる学校で、ジャングルのような景色の先にあった。休みの日にもかかわらず多くの先生と生徒が登校してくれたことに感謝。生徒たちは礼儀正しく、質問コーナーでは将来の夢や好きな時間を答えてくれたが、先生の「いつもの元気は？」という言葉から、緊張していた様子もうかがえた。

8月10日(日)AM

どの子供にもチャンス！

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇学校
渡辺 和宏



訪問先 / 場所：BKSP（国立スポーツ研究所）

バングラデシュの国立スポーツ研究所 BKSP を視察。全国から選抜された児童は定員 1000 人に対し応募約 5 万人。合格者は 7 センターで基礎を学び、週 4 日の練習と学習を両立し、数ヶ月ごとの実技試験で進学が決まる。厳しい競争の中、スポーツを通じ学ぶ子どもたちの眼差しは真剣。日本で試合を控える U17 チームも応援したい。

8月10日(日)PM

手作り教材の温かみ

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇学校
太田 祥子



訪問先：Primary Teacher Training Institute

教育学部を出ても教員免許が取得できるわけではなく、10ヶ月の研修で正規職員に。小学校の研修中の先生たちは楽しそうに手作り教材を作っていた。背景には政変時の非正規教員デモがあり、政治と教育制度の関係を感じる。温かみある教材に、この国の笑顔の理由を一つ掴んだ。パワポ使い回しの自分の授業を反省した。

8月11日(月)AM

日本の技術の伝承

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇学校
山本 有起



訪問先 / 場所：EPQ 丸久

バングラデシュの衣料品工場で、綿から出荷までの一貫製造を見学した。日本の技術も取り入れられ、針の長さ確認や道具の返却など細かな管理が徹底されている。毎日使用する服の製造過程を実際に見た経験を、日本の子どもたちに写真や動画で伝えたい。

8月11日(月)PM

Bangladesh is a scary country It's not, it's a country with a heart

○○○○○○○○○○学校
浅野 恭子



訪問先 / 場所: Narayankul Dream Model School & College

自然に囲まれた6～12年生の学校では、学費や給食が無料の生徒が資料によると3分の2を占める。郁文館夢学園をモデルに清掃やドリームボード、ダイアリーを導入。夢を尋ねると理由とともに力強く答える姿が印象的で、日本人の「夢」と心の教育を考えさせられた。

8月12日(火)AM

Breast milk saves lives, light and shadow of support

○○○○○○○○○○学校
鶴岡 美沙



訪問先 / 場所: 桶谷式母乳技術強化プロジェクト

Bangladeshでは、汚染水による粉ミルクや母乳不足で乳児の命が危険にさらされてきた。日本発の桶谷式乳房管理法が1994年に導入され、母乳外来が広がり多くの命を救っている。今、その温もりをストリートチルドレン家庭や無国籍の母にも届けられるかが問われている。

8月12日(火)PM

Learning and living together Classroom in Bangladesh

○○○○○○○○○○学校
吉元 恵那



訪問先 / 場所: ダッカ大学 日本研究学科
Department of Japanese studies

ダッカ大学には全国から優秀な学生が集まり、日本研究学科の半数は日本に興味を持って進学する。前列には全盲の学生が座り、インクルーシブ教育のもとオーディオブックを活用しながら学び、来年日本へ留学予定だ。特別な配慮を必要とする子どもに出会う機会は少なかったが、仲間に支えられ力強く学ぶ姿に、この国の教育への希望を感じた。

8月13日(水)AM

Meeting on a rainy day, Wisdom and warmth of daily life

○○○○○○○○○○学校
西家 久美子



訪問先 / 場所: バザール

10日間の研修を終え、帰国前にバザールを訪れた。雨で足元はぬかるみ、人々は「頭を冷やすと病気になる」という言い伝えからビニール袋をかぶって歩く。雨の日だけの光景だ。短い時間ながら、雑踏の活気や色鮮やかな野菜、すれ違う笑顔に触れ、 Bangladeshの心の豊かさを改めて感じた。

8月13日(水)PM

学びと信仰が結びつく、 マドラサの教室

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇学校
大野 健一



訪問先 / 場所 : Faizur Rahman Ideal Institute

この学校は、私が入院していた病院の代表ドクターの父が設立した。完全なマドラサではなく、一般教科に加えイスラムの道徳・社会価値を学ぶ。学生数は約7,000人、キャンパスは3つ、男女は午前午後に分かれる。幼少期からの学びが敬虔なムスリムを育て、揺るぎない価値を共有する社会は、日本にはないと感じた。

8月14日(月)AM

落書きから壁画へ、 街を彩る学生たちの力

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇学校
大野 健一



訪問先 / 場所 : 壁画アート

昨年8月の政変後、ダッカの街には旧政権への悪口が溢れた。一部の学生は「悪意ばかりでは心が荒む」と訴え、壁画アートを始めた。高架下などに描かれた作品は、自然やメッセージ性を持ち、人の心を動かす力がある。日本の学生は、このパワフルな取り組みに何を語れるだろうか。

8月14日(木)PM

「今日の1枚」最後に飾る バングラアイス

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇学校
大野 健一



訪問先 / 場所 : イグルーアイスクリーム

バンラデッシュ国内限定のアイスクリームメーカーを訪問。ダッカ南部の工場では約1000人が働き、パッケージから製造まで自社で一貫生産している。日本人には甘さが強めだが、現地の優しさを思わせるホッとする味だった。



派遣後研修

8/23(土)、24(日)

自分の変容をしっかりと認識、児童生徒の変容を描く

8/23 (土)

時刻

プログラム

10:00

【開会】プログラム説明、過年度参加者自己紹介

10:15

各国での学びを共有

タンザニア・バングラデシュでどんなところを訪問し、何を感じたのか…。先生達が写真を使って各訪問先での様子を発表します。日々の気づきやモヤモヤが詰まっていた、どちらのコースも毎日濃い内容だったことが伝わってきました！



11:15

休憩

11:25

【講義・ワーク】どんなレンズや視点を獲得したか

東京都市大学教授 佐藤 真久 先生

研修で獲得した視点は…？

自身にとっていちばん印象に残った体験や児童・生徒に伝えたいこと、研修で得た「グローバル社会の多様なものの見方」について、社会・経済・文化の切り口で分かれたチーム内で共有し合います。



12:35

休憩

13:35

【講義・ワーク】

国内の多文化共生について～国内で児童生徒への橋をどうかけるか～

JICA 東京 松井 和久 国際協力推進員

国内の多文化共生について

海外の現場を見てきた先生達に、改めて日本国内の国際化に目を向けてもらいます。日本人とは？日本人らしさとは？多様化している日本国内の現状について、改めて考える時間となりました。



14:35

【講義】

子ども達の学びを見取るために～授業でどんな学びを引き起こしたいか～

教育デザイン研究所 畑 文子 先生

子ども達の学びを見取るために

海外研修でたくさんの経験をしてきた先生達。それを実際授業に落とし込むには…？子ども達の学びを見取るという大事なポイントに立ち返り、これからの授業作りに向けて考えを整理しました。



● 14:55

いよいよ授業作りへ！

それぞれが実践したいテーマごと、5つのチームに分かれて授業案を共有し合います。色々な先生の意見を聞きながら、大きく授業の流れを変えたり、児童生徒への問いを変えたり…。まだまだ悩みがたくさんです！



● 16:30

【全体共有】 ● 他のチームに共有したいこと（悩み、気づき）

● 17:05

事務連絡、写真撮影

8/24 (日)

時刻

プログラム

● 9:30

【諸連絡】 本日のプログラム説明 / 諸連絡

● 9:45

チームをシャッフル！

社会・経済・文化のチームをシャッフルして、違う先生に授業案を見てもらいます。色々な視点から質問・アドバイスをもらいながら、自身の授業案をブラッシュアップしていきます。大学生のインターンも加わり、より児童生徒に近い目線での意見ももらうことができました。



● 12:15

休憩

● 13:15

チームに戻ってまとめ

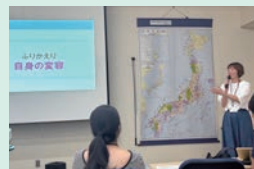
1日目の授業案から色々な先生のアドバイスをもらって、だいぶ授業実践のかたちが見えてきました。まだまだ悩むところが多い…！という先生も。



● 14:15

自身の変容を振り返る

派遣前研修・海外研修・派遣後研修を通じて、色々な経験をしてきた先生達。児童生徒に思いを馳せて授業作りを進めています。ご自身の変容についても振り返ってもらいました！それぞれの発表に大きく傾きながら聞き入る先生達の姿が印象的でした。



● 15:45

休憩

● 15:55

過年度参加者から

以前、教師海外研修に参加したことのある先生達にも、今取り組んでいることを発表してもらいました！研修を終えてもなお積極的に活動している先生達に、今年の参加者もきっとたくさん刺激を受けたと思います。今後の活躍も楽しみです！



● 16:25

あいさつ、諸連絡

2日間お疲れさまでした！

夏休みが終わる前の貴重な2日間を、どっぷりと研修に費やした24名のアツイ先生達。これから学校も始まり忙しくなる中で、授業実践もしていくことになりますが、どんな授業をするのかとっても楽しみです！



● 16:35

解散



授業実践



テーマごと、4～5名ずつのチームに分けられました。校種が違うからこそその視点、タンザニアコース・
バングラデシュコースの経験からの視点でアドバイスをし合いながら授業を作っていました！

【社会・生きがい】 P.24～

堀越 日南子（タンザニア・東京・高）
有賀 早也香（タンザニア・群馬・中等一貫）
井土 恵美里（タンザニア・埼玉・高）
澤田 将智（タンザニア・埼玉・高）
浅野 恭子（バングラデシュ・東京・高）



【経済】 P.54～

渡邊 大介（タンザニア・東京・中等一貫）
木谷 隆太郎（バングラデシュ・東京・高）
大槻 研（バングラデシュ・東京・高）
太田 祥子（バングラデシュ・東京・中等一貫）



【文化・言語】 P.77～

北村 望（タンザニア・東京・中）
綿貫 誠（タンザニア・千葉・高）
清水 歆奈（バングラデシュ・東京・中等一貫）
大野 健一（バングラデシュ・埼玉・小）



【文化・食 / 環境】 P.101～

松本 あゆみ（タンザニア・埼玉・特別支援）
水島 一真（タンザニア・石川・小）
鶴岡 美沙（バングラデシュ・千葉・小）
西家 久美子（バングラデシュ・新潟・小）
山本 有起（バングラデシュ・千葉・高）



【文化・つながり】 P.131～

執行 稜（タンザニア・千葉・小）
南沢 青和（タンザニア・長野・小）
吉元 恵那（バングラデシュ・千葉・特別支援）
田中 利奈（タンザニア・群馬・小）
萩原 英輝（バングラデシュ・埼玉・小）
渡辺 和宏（バングラデシュ・東京・小）



Lesson 6 IT and Life “Living for Today”

【実践者】

氏名	堀越 日南子	学校名	東京都立西高等学校
担当教科等	外国語 (英語コミュニケーションⅡ)	対象学年(人数)	2年A組(39名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年11月～12月(5時間)		

実施概要

01 実践する教科・領域

外国語(英語コミュニケーションⅡ)

02 単元名と単元目標

単元名: Lesson 6 IT and Life “Living for Today”

単元目標: タンザニアの文化や社会に対して理解を深める活動を通して、自分自身の生きがいや価値観を捉え直し、これらを適切に表現したり伝え合ったりすることができる。

関連する学習指導要領上の目標: (3) 話すこと [やり取り] イ

03 単元の評価規準

① 知識・技能	ITに関する語彙・表現、倒置・関係副詞非限定用法の文法事項の理解を深めるとともに、物語文を聞いたり読んだりする活動において、これらを適切に活用できる。
② 思考・判断・表現	自分自身の生きがいや価値観について話したり書いたりする活動において、これらを適切に表現したり伝え合ったりすることができる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	タンザニアの文化や社会に対する理解を深め、主体的、自律的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由・単元の意義〉

本単元の題材である Living for Today は、教師が JICA 教師海外研修中にタンザニアで触れた生きがいや価値観である。小川さやか著『「その日暮らし」の人類学 もう一つの資本主義経済』(光文社、2016年)でこれらは述べられている。タンザニアの今を豊かに生きる価値観に触れることで、生徒自身の生きがいや価値観に揺らぎを与えることを目指す。

〈児童/生徒観〉

本校の生徒は、高い知的好奇心を持ち、英語学習にも前向きに取り組んでおり、国際理解や国際交流への興味関心は高い。ただし、アフリカへの興味関心は限定的であるため、教師のタンザニアでの実体験や写真を多く取り入れる。また、2学年生徒は進路選択や大学受験の悩みを抱え始めており、本単元で異なる価値観に触れることは有効である。

〈教材観〉

本科目の教科書『ELEMENT English Communication II』（啓林館）の Lesson 6 IT and Life では、A Long Way Home という題の、IT の発展がインドの 1 人の青年の人生にもたらした影響についての物語文を読み、その内容についてリテリング活動を行う。教科書の学習内容と関連付け、インドとタンザニアの関係や、タンザニアでの IT の発展についても取り上げ、学習内容を発展させる。

〈指導観〉

本科目は、教科書と大学入試長文読解問題集を主に使用しながら、ALT とのチーム・ティーチングやオンライン英会話活動も行い、英語の 4 技能 5 領域を統合的に育成している。本単元では、本研修で学習した、知識構成型ジグソー法やフォトランゲージを実践することで、題材内容を中心に据えながら、これらを理解し、考えを深め、英語で表現することを重視する。

05 単元計画（全 5 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	Introduction	タンザニアへの興味関心を高めることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ Presentation (夏休みの思い出を 1 枚の写真とともに紹介し合う) ・ Photolanguage (教師のタンザニア滞在記について聞く) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒が準備した写真 ・ 自作スライド (フォトランゲージ用の写真)
2	Lesson 6 #1	A Long Way Home (物語文) を聞いたり読んだりして的確に理解することができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ Dictation (リスニング帯活動) ・ Extensive Reading (多読帯活動) ・ Speed Reading ・ Vocabulary ・ Comprehension (Overview, Main Idea, Details, Recognizing Tone) ・ Discussion 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教科書 ・ 自作スライド
3	Lesson 6 #2	A Long Way Home の内容について話したり書いたりして適切に表現することができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ Dictation (リスニング帯活動) ・ Extensive Reading (多読帯活動) ・ Speed Reading ・ Retelling ・ Writing Opinions 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教科書 ・ 自作スライド
4	Lesson 6 #3	A Long Way Home の背景にある開発途上国の現状や課題に対して理解を深めることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ Dictation (リスニング帯活動) ・ Extensive Reading (多読帯活動) ・ Watching a Video ・ Discussion 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自作スライド ・ 動画 YouTube:Saroo Brierley on his life journey that inspired "Lion")
5 本時	Application	タンザニアの Living for Today の価値観に対して対話を深めることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ Warm-up ・ Jigsaw Activity (Pre, Expert, Jigsaw, Cross Talk, Post) ・ Discussion ・ Reflection 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自作ワークシート ・ 自作スライド

06 本時の展開（5時間目）

本時のねらい：タンザニアの Living for Today の価値観に対して理解を深めるジグソー活動を通して、自分自身の生きがいや価値観を捉え直し、対話を深めることができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
<p>導入 (5分)</p> <p>展開 (40分)</p>	<p>○Warm-up 【Step 1 : Pre】 T : We learned about Saroo, an Indian boy, and how IT changed his life. What do you think Saroo values in his life? Also, what do you value in your life? S1 : I think Saroo lives for his family and for his identity. S2 : I'm not sure yet, but maybe I live for my family and for my dreams.</p> <p>○Jigsaw Activity T : Do you remember which country I visited this summer? Yes, Tanzania! Today, I want you to think about what people in Tanzania value in their lives. What do you think people in Tanzania value in their lives? 【Step 2 : Expert】 T : First, you will receive one of three reports: A, B, or C. Next, get into groups of three or four and read the same report together. Then, discuss the content with your group to make sure you all understand it. S1 : Report A "Nyerere and Ujamaa" S2 : Report B "Swahili and Culture" S3 : Report C "Mobile Phone and M-Pesa"</p> <p>【Step 3 : Jigsaw】 T : Get into new groups of three. Make sure your group has three different reports. Then, explain your report, discuss your ideas, and work together to answer today's question. S1 : I think people in Tanzania value connection and cooperation in their lives. S2 : Why do you think so? S3 : All three reports talk about their relationships with family, friends, and the community.</p> <p>○Discussion 【Step 4 : Cross Talk】 S : We think people in Tanzania live for connection and cooperation. All three reports show that they value enjoying the present moment with their family, friends, and community. T : An anthropologist who studies Tanzania says that people there often "live for today" and live fully in the</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書の学習内容と関連付け、自分自身の生きがいや価値観を意識化するきっかけにする。 ・ロイロノートのアンケート機能を活用し、自分自身の意見を共有させる。 ・教師のタンザニアでの実体験や写真を多く取り入れ、タンザニアへの興味関心を高めさせる。 ・スライドで主発問を明示する。 ・スライドで図示し、活動説明を簡潔にする。 ・グループで同じ資料を読み合い、そこから読み取れるタンザニアの人々の価値観を言語化させる。 ・エキスパート活動中は、必要に応じて、追加で調べ学習をしてもよいことにする。 ・自分自身の言葉で、意見が伝わるように説明することを意識させる。 ・ジグソー活動中は、机間指導をし、各グループの対話を支援する。 ・数グループに全体へ意見とその理由を発表させる。その後、ロイロノートの共有機能を活用し、思考を深めさせる。 ・教師の意見や価値観の押し付けにならないように、本単元で取り上げたタンザニアがタンザ

<p>まとめ (5分)</p>	<p>present moment. I think this could be a key to understanding their values in life.</p> <p>○Reflection 【Step 5 : Post】 T : Again, what do you value in your life? What do you live for, and why do you think so? S1 : I live for spending time in the present with the people around me because it makes my life more meaningful and valuable. S2 : I want to live for making the most of today because it will lead to a better future.</p>	<p>ニアの全てではないことに留意する。</p> <p>・学習の前後で同じ発問をし、自分自身の生きがいや価値観を捉え直させ、思考の変容を見取る。</p>
---------------------	--	--

使用する資料・教材：

- ・知識構成型ジグソー法：資料 A 「ニエレレとウジャマー」 資料 B 「スワヒリ語と文化」
資料 C 「携帯電話とエム・ペサ」
- ・資料 A 「ニエレレとウジャマー」では、JICA タンザニア事務所訪問より、ニエレレ初代大統領の平和と統一の維持、民族部族間対立・宗教間対立なし、その背景にあるスワヒリ語の国語・公用語としての採用、ニエレレが理想とする社会ウジャマー (family-hood 家族)、チャリンゼ県庁地域開発課が融資支援をする養鶏場訪問より、スワヒリ語による女性達の連帯感、ケニアータンザニア送電線訪問より、地域協力による平和維持、を取り上げる。
- ・資料 B 「スワヒリ語と文化」では、スワヒリ語の代表例として、「カリブ (ようこそ、どういたしまして)」「ポレポレ (ゆっくりと、落ち着いて)」「ハクナ マタタ (問題ありません)」、その背景にある縦軸の時間よりも横軸の時間を優先する文化、ムワンバオ小学校訪問より、授業用語のスワヒリ語と、アザニア中学校訪問より、試験のための授業用語の英語との対比、を取り上げる。
- ・資料 C 「携帯電話とエム・ペサ」では、タンザニアにおける携帯電話やインターネットの急速な普及、エム・ペサ (携帯電話を利用した送金サービス)、誰もが誰かに金銭を貸していると同時に、誰もが誰かに金銭を借りているという状況、バガモヨ県病院訪問より、医師や看護師の携帯電話や SNS の使用、その背景にある生きがい・やりがい、を取り上げる。

07 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・ジグソー活動や対話活動を通して、自分自身の生きがいや価値観、思考に変容がある。
- ・自分自身の生きがいや価値観を適切に伝え合うことができる。
(授業中の発言、ロイロノートの提出物)

08 学びの軌跡 (※児童生徒の発言の変化など)

・生徒の主発問に対するロイロノート上の記述

① 関係性や協力についての記述

We think people in Tanzania live for peaceful and considerate relationships because they want people around them to be happy.

We think people in Tanzania live for relationship .
because people in Tanzania think relationship makes peaceful world.

We think people in Tanzania live for connection between people
because they cherish his friends and family.

We think people in Tanzania live for relation with people

because they wanted to avoid conflict and maintain stability in the country which has many ethnic group.

We think people in Tanzania live for connection

because their culture values it.

We think people in Tanzania live for good relationships between a lot of people

because they use their original language Swahili for better connection between their family, friends, ethnic and other country's people and peace through smoothly and clearly communication.

We think people in Tanzania live for making reliable relationship like family

because they cherish to maintain their calmful lives and communication by having some relaxed spirit of their culture.

We think people in Tanzania live for their identity

because they unite, cherish their connections and do anything for themselves.

We think people in Tanzania live for peace

because they often cooperate with each other.

② 幸せ、優しさ、多様性などについての記述

We think people in Tanzania live for happiness

because they cherish their life that they spend time peacefully by using technology and interacting with others.

We think people in Tanzania live for kindness

because they try to be nice to other people and take time to make friends with strangers.

We think people in Tanzania live for making multicultural society

because there are traditional culture, high level technology and they try to coexist.

09 海外研修で何を学び、どの部分を見童生徒に伝えようと思ったか

タンザニアでの研修で多くの学びを得たが、それぞれの学びとしての点を単元の題材としての線に形作ることを重要視した。研修中のモヤモヤを大切にし、これらを様々な文献を通して紐解き、Living for Today の価値観を題材にした。また、生徒が全人格的な英語コミュニケーション能力を身に付けるためには、英語運用能力を育成するためだけの英語教育では不十分であり、国際理解教育が不可欠であると考え、本研修で学習した、日々の教育実践への内在化も意識し、教科指導の中で授業実践を行うことにした。

10 苦勞した点

ジグソー活動で使用した3種類の読み物資料の作成が最も苦勞した点である。Living for Today の価値観のヒントになり、タンザニアで特に印象的であった学びを中心に、文献内容と実体験に基づいて作成した。多くの学びから、「ニエレレとウジャマー」「スワヒリ語と文化」「携帯電話とエム・ペサ」に焦点化し、高校英語の難易度に英文を調整することは困難であったが、生成 AI なども適宜活用し、推敲を重ねることで、最終的には満足いく教材を自作でき、参観した先生方からも高評価をいただいた。

11 改善点

ジグソー活動で、資料から読み取れるタンザニアの人々の価値観を、生徒が自分自身の言葉で意見が伝わるように説明する際に困難さが見られた。授業後の協議会でも助言をいただいたように、資料を読み合う際に、キーワードと思われる語句に印を付けさせるなどの足場掛けの支援を増やすことが改善点

として考えられる。また、そのキーワードを選んだ理由を追発問することで、対話をより深めることが期待できる。普段の教科書指導の際にも足場掛けを増やすことを意識したい。

12 成果が出た点

ジグソー活動での生徒の記述内容から、今を豊かに生きるという Living for Today の価値観を捉えたものが多かったことは、成果が出た点とすることができる。タンザニアの人々の価値観を、家族、友人、近隣との関係性や協力関係にあると思考し、これらに関連した、幸せ、優しさ、平和、コミュニケーションの重要性も捉えていたことから、生徒の大半が本時のねらいを達成できたと考えられる。また、本時はロイロノートなどの ICT を積極的に活用した点も参観した先生方から高評価をいただいた。

13 自由記述

本研修では、タンザニアの国際協力現場を実際に訪問し、五感を通して学び、その経験から授業実践の種を数多く得ることができ、非常に貴重な機会であった。また、国際理解教育に情熱溢れる、様々な校種・教科の先生方とともに学ぶことができ、大きな成長の機会にもなった。本研修にご尽力いただいた全ての皆様に感謝を申し上げたい。今後も英語教育と国際理解教育を両軸とした授業実践を重ねることで精進していく。

参考資料・使用教科書：

浅井誠『稲穂の波の向こうにキリマンジャロ タンザニアのコメづくり半世紀の軌跡』

佐伯コミュニケーションズ、2023年

小川さやか『「その日暮らし」の人類学 もう一つの資本主義経済』光文社、2016年

栗田和明、根本利通『タンザニアを知るための60章【第2版】』明石書店、2015年

日本国際理解教育学会『国際理解教育を問い直す 現代的課題への15のアプローチ』

明石書店、2021年

教科書『ELEMENT English Communication II』啓林館

フォトランゲージ：DEAR 開発教育ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>

【社会・生きがい】

生きがいを形にする － 伝統と革新をつなぐ木のデザイン －

【実践者】

氏名	有賀 早也香	学校名	群馬県 私立ぐんま国際アカデミー 中高等部
担当教科等	MYP Design (技術)	対象学年 (人数)	中学1年 (93名)
実践年月日もしくは期間 (時数)	2025年10月～2026年2月 (16時間)		

実施概要

01 実践する教科・領域

MYP Design Year 1 / 技術 (材料と加工の技術)

02 単元名と単元目標

単元名：生きがいを形にする - 伝統と革新をつなぐ木のデザイン

単元目標：

- ・生徒は、木材加工の基礎的な技術を学び、伝統的な宮大工の知恵と現代的なデザインを融合させる力を獲得する。
- ・生徒は、タンザニアでの「生きがい」調査を通して、人々の幸せや生き方の多様性を理解し、共感を深める。
- ・生徒は、「伝統」と「革新」の関係について考察し、自分や他者の生活をより豊かにするデザインの在り方を探究する。

関連する学習指導要領上の目標：

- ・材料や工具を用いて基本的な加工・組立を行う技術を習得する。
- ・生活や社会における技術の役割を理解し、持続可能な視点から活用できるようにする。
- ・課題を発見し、計画・制作・評価を通じて解決する力を育む。

03 単元の評価規準

①知識・技能	・木材加工に必要な基礎的な工具の使用方法や安全な作業手順を理解している。 ・宮大工の技術やタンザニアでの事例から学んだ知識を、自分のデザインに活かしている。
②思考・判断・表現	・「伝統」と「革新」の観点を踏まえて、自分なりのデザインを構想・判断できる。 ・生きがいの考え方を取り入れ、作品や設計仕様書に表現できる。 ・他者と協働しながら、自分の考えを的確に説明・発表できる。
③主体的に学習に取り組む態度	・新しい知識や異文化に積極的に関心を持ち、学習に活かそうとしている。 ・社会・環境課題やその困難の解決に向けて、自力で取り組んでいる。 ・振り返りを通して自分の学びを改善しようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

- ・木材加工の技術は、ものづくりの基礎的技能を身に付ける。
- ・日本の宮大工の伝統技術を題材とすることで、単なる木材加工体験にとどまらず、文化的背景や「伝統と革新」の関わりを考える機会になる。
- ・「生きがい」調査を取り入れることで、異文化理解を深めながら自分自身の生き方・幸せについて考える機会を持つ。

〈単元の意義〉

- ・技術の学習を「文化」「幸福」「社会」と結びつけ、生活を豊かにするデザインの思考を身につけることができる。
- ・「伝統を尊重しながら新しいものを生み出す」視点は、グローバル社会における持続可能な開発や Well-being の追求と関連づけられる。
- ・実体験（木材加工・設計仕様書作成）と価値観探究（生きがい対話）を統合することで、生徒の学びを知識・技能から自己形成へと広げられる。

〈児童/生徒観〉

- ・生徒は「技術＝技能的な活動」と捉えがちだが、そこに文化的価値や人々の生き方を重ねることで、学習が自分の未来のためになっていることに気が付き、意欲が高まる。
- ・異文化の価値観に触れることで、自分の考えと比較し、柔軟に発想できる力を育成する。
- ・他者から評価してもらうことや、実際に手を動かしてものを作る過程を通して、失敗からの改善や工夫の仕方を学ぶことができる。

〈指導観〉

- ・教師は「技能の習得」だけでなく、「伝統」「革新」「生きがい」といった概念的なテーマを結びつけるファシリテーターの役割を担う。
- ・ワールド・カフェや協働的な学習手法を用いて、生徒同士の対話を通じた学びを重視する。
- ・成果物（木工作品・設計仕様書）を通じて、知識、思考力、想像力を養う。

05 単元計画（全 16 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	ユニットの導入	○ Thinking skill 関心や直感、観察を言葉にする。 ○ Social skill 他者の参加、貢献、成功を助ける。	・このユニットで取り組む、自分の社会問題について考える ・タンザニアでの体験の紹介から、何を感じるかを対話する ・それぞれの生きがいについて考える	生きがいチャート (Canva) タンザニアで撮影した写真
2 3 4 5	Criterion A 探究と分析	○ Research skill さまざまなメディアから情報源を探し出し、それを評価する。	・課題解決の必要性を説明し、正当化する ・課題解決のために必要とされるリサーチの主要な点を述べ、優先順位をつける ・課題解決のヒントとなる、ひとつの既存製品の主要な特長を詳しく述べる ・先行研究の主な結果を提示する	各自で調査文献を見つける (インターネット、図書館を利用)
6 7 8	Criterion B アイデアの発展	○ Thinking skill 複数の見方・考え方で問いやアイデアを検討する。	・デザインのアイデアを考える (スケッチやリストを作成) ・アイデアを比較し、最適なものを選ぶ ・最終的なデザイン図を作る	東京書籍『新しい技術・家庭科技術分野』 P.20-P.86 参照

			<p>(寸法や詳細を含める)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作成するための計画を立てる (材料やツールを考える) ・作図 ・宮大工の技術を学ぶ <p>(講演会：2時間)</p>	
9 本 時	Criterion C 解決策の制作 導入	<p>○ Communication skill 敬意を持って意味のあるフィードバックをする。</p> <p>○ Self-management skill まず行動し、試行錯誤する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生きがいチャートの改善 ・社会問題の解決策の改善 <p>*ワールド・カフェ形式の対話(5分×3回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポスター作成 (A3 日本語と英語) <ol style="list-style-type: none"> 1. ターゲット・社会問題・SDGs 2. 生きがいチャート 3. 設計図 4. 完成図(解決策の説明) <ul style="list-style-type: none"> ・Peer Assessment 	Canva
10 11 12 13	Criterion C 解決策の制作	<p>○ Self-management skill 集中力と健康を保つために、時間と気が散る要因を管理する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・時間やリソースを無駄なく使い、他の生徒もそれを見てソリューションが製作できるような計画について簡単に述べる ・ソリューションの製作にあたり、優れた技術的スキルを示す ・意図した通りに機能し、適切に提示されたソリューションを、 計画に従って作成する ・ソリューションの製作にあたり、選択したデザインや計画に変更を加えた部分を 列挙する ・ポスター作成 	Canva
14 15 16	Criterion D 評価	<p>○ Self-management skill 自分(たち)の学びや行動を振り返り、 評価する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・作ったものを評価する(デザイン要件を満たしているか確認) ・ユーザーや他の人からのフィードバックを集める ・改良点を考える(次にどう改善できるか) ・プロジェクト全体を振り返る(学んだことをまとめる) 	Google forms スプレッド シート

06 本時の展開（9時間目）

本時のねらい：生徒は、生きがい、社会問題・SDGs を関連付けながらデザインのアイデアを整理し、協働的な対話を通してポスターの間や解決策を発展させる。

過程時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5分)	初等部の頃から行っているウガンダへの支援協力の経験から分かったことを発表する（該当生徒4名）	該当生徒4名のプレゼンを聴くことで、国際協力とはどんなものかを知る	プロジェクターを使用する
展開1 (15分)	ポスターを作成する。 1.生きがいチャートの画像を貼る 2.社会問題、ターゲット、SDGsをまとめる 3.完成予想図作成 4.それぞれの項目からキーワードを探す 5.問いを立てる	説明をして、その後サイレントモード（10分間）に設定 個人の作業に集中する	10分間のタイマーを設定する
展開2 (20分)	「他の人の考えを聞き、改善できる点を探します。」 「5分間で、グループ内のすべての人が発表します。」 「アイデア交換し、その都度、改善します。」 「それぞれが発表、フィードバックをもらってください。」	ワールド・カフェ形式 2～3人のグループ 5分のアイデアの交換 毎回、メンバーをすべて入れ替えて、3回行う。	話しやすい雰囲気をつくる
まとめ (10分)	「今日の対話で得た気づきを一言で共有しましょう」	全体発表 (ショートシェア)	数名の生徒に、感想を 発表してもらう

使用する資料・教材：

- 生きがいチャート（Canva テンプレート）→ 生徒が前回までにまとめた内容を振り返る
- タンザニア研修での写真・動画・体験談→ 対話の出発点として提示
- Canva：ポスター（日本語+英語）→ A3サイズ：ターゲット・社会問題・SDGs、生きがいチャート、設計図、完成図（解決策の説明）
- Chromebook → Canvaによるポスター作成・発表

07 評価規準に基づく本時の評価方法

- 知識・技能（技能面）
 - ・ Canva等のツールを用いてポスターを正しく作れるか
- 思考・判断・表現
 - ・ ワールド・カフェで得たフィードバックを取り入れ、改善点をポスターに反映できているか
 - ・ 「生きがい」と「社会問題解決」の関連を、表現として明確に示しているか
- 主体的に学習に取り組む態度
 - ・ 積極的にコミュニケーションを取ろうとしているか
 - ・ 他者の意見や考えに耳を傾けているか

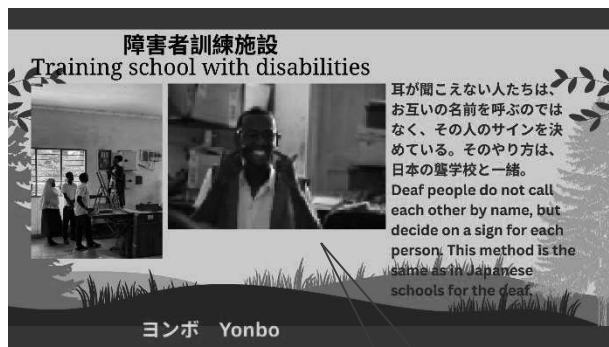
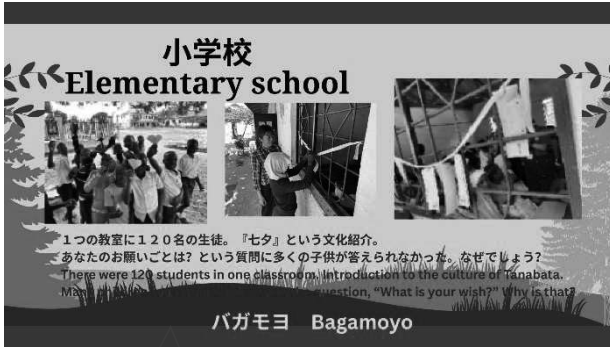
08 学校外との連携（※該当のある場合）

厚生労働省 ものづくりマイスター事業： 群馬地域技能振興コーナーから宮大工講師派遣

09 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

● 私の感じたタンザニアを授業で紹介したスライド：

* 吹き出しは生徒の感想です



彼らには『願い』という概念がないことにビックリ！

モラルってどう伝えればいいのかな？



私のサインはどんなのかな？

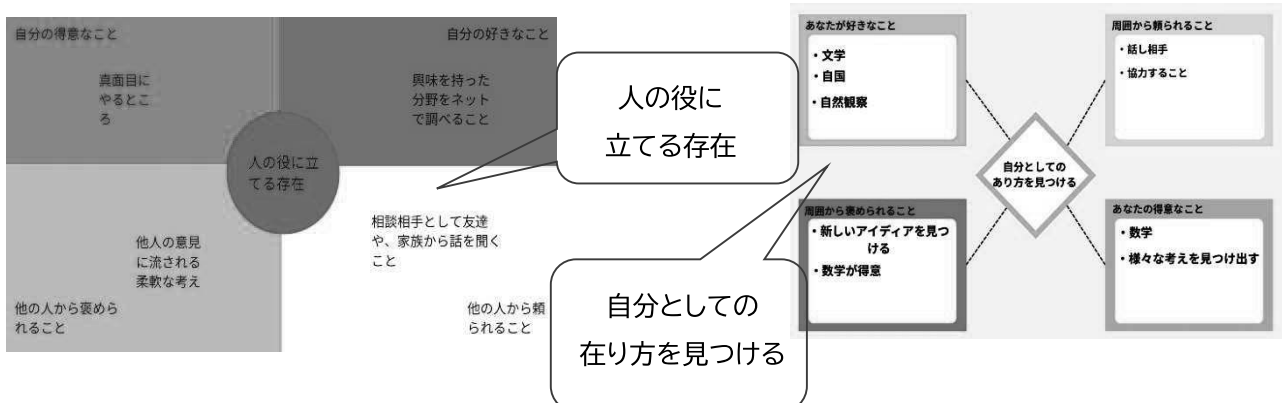
奴隷貿易は本当に必要だったの？



● タンザニアの話をした後の生徒の生きがいチャート：

- 好きなこと ⇒ ○自分の得意なこと ⇒ ○他の人から必要とされること（世界が必要とすること）
- ⇒ ○他の人から褒められること（報酬を得られること）

これら4つが揃うとあなたの中に、何が生まれますか？という問いを生徒に考えさせた





自分に素直に
生きること

縛られずに
生きること



10 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

国際協力の現場を実際に訪れることで、現地の状況を理解し、ニーズ調査がしっかりと行われていることが分かりました。そこでは支援するのではなく、人と人との協力を大切にしていることに感銘を受けました。生徒にも、まずは「知ること」から始め、一方的な支援ではなく、お互いに助け合い、一緒に学んでいく気持ちを大切にすることを伝えようと思いました。

11 苦労した点

タンザニアで体験したことが多く、生徒に伝えたいことが今年度の授業内では収まらなかったことです。来年度以降も引き続き、学習に落とし込んでいこうと思います。

12 改善点

一度に様々な出来事を話しすぎてしまったので、分野や内容をそれぞれの学年で分けてもよかったです。また、生徒がタンザニアの人々と繋がれる活動を今後取り入れたいと思いました。

13 成果が出た点

自分たちとは異なる環境やバックグラウンドを持つ同世代の存在を知ること、「自分とは？」や Well-being について見つめ直す機会になりました。

14 自由記述

物質的には恵まれた日本にいるのに、幸せを感じにくいのはなぜかと不思議に思っていました。今回タンザニアを訪れ、幸せな雰囲気を経験することで、人生を豊かにするものは、モノの豊かさではないことがよく分かりました。そこには、自然、気候、多様な文化や価値観に触れることであり、日本でもできることです。自分の考える視点次第で、生活は豊かにも、不幸にもなると感じました。

参考資料・使用教科書：「デザイン」指導の手引き / MYP: 原則から実践へ
東京書籍 『新しい技術・家庭科 技術分野』

【社会・生きがい】

文化・価値観の古今東西

「社会でより良く生きるとはどういうことか考えよう」

【実践者】

氏名	井土 恵美里	学校名	埼玉県立幸手桜高等学校
担当教科等	国語（古典研究）	対象学年（人数）	3年（19名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年9月～11月（15時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

古典研究（学校設置科目）

02 単元名と単元目標

単元名：文化・価値観の古今東西「社会でより良く生きるとはどういうことか考えよう」

単元目標：

（1）古典などを読むことを通して、我が国の文化の特質や、我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること。【知識・技能】（伝統的な言語文化・古典探究（ア））

（2）古典の作品や文章などに表れているものの見方、感じ方、考え方を踏まえ、人間、社会、自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすること。【思考・判断・表現】（○考えの形成、共有【①】・古典探究（カ））

（3）話し合いに積極的に参加し自分の考えを深めようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】

関連する学習指導要領上の目標：学校設置科目のためなし（単元目標と同様）

03 単元の評価規準

① 知識・技能	古文、漢文の重要な単語、文法、句形を理解できる。時代背景について理解できる。
② 思考・判断・表現	「国際社会」で生きるということ、「ジェンダーとは何か」ということについて自分なりに考えをまとめ、他者に伝えることができる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	話し合いに積極的に参加し自分の考えを深めようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

本単元を通して、国際社会における「ウェルビーイング」について、考えてほしい。今年度、教師海外研修にて、タンザニアで研修を受けた。そこでの学びも生かし、「とりかへばや物語」の舞台である日本、

「四面楚歌」の舞台である中国、そしてタンザニアの価値観の変遷を比較して、再度、日本でより良く生きるということや、国際社会でより良く生きるということについて考える機会にしたい。発展途上国をただ遅れている国などと捉えるのではなく、国を超えた「共生」のために必要なこと、日本さらには国際社会の更なる発展のために意識しなければならないことを主体的に考えられるようにする。

〈単元の意義〉

SDGsの達成目標の中、日本の大きな課題とされている上に、生徒の関心もある「ジェンダー」を1つの軸として設けて、日本社会や国際社会を捉える上での視点を具体化する。それにより、日本の課題、世界の課題、そして自分自身とその周囲の課題について、真摯に考える契機を作り、生徒なりの解決策を考えられるようにする。

〈児童／生徒観〉

本校は、「商業を中心とした総合学科」として展開されているため、高校卒業後、就職する生徒が多い学校である（今年度は半数以上が就職希望）。本来、「働くこと」や「生きること」について、具体的に考える必要があるが、求人数も多く売り手市場であることから、「社会で生きる」ということについて実感が湧いていないように見受けられる生徒も多くいる。生徒が働くような企業には、技能実習生のような発展途上国から日本に働きに来ている方も多くいることが予想される。そこで、発展途上国と先進国における職業観を軸に、再度、働くことや、社会で生きることについて考える契機にしてほしい。

〈指導観〉

古典の授業で、源氏物語の若紫について学習した際に、「ジェンダー」についての意見が生徒から上がった。そのため、現在、生徒の興味関心が湧いている「ジェンダー」を軸に社会を見られるように授業を展開する。「ジェンダー」に関する捉え方や、考え方は多様であるため、基本的には生徒の意見を否定することなく、多くの視点を持てるように指導したい。

05 単元計画（全15時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	タンザニアについて知ろう 「とりかへばや物語」を読解しよう	<ul style="list-style-type: none"> ・「とりかへばや物語」の世界を理解できる。 ・平安時代の文化・価値観を理解できる。 ・当時の男女の書かれ方の違いを学び、現代と比較できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・重要単語、文法事項確認。 ・読み方の確認。 ・登場人物の性格、話の展開を理解する。 ・日本古来の固定観念について理解する。 	自作プリント 自作スライド
2	「四面楚歌（時利あらず）」を読解しよう	<ul style="list-style-type: none"> ・「四面楚歌」の世界を理解できる。 ・紀元前の中国の文化・価値観を理解できる。 ・当時の男女の書かれ方の違いを学び、現代と比較できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・重要単語、文法事項確認 ・読み方の確認。 ・登場人物の性格、話の展開を理解する。 ・中国古来の固定観念について理解する。 	自作プリント 自作スライド

3	「ジェンダー」とはどのような概念か、再度確認し、理解を深めよう	<ul style="list-style-type: none"> ・「ジェンダー」という考え方を理解できる。 ・日本、中国、タンザニアの「ジェンダー」に関する価値観や生き方の変遷を理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・シンデレラ・コンプレックスやSDGs 到達度を例に担当者が説明し、これまで学習してきた「ジェンダー」の概念をより明確に捉え、理解を深める。 <p>★知識構成型ジグソー法 (エキスパート活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●日本、中国、タンザニア、各国の価値観、生き方を考察する ・これまでの授業をもとに <ol style="list-style-type: none"> ①日本チーム ②中国チーム ③タンザニアチーム <p>の3チームに分かれて、各国の価値観や生き方を検討する。</p> <p>★ジェンダーを軸に、価値観の表れ方を学び、現代と比較する</p>	自作プリント 自作スライド
4 本時	「ジェンダー観」の変遷を踏まえ、「ジェンダー平等」とは何か、「社会でより良く生きる」とは何か、自分の意見を明確にしよう。また、他者の意見を聞き、自分の意見を深めよう	<ul style="list-style-type: none"> ・日本、中国、タンザニアの「ジェンダー」に関する価値観や生き方の変遷を理解できる。 ・3か国の価値観、生き方を比較し、各国の特徴を捉えられる。 ・自分の生き方や、より良く生きることについて再考できる。 	<p>★知識構成型ジグソー法 (ジグソー活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●①日本、②中国、③タンザニア、各国の価値観、生き方を比較し、価値観、生き方を再構築する ・①②③のチームを合わせて、話し合いをし、自分なりの「より良く生きること」や「社会で生きること」について考え、捉えなおす。 <p>★ジェンダーを軸に、価値観の表れ方を学び、現代と比較する</p>	自作プリント 自作スライド
5	再度「とりかへばや物語」や「四面楚歌」におけるジェンダー観を見よう	<ul style="list-style-type: none"> ・ここまで学習してきた「ジェンダー」という観点から、再度作品を鑑賞できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの学習を踏まえ、再度「とりかへばや物語」と「四面楚歌」に見られるジェンダー観を確認する。 	自作プリント 自作スライド

06 本時の展開 (14 時間目)

本時のねらい：

- ・日本、中国、タンザニアの「ジェンダー」に関する価値観や生き方の変遷を理解できる。

- ・ 3か国の価値観、生き方を比較し、各国の特徴を捉えられる。
- ・ 自分の生き方や、より良く生きることについて再考できる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)
導入 (5分)	①本時の目標を確認する。	①前時の復習も行う。不明点等、最初に確認しておく。
展開1 (10分)	②前時の復習として、エキスパート活動での意見を再度共有する。 理解できていない点を班で話し合う。	②各班の到達度に応じて、臨機応変に時間を設定する。
展開2 (15分)	③ジグソー活動 1班～6班に分かれ、グループ活動を展開する。 ・ A、B、C各班の話し合いの結果報告：5分 ・ グループ活動：10分 →ジェンダー平等のために必要なことの優先順位を、ダイヤモンドランキングにする。	③机間巡視を実施し、各班の到達度を確認する。必要に応じて、声掛けを行い、話し合いが活発に行われるように補助する。
展開3 (5分)	④作成したダイヤモンドランキングを共有する。	⑤生徒が自由に思考を深めることができるように、机間巡視はしつつも、極力声掛けは行わない。
展開4 (10分)	⑤まとめとして、「ジェンダー平等のために必要なこと」「社会でより良く生きるとはどういうことか」という2つの問いに、回答する。	⑥担当者自身の経験を踏まえ、現代の日本の「ジェンダー」について説明する。
まとめ (5分)	⑥この授業で気づいて欲しかったことや、理解してほしいことについて説明し、まとめとする。	

使用する資料・教材：

- ・ エキスパート活動：日本、中国、タンザニアのジェンダーの歴史に関する自作プリント
→各国時代は4つに分けて変遷が分かるようにする。ダイヤモンドランキングを作成する。
- ・ ジグソー活動：各国のジェンダーの歴史を整理し、再度ダイヤモンドランキングを作成する自作プリント
- ・ 古典から見る『ジェンダー』：ジェンダーに関する以下の問いを記載した自作プリント
 - ①ジェンダー平等のために必要なことは何でしょうか。
 - ②社会でより良く生きるとはどういうことでしょうか。

07 評価規準に基づく本時の評価方法

机間指導による観察/授業プリントの取り組み状況/授業内発表

08 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

「本時」の最後に実施した「古典から見る『ジェンダー』」のプリントより以下抜粋。

1、ジェンダー平等のために必要なことは何でしょうか。

- ・個人の中に差別思想や男尊女卑の考えが残っていれば根本が変わりきるとは言えないと思います。社会の悪い流れに流されることなく、個人が自分の考えをしっかりと持つこと。根本から差別思想等をなくすために何年かかっても良いので、政治や社会が動くこと。
- ・価値観が違っても否定からは入らない
- ・他国の良いものは取り入れる。
- ・ジェンダーが文化に関連する部分もあるがその部分を積極的に排除しようとする、その国の文化自体を否定することも起きてしまうかもしれないから、あまり過度に取り除くのはその国の人の反感を買うからいけないと思う。
=文化とジェンダーの上手な共生が大事
- ・小さい頃からちゃんとした教育を受けないと売春や窃盗などをする子どもができてしまうし、差別が起きてしまう。
- ・差別意識のあるものなのか、役割分担の範囲なのか判断をつけられるよう、知識をつけるべきであると思った。

2、社会でより良く生きるとはどういうことでしょうか。

- ・「自分がされて嫌なことはしない」をモットーに生きる。
- ・自分と他者のみんなが幸せになれるように思いやって生きること。
- ・他者の考えを広く受け入れていくこと。
- ・趣味ができる程の余裕を持つこと
- ・自分の意志をはっきり伝えられる環境。
- ・差別と区別をしっかりと分けた、行き過ぎたジェンダーをなくす。
- ・広い選択肢の中から自分で決められること。

09 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

「先進国」「発展途上国」という経済を軸にした分類はあるが、文化・価値観に関する課題の根幹は共通するものがあると学んだ。今回は、「生きがい」を大きなテーマにし、「ジェンダー」という軸を立て視点を明確にした上で、各国の共通の課題、そしてそれを踏まえた上で、今後の生徒自身の生き方を見つめ直す契機にしたいと考えた。

10 苦労した点

「社会が変わるべき点」と「個人が変わるべき点」の両面から考えてほしいと思ったが、資料に偏りがあり、「個人が変わるべき点」まで考えられるように手助けする点に苦労した。

11 改善点

多様な視点から課題を捉えてほしかったので、各国の資料の情報量が多くなり、生徒の処理能力を考慮できていなかった。次は、情報をさらに取捨選択し、生徒がより学びを深められるようにしたい。

12 成果が出た点

「日本だから」「中国だから」「タンザニアだから」という国の括りを越えて、社会課題の根幹は共通であると考えられた生徒が多かった。ジェンダーに関しても、多くの生徒が自分の課題として捉えられていた。

13 自由記述

海外の話をして「日本に生まれることができて良かった」などと、他人事になってしまう生徒が多く、国際化の進む社会を生きる上で大切になる視点がかけているのではないかと感じていた。今回、授業をし、3か国の比較、社会課題の見直しをしたことで、少しずつではあるが、外国が自分に全く関係のない国ではないのだと気づいた生徒が多かったように思う。これからも、生徒の視野を広げ、多くの視点を持てるような授業を展開したい。

参考資料・使用教科書：

近藤大介『ほんとうの中国 日本人が知らない思考と行動原理』（講談社、2025年8月）

遠藤みどり『日本の後宮』（中央公論新社、2025年8月）

長野ひろ子、姫岡とし子『歴史教育とジェンダー 教科書からサブカルチャーまで』（青弓社、2011年2月）

末次玲子『二〇世紀中国女性史』（青木書店、2009年5月）

相良匠俊『アジア・アフリカ独立の時代』（集英社、2002年11月）

鈴木裕子『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 とりかへばや物語』（KADOKAWA、2009年6月）

三角洋一、石埜敬子『住吉物語 とりかへばや物語』（小学館、2002年4月）

土屋徹『それ日本と逆！？文化のちがい 習慣のちがい① モグモグ食事のマナー』（Gakken、2012年2月）

土屋徹『それ日本と逆！？文化のちがい 習慣のちがい④ フムフム人生のイベント』（Gakken、2012年2月）

土屋徹『それ日本と逆！？文化のちがい 習慣のちがい 第2期① ニコニコ学校生活』（Gakken、2017年2月）

片桐圭子『地理×文化×雑学で今が見える 世界の国々』（朝日新聞出版、2019年9月）

フリーポート 藤井勝彦『もっと知りたい！世界の国ぐに ビジュアル事典 改訂版』（メイツユニバーサルコンテンツ、2020年6月）

川村哲也『地図でスッと頭に入るアフリカ55の国と地域』（昭文社、2023年11月）

富永智津子、永原陽子『新しいアフリカ史像を求めて—女性・ジェンダー・フェミニズム—』（お茶の水書房、2006年12月）

山口昭男『新編 日本のフェミニズム10 女性史・ジェンダー史』（岩波書店、2009年2月）

若桑みどり『お姫様とジェンダー—アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』（筑摩書房、2003年6月）

加藤秀一『はじめてのジェンダー論』（有斐閣、2017年4月）

独立行政法人労総政策研究・研修機構「女性の地位向上とジェンダー平等の進展—国家統計局による最新モニタリング報告」 https://www.jil.go.jp/foreign/jihou/2025/06/china_02.html

日本ペンクラブ電子文藝館 <https://bungeikan.japanpen.or.jp/3518/>

京都市選挙委員会 https://www2.city.kyoto.lg.jp/senkyo/senkyoFriends_html/senkyo/history.html

【社会・生きがい】

国際理解と国際協力 国家・民族・言語の結び付きと生活文化

【実践者】

氏名	澤田 将智	学校名	埼玉県立大宮東高等学校
担当教科等	地理総合	対象学年（人数）	3年 8組 （38名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年 10月 ～ 12月（全 6 時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

地理総合

02 単元名と単元目標

単元名：国際理解と国際協力 国家・民族・言語の結び付きと生活文化

単元目標：日本との共通点や相違点に着目し、多様な習慣や価値観などをもっている人々と共存していくことの意義に気付くとともに、自身の在り方生き方の現時点での最適解を模索し、考察する。

関連する学習指導要領上の目標：学習指導要領「地理総合」の目標（3）

地理に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の国土に対する愛情、世界の諸地域の多様な生活文化を尊重しようとすることの大切さについての自覚などを深める。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	地理に関わる諸事象に関して、世界の生活文化の多様性を理解するとともに調査や諸資料から地理に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けている。
② 思考・判断・表現	地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域などに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりしている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	地理的な見方考え方における基本的原理を踏まえ、国際社会の課題解決を視野に、主体的に授業に関わろうとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

今年度の教師海外研修タンザニアコースに参加し現地で獲得した知見を目の前の学習者に還元するために、効果的であると考えた。理由は以下の通りである。

第一に、教科書においてアフリカが事例として取り扱われており、学習者の学習意欲の一定の向上が期待できることを挙げる。本校の生徒の実情から推察するに、学習意欲への生徒間で差が生じていることが想定される。そこで、教科書内容という見方だけでなく、授業者が自ら経験してきた事象を扱うことで、生徒の興味関心を引き出すことを最大の狙いとして単元を設定した。

次に、今回の授業実践のメインテーマである、生きがい・在り方生き方を考える際に、日本と異なる生活や文化を考慮する必要性を感じた。現在の日本に住む学習者として、一見異質に見えるアフリカの生活・文化に対して共感的理解を抱きながら、自らの在り方を捉えなおしてもらいたいと考えた。

〈単元の意義〉

在り方生き方教育の内容に関連する以下の項目を取り扱うことができる。

A 主として自分自身に関すること

(2) 真理を探究し、より高い目標を目指し、自己の向上を図ろうとする強い意志に関すること。

B 主として人との関わりに関すること

(3) 相互理解と寛容に関すること

C 主として集団や社会との関わりに関すること

(7) 伝統と文化の継承、国際理解、世界の平和と人類の幸福への貢献、日本人としての誇りを高めることに関すること

D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

(3) 人間としての弱さや克服する強さの自覚、誇りある生き方に関すること

〈児童／生徒観〉

地理の授業に対しては前向きな姿勢を示してくれる生徒が多数という認識をしている。教員が話を始めても私語が止まらなくなってしまう生徒もいる。特にグループワークになると授業に関係ない話をする生徒もいるが、指示を出すことで改善される。授業内容や教員が出す指示の理解に差があり、既知知識の差も存在する。

〈指導観〉

多くの生徒にとって、アフリカという地域、タンザニアという国への心理的な距離が大きい状況にある。これは、地理に限った話ではないだろうが、学習意欲について生徒によって差がある本校では授業の際に留意する必要がある。授業者自身が、実際に行ってきたということをもっと前面に出していく授業を展開する必要がある。在り方生き方については、考えてくれているものの、内容についてはまだまだ浅い印象がある。

05 単元計画（全6時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	考查返却 イントロダクション	自分が普段考えないことについて考えてみる。	・講義 ・モチベーショングラフ	・体験談

2	多民族社会の分断と共存 多民族社会の暮らしと生活文化	I. アフリカ、特にタンザニアについての生活・文化に関する理解を深めながら、日本との共通点、相違点に着目していく。 II. 開発途上国と日本を比較し、タンザニアと日本について見識を深める。	・講義 ・討論 ・フォトランゲージ	・教科書 ・現地の写真
3	かわるアフリカと多文化共生 民族と言語からみた生活文化	(自国中心→国際的な見方の練習)	・講義 ・討論 ・フォトランゲージ	・教科書 ・現地の写真
4	生きがいの在り方を考察①	生きがいに優劣はあるのか。自分は、世界の人は何を大事に生きている？（グローバルな見方へシフト）	・講義（スライドショー） ・討論 ・ダイヤモンドランキング	・現地の人や協力隊員の方のインタビュー
5	生きがいの在り方を考察②		・講義（スライドショー） ・討論 ・ダイヤモンドランキング	・現地の人や協力隊員の方のインタビュー
6 本時	在り方生き方のとらえなおし	生きがいと生き方を捉えなおす もしくは自分の在り方生き方の再考 (グローバルな見方の練習)	・討論 ・発表 ・モチベーショングラフ ・ICTの活用	

06 本時の展開（6時間目）

本時のねらい：日本とアフリカの生活・文化を比較して自分の生きがいと在り方生き方を捉えなおす

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5分)	・講義：これまでの学習の振り返り（スライドショー） ○「日本にしていると気が付かないけれど、日本式生活のすばらしさがある。」 ・本時の課題の提示	● 投影のスライドショーに集中できるような声かけ。 ● 生徒が迷子にならないように、複数回確認を行う。 ● 正解はない、自分自身の在り方生き方を考えることを何度も説明する。 ● 机間指導を行い、生徒の記入内容に随時間いかけを行う。 ● 生徒が迷子にならない声をかけに努める。
展開 (35分)	○「30歳で成し遂げておきたいことを考える」 ・発表準備（15分） 生きがいチャートの項目の確認。 30歳で成し遂げたいことを考える。 モチベーショングラフの作成。 ・グループ、会場作り（5分） 机、いす、ICT機器のセッティング。	

<p>まとめ (10分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・発表（15分） タイマーをセットし、各グループ一斉にスタート。 一人1分間の持ち時間で発表。 ICT 機器の活用。 ・まとめの言葉、感想文のフォーム入力（10分） ○「これは高校3年生の時点での見通し。今後の人生の折に触れて考え直してみることが重要である」。 今回の一連の授業の感想をフォームにて入力。 タンザニアの生き方への共感。 	<ul style="list-style-type: none"> ●グループはメタモジを使い事前に決めておく。 ●発表順はグループ内の出席番号とする。 ●時間で打ち切る。 ●今回は考えるきっかけ、種まきであり、今後の人生において振り返るきっかけとする。 ●在り方生き方を授業者側から決めつけない。
----------------------	--	---

使用する資料・教材：

- ・教科書：実教出版『地理総合』
- ・地図帳：帝国書院『標準高等地図』
- ・自作授業プリント、Google スライド、メタモジ

07 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・各授業プリントへの記入状況、感想文の提出状況。
- ・考査における授業内容（アフリカ地誌）に関する知識問題、思考力問題の結果。

08 学校外との連携（※該当のある場合）

- ・令和7年度道徳教育推進モデル校研究授業として実施（埼玉県教育委員会、県内・他県から視察）。

09 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

以下、生徒の感想文の引用。生徒全員ではないにしろ、生徒にとっては何かしらの変化を促すことができたと言前向きに考えている。

Aさん：タンザニアの人たちがとても印象に残った。生きる為に自分のやりたい職業ではなく生きる為に少しでも稼げる職業を選んでいて自分が今普通に暮らしていることがどれだけ幸せか感じる事ができたので後悔のない進路、職業に就きたいと思った。また、タンザニアや他の国で苦しんでいる人たちに募金やリサイクルなど何かできることがあればしていきたいと思った。

Bさん：日本ではなくタンザニアを資料として用いてくださったことで、日本との比較が出来てタンザニアの人たち考え方や、学校での勉強の学び方、その地域の生活の仕方などを知れて良かったです。日本とは違った働き方や生活をしている人たちの現状を学ぶことができ安定している日本の良さや、タンザニアの助け合いや余裕のある考え方などのそれぞれの生き方の知識が増えました。

Cさん：今学期の授業で、私たちはすごく恵まれているのだなと思いました。アフリカは日本と比べて環境が良くないですが、その分、国の伸びしろはあるのかなと思いました。ですがアフリカの生活も楽しそうだなと思いました。僕は日本という恵まれた環境に感謝し、これからの生活も楽しくいこうと思います。

10 海外研修で何を学び、どの部分を見習うに伝えようと思ったか

まず、自然地理的な視点について挙げる。教科書の世界がそこには広がっており、生の体験、自分で撮影した写真や動画がすべて生徒に還元できると考えている。次に、開発教育に係る各種授業テーマを挙げる。人々の内面、在り方生き方、文化などの日本との相違点についての学びを得た。一方で、“（国際理解教育では、相違点を強調しがちではあるが）日本と変わらないものもある”、という視点に立った見方考え方があることも生徒に伝える必要性を感じている。

11 苦労した点

アフリカ（だけでなく、“外国”というもの）に対するアンコンシャスバイアスは生徒の中にも確実に存在するように感じている。これをどのように認知させ、正しい理解に結び付けていくか、ということが非常に難しく感じる。必ずしも全員が興味を持っているとは限らないためである。また、この授業で初めてアフリカに目を向ける生徒もいることから、誤った見方をさせることが無いように言葉や生徒の発言に対するフォローに気を配る必要性があった。

また、現地の写真やエピソードなどの使い方、選び方に迷うことが多かった。生徒目線と教員目線、現地を知らない生徒と実際に行った教員との経験の差をどれだけ埋めることができるか、ということが最大のポイントであるように感じた。

12 改善点

研修内では「ビックリ体験に終わらせない」というキーワードがあった。これのとらえ方が極端になり過ぎてしまった反省がある。そもそもの「ビックリ体験」を話すことが少なくなってしまい、生徒と共有する情報が少なくなってしまった。生徒に対して、授業者が実際に海外に行ってきたということを伝える時間をより多く確保することができれば、生徒に与える印象が違ったのではないかと考えている。生徒はどこか、“授業”という枠組みの中におり、これが実際の授業者の体験談であることを実感できていない様子が見受けられることもあった。

13 成果が出た点

学期末の授業アンケートにおいて多くの生徒が、タンザニアという国について学んだことが印象に残っている感想を記入していた。本校の生徒が海外に目を向けてみることのきっかけとなる授業となった。県内外の見学者の教職員に対して、教師海外研修を周知し、興味を持ってもらうことができた。

多様な授業スタイルを展開し、講義、討論、作業を織り交ぜながら生徒を飽きさせない工夫を実践することができた。生徒からも概ね好評であり、今後も継続していく。

14 自由記述

今回は“生きがい”を授業テーマに据えた。大人でも答えを出すことが難しい問いに対して生徒はよく取り組んでいたように感じる。日本の生き方とタンザニアの生き方を直接比較することはできないもの

の、生徒の口からは「日本でよかった」という言葉や、「タンザニアの生き方がうらやましい」など、日本には無く、開発途上国にはあるものを捉えることができている生徒がいた。今年度の授業実践の甲斐があったというものである。開発教育は、必ずしもすべての生徒に影響を与えることはできないと考えている。何人かの生徒が、新しい気づきを大切に捉え、今後の進路や人生に影響をあたえるものにしてもらえればよい、と割り切ることで、授業実践へのハードルが下がるのではないだろうか。

また、今年度は単発の授業ではなく、全6回の長い授業展開を行った。これにより、生徒はタンザニアという国と長い時間接することとなり、遠い国から、ちょっと遠い国と捉えることができるようになったのではないだろうか。限られた授業時間数ではあるが、来年度以降も継続して授業実践を行うことができる環境整備に努めていく。

【参考】

フォトランゲージ：DEAR 開発教育ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>

【社会・生きがい】

Chocolate and Child Labor

【実践者】

氏名	浅野 恭子	学校名	東京都立町田総合高等学校
担当教科等	英語	対象学年（人数）	学校設定選択科目 英語総合読解β・実用英語 21人
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年9月～11月（9時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

英語・国際理解

02 単元名と単元目標

単元名：Chocolate and Child Labor

単元目標：児童労働の現状や問題の概要について把握するとともに、NGOやODAの働きについて知り、社会や困りごとのある人に何か自分ができることがあるのかを考えることができる

03 単元の評価規準

① 知識・技能	<ul style="list-style-type: none">児童労働と、それに関わるNGOの取り組みについて英文を読み取ることができる。異文化の人々の困りごとについて英文から情報を読み取ることができる。NGO、NPO、ODAについて理解することができる。
② 思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none">児童労働の背景や問題点について考え、他者と話し合えることができる。自分の価値観と照らし合わせて異なる文化の人々とのように共生していけばよいか考え、他者と話しあうことができる。NGO、NPO、ODAに関わる方の生き方を学び、自分なりにできることを考えることができる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none">児童労働やNGO、NPO、ODAの取り組みについて理解を深めるために、概要や要点を把握しようとしている。答えのない問いに対し、自分の意見を持つことができる。ペアワークやグループワークに主体的に参加することができる。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈**単元設定の理由**〉世界の児童労働の現状やその背景、問題点について学ぶことで、子どもの権利や社会的な課題に対する生徒の関心を高めたい。また、グローバルな視点で活動しているNGO、ODAや地域貢献をしているNPOについて学び、社会問題への関心を高めるとともに、生徒が自分なりにできることについて考え、取り組んでいこうとする態度を養うことを目指したい。

〈**単元の意義**〉1.世界の児童労働の実態理解 2.子どもの権利や人権の重要性の理解
3.国際理解とグローバルな視点の育成 4.倫理的・社会的問題への関心喚起

5.主体的な行動の促進

〈児童/生徒観〉多くの生徒は進路を意識しながら授業に取り組んでいるが、学習意欲の持続や基礎的な知識・技能の定着には課題が見られる。決められた答えを求める傾向がやや強い。

〈指導観〉今回の単元では答えのない問いに対し、生徒が自分なりに考えることや他者との関わりを通じて視野を広げさせることを大切にしたい。そのため、適宜ペアワークやグループワークを取り入れ学びあいを促したい。

05 単元計画（全9時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	カカオと児童労働	身近なものが、外国や児童労働に関係していることを知る	<ul style="list-style-type: none"> ・チョコレートへの興味関心をもつ ・英文を読み、本文の内容を理解する (part 1) ・Child labor と Child work の違いについて理解する ・「路上で物を販売する児童労働者から物を購入するか」を考える 	児童労働写真・人数 学校へ行く児童の写真 「小学生からわかる！児童労働ってなに？」 (YouTube ACE) バングラデシュ写真
2	児童労働の内容と背景	児童労働の内容と背景について考える 貧しさからくる「負の連鎖」について知る	<ul style="list-style-type: none"> ・英文を読み、本文の内容を理解する。(part 2) ・「児童労働のシステムは誰がいけないのか」を考える ・文字が読めないことの体験 ・「負の連鎖」を考える ・「どうやったら「負の連鎖」を断ち切れるのか」を考える 	ベンガル語練習帳 負の連鎖 (JICA)
3	NGO 現地での活動	NGO ACE がガーナで行うスマイルガーナプロジェクトを知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ガーナの課題を読む (ジグソー法) ・谷川俊太郎「そのこ」を視聴する ・「Should we stop buying chocolate to end child labor on cacao farms?」について考える ・英文を読み、本文の内容を理解する。(part 3) ・「スマイルガーナプロジェクトが様々なアプローチをする理由」を考える 	谷川俊太郎「そのこ」 (YouTube Ace)
4	NGO 日本での活動	NGO ACE が日本で行う活動を知る フェアトレードについて知る	<ul style="list-style-type: none"> ・英文を読み、本文の内容を理解する。(part 4) ・日本のチョコレート会社の児童労働への取り組みについての英文を読む ・フェアトレードについて知る 	「チョコレートを食べたことがないカカオ農園の子どもにきみはチョコレートをあげるか？」
5 6	貿易ゲーム	自由貿易やグローバル化が引き起こす問題に気づく	<ul style="list-style-type: none"> ・貿易ゲーム ・振り返り ・ディスカッション 	新・貿易ゲーム
7	社会・地域貢献 / NGO	地域貢献、社会貢献をしている人や団体の思いを知る	<ul style="list-style-type: none"> ・NGO・NPO・ODAの違いについて知る ・世界/地域で活動している人の話を聞き、社会貢献活動について考える 	setaitojinkou202407.pdf 町田市国籍別人口 「人間と社会」

	NPO・ODA	自分たちの住む町について考える	・2035年に“推せる町“（住民の満足度／移住希望者の心をつかむ視点）になるために町田の良いところ、問題点について考える	(東京都教育委員会)
8	共生	日本に暮らす外国人の困りごとを知る 自分がどのように異文化出身の人々と関わっていくかを考える	・町田に住む外国人人口の数や国名について知る ・日本に住む外国人が困っていることについて知る（ジグソー法） ・ALT・JETが日本で経験した嫌だった体験を聞く ・無自覚の偏見について考える ・「勤務中の礼拝」への対応をどうするのか、話し合いをする。	
9	生きがい	生きがいについて自分なりに考える	・「生きがいチャート」について知る ・Love/ good at / World needs / What you can do every day について各自記入し、シェアする。	

06 本時の展開（7・8時間目）

本時のねらい：

(7)社会・地域貢献をしている人の話を聞き、自分たちの住む町田について話し合う中で、地域にどのような課題があるかを見つめ直すとともに、何か自分にできることがあるかを考えることができる

(8)異文化出身の方の視点から地域社会を見直し、自分の中にある無自覚の偏見を知るとともに、共生するとはどういうことかを自分なりに考えることができる

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (20分)	<ul style="list-style-type: none"> ・貿易ゲーム振り返り ・Chocolate and Child labor 振り返り (YouTube) ・町田木曾南自治会長、NPO リトリトさん紹介 ・What is an NGO/ NPO/ ODA? 英文読解 QA ・自治会長の話（地域貢献、社会貢献きっかけなど） 困りごとに気づく力、一緒に考える力 ・学校のある町田市の良いところ・課題について考える 	D グループの感想をシェアしつつ、A グループがそもそも不平等な状態に気づいていなかったことも伝える
展開 (75分)	<p>東京都町田市「第8回高校生と町田市議会議員の意見交換会」</p> <p>テーマ①「町田をもっと“推せる街”にするには？」</p> <p>テーマ②「10年後の町田について考える。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町田に住む外国人人口について知る（人口の2%） ・日本に住む異文化出身の方が困っていることについて知る 英文読解 ジグソー法 ・ALT や JET の日本で経験したことを聞く ・困りごとの背景にある Unconscious bias について考える ・ケーススタディー【勤務中のイスラム教の方の礼拝】 	<p>「ちょこっと世界をのぞいてみよう」(YouTube Ace) https://youtu.be/k-oA9k7-rJg</p> <p>個人→4人グループ ダイヤモンドランキング</p>

まとめ (5分)	勤務中に礼拝の時間を10分取りたいと言われた際に、自分が社員と だったらどのように対応するか？（有給にするのか無給にするのか、 従業員への説明など） ・共生（一緒に生きる）とはどういうことか？	
-------------	---	--

使用する資料・教材：「人間と社会」（東京都教育委員会）

07 評価規準に基づく本時の評価方法

授業中の観察、ワークシート

08 学校外との連携（※該当のある場合）

東京都立町田総合高校評議員／町田木曾南自治会長 一戸雅行さん NPO リトリトさん

09 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

< 1. 2時間目より >

バングラデシュの児童労働で果物を売っている子どもから品物を買うか？

- ・安全かどうかわからないし、一人から買ったら皆からも買わないといけなくなりそうで怖い。
- ・たまになら何個か買う。毎日はお金がかかるから買えないかもしれない。

感想

- ・これからチョコを買おうと思ったときに悩んでしまうと思った。小さな子どもたちが学校にも行けずに労働をしているのに、そんな事を考えずに食べていいのだろうか。
- ・世界で10人に1人の割合で児童労働をしていて、子供たちが働かざるを得ない状況にあることを知って、今の自分の当たり前の暮らしをちゃんと大切に過ごしたい。
- ・児童労働は体に悪い環境で危ない仕事をさせられていると考えたら、想像以上に現実はひどい。
- ・日本のヤングケアラーは「負の連鎖」活動で行った児童労働をしている子どもたちと状況が似ているので、海外だけの問題ではないのかもしれない。
- ・一度お金をもらい稼げることを知ったら、そこから学校へ行けることになっても行こうとは思うことができない。自分だったら年下と学習することに劣等感をもってしまう。
- ・学校へ行き、読み書きができるようになったらいい仕事に就けるから留年しても学校へ行きたい。

< 3. 4時間目より >

カカオ農園の児童労働に間接的に関係しているのでチョコレートを買うことを止めるべきなのか

- ・買うことをやめたらガーナの人や子どもの仕事がなくなりお金がもっと入らなくなる。
- ・日本の会社の売上げが減り、ガーナ農家に支払われるお金もますます少なくなるだけ。
- ・値上げしてもいいからガーナに行くお金が増えればいい。
- ・買うことを止めても根本的な解決にはならない。
- ・自分たちがチョコレートを買わなくなったところで、児童労働がなくなるわけではない。児童労働を止めたいのなら、政府や会社に視点を変えるべき。

感想

- ・いつも考えずに食べるチョコレートにここまでの問題があることを知らなかったのでびっくりした。この問題を知らない人がほとんどだと思うので、みんな知るべき。
- ・ガーナに生まれるだけで、生まれた瞬間から貧困なのはかなりきつい。
- ・自分たちが安くいい物を買っている裏では、海外で苦しんでいる人がいたことが想像以上でびっくりした。
- ・チョコレートが好きなのでこれからはフェアトレードの商品を買ってチョコレートを楽しみたい。
- ・児童労働の事実を知らないからこそ、日本のチョコレートのパッケージは裏ではなく表に「児童労働をやめる」取り組みをもっとアピールしてほしいと思う。小さくて今まで気がつかなかった。
- ・今回はチョコレートについて学んだが、低賃金での労働により作られた製品は他にもたくさんあると知った。中でも自分に身近なのが服だと思った。服を安く買うことがよくあるが、考え直す必要があると思った。
- ・ガーナの人々の労力も知らずにチョコを食べていたという事実を知り、やるせない気持ちになった。

< 5. 6時間目 貿易ゲーム > 感想 (A グループ道具／お金 有 ⇄ D グループ道具／お金 無)

- ・他のグループとの交渉が難しかった。道具が欲しいけど、他のグループは自分たちに有利な条件をだし
てくるため、自分も相手のことも考えなければいけないことが大変だった。
- ・世界って不平等。今回はゲームだったけど実際に D グループみたいな国があると実感した。
- ・A グループとして利益を増やしつつ、援助するなど様々な役割がある中、グループ内の合意を得るこ
とが難しかった。
- ・価格変動などの変化に対応していくことに必死で、協力してくれたグループがいてとても助かった。
- ・D グループは無力感がありモチベーションがあがらない。性格の悪さが貿易を制することがわかった。
- ・お金がある A グループが貧しい D グループに協力してくれればイライラしなかった。
- ・裕福な A グループは冷たくて何も貸してくれなかった。とても不公平で不平等だと感じた。同じポジ
ションの D グループが協力してくれてありがたかった。二度とやりたくない。

< 7・8 時間目より >

無意識の偏見について

- ・他の国に行ったときに、目を横にひっぱる動作をされたことがある。
- ・日本に暮らす外国人/JET が「電車で隣に日本人が座らない」「美容院へ行っても断られる」「(観光客
だと思われ) いつ帰国するの?」と言われ傷ついていたことを知って驚いた。
- ・服装や装飾品など見かけで、初対面の人に「怖い人」と思われたことがある。
- ・国や見かけで判断するのではなく、個人を知ろうとすることが無意識の偏見を止めることができる。
- ・コミュニケーションをまずはとって、相手を「知る」ことを大切にしたい。

礼拝のケーススタディーについて

- ・礼拝は 10 分だし、初めて他国でアルバイトをして馴染むのにも時間がかかるし元気に働いてもらいた
いから有給で礼拝の時間をあげたい。日本人にイスラム教の礼拝について共通理解をしてもらう必要が
ある。
- ・礼拝する時間に給料を発生させてしまうと、ズルをして真似をする日本人がでてくるのではないか。
- ・日本とは違う習慣だとして礼拝を受け入れるべきだけど、他の従業員から公平じゃないと言われてしま
うかもしれない。
- ・外国の人だけ優先順位を高くして礼拝の時間をあげることはできないので、平等に休憩時間を 10 分設
けてあげるほうがいいのではないか。
- ・宗教のことだから、止めることはできないけど、業務とは関係ないからお金を払うことはできない。イ
スラム教の方が忘れることなく、礼拝する時間がとれるよう時間を配慮したい。

11 海外研修で何を学び、どの部分を見習うように思ったか

今回の研修ではバングラデシュの人の温かさや、自然の美しさを心から学ぶことができた。また、パッ
ションをもって仕事と社会貢献を両立しているカッコイイ大人にたくさん出会い直接お話を聞いたことか
ら私自身の「生き方」を振り返る貴重な経験になった。

生徒一人ひとりが、自分と家族、友人だけの狭い視野でのみ生活していくのではなく、少しでも「人/
世界とのつながり」を考え、様々な他者とも今後共生しながら生きていって欲しいと思い本単元を設定し
た。相手を「知ろう」という姿勢がないと、無知の偏見で人を傷つけてしまうことがある。人と対話し、
違いを受け入れたり、相手を思いやる想像力を磨いたりしてほしい。

私自身もバングラデシュに行く前は政変交代がちょうど 1 年前に行われ、「怖い国」という無知の偏見
をもっていた。「バングラデシュは怖い国ではありません。何もありません。心がある国なんです」という現
地校の先生のセリフが今でも忘れられない。自身が見たこと、体験したこともバングラデシュの一部であ
り、全てを知った気になって授業をするのではなく、生徒と一緒に「共生」とは何かを一緒に考える時間
を創りたいと考えた。

12 苦労した点

バングラデシュ/ガーナを「かわいそうな国」と捉える偏見が助長しないよう、日本とのつながりに触
れ、写真や体験談で良さを知ってもらうことを心掛けた。また、答えのない質問をし、生徒に「モヤモ
ヤ」感を味わってもらい、思いや考えを「共有」する時間をとるなど授業スタイルも「教える」から「一緒
に考える」時間になるようできるだけ目指した

13 改善点

「他の人の困りごと」を助けたい、「生きがい」をもって何かに取り組みたいという気持ちの醸成まではできなかった。高校3年生にとって「生きがい」のテーマが大きかった。「生きがい」については生きがいチャートの概論の英文理解と各自が「What makes you happy? / What are your skills? / What can help others? / What jobs can give you money?」を考えるだけになった。

また、町田市の良いところ、悪いところを考える活動では、「町の課題」という大きなくくりから抜け出せなかったのが、個人レベルの「困りごと」に焦点をあてて、それに対して自分に何かできることがあるのかを考えさせる活動にできればよかった。

14 成果が出た点

「知る」と「考える」活動を繰り返し行うことができた。全体で何か「行動にうつす」ことはできなかったが、各自が「様々な人と共生する」ことについて考えるきっかけにはなった。

社会科の先生と貿易ゲームと一緒に企画し、教科横断型の学習に取り組むことができたことが大きな収穫となった。英語の授業で学習した「ガーナとカカオ」「(タイの) Songkran 祭り」の話が、社会の先生やゲストの方からでて、教科が繋がる瞬間が何回もあったことが面白かった。今後も様々な教科の先生や外部講師の方との連携に取り組んでいきたい。

15 自由記述

ストリートチルドレンや市民権など自身が海外研修で一番衝撃を受けた体験については、授業でどのように落とし入れるか時間をかけて検討したが、今回は残念ながらできなかった。エクマツラの渡辺夫妻の紹介をするだけでなく、生徒が自分ごととしてストリートチルドレンや市民権について考えることができる授業をどのように行うかは、これからの教員生活での課題にしたい。今回の JICA 教師海外研修は私自身にとっても「生きがい」をもって教師として「人/世界が必要とする」仕事/活動ができているのかを省みる機会になった。

ダッカ大学モハメッド・アラム教授の「バングラデシュ人日本語学習者のためのケース教材」(第9課: 私の子供は給食の豚肉は食べられません)を使った授業を高校3年生全クラスで行い「宗教・アレルギー・好き嫌い」を配慮しメニューを決める活動も行った。(以下感想)

- ・多数決で物事を決めることが公平でいいと思っていたが少数の意見も配慮したい。
- ・日本の学校にもいろいろなバックグラウンドの人がいるから日本基準で給食を作っているようなら時代遅れだと感じた。
- ・少数派のために動くことには限界があるけど、何もしないのは話が違うので、行動したうえで出来るか出来ないか結論をだしたい。言い方や態度にもお互い気を付けていきたい。
- ・学校にはいろいろな人がいるからこそ、対応にはとても神経を使う。私は将来栄養士になりたいから、できるだけみんなが食べることができるよう献立を考えたい。
- ・アルバイトでイスラム教の方に「豚肉入っていますか?」と聞かれたときに、今までは「入っている/入っていない」しか答えていなかったが、豚肉の入っていない別の料理をお勧めしてみるなど、どんな人でも食事を楽しんでもらえるような行動をしたい。

参考資料・使用教科書: Comet English Communication III (数研出版)

「人間と社会」(東京都教育委員会)

「子どもたちにしあわせを運ぶチョコレート。」(合同出版) 白木朋子

「わたし8歳、カカオ畑で働き続けて。」(合同出版) 岩附由香、白木朋子、水寄僚子

「ぼくは12歳、路上で暮らしはじめたわけ。」(合同出版) 国境なき子どもたち

「チョコレートを食べたことがないカカオ農園の子どもにきみはチョコレートをあげるか?」

(旬報社) 木下理仁

「バングラデシュ日本語学習者のための「ケース教材」」(令和出版) モハメッド・アラム

「新・貿易ゲーム(改訂版)」(開発教育協会) <https://www.dear.or.jp/books/book01/1149/>

日本ユニセフ協会「子どもと先生の広場」



【経済】

ゲーム形式で学ぶ開発経済学

【実践者】

氏名	渡邊 大介	学校名	東京都 私立 八王子学園八王子中学校
担当教科等	中学社会（公民）	対象学年（人数）	3年 3組（ 31名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年11月～2026年1月（計2時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

中学社会（公民的分野）

02 単元名と単元目標

単元名：ゲーム形式で学ぶ開発経済学

単元目標：開発経済学の基本を学ぶ

関連する学習指導要領上の目標：(3) 国際的な相互依存関係の深まりの中で、世界平和の実現と人類の福祉の増大のために、各国が相互に主権を尊重し、各国民が協力し合うことが重要であることを認識させるとともに、自国を愛し、その平和と繁栄を図ることが大切であることを自覚させる。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	・開発経済学の基本的な理論を理解する。
② 思考・判断・表現	・タンザニアのよりよい経済開発を考える。
③ 主体的に学習に取り組む態度	・途上国の貧困問題に対して主体的に学習する。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

21世紀に入り、移動技術や輸送技術、情報通信技術等は急速に発展した。ヒト、モノ、カネ、情報の国際移動は当たり前となり、経済のグローバル化は言を俟たない。これに伴い21世紀の世界は当然にグローバル化していくものと思われた。しかし、イギリスのEU離脱やアメリカのトランプ政権をみれば、急速な経済のグローバル化の進展は反ってナショナリズムや排外主義を招いているようである。日本においても、日本人ファーストを掲げる政党が躍進し、外国人政策を見直す動きがみられる。また、ODAをはじめとした途上国支援に対する風当たりは強くなり、国内の政策に予算を向けるべきだとする声は大きくなっている。一世を風靡したSDGsも環境問題には浸透したものの、途上国の貧困問題に

浸透しているようには思えない。現在の日本においては、途上国支援や国際協力は随分と逆風に晒されている。

このように、ナショナリズムや排外主義が堂々と罷り通る時代だからこそ、今一度、国際理解教育とその理念である“地球的市民”という言葉に照らしたいと思う。本実践は「貧困のない世界の実現は不可能だ。途上国の貧困問題に対して日本の教育にできることなどない。」というシニシズムに陥ることなく、現存する格差に抗いながら真に公正な世界を目指したい。

〈単元の意義〉

本実践はタンザニアを題材に開発経済学を扱うものであり、広義の国際理解教育における開発教育に位置付くものと思われる。開発教育は途上国の貧困問題や国際協力を扱うものであるが、管見の限り開発経済を真正面から扱った実践はない。近接するものとしては、南北問題を扱った大津和子の「一本のバナナから」や開発教育協会の「貿易ゲーム」が挙げられる。これらは先進国と途上国の格差である南北問題に焦点を当て、格差の現状や構造を教える優れた実践および教材ではあるが、各途上国が貧困から抜け出せない具体的原因や経済発展していくための具体的方策を範疇に収めていない。また南北問題は、貿易だけでなく金融政策や財政政策に連関するところが大きいのが、同実践および教材は南北問題を貿易の問題に矮小化してしまっているきらいがある。

そこで本実践では、これまで開発教育でも等閑視されてきた開発経済学を真正面から扱う。南北問題を貿易に限定してしまっていたこれまでの開発教育および国際理解教育において、貧困問題の解決はフェアトレードに収斂してしまっているといえるだろう。つまり、南北問題の解決方法は先進国の人々の善意や心がけしかなく、善意や心がけは有用で必要だと思う。しかし、貧困問題を解決に導くものはそれらに限られず、むしろ範疇の大きい開発経済学にこそ手掛かりがある。そして、その手掛かりにアクセスできるのは先進国の人々であるから、先進国の人々には開発経済の知見を学ぶ責任があるように思う。

先進国と途上国との経済格差は依然として存在し、特にサブサハラの貧困が深刻であり、国民の約4割が貧困ラインの下にいる。貧困ラインを下回れば、十分な栄養やカロリーを摂取できないことが多い。人口増加が続く状況下で国民一人あたりの栄養状況を改善するには、農業の発展が欠かせない。具体的には、改良された高収量品種の普及、土地の整備、化学肥料の投入、除草などの効果的な栽培方法の実践などが求められる。しかし、これらのためには一定以上の規模の農家となることが目指されるが、途上国では小規模な家族経営による自給的な農家が多い。しかし日本で実施されたような地主から小作人へ土地を譲渡する類の農地改革では、経営ノウハウの不十分な小作人が土地を手放さざるをえず、結局のところ政治的実力者に土地が集まってしまうようである。同様のことが危惧されてか、アジアのプランテーション改革は先延ばしされている。むしろアフリカにおいては、小作人に土地を譲渡することよりも、土地の所有権を明確にさせる改革が求められるという。アフリカにおいては、土地は部族によって共同体的に所有されることが多く、共同体的所有であるため土地を整備し開墾するインセンティブが働きにくいことがその理由である。なお、穀物については水稻が土壌の疲弊が少ないために最も持続可能性が高い作物だといわれる。タンザニアでも、日本と見紛う田園風景がキリマンジャロのふもとでみられた。ただし、現在のところアジアでみられたような「緑の革命」はアフリカでは生じていない。「緑の革命」がアフリカで生じていない要因としては、栽培技術の普及員がおらず、技術普及のシステムが脆弱であることが指摘される。タンザニアの JICA 職員も、アフリカ地域における人口密度の小ささを指摘する。アジア地域においては、改良品種の導入や新たな栽培方法によって収量および所得を向上させた者がいれば、その噂はすぐに伝播するが、アフリカでは人口密度の小ささから伝播に時間がかかっ

ているという。なお、途上国の農村の振興のためには、マイクロファイナンスは有効な一手となるようであり、タンザニアの農村地域でもマイクロファイナンスによって事業を始めた養鶏場を見学することができた。

工業においては、まずは労働集約的な軽工業が望まれる。資本集約的な重工業の儲けは大きい、そもその投資資金が不足しているため重工業では生産まで辿り着けないからである。また、人口ボーナス期における潤沢な労働力は、労働集約的な軽工業において比較優位を発揮する。現在、エチオピアやタンザニアでは、5S（整理、整頓、清掃、清潔、躰）やKAIZEN（労使協力的な経営改善）を積極的に導入しており、工業化の発展が期待される。なお、工業の振興には安定した電力供給や整備された道路といったインフラが欠かせない。しかし、これら公共的な性格を有するインフラについてはフリーライダーが生じやすく、民間企業による供給は期待しにくい。そのため、このようなインフラについては政府による供給や援助が望まれるだろう。ちなみに第三次産業については、英語やフランス語を公用語とする途上国で急速な発達が見られる。これは、英語やフランス語を扱える者が多く、先進国に留学した優秀な層が国に戻ってビジネスを展開するためである。その際、初期投資が安価であり収益が大きいことから第三次産業が展開される。しかし、それらの多くは労働集約的なものではないため、十分な雇用が生まれなため「早すぎる脱工業化」とも指摘される。

農工業の振興やインフラの整備は、費用対効果が見えやすい。しかし、それらに比べると教育はかかった費用に対して効果が見えにくい。さらに、効果が表れるまでに十年単位の時間がかかってしまう。そのため、教育に貧困削減の効果があるとわかっているにもかかわらず、予算が充てられにくいという問題がある。さらに途上国の場合は教育者の水準向上も求められるため、教育による貧困削減効果を感じられるまでには相当な時間を要することが予想される。そして、教育以上に対応が後手に回ることが多いのが福祉である。特に障がい者福祉および特別支援教育は等閑にされることが多い。教育や福祉への対応はQOLに直結するものの、その効果が見えにくいいため産業の振興やインフラ整備が優先されがちである。本実践では、この現状についてもゲームの中で触れられるように仕組んでいる。

ここまで各分野において求められる政策を概観したが、言うまでもなく政策の実施には予算がかかる。しかし、途上国においては（これは先進国も同じかもしれないが）全ての分野に十分な予算を割けるだけの財政的な余裕はない。そのため、政策に優先順位をつけなければならないトレードオフの状態であり、ゲームの中でもこの状態を生じさせた。また、資金の確保のためには、まず増税もあり得る。しかし、増税は景気の減退や国民の反発を招くこと。また、途上国においてはそもそも十分に公正な徴税がなされていないという点も考慮しなければならない。増税以外の手段としては、国債の発行も考えられる。しかし、政治的な情勢が不安定な国の場合は信用が低く国債の金利が高くなること、またそれに伴って国内の長期金利が上昇し景気の足かせとなってしまうという課題もある。次なる資金確保の手段としては、ODA（政府開発援助）など先進国からの援助に頼るという手段もある。しかし、かつて重債務貧困国（HIPC）の負っている債務の帳消しがG8で合意されたこともあり、先進国の借款供与ではかつてほど十分な資金が望めない。最後に、政府ではなく先進国企業からの直接投資によって資金を確保できる可能性もあるが、タンザニアなど外国企業への抵抗感が強い国も少なくない。そのような国では、政府によって外国企業の設備などが接収されることがしばしばみられるという。そのため、外国企業による直接投資は過少となっている。このようなマクロ経済的なジレンマについても補足的ではあるが授業の中で扱うこと、途上国の貧困問題の解決が容易ではないことに気付かせたい。

〈児童/生徒観〉

中学3年生という年齢もあり、ややもすると利己主義的で排外主義的な発言をする生徒もいる。昨今の社会情勢を鑑みれば、そのような発言をしないまでも利己主義や排外主義の片鱗は多くの生徒に内在

してしまっているように思われる。本実践を通して、自身の利己主義や排外主義を再考する一助としてもらいたい。

〈指導観〉

開発教育協会の「貿易ゲーム」を参考に、ゲーム的な要素を授業方法に取り入れることで、学習意欲を喚起するとともに、途上国が抱える財政的なジレンマと金融的なジレンマを有機的に理解させたい。なお、中学生の段階では金融に関する学習事項が極めて限定されている上に、そもそも金融自体が比較的難解であるため、今回は財政政策をベースにし、金融に関する事項は補足的に扱うに止めている。また、開発経済学に基づく各種具体的な政策については専門性が高くなるため、グループディスカッションを取り入れながらも講義を主とした授業方法を採用している。

05 単元計画（全2時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	開発経済ゲーム	途上国が抱える財政および金融のジレンマを理解する。	開発経済ゲーム	・写真 ・ゲーム教材
2	開発経済論	タンザニアを題材に具体的な開発経済戦略を考える。	グループディスカッション	・統計資料

06 本時の展開（1時間目）

本時のねらい：ゲーム形式で開発経済の基本を学ぶ

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (10分)	(講義) タンザニアってどんな国？ ・スライドによる講義	・学習意欲を喚起するため、写真を多く使用する。
展開 (35分)	(学習活動) 開発経済ゲーム（詳細は 15.自由記述欄に記載） ・ゲーム形式で、途上国における財政および金融のジレンマを理解する。	
まとめ (5分)	(講義) 開発経済ゲームの検証	

使用する資料・教材：

開発経済ゲーム・写真・統計資料

07 評価規準に基づく本時の評価方法

机間巡視・小レポート

08 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

- ・ 1時間目の「開発経済ゲーム」においては、素朴にゲームを楽しむ様子が顕著であった。なお、生徒は返済が必要なODAや国債の利用に慎重な様子であった。
- ・ 「開発経済ゲーム」の振り返りにおいて、途上国が抱える諸種のジレンマに気付いた様子であった。
- ・ 2時間目の開発経済学講義において、農業政策におけるコメの利点や難点など具体的な方法知については興味を示している様子であった。(ex. 「先生、コメに詳しいね～！」)

09 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

タンザニアでの研修にて実践者は、国や地域が異なろうとも経済開発には共通するセオリーが存在することを体感した。貧しく混沌としながらも活気あるタンザニアの現在は、高度経済成長期の黎明期の日本と共通するところが多く感じられた。そのため、経済開発を体系化した開発経済学を授業で伝えようと考えた。また、貧しい農村部を視察し途上国の貧困問題が未だに深刻であり、経済などを学ぶことができる先進国の人々にその解決の責務があるように思われた。

10 苦労した点

開発経済学の知見をゲーム形式の授業方法に落とし込むという授業方法の開発に苦労した。当初は、タンザニアの現状を様々な統計資料から把握するという作業から生徒に行わせ、農業や工業、教育や福祉についての具体的な政策および財政政策や金融政策を考えさせるという展開も検討した。しかし、タンザニアに行っていない生徒達が意欲的に調べ学習に取り組むことは難しいと判断し、統計資料に基づいた具体的政策については講義形式で行うこととした。さらに、難しくなりがちな金融については静的に盛り込むにとどめて、ゲーム自体はできるだけシンプルな構成とした。なお、金融の動的な展開についてはゲームの解説で扱っている。

11 改善点

開発経済学を真正面から扱う実践を試みたが、生徒が開発経済学や途上国の貧困問題にどこまで肉迫したのか疑問が残る。彼らにとって、タンザニアをはじめとした途上国の貧困問題は解決すべき切実な社会課題として映ったであろうか。本実践の「開発経済ゲーム」はゲーム形式であるが故に積極的に参加する姿勢がみられたようにも思われる。また、開発経済学の専門的な内容に関する講義もトリビア的な知識であったために彼らは関心を示したに過ぎないようにも思える。国際関係や経済学を専門に学ぶ大学生ではない一般の中学生に、専門的な内容をどこまで扱うべきかと逡巡した。

12 成果が出た点

これまで貿易に限定されがちであった南北問題に関する授業実践において、途上国の経済開発に求められる農業政策などの具体的な国内政策を検討する本実践は、大袈裟に言えば社会科教育実践における未踏の分野に挑んだものといえる。実践内容における成果としては、ゲーム形式の授業方法によって、途上国の財政的および金融的なジレンマの一端を感じさせることができたように思う。

13 自由記述

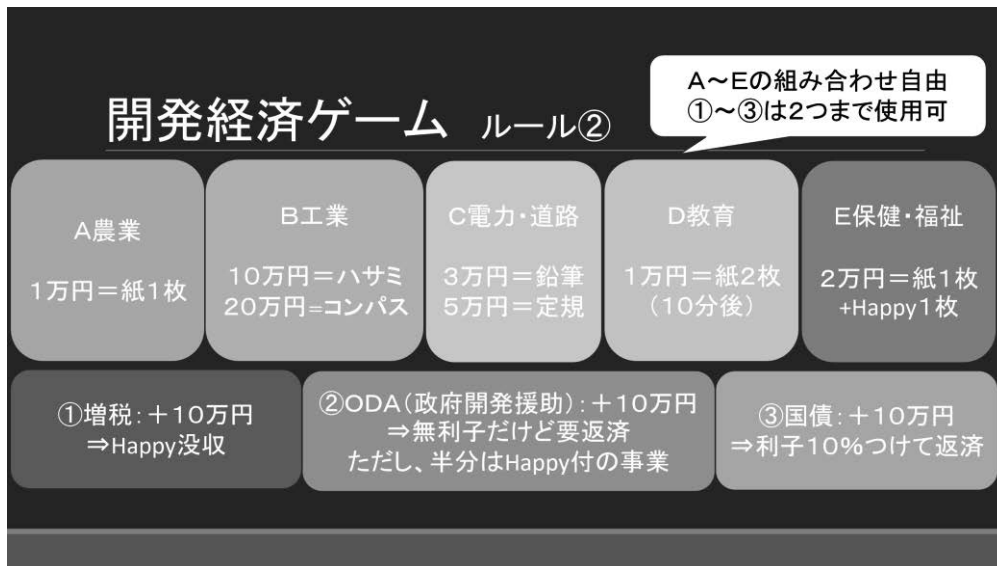
<開発経済ゲームについての補足>

1. ゲームの基本的な仕組み

学習者は4人程度のグループに分かれ、渡されたハサミや鉛筆などの文房具のみを使って所定の図形を作りお金を得る（20cm×10cmの長方形＝1万円、1辺が10cmの正三角形＝2万円、直径10cmの円＝3万円）。最も多くのお金を得たグループの勝ちとする。なお、ゲーム開始時点で渡されるものは、紙（B5サイズ）×1と10万円のみである。

2. ゲームの展開

各グループは図形を生産するために鉛筆やハサミなどの文房具を要する。しかし開始時の10万円では足りないため、①～③のいずれかの財政政策を講じて資金を調達しなければならない。その後、調達した資金をA～Eの政策に使用して文房具を得て生産活動を展開することとなる。



なお、Happyは国民の幸福度を向上させるものと位置付けている。しかし、実際の途上国がそうであるように国民の幸福度が上がる政策が必ずしも実施されにくい構成となっている。

参考資料・使用教科書：

- 大塚啓二郎『なぜ貧しい国はなくなるのか 第2版』（2021）日経BP日本経済新聞出版本部
黒崎卓 他『開発経済学 貧困削減のアプローチ』（2017）日本評論社
高橋基樹 他『アフリカ経済開発論』（2025）ミネルヴァ書房
田中治彦 編著『開発教育 持続可能な世界のために』（2011）学文社
開発教育協会『新・貿易ゲーム 経済のグローバル化を考える』（2009）開発教育協会
<https://www.dear.or.jp/books/book01/1149/>
国際協力機構「タンザニア連合共和国 JICA 国別分析ペーパー JICA Country Analysis Paper」（2025）
日本国際理解教育学会『国際理解教育を問い直す』（2021）明石書房
日本文教出版『中学社会 公民的分野』

【経済】

世界の多様な環境と人々の生活

【実践者】

氏名	木谷 隆太郎	学校名	東京都立駒場高等学校
担当教科等	地理総合	対象学年（人数）	1年1～7組（280名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年12月（2時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

地理総合(高校1年生)

02 単元名と単元目標

単元名：世界の多様な環境と人々の生活

単元目標：①世界各地の自然環境とそこに暮らす人々の生活の多様性を理解する。

②気候・都市化・経済発展・社会階層などの事象を関連付けて捉え、発展の成果と課題の両面を踏まえながら、持続可能な社会づくりの視点から考察する力を育成する。

③日本の都市発展の過程と関連付けながら、バングラデシュの都市が抱える課題について考察する力を育成する。

関連する学習指導要領上の目標：世界や日本の自然環境と人間生活との相互依存関係を理解し、現代世界の諸課題を多面的・多角的に考察し、公正かつ持続可能な社会の構築に参画しようとする態度を養う。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	・複数の資料を用い、バングラデシュの発展と課題を見出すことができる。
② 思考・判断・表現	・複数の生活階層を比較し、多面的に考察できる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	・日本や自分の生活と結びつけて学びを深められる。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由・単元の意義〉

本単元「世界の多様な環境と人々の生活」は、自然環境と人間の生活や経済活動との関係を地理的視点から捉え、持続可能な発展のあり方を考察することを目的としている。

熱帯に位置するバングラデシュは、縫製業を中心とした経済成長とインフラ整備が進む一方で、都市の過密や社会的格差、気候リスクといった課題を抱えており、「発展の成果」と「課題」が併存している。

こうした二面性は、生徒に発展と課題の相互関係を多面的に考察させる上で有効な教材であり、現代的・国際的課題を主体的に捉える契機となる

〈児童/生徒観〉

○生徒たちは世界の様々な事象に関心をもち、学習に対して前向きな姿勢ではあるものの、自分の意見を表明することに関しては控えめである。そのため、具体的な事例の提示や問いかけを通して思考を引き出すことが重要である。また、写真や統計などの一次資料を扱うことで、生徒の学びをより主体的なものへと促す必要がある。

〈指導観〉

授業では、第1時において写真資料を用いたフォトランゲージを行い、生徒がバングラデシュの都市にみられる発展と課題を直感的に捉える。その後、バングラデシュの統計資料を用いて、写真から読み取った事柄の背景を整理する。さらに、東京の戦後復興期の写真を示し、都市が発展の過程で抱えてきた課題の共通性について考えさせる。

第2時では、都市における社会階層の違いに着目し、教育支援を例にどの層への支援を優先すべきかをグループで考察させる。多様な意見を交流する活動を通して、発展の成果と課題を踏まえながら、持続可能な発展に向けた視点を養っていききたい。

05 単元計画（全2時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	写真から読み解く都市の発展と課題	写真をもとにバングラデシュの都市にみられる発展と課題を読み取り、過去の東京の姿と比較しながら考察する。	<ul style="list-style-type: none"> ・バングラデシュ・ダッカ周辺の写真を提示し、班で読み取る。 ・読み取った内容をもとに、都市の発展と社会課題について意見を共有する。 ・日本の戦後の都市写真を手がかりに、「発展と課題はどの国にもあったのか」を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・写真資料（バザール、ダッカ MRT、縫製工場など） ・統計資料（人口ピラミッド、輸出額・輸出品目の推移など） ・地図（色別標高図など）
2	バングラデシュの都市発展と社会階層	経済成長と社会課題の両面を踏まえ、都市における社会階層の違いに着目しながら、持続可能な都市発展に向けた支援について考察する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ダッカ周辺において想定される4つの社会階層の生活や教育環境を比較する（①国際機関や外資系企業に勤務する家庭の子ども、②国内企業に勤務する家庭の子ども、③非正規・不安定な仕事で働く家庭の子ども、④ストリートチルドレン）。 ・班ごとに、国の目指すべき姿を想定し、それに向けて教育分野で優先して支援する社会層を考察し、理由を整理して発表する。 ・日本を含む様々な主体による支援の在り方を整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・写真資料（現地で撮影した参考となる4種類の学校） ・4つの社会階層を整理した図表

06 本時の展開（1時間目）

本時のねらい：経済成長と社会課題の両面を捉え、持続可能な都市の発展を考える

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点(支援)
導入(5分)	<ul style="list-style-type: none"> ●研修で撮影した写真を提示した後、Forms を用いてバングラデシュに関する事前認識やイメージを把握・共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●ワークシート(A4)サイズを配布する。
展開1(15分)	<ul style="list-style-type: none"> ●現地で撮影した写真を1班1枚ずつ配布し、その写真にふさわしいタイトルを考えさせる。班でそのタイトルにした理由をまとめ、班代表がタイトルを板書する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●班ごとにA3サイズでラミネートした写真を配布する。1班5人で8班に配布する。
展開2(10分)	<ul style="list-style-type: none"> ●各班が考えた写真のタイトルと、その理由を発表する。他班の発表を通して、一枚の写真から多様な読み取りができ、都市の発展や課題について様々な視点が生まれることを理解させる。 	
展開3(10分)	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒の板書をもとに、バングラデシュの首都ダッカにおける都市発展と社会課題についてスライドや動画、統計等を含めて整理・解説する。 ①バザール…都市の活気と庶民のエネルギー 熱帯の気候ならではの果物が流通 ②町中の雑踏…都市のにぎわいを示す一方、人口集中による交通渋滞やインフラの脆弱性といった課題も読み取れる ③縫製工場…バングラデシュ経済を支える産業の一つ 人口ピラミッドからは人口ボーナス期にあることがわかる。女性の雇用機会は拡大している一方、月給は3万円程度と低水準 ④Aarong の店舗…世界最大規模の NGO「BRAC」が運営 農村部の女性を積極的に雇用するなど、経済活動と支援を結び付けた取り組み ⑤ダッカ MRT…都市の交通渋滞緩和を目的として整備 近年のインフラ整備の進展や、JICA による支援の一端を示している ⑥BRAC くもん…高所得層の家庭の子どもたちを対象 日本と同様の学習形態で冷房完備 ⑦雑多な旧市街…インフラの脆弱性と衛生リスク 過密ゆえ上下水道や道路の整備が進まず ⑧果物を売る少年…たくましく働く姿である一方、貧困や教育機会へのアクセスといった課題も 	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒の発言と重複する部分は触れる程度にし、写真の背景について解説していく。
まとめ(10分)	<ul style="list-style-type: none"> ●東京の戦後復興期の都市写真や1960年代の人口ピラミッドを提示し、バングラデシュの事例と比較しながら、都市が発展の過程で抱える課題の共通性について考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●日本も戦後復興期には世界銀行など国際機関の支援を受けながらインフラ整備を進めてきた

<p>●数名の生徒の感想を共有した後、Forms を用いて本時の振り返りを回収し、次時は、「どの社会層への教育支援を優先すべきか」をテーマに学習を進めることを予告する。</p>	<p>ことに簡単に触れる。</p>
--	-------------------

使用する資料・教材：写真資料（A3 サイズに印刷したものを班に 1 枚ずつ配布）、統計資料（日本との人口ピラミッドの比較、GDP の推移、色別標高図）、人物カード（各社会階層の生活や学習環境を想定したモデル）

07 評価規準に基づく本時の評価方法

・Forms への記述内容および発表の様子をもとに、都市の発展と課題の把握や、多角的に考察しようとする姿勢を確認する。

08 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

10. 学びの軌跡（児童生徒の反応・変容、感想文、作文、ノートなど）

授業冒頭に、バングラデシュについて①知っていること、②イメージについて Forms で回収した。①「知っていること」では、約半数の生徒が「国旗が日本と似ている」「人口が多い」「イスラム教の国」「衣類・縫製業がさかん」といった内容を回答していた。一方で、「特に知らない」「イメージがない」とする回答も一定数見られ、生徒の知識や関心にはばらつきがあることが分かった。

②「イメージ」では、「発展途上国」「人口が多い」「貧困や格差」「治安や衛生面があまり良くなさそう」といった印象が多く見られた。一方で、「衣類・縫製業が盛ん」「農業や稲作が盛ん」「人がフレンドリーそう」といった回答も一定数あり、生徒の中で多様なイメージが混在していることが分かった。

フォトランゲージでは、班ごとに 1 枚の写真から多様な意見が出され、写真を手掛かりに生徒が自分の考えを言語化し、なぜそのように読み取れるのか考える様子が見られた。

例えば、「果物を売る少年」の写真を扱った班では、「服装はそれほど悪くない」「子供の表情は暗くない」といった読みが示され、生徒がもっていたいわゆる児童労働のイメージとは異なる側面に気付く場面も見られた。



第 1 時に実施したフォトランゲージの様子

授業後の感想では、「日本」と結び付けて捉える記述が多く見られた。写真→統計→戦後日本の写真という学習の流れを通して、バングラデシュを単に“遠い国”としてではなく、都市化や人口構造、インフラ整備、格差といった地理的概念を用いて相対化し、時間軸を伴って理解しようとする変容がうかがえた。参観者からも、「写真から想像した現実を統計で肉付けし、日本の経済成長とも重ねて時間軸を意識させる構成が効果的であった」との評価が寄せられている。

また、写真にタイトルを付けるフォトランゲージの活動を通して、「同じ写真でも見方によって意味が変わることに気付いた」「他者の視点を知ることによって理解が深まった」といった記述が多く見られ、事象を一面的に捉えるのではなく、多面的に考えようとする姿勢が育まれていた。

一方で、「汚い」「狭い」「旅行はまだ難しそう」といった反応もあり、衛生面や過密といった都市課題を強く印象づけた生徒もいた。しかし同時に、「貧富の差は単純な同情で捉えるべきではない」「低賃金

産業の恩恵を自分たちも受けていることに気付いた」といった記述も見られ、経済成長の中で生じる格差を多面的に考えようとする姿勢が表れていた。これらの反応を踏まえ、次時以降では、都市課題を問題の列挙に終わらせるのではなく、どの社会階層がどのような条件下で課題に直面しているのかという視点へ接続し、理解を一段深めていきたい。

09 海外研修で何を学び、どの部分を見童生徒に伝えようと思ったか

ダッカ市街を中心とする現地視察を通じ、街の活力と、同じ都市空間に存在する格差の現実を観察した。特に、BRAC くもんの担当者から聞いた1か月分の学費と、現地でストリートチルドレンを支援するNPO 関係者から聞いた子どもの1か月の生活費が同程度であることに気づき、教育機会に留まらない格差の大きさを実感した。

また、同じ「学校」であっても、冷房やパソコンなどの設備が整ったインターナショナルスクールと、空調や照明が十分でない学校とでは、学習環境に大きな差があることが印象に残った。

これらの気づきをふまえ、本実践では、「バングラデシュの首都ダッカにおける発展と課題」、そして、「どの社会層への教育支援を優先すべきか」という問いを設定し、経済発展の成果と課題を多面的に捉えさせる教材として位置付けた。

10 苦勞した点

写真資料は生徒に強い印象を与えるため、貧困や危険といった先入観を助長せず、同時に現実から目を背けさせないバランス調整に苦勞した。フォトランゲージでは自由な発想が生まれる一方、断定的な読みへ傾く場面も見られたため、「どこからそう言えるのか」と写真の情報に立ち返らせる問い返しを意識した。

また、1時間の中で写真読解・統計による背景整理・戦後日本との比較・振り返りまで行う必要があり、活動のテンポ設計と説明量の取捨選択が難しかった。

11 改善点

今回用いた8枚の写真はいずれも探究活動の教材になり得るものであり、個々の写真についてより深く掘り下げる余地があった。しかし、時間の制約上そこまで展開できなかった点は今後の課題である。

また、自分たちの着ている服にもバングラデシュ製のものが多いことから、消費行動などを通して生徒自身の生活との接点を意識させる設問を加えるなど、学びの自分事化を一層図っていきたい

12 成果が出た点

授業前 Forms によって生徒の既有知識やイメージを可視化したことで、認識の差を前提に授業を進めることができ、写真読解において多様な視点が生まれやすくなった。

また、フォトランゲージ→統計→戦後日本との比較という構成により、バングラデシュを異質な国としてではなく、都市化や人口構造、インフラ整備といった地理的概念で整理し、時間軸を伴って理解させることができた。

13 自由記述

本実践では、バングラデシュの「活力」と「課題」を対立的に扱うのではなく、同じ都市空間に併存する現実として捉えさせることを重視した。写真資料によって生まれる感情的な反応を、統計資料や日本

の戦後復興期の事例で相対化することで、生徒が「発展と課題は多くの国に共通する過程である」と捉え直す姿が見られた。

参考資料・使用教科書：

栗田和明、根本利通(2015)『タンザニアを知るための 60 章【第 2 版】』明石書店

公益財団法人矢野恒太記念会編(2024)『世界国勢図会 2024/25』

資料：フォトランゲージで各班に配布した写真

フォトランゲージ：DEAR 開発教育ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>

1 班：バザールの果物店



2 班：ダッカの雑踏



3 班：縫製工場



4 班：商業施設(Aarong)



5 班：ダッカ MRT



6 班：BRAC くもん



7 班：ダッカ旧市街



8 班：果物を売る少年



【経済】

発展途上国の諸課題と日本の役割

【実践者】

氏名	大槻 研	学校名	東京都立大江戸高等学校
担当教科等	公共	対象学年（人数）	2年（27名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年 11月 ～ 11月（4時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

公共

02 単元名と単元目標

単元名：発展途上国の諸課題と日本の役割

単元目標：国際社会の安定と成長のために果たすべき日本の役割について考察する

関連する学習指導要領上の目標：

公共：地域の創造，よりよい国家・社会の構築及び平和で安定した国際社会の形成へ主体的に参画し，共に生きる社会を築くという観点から課題を見だし，その課題の解決に向けて事実を基に協働して考察，構想し，妥当性や効果，実現可能性などを指標にして，論拠を基に自分の考えを説明，論述すること。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	持続可能な世界の実現に向けた取り組みについて、資料を活用して身につけた知識を基に、国際社会の課題を多面的・多角的な視点から理解できている。
② 思考・判断・表現	これからの国際社会の在り方について、資料を検証・比較に用いて主張できている。論理に飛躍がなく展開できている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	国際社会が直面する課題に対して関心を持ち、提示された課題に対して積極的に取り組み、意見を発信しようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

本校は昼夜間の定時制・総合学科・単位制のチャレンジスクールであり、生徒が「今までの自分」から「これからの自分」に向けて、自分の力を信じ、チャレンジすることができるよう日々教育活動を行っている。チャレンジスクールは、小・中学校で学校になじめず不登校の経験があったり、高校で長期欠席等が原因で中途退学を経験したりして、これまでの学校教育の中で能力や適性を十分に生

かしきれなかった生徒が多く在籍する。そのため、本校では基礎的・基本的な学習内容の学び直しや自身の意見形成、集団での合意形成など社会で自立するための土台を築くよう日々の教育活動を行っている。

本単元「発展途上国の諸課題と日本の役割」では途上国への支援の在り方を軸として進めるが、本校の生徒にとっては身近な問題ではない。そのため、授業を通じて途上国への支援の在り方に関して自分なりの意見を持って構築し「自分事」として問題をとらえ、他者と対話を重ねながら結論を導く姿を期待する。

〈単元の意義〉

①「公共的課題への総合的・協働的なアプローチ」の育成

これまでの学習で身に付けた社会的見方・考え方を活用し、国際協力の在り方について、協働して解決策を考えるプロセスを経験させることで、単なる知識の習得にとどまらず、合意形成や社会参画を意識して共同作業を進める力を養う。

②「自立した主体としての市民性」の涵養

生徒自身が社会の形成者として行動するときに必要な思考の軸を持ち、自身の意見に根拠を持って対話し、結論を導く力を実践的に使いこなせるようにする。

〈児童/生徒観〉

バックグラウンドが多様な生徒が集まるため基礎学力や学習意欲の差はあるものの、素直で熱心に授業に取り組む生徒が多い。しかし、自分の意見や意思を全体の前で表出することは苦手とする生徒が多いため、授業では少人数での班内の対話を通して自分の意見を発表する機会を多く設定した。

〈指導観〉

①出会う段階では、バングラデシュを日本と比較しながら知り、バングラデシュが置かれている状況を多面的・多角的に理解する。その理解を通じて、バングラデシュへの支援はどのようなかたちで行うべきか、目標を確認する。

②深める段階では、フォトランゲージを行い、それぞれの写真を通じて日本とバングラデシュの「違い」をとらえる。また、その「違い」をどのように直すべきか、直さざるべきかを考え、支援の必要性を考察する。

③活かす段階では、架空の村を題材に具体的な支援を考察することで、支援を行う際の配慮事項などを理解する。

05 単元計画（全4時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	発展途上国の諸課題と日本の役割	国際社会における日本の支援や援助について理解する	・日本にとって国際社会との関りや国際社会の安定が重要であることを図表やグラフを通じて理解し、日本が国際社会に対して果たすべき役割を考える。

2	発展途上国の諸課題と日本の役割	SDGs の目標達成に向けて必要な日本の役割について考察する	・JICA 紹介動画 (YouTube) を活用し JICA が実施する ODA について理解する。
3 本時	援助の在り方について考えよう	グローバル化による経済発展がもたらす影響を理解する	・バングラデシュの基本情報を日本と比較しながら捉え、支援の必要性について理解する。 ・支援は金銭的な支援と技術的な支援の両方の側面から行うことが重要であることを理解する。
4 本時	援助の在り方について考えよう	支援の在り方について自分なりの考えを持つ	・村への支援の在り方を具体的な事例を基に考察し、支援を行う際に配慮しなければならないことを理解する。

06 本時の展開 (3・4 時間目)

本時のねらい：どのようなことに配慮し援助を行う必要があるのかを理解する。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)
導入 (5分)	○前時までの復習 ・南北問題を例に、途上国が抱える問題を振り返る。その際、先進国が行う支援の実例を例に支援の必要性を振り返る。 ・日本が行う支援として JICA の資金協力や技術協力があつたことを振り返る。	
展開 1 (20分)	○技術協力の必要性 ・WHO の作成する傾向補水液のレシピを参考に、班ごとに経口補水液を作成する。 ・読みにくいレシピを参考に作成することで、モノや資金だけの協力だけではなく技術面の協力が重要であることを理解する。	・UNICEF が示すアラビア語、スペイン語、英語のレシピを配布する。 ・配合を誤った経口補水液を飲むと体調不良を引き起こすこともあるため、作成した経口補水液は飲ませないように留意する。
展開 2 (20分)	○日本との「違い」を理解する ・バングラデシュの基本情報を日本と比較しながら捉え、支援の必要性について理解する。 —休憩 5分—	・人口、気候、GDP、宗教などに関してグラフや図表を用いて説明する。
展開 3 (20分)	○日本との「違い」を理解する ・フォトランゲージを通じて、バングラデシュと日本との「違い」を考える。その後、グループワークを通じて、「違い」を「あっていい違い」と「直すべき違い」とに分け、意見をまとめる。	・インフラ環境の違いや学校の教室の違い、路上で生活する人々との違いなどに着目させる。
展開 4 (20分)	○どのように援助を行うべきか考察する	・相手の立場を踏まえて支援を行うための視点を獲得できるよう指導する。

<p>まとめ (5分)</p>	<p>・架空のバングラデシュの村を事例に、「電気」「道路」「水道」「教育」のどれに援助を行うべきかを資料を基に考察する。その際、根拠を持って自分の意見をまとめる。</p> <p>○相手の立場に立った援助を考える</p> <p>・援助を行う際は相手国の立場や環境に配慮する必要があることを理解する。</p>	<p>・支援された蚊帳を漁網として使用されたマラウイでの事例を取り上げ説明する。</p>
---------------------	--	--

使用する資料・教材：・教科書「公共」実教出版、経口補水液の作り方（UNICEF）

07 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・ワークシート、グループワークの様子

08 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

以下、生徒の意見の抜粋

- ・過酷な環境を見て、日本に住んで安全に暮らせていることがどれだけ恵まれているか実感した。
- ・道ガッタガタ、めっちゃ長くかけて仕事してる
- ・自分はとても恵まれていると思った
- ・日本と全然違う暮らしをしていてびっくりした
- ・道がガッタガタで生活が大変で、無償資金協力によって整備された道路が増えたらいいと思った。
- ・日本とは全く違う環境で授業を教えるのもすごい大変だ
- ・テレビでは伝えられないような貴重なことを知れた

09 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

バングラデシュでは、ベンガル語をはじめ自分達の文化に強い誇りを持ちそれが国家としてのアイデンティティを形成しているように感じた。人々の暮らしや言葉から「利便性≠豊かさ」ではないことを改めて痛感させられたため、子ども達には先進国の行う支援の在り方を考えさせたいと思った。単純に金銭的な支援や技術協力を一方的に行うのではなく、先進国は支援をする際にその生活をいかに尊重しながら行うのかを考えなければならない。バングラデシュでの暮らしを実際に見聞きした経験があるからこそ、伝えたい内容である。

10 苦労した点

あらゆる環境が異なるバングラデシュでの問題や支援の在り方を「自分事」としてとらえるための工夫。ただ知識として知るだけでなく、経口補水液の制作などを通じた体験やフォトランゲージの実施などで少しでも「自分事」として問題意識を持てるように工夫した。

11 改善点

- ・本時のまとめでは「相手の立場に立った支援の重要性」を考えた。しかし、「相手の立場に立った支援の重要性」だけでなく、「相手の立場も尊重するが、それでも支援しなければならないこと」という

一步踏み込んだ支援の在り方まで考察するべきであった。相手の立場の尊重と利便性の提供はジレンマの関係ともいえるが、「なぜ支援が必要か」「支援を行う意味は何か」を改めて問いかけ、思考を深めていきたい。

・展開3において日本とバングラデシュの違いを考える場面では、国家のアイデンティティを考えるためにも「あっていい違い」と「直すべき違い」とに分け、意見をまとめさせたが、時間の制約や展開の流れを考えると「直すべき違い」に絞った方が展開はスムーズだった。

12 成果が出た点

本時の展開3では、生徒は人々の立場や考えを考察したうえで、自分の意見を構築することができた。考える材料としてはあえて多様な意見が入り混じるように意識して人や環境を設定した。その結果、生徒なりに自身の意見に根拠を持って発言できた。

13 自由記述

授業案作成時のテーマとして、本時は「日本人としての自覚をもって国際社会を主体的に生きる」を掲げた。国際貢献という抽象的な地球レベルの問題をいきなり考えさせることは、生徒にとっては切実性が持たず、現実的ではない。そのため、まずは足元の「ふるさと」を意識し、自分自身の国の文化の持つ価値観をアイデンティティとして保持するために、自分自身の生活とバングラデシュの人々の生活との「違い」を何度も行き来するような工夫を設けた。「Think globally, act locally（地球規模で考え、足元から行動する）」と表現されるように、この「ふるさと」を常に地球全体の問題とリンクして考える視点が、グローバル化が進展する現在、一層重要性を増していると考えられる。

参考資料・使用教科書：教科書「公共」実教出版

フォトライク：DEAR 開発教育ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>

【経済】

世界地理

【実践者】

氏名	太田 祥子	学校名	東京都 私立 駒場東邦中学校
担当教科等	地理	対象学年（人数）	2年1～6組（各43名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年 11月 17日 ～ （1時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

世界地理（南アジアの地誌）

02 単元名と単元目標

単元名：世界地理

単元目標：南アジアの地誌

関連する学習指導要領上の目標：気候や文化や産業、地理条件や経済課題を理解する。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	地理や経済関連データを読み解く力
② 思考・判断・表現	資料や条件をもとに、自らの考えを説明する力
③ 主体的に学習に取り組む態度	自分の意見を踏まえた上で、班員と協力して結論を導き、発表する力

04 単元設定の理由・単元の意義

〈**単元設定の理由**〉途上国の経済・社会的な課題と将来の可能性を考える。

〈**単元の意義**〉途上国や貧困問題を考えることで、自らの「当たり前」を問い直す。

〈**児童/生徒観**〉途上国の社会制度や経済は「遅れている・日本が安全でいい」という印象の生徒が多い。

〈**指導観**〉日本のシステムが「当たり前・ベスト」で、「日本の利益は自国のもの・支援の意味が不明」という意識を変えたい。

05 単元計画（全3時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	南アジア地誌	南アジアの地理情報の学習	バングラデシュを中心に、地理や産業の現状、経済の課題を学ぶ。	資料集、地図帳 各国基礎データ
2 本時	融資の決定作業	融資を通じて貧困を考える	班で融資先を話し合って決定する	作業シート
3	融資の決定作業	貧困の定義や国際協力の意義を考える	貧困＝お金がない以外の側面、日本の「信用」の意味と課題を考察する	生徒の考察や感想の紹介

06 本時の展開（2 時間目）

本時のねらい：融資の決定活動を通じて、バングラデシュの課題や貧困の定義を考える。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (10分)	1. 導入：バングラデシュ情報の復習、作業の説明	学習情報の確認
展開 (30分)	2. 班の発表準備作業：7名×6班に分かれて話し合い作業 3. 班の発表：代表者が班の意見を発表	知識の活用 合意形成の留意点の示唆
まとめ (10分)	4. まとめ：貧困や信用の定義の考察、作業シートの記入	

使用する資料・教材：配布した資料・作業シート（最後に一部を掲載）

07 評価規準に基づく本時の評価方法

自分の意見を資料に基づいて表明し、班での話し合いを行い、説得的に結論を発表できたか。
授業後の考察において、気づきをもとに、日本や国際社会の貧困対策の意義を理解できたか

08 学校外との連携（※該当のある場合）

学外から多くの先生方に見学に来ていただき、協議会で有意義な指摘をいただいた。

09 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

融資先の結論(6班×6クラス=36班)

小作人パパイヤ:14班 村の主婦マンゴー:9班 IT社員ダツカ:8班
縫製員ライチ:4班 出稼ぎ労働者リキシャ 1班

融資先の決定理由・発表内容より

小作人

選んだ理由・社会貢献効果

- ◆収穫量を上げることで現金収入が増え、新しい技術が村全体にも伝わっていく効果がある。
- ◆産業技術の革新は、第三次産業だけではなく、農業分野にもあてはまるはずだ。バングラデシュの就業人口の多くは農業従事者なので、農業分野に融資することの影響は大きい。
- ◆米の増産によって、国内の飢餓が無くせるだけではなく、将来的に、米の有数の生産国から輸出国になることが期待でき、世界の食糧不足にも貢献できる。
- ◆農業指導で村人から信頼されているので、担保となる資産はないが、保証人となる人は多いだろう。

懸念点

- ◆新種の苗が上手く育たない危険性がある。また、小作人であるため、担保となる土地を持っていない。
- ◆国土の多くがデルタ地帯で洪水被害に遭いやすく、農業分野でのリスクが高い。

村の主婦

選んだ理由・社会貢献効果

- ◆今までの家事労働の経験から、鶏を育てる技術は持っている。養鶏のビジネスをすることで、現金収入を得ることができ、農村で雇用が創出されて、都市との経済格差の縮小に貢献できる。
- ◆日本人の3倍近い量のお米を食べるが、食事内容が偏っているため、卵を売ること、たんぱく質を得られるなど質の高い食事を提供することにもつながる。

懸念点

- ◆鳥インフルエンザなどが流行したら、事業が失敗する可能性がある。

- ◆村で卵を作っても、都市部まで運んで販売までできるルートがない限り、ビジネスにはならない。
- ◆読み書きができないので、銀行の書類手続きができない。

IT 社員

選んだ理由・社会的効果

- ◆大学を卒業したエリートで、資産もあって返済が確実にできそう。
- ◆縫製産業に輸出の8割を依存しているのが課題なので、縫製産業以外の高付加価値の産業の育成に貢献できる。
- ◆IT人材の育成が、この国の産業の高度化につながる。この人が就職して部下を育成すれば、さらにIT人材が増えてGDPの向上につながる。

懸念点

- ◆失業中の仕事探しの生活費の足しになって終わってしまう可能性がある。
- ◆この5人の中では充分恵まれているので、この機会にあえて融資する必要性は他の人よりは低い。

縫製員

選んだ理由・社会貢献効果

- ◆子供の数が多一方で、公立教育の質の遅れも課題なので、子供の未来に投資することが重要だ。
- ◆英語を話し、専門知識をもつ高度人材の育成に貢献できる。

懸念点

- ◆子供が最終的に大学まで卒業するには、あと何年もかかり、今回の融資だけでは賄えない。
- ◆縫製員の給与は低いので、融資をしても返済できるか不確実だ。

融資先の結論(6班×6クラス=36班)

小作人パイアヤ:14班 村の主婦マンガー:9班 IT社員ダツカ:8班
縫製員ライチ:4班 出稼ぎ労働者リキシャ1班

融資先の決定理由・発表内容より

小作人

選んだ理由・社会貢献効果

- ◆収穫量を上げることで現金収入が増え、新しい技術が村全体にも伝わっていく効果がある。
- ◆産業技術の革新は、第三次産業だけではなく、農業分野にもあてはまるはずだ。バングラデシュの就業人口の多くは農業従事者なので、農業分野に融資することの影響は大きい。
- ◆米の増産によって、国内の飢餓が無くせるだけではなく、将来的に、米の有数の生産国から輸出国になることが期待でき、世界の食糧不足にも貢献できる。
- ◆農業指導で村人から信頼されているので、担保となる資産はないが、保証人となる人は多いだろう。

懸念点

- ◆新種の苗が上手く育たない危険性がある。また、小作人であるため、担保となる土地を持っていない。
- ◆国土の多くがデルタ地帯で洪水被害に遭いやすく、農業分野でのリスクが高い。

村の主婦

選んだ理由・社会貢献効果

- ◆今までの家事労働の経験から、鶏を育てる技術は持っている。養鶏のビジネスをすることで、現金収入を得ることができ、農村で雇用が創出されて、都市との経済格差の縮小に貢献できる。
- ◆日本人の3倍近い量のお米を食べるが、食事内容が偏っているため、卵を売ることで、たんぱく質を得られるなど質の高い食事を提供することにもつながる。

懸念点

- ◆鳥インフルエンザなどが流行したら、事業が失敗する可能性がある。
- ◆村で卵を作っても、都市部まで運んで販売までできるルートがない限り、ビジネスにはならない。
- ◆読み書きができないので、銀行の書類手続きができない。

IT 社員

選んだ理由・社会的効果

- ◆大学を卒業したエリートで、資産もあって返済が確実にできそうだ。
- ◆縫製産業に輸出の8割を依存しているのが課題なので、縫製産業以外の高付加価値の産業の育成に貢献できる。
- ◆IT人材の育成が、この国の産業の高度化につながる。この人が就職して部下を育成すれば、さらにIT人材が増えてGDPの向上につながる。

懸念点

- ◆失業中の仕事探しの生活費の足しになって終わってしまう可能性がある。
- ◆この5人の中では充分恵まれているので、この機会にあえて融資する必要性は他の人よりは低い。

縫製員

選んだ理由・社会貢献効果

- ◆子供の数が多いため、公立教育の質の遅れも課題なので、子供の未来に投資することが重要だ。
- ◆英語を話し、専門知識をもつ高度人材の育成に貢献できる。

懸念点

- ◆子供が最終的に大学まで卒業するには、あと何年もかかり、今回の融資だけでは賄えない。
- ◆縫製員の給与は低いので、融資をしても返済できるか不確実だ。

生徒の発表結果の分析

- 個人作業の段階で「この人に融資する」と決めていた人物から、班で話し合っ一致した融資先の結論に至るまで、バングラデシュの所与の課題や社会貢献効果を考えつつ、多角的に考え、ベストな選択肢を導きだそうとしていた。
- 個人作業の段階では、資産保有があり大卒で、将来像的に現在の生徒が想像しやすい立場のIT社員が選ばれていた。しかし、班員と話し合い、社会貢献効果や、将来の新しいビジョンや可能性を踏まえて、農業分野への投資という新しい見方を提示するようになった班が多かった。
- 銀行員としての前提条件、すなわち、確実な返済と社会貢献効果、両方を踏まえる必要があるという前提条件があったが、両者のバランスをどうとるのかでも、班内で意見の相違がみられた。

【生徒の感想】（事後の感想記入シートより）

企業活動と社会貢献の両立について

（両立の難しさを実感）

- ◆社会貢献しそうだと思ったものほど、失敗するリスクが高いと思ってしまった。企業として利益を得そうなものほど、社会に貢献できているのかは疑問に思えてくる。
- ◆社会貢献はしなければと思うのだが、やはりリスクはとて大きいと思った。投資家目線だと難しい。
- ◆貧困層より、ある程度信用や資産がある人に融資した方が結局は利益が多くなるが、それがない人に助けの手がない限り、貧困の根本的な解決には至らないのが難しいと思った。
- ◆社会貢献の利益として得られるものは、長期的に考えないと捉えにくいので、企業活動との両立は難しいと思った。

（両立の追及の意義の発見）

- ◆企業活動を成功させるためには、安定した成長を意識してしまいそうだが、企業内で労働環境の改善など、働く人のため、そのサービスを受けている人のために少しリスクを負っても改善すれば、中長期的な企業の成長につながると思う。
- ◆リスクが少ないなどを重視しすぎて、貧困所帯の改善につながらないこともあると思う。目の前の利益も大事だが、若い世代としては、数十年先の利益も見るのが大事だ。
- ◆社会貢献は大切だけれど、バングラデシュは国内の企業活動をさらに発展させることが重要なので、まずは利益第一になってしまうのではないかと。だからこそ、先進国が発展途上国を助けるという役割が意義あるものになるのだと思う。
- ◆貸した金が確実に帰ってくる人に貸すのは、企業活動として当然のことだが、それだと新たな面に挑戦することが厳しく、貧困が固定化され、社会貢献になりえない。企業側が譲歩しないと、貧困からの脱却は難しいだろう。

- ◆個人への融資によって、個人だけではなく、社会全体が豊かになっていくようなことはあるのだと感じた。
 - ◆社会貢献事業は、利益を得ようとするのではなく、企業のイメージアップとして多少のリスク覚悟で取り組むべきだ。
 - ◆1つひとつの企業の発展が、雇用の増加につながり、それに伴って教育が新しい仕事など、社会全体の産業が発達すると考えることができる。
- (貧困の定義の再考)
- ◆文字が読めず、収入が低いと融資を受けることが難しくなってしまうので、貧困のままになっていくことが分かった。
 - ◆小作人のパパイヤさんのように、現金収入は少ないが、自給自足できている人がいるため、貧困はお金だけではなく、土地などの資源へのアクセスだと理解できた。

金融分野における「信用」に関して

- ◆日本だと「定職」があり、財産保有があることが「信用」となるが、世界で生きていく上での「信用」は、やはり「将来性」にあるのでないか。例えば、年齢があてはまる。若ければ働けるので、バングラデシュの平均年齢が28歳と若いことは、それだけ可能性があることだと思った。
- ◆「信用」とは、お金のことだけではないと思った。自然災害によるリスクも考えていく必要があると思った。
- ◆「信用」されるためには、読み書きができることが前提条件で、今までの人間関係も大切だと思った。
- ◆日本だと定職についているかは重要だが、無職に風当たりが強いのは、こういうことも関係していると思う。世界での「信用」される条件は、十年後の利益だと思う。
- ◆技術がある人には多くの信用があり、識字率や学歴は低くても、勉強や仕事にやる気のある人には多くの信用があると思った。
- ◆日本においては、資産などが「信用」において重視される。しかし、将来においては、持続可能という視点から、「信用」を得るためには、ビジネス拡大などの可能性があるということが大切になると思う。
- ◆日本だと「信用」は財力になるが、世界で生きていく上では、仲間が必要だと思う。日本ではなくても、仲間をたくさんつくれる人は、すごいと思う。

10 海外研修で何を学び、どの部分を見習うように伝えようと思ったか

「貧困の定義」= お金ではなく、機会や資源へのアクセスがないという側面に留意し、誰にでも機会を開く社会制度の意義を考えさせたい。個人のチャンス→国内の成長→国際社会への持続可能な発展…という視点を持たせるような具体例を紹介していきたい。可能性が与えられる人が多くなれば、途上国や国際社会全体の持続発展的な発展につながっていく可能性が生まれることを伝える。

11 苦労した点

情報をたくさん提示しすぎて処理できない生徒がいた。大人数であるための措置だが、7名1班だと意見がまとまりづらかった。

12 改善点

利益重視以外に、中長期的な視点が、持続可能な経済成長のためには必要だという視点を伝えられた。

13 成果が出た点

具体的な登場人物を設定し、それぞれの場面で直面している困難を紹介することによって、抽象的な「国」ではなく、バングラデシュの「人々」という視点で考えてもらうことができた。その際、海外研修で撮影した写真（農村風景、縫製工場の現場、鶏肉売り場、リキシャの渋滞など）が、視覚資料として大いに役に立った。バングラデシュの産業や地形や貿易構造を学んだ上で、それを踏まえて融資先を決める作業にしたことで、生徒が目的をもってこの国の情報を見直すことにつながった。

14 自由記述

社会貢献と利益の追求は難しいけれど、必ずしも矛盾しないことを伝えることができた。

【資料配布プリントより（一部抜粋）】

※以下の5人は、それぞれの理由で**10万タカ（※約12万円）**を必要としており、銀行からの融資を受けたいと思っている。上の条件を踏まえた上で、誰に貸し出すべきか？

農民パバイヤさん 43歳。地主から借りた田を耕し収穫の半分を小作料として支払う。小さいころから農業一筋で、村人に農業指導をして頼りにされている。小作料の残りの米を家族の食料にし、余った分は市場で売っているが現金収入は少ない。もっと多くの米を収穫するために新しい品種を試したいと思っているが、新種の苗は高く買えない。

村の女性マンゴーさん 38歳。小さな借家で子供4人を育てる。夫は病氣療養中。「女性に教育は不要」という昔の考えで小学校は中退した。家事が得意で、特に鶏を育てるのが上手で村の女性達に卵を売っているが、広い養鶏場を作って卵を売るビジネスにしたい。

人力車で稼ぐリキシャさん 27歳。村の家族に仕送りするために、ダッカで人力車の運転手や建設工事の日雇いで働くが、収入は不安定。もっと賃金の高いドバイに出稼ぎに行くことを考えており、渡航費が必要。村から一人出てきて、ダッカに知り合いはいない。

ビジネスマンのダッカさん 35歳。外資系のIT会社に勤め、この国では月収8万タカの高水準の定収入で、親から譲り受けた土地に自宅もある。しかし、IT業界の競争が激しく、勤務していた会社が倒産したため、現在失業中で、ダッカの高い生活費に悩んでいる。

縫製工場のミシン職人ライチさん 31歳。日系企業で、日本向け衣服を製造する工場働く。娘2人は地元の公立学校に行っているが生徒数が多すぎて、午前午後の二部制で学習時間が少ないので、母親として私立学校で英語を学ばせたいが、2万タカの月収では足りない。

生徒発表原稿

駒東バンクの我々のチームは、JICAの職員、および我が銀行に資金提供をしてくれている、この場にいらっしゃる投資家の皆様に、以下を提案します。我々は、5人のうち、〇〇の〇〇さんに、10万タカを、年利4%で貸し出すことを提案します。我々はバングラデシュの統計資料から、この国の課題は、

_____ であると考えます。

一方、将来の経済成長の可能性については、

_____ であると考えています。

まず、〇さんに融資することで、〇さん個人には、_____ というメリットが生まれます。

〇さんに融資することで、〇さん個人に対してだけでなく、バングラデシュ国内には、_____ という社会的貢献的効果が生まれます。

さらに、我々が生きるグローバルな社会を考えると、国際社会全体には、_____ という社会的貢献的効果が生まれます。

もちろん、〇さんに融資することで、_____ というリスクはありますが、きちんと融資したお金と利子を返済してもらえると確信しています。

以上に述べたようなメリットと、利子による利益獲得、および社会的貢献が期待できるため、JICA および投資家のみなさんには、ぜひ〇さんに融資すべきという我々のチームの案を採用していただきたいと思います。以上です。

参考資料・使用教科書

慎泰俊『世界の貧困に挑む・マイクロファイナンスの可能性』岩波新書、2025年
外川昌彦（編著）『現代バングラデシュ・経済成長と変動する社会』東京大学出版会、2025年
J.モーダック・S.ラザフォード『最底辺のポートフォリオ（新装版）』みすず書房、2021年
黒崎 卓・栗田 匡相『ストーリーで学ぶ開発経済学』有斐閣ストゥディア、2016年
大橋 正明（著・編集）『バングラデシュを知るための66章（第三版）』明石書店、2017年

【文化・言語】

心と心が「つながる」コミュニケーションとは -国際社会で求められるコミュニケーションを考える-

〈実践者〉

氏名	北村 望	学校名	東京都世田谷区立千歳中学校
担当教科等	外国語（英語）	対象学年（人数）	1年A組（34名） B組（35名） C組（36名） D組（35名） E組（35名） F組（35名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年10月1日～12月16日（2時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

外国語（英語）、道徳

02 単元名と単元目標

単元名：心と心が「つながる」コミュニケーションとは -国際社会で求められるコミュニケーションを考える-

単元目標：タンザニアの体験記を通して、心と心がつながるコミュニケーションのあり方について考え、自分の言葉や姿勢で表現するとともに、実際のやりとりを通してその大切さを実感する。

関連する学習指導要領上の目標：(1) 聞くこと ア・イ、(3) 話すこと [やりとり] イ

03 単元の評価規準

① 知識・技能	英語での簡単な説明を聞き、やりとりをしながら話の概要を掴むことができる。 必要なコミュニケーション手段を考え、それらを適切に活用することができる。
② 思考・判断・表現	タンザニアの体験記をもとに、心と心をつなげるために大切なコミュニケーションのあり方を考え、実際のやりとりの中で適切に表現したり、伝えあったりすることができる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	コミュニケーションに興味・関心をもち、特に心と心をつなげるためのコミュニケーションについて学ぼうと、自ら考え、他者とコミュニケーションを図ろうとしている

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

授業者がタンザニアで現地の人々と関わる中で得た気づきをもとに設定した。活動を通して、言葉のやり取り以上に、相手を理解しようとする姿勢や、関係を築こうとする関わり方そのものが、コミュニケーションにおいて重要であると実感した経験があった。これを踏まえ、コミュニケーションにおいて本当に大切なことは何かという問いを、生徒と共に考えることをねらいとした。

〈単元の意義〉

授業者のタンザニアでの経験を通して、コミュニケーションが人と人をつなぐ重要な役割を持つことに気づかせることをねらいとした。英語を含む様々な手段で伝え合う活動を通して、相手を理解しようとする姿勢や、伝えよう

とする気持ちの大切さを学ぶ機会とした。これらの学びが、英語学習への動機づけに加え、生徒自身の人間関係や、将来を考えるきっかけとなることを目指す。

〈生徒観〉

生徒は今年度 4 月に入学したばかりで、中学校生活や英語学習に慣れつつある段階である。英語の授業は少人数制で、習熟度別ではなく学習レベルが均等になるよう編成している。英語に難しさを感じる場面も見られるが、多くの生徒は粘り強く学習に取り組んでいる。ペアやグループ活動を通して学び合う姿はある一方、相手の考えを受け止めたり、伝え合ったりする関わり方には課題が残る。英語学習への意欲を、世界とのつながりを意識した学びへと、さらに広げていく必要がある。

〈教材観〉

タンザニアでの実体験を教材として用い、生徒が具体的な場面を想像しながら、コミュニケーションの難しさや喜びを身近に感じられるようにした。導入や簡単なやり取りでは英語を用い、内容理解や思考を深める場面では日本語を用いることで、本質的な学びに集中できる構成とした。

〈指導観〉

本時の授業では、英語を「目的」ではなく、人とつながるための「手段」として位置付ける。また、実際にやり取りを行うことで、コミュニケーションの大切さを実感できるようにするとともに、振り返りを通してその気づきを言葉にできるようにする。

05 単元計画 (全 2 時間)

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	タンザニアと日本の違い (道徳)	<ul style="list-style-type: none"> ・タンザニアの紹介 ・タンザニアへの興味・関心を高めることができる。 ・日本との違いに気付くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・タンザニアの写真資料を用いて日本との違いについて話し合う。 資料：タンザニアで撮影した写真
2 本時	心と心が「つながる」コミュニケーションとは？-国際社会で求められるコミュニケーションを考える- (英語)	タンザニアの体験記を通して、心がつながるコミュニケーションのあり方について考え、自分の言葉や姿勢で表現するとともに、実際のやり取りを通してその大切さを実感する。	<ul style="list-style-type: none"> ・Greetings ・前時で見た写真を見返す。 ・写真の中の状況を想像・比較 ・写真にまつわるエピソード紹介 ・本日のゴールの確認 ・[Think-Pair-Share] コミュニケーションについて、今までの自分の考えを振り返る。 ・心と心をつなぐコミュニケーションをするために大切なものが何かを考える。 ・[実践]心と心がつながるコミュニケーション ・まとめと振り返り 〈資料・教材〉タンザニアで撮影した写真、自作スライド、ワークシート

06 本時の展開 (2 時間目)

本時のねらい：タンザニアの体験記を通して、心がつながるコミュニケーションのあり方について考え、自分の言葉や姿勢で表現するとともに、実際のやり取りを通してその大切さを実感する。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点・支援
導入 (10分)	○Greetings T: Hello, everyone.	・気持ちの良い挨拶で始める。

<p>展開 (35分)</p>	<p>S: Hello. T: How are you today? S: I'm fine. / sleepy. / tired. / good. T: Alright. With your pairs, please greet each other. S: Hi. How are you? -I'm fine. / sleepy. / tired. / good.</p> <p>○写真の振り返り T: I'd like to show you some pictures. Do you remember these pictures? S: Yes. / No. T: Can you tell me something about these pictures? S: These are the pictures from Tanzania. T: Yes. I went to Tanzania during the summer vacation. And in Tanzania, I wondered about something. Today, I'd like to show you 2 pictures.</p> <p>○写真の中の状況を想像・比較 T: First, please look at the picture A. What do you think they are talking about? What about the facial expressions? What about the atmosphere? S: Serious. / Heavy. / Nervous. T: Then, what about the picture B? What do you think they are talking about? What about the facial expressions? What about the atmosphere? S: Smile. / Fun. / Light. T: So, why are there differences? T: The 1 main difference was...they were talking in English in the picture A and in Swahili in the picture B. But why?</p> <p>○写真にまつわるエピソード ・タンザニアでの会話の機会 ・英語で話すことで、様々な会話ができたこと、通訳として他の先生たちをサポートできたこと。 ・写真 B には隠れている部分がある。→W 先生が存在 ・W 先生のスワヒリ語での活躍の様子 ・スワヒリ語で話されたタンザニア人の「笑顔」と、授業者が感じた「寂しさ」 ・コミュニケーションとは？人の心と心を「つなぐ」コミュニケーションとは？</p> <p>○本日のゴールの確認 心と心が「つながる」コミュニケーションとは何かを考えよう！</p> <p>○[Think-Pair-Share] コミュニケーションについて、今までの自分の考えをプリントに書く。ペアやグループで共有する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・写真を見ながら、タンザニアについて、道徳の時間に学んだこと、知ったことを思い出す。 ・2枚の写真を比べ、その違いや、特徴に気づかせる。単に情報として理解させるのではなく、生徒が実際の場面を想像しながら捉えられるよう留意する。 ・授業者自身の体験をもとに、何が起り、どのようなやり取りがあったのかをエピソード形式で伝える。 ・本日の目標を明確に伝える。生徒が何について考え、何を大切にして活動するのかを意識できるようにする。 ・これまでの経験やコミュニケーションに対する考えを、自分の言葉で整理する。その後、ペアや全体で共有することで、他者の考えに触れながら、自分の考えを深める。 ・上記の活動を踏まえ、心と心をつなぐためのコミュニケーションに必要なことについて考える。また、自分の考えを言
	<p>Q1:タンザニアの人々が母国語で話しかけられたとき、「笑顔」になったのはなぜ？ Q2:今まで、誰かと心がつながったり、意気投合したりした経験は？ Q3:コミュニケーションするとき、普段大切にしていることは？</p>	
	<p>○心と心をつなぐコミュニケーションをするために大切なものが何かを考える。 生徒に、コミュニケーションにおいて大切なことが書いてあるカード（例：「相手の話を最後まで聞く」、「相手を尊重する」、「表情」、「質問力」、「言語」、「翻訳アプリ」など）をロイロノートで配る。他に必要なものがあれば、</p>	

<p>まとめ (5分)</p>	<p>各自で付け足す。カードの中から、最も生徒自身が大切だと思うものを3つ選び、その理由を書く。カードは提出する。ペアやグループで共有する。</p> <p>○[実践]心と心をつなぐコミュニケーション 上記のアクティビティで選んだ3つの特に大切にしたいことを意識しながら、ペアを変えながらトピックについて話をする。(例：冬休みの予定、最近食べた美味しいもの、「UFO」や「お化け」は存在する?)</p> <p>○まとめと振り返り ・タンザニア研修を振り返る by Kitamura</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 英語も、現地の言葉もどちらも大切。 ・ 心が「つながる」コミュニケーションには、様々なコミュニケーションスキルや、思いやりや尊重を根底とした態度や姿勢が欠かせない。 ・ 心が「つながる」コミュニケーションは、日本にいても、世界のどこにいても大切なこと。 ・ 豊かなコミュニケーションは、人生を豊かにしてくれる。自分の世界を広げてくれる。 ・ これからも、国際人として通用するコミュニケーションを目指す。 </div> <p>・まとめ</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ol style="list-style-type: none"> 1.心と心が「つながる」コミュニケーションを意識してみて、思ったこと、考えたこと、感じたことは？ 2.あなたにとって、心と心が「つながる」コミュニケーションとは？ 3.今日の授業を通して思ったことや、考えたこと。 </div>	<p>語化することで、その大切さを意識できるようにする。他者の意見を聞き、考えを深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時は、英語で話すことを目的とせず、コミュニケーションの姿勢や、関わり方に意識を向けられるよう、日本語での対話を行う。その際、本時の目標を意識させながら取り組ませる。 ・授業者が実体験を通して感じたことを共有する。その際、特定の答えを示すのではなく、生徒の気づきや考えを広げ、深めるための材料として提示する。 ・本時の学習をふりかえり、自分なりの気づきや考えを言語化し、今後の生活や学習につなげる。
---------------------	--	---

使用する資料・教材：タンザニアで撮影した写真 ・自作スライド ・自作ワークシート

07 評価規準に基づく本時の評価方法

【活動】英語でのやり取りに積極的に参加しようとする姿勢や、コミュニケーションについて考え、表現しようとする姿勢、主体的に活動に参加しようとする姿勢。

【ワークシート】心と心が「つながる」コミュニケーションとは何かを考え、気づきなどとともに自分の言葉で表現している。

08 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

① 心と心がつながるコミュニケーションを意識してみて、思ったこと、考えたこと、感じたこと

「コミュニケーションはとても難しいと感じた」 「めっちゃ疲れる。これは当たり前でできる人って本当に強い人なんだなって実感した」 「少し気をつけるだけで、みんなとの話が楽しくなるんだと思った」 「会話が有意義だと感じた」 「人と話す事は面白い。自分と違う考えがあって、新しいことがわかった」 「これからも意識していきたい」

生徒の記述からは、心と心がつながるコミュニケーションを意識して実践したからこそ得られた、体感的な学びが見られたように感じる。多くの生徒が、相手の気持ちを考えながら話したり、質問したりすることに難しさや緊張を感じており、

「コミュニケーションは簡単ではない」と実感しているようであった。一方で、**表情や目線、声のトーン**などの非言語的要素を意識することで、話しやすさが変わり、**相手との距離が縮まった**と感じた生徒も多かった。また、意識して関わることで**会話が楽しくなり、笑顔が増えた**という記述も見られた。**相手との価値観の違いや、新しい考えに触れる面白さに気づいた様子**も見られた。

② あなたにとって、心と心が「つながる」コミュニケーションとは？

「相手の話をよく聞いて尊重する」 「共感したり、意気投合したりすること」 「対等な関係で仲良くすること」 「自分と相手がお互いに歩み寄っていること」 「言語や文化に違いや差があっても、認め合える関係になれるって素敵なこと」 「言葉ではわからない感情や思いが、つながること」 「本心を話せる」 「安心感」

この問いに対する記述から、生徒が、心と心が「つながる」コミュニケーションを、人と人との関係性であると認識した様子うかがえた。つまり、正確な言葉や、高度なスキルよりも、相手の話を聞こうとする姿勢や、共感し認め合おうとする態度、尊重し合い対等な関係で関わることが、心が「つながる」ために重要な役割を果たしていると考えられる生徒が多く見られたようであった。言語や文化が異なっても、相手を認め合い、安心して話せる関係が大切であるという理解が深まっている様子うかがえた。また、笑顔や表情、雰囲気といった非言語的要素が、人と人をつなぐ重要な役割を果たしていることに気づいた生徒も多かった。

③ 今日の授業を通して感じたこと・学んだこと

「英語をもっと頑張りたい」 「英語ができれば外国の人とも仲良くなれる」 「これから英語を勉強して海外に行きたい」 「完璧じゃなくても挑戦することが大切」 「もっとこういう授業をやってほしい」

本授業を通して、生徒たちがコミュニケーションについて深く考えたことに加え、英語に対する捉え方や、学習意欲にも変化が見受けられた。英語を「人と人をつなぐための手段」と捉える記述が多く見られ、「英語をもっと頑張りたい」「世界の人と話してみたい」といった前向きな意欲につながっていたようである。これは、授業者のタンザニアでの具体的な経験エピソードを聞く中で、身近な存在が英語を使うことで、タンザニアや、そこに住む人々となつながり、想いを分かち合っていたということを知り、それを自分ごととして考える中で、「英語が、世界と自分を結びつけてくれる意味のある言語である」と実感したことが、英語学習への内発的動機づけにつながっていたかもしれない。

また、「もっとこういう授業をやってほしい」という記述から、単に文法やスピーキングの技能練習としてではなく、人と人が関わる上で大切なことを、英語と結び付けて考える学びに、価値を感じていたことがうかがえる。英語を、単なる教科としてだけでなく、国際社会で用いる言語として捉え、他者とつながるために必要な姿勢や、考え方を扱う本授業には、生徒の側からの学習ニーズがあることもうかがえた。

09 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

タンザニアに実際に訪れ、現地の人々と会話を交わし、共に参加した教員と対話を重ね、さらに自分自身の学びを振り返る過程を通して、改めて自分が大切にしたい価値観や、生徒に伝えたい想いを整理することができた。特に、現地を訪問し視察させていただいたからこそ、タンザニアという国の様子を知るにとどまらず、その豊かさに心を打たれたり、学校教育の在り方や国際協力について葛藤やジレンマを抱いたりする経験を得ることができた。

実際に「見て」「聞いて」「感じた」からこそ、あらゆる場面において、「彼らにとって、そして私たちにとって本当に大切なことは何か」という問いを自分自身に投げかけ、対話を重ねることができたと思う。その問い続ける時間と過程そのものが、かけがえのない学びの時間であったと振り返っている。

本授業では、授業者がタンザニアで現地の人々や参加した教員と会話をする中で感じた「距離感」や「寂しさ」と一方でコミュニケーションを通して他者同士が築いていたように感じられた「つながり」をテーマとした。人々がつながるために必要なコミュニケーションとは何か、また国際人として求められるコミュニケーションとはどのようなものかについて、生徒と共に考える授業実践を試みた。授業を通して、生徒には、互いを尊重する姿勢を基盤としたコミュニケーションの大切さ、オープンマインドで他者と関わることを、そして Willingness to Communicate（積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢）の重要性を伝えることを目指した。また、国際的な場面において、英語が人と人をつなぐ役割を果たすことへの気づきを促し、英語学習への動機づけにつなげることも意図した。さらに、タンザニアという国を通して世界へと視野を広げ、生徒が世界に対して関心を持つきっかけを提供することも、本授業の目的の一つである。

10 苦労した点

コミュニケーションを知識として理解させるだけでなく、生徒が実践を通して体感できるアクティビティの設定に苦労した。抽象的なテーマを、限られた教材・時間・環境の中で具体化し、生徒が自分事として捉えられる形に落とし込む必要があった。

11 改善点

生徒に「コミュニケーションとは何か」という問いを深く考えさせることを優先した結果、授業中の英語使用量が限定的となった点は今後の課題である。内容理解と探究を重視しつつも、生徒の英語レベルに応じて英語使用率を高める工夫をしていく。

12 成果が出た点

授業終了後、ある生徒が「先生、今日の授業、すごく楽しかった！」と声をかけてくれた。理由を尋ねると、「こういう大切なことを、クラスのみならず一緒に考えるのがとても良かった」と話してくれた。この生徒の言葉は、本実践の成果を象徴するものであると感じている。

また、「10. 学びの軌跡」で述べたように、生徒一人ひとりがコミュニケーションについて深く考え、自分の言葉で「心と心がつながるコミュニケーションとは何か」を表現しようとする姿が見られた。その記述からは、生徒が他者との関わりの中で内省を深めている様子が読み取れた。

また、所属校の4名の教員にも授業を担当してもらい、タンザニアでの経験や学びを共有する機会にもなった。その点においても、本研修および授業実践は実りのあるものであったと考える。

また、「英語をもっと頑張りたい」という生徒の声が多く見られたことに加え、そのような変化が生まれた背景に目を向けることができた点も、本実践の成果である。英語の授業は、正確さや使用量だけでなく、学ぶ意味や文脈を大切にすることで、生徒の学習意欲を高める可能性があることに気づく機会となった。これは、今後の英語教育において重要な要素の一つであると考えられる。

13 自由記述

今回の授業では、タンザニアでの実体験をもとにしたエピソードを扱ったことで、生徒が出来事を「知識」としてではなく、「自分ごと」として捉え、擬似的に体験するような学びが生まれたと感じている。そして、このエピソードは、実際に現地を訪れ、文化や人々と関わったからこそ得られたものであり、海外研修という機会がなければ生まれなかった学びの素材である。生徒の記述から見ても、こうした研修を通して学ぶことのできる環境の重要性を改めて感じるとともに、その環境を整えてくださったすべての関係者の方々に深く感謝したい。

また、AIの発達により翻訳が身近になる中で、英語の授業で何を扱い、どのような力を育てるのかを改めて考える貴重な機会にもなった。文法や語彙などは個人学習でも補える一方、学校という場には、多様な他者と関わることで生まれる学びがある。本実践では、英語を知識や技能としてではなく、文化や価値観、コミュニケーションの在り方と結び付けて扱い、「正しさ」よりも「理解しようとする姿勢」や「伝え合おうとする態度」に目を向けた。国際社会においては、言語技術だけでなく、相手を尊重する姿勢が不可欠であり、こうした価値観を英語の授業で扱う意義は大きいのではないかと考える。

参考資料・使用教科書：

コミュニケーション能力とは？鍛える方法や能力の高い人・低い人の特徴

(<https://mba.globis.ac.jp/careernote/1181.html>)

コミュニケーションが上手な人の20の特徴

(<https://jp.indeed.com/career-advice/career-development/good-communicator-characteristics>)

フォトランゲージ：DEAR 開発教育ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>

【文化・言語】

「Swahili ساحل」

【実践者】

氏名	綿貫 誠	学校名	千葉県立津田沼高等学校
担当教科等	地歴公民（世界史）	対象学年（人数）	3年 B組（39名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年 10月 ～ 11月（5時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

地歴公民・世界史探究

02 単元名と単元目標

単元名：「Swahili ساحل」

単元目標：「ESD 4つのレンズと5つの見方」の考え方を基に、中世の東アフリカ（タンザニア）における諸地域の広がりを多様なアクティビティで理解できるようになる。

関連する学習指導要領上の目標：世界史探究 C 諸地域の交流・再編 西アジア社会の動向と アフリカ・アジアへのイスラームの伝播，ヨーロッパ封建社会とその展開，宋の社会とモンゴル帝国の拡大などを基に，海域と内陸にわたる諸地域の交流の広がりを構造的に理解できるようになる。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	中央アジア・南アジア・東南アジア・アフリカの各地でどのようにイスラーム化が進んだのかを理解している。
② 思考・判断・表現	各資料をもとに、イスラーム教の伝播・拡大においてアラビア語の果たした役割を多面的・多角的に考察し表現している。
③ 主体的に学習に取り組む態度	イスラーム教の各地への伝播について、自分が抱いた興味・関心や疑問、追究してみたいことなどを見出して、見通しを持って学習に取り組もうとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

本単元は、アフリカ東海岸に形成された中世スワヒリ世界を扱い、インド洋交易を基盤とする都市社会の成立と発展を理解させるために設定した。生徒はアフリカ史を内陸中心・受動的な歴史として捉えがちであり、海洋交易や都市文化の存在について十分な理解を得られていない。そこで、地理的条件、交易品、イスラームの受容と在地文化との融合に着目することで、スワヒリ世界が外部から一方的に影響を受けたのではなく、主体的に形成された地域世界であることを明らかにする必要がある。このような視点から本単元を設定し、世界史を相互交流の歴史として捉える力を育成する。

〈単元の意義〉

本単元は、アフリカ東海岸に形成された中世スワヒリ世界を取り上げ、インド洋交易を基盤とする都市社会の成立と発展を通して、地域世界の多様性と相互のつながりを理解させることを目的として設定した。生徒は「アフリカ＝内陸・未開」という固定的なイメージを抱きがちであるが、スワヒリ都市はイスラーム文化とアフリカの要素が融合した高度な海洋交易社会であり、ユーラシア・アフリカを結ぶ国際的ネッ

トワークの一角を担っていた。そこで本単元では、地理的条件、交易品、宗教・文化の受容と変容に着目し、史資料の読解や比較を通して、スワヒリ世界を「周縁」ではなく「主体的に形成された地域世界」として多面的に捉えさせる。これにより、生徒が世界史を単なる文明史・王朝史としてではなく、交流と相互作用の歴史として理解し、現代のグローバル社会を考える基礎的視点を身に付けることをねらいとする。

〈児童／生徒観〉

全体を通して落ち着いており、雰囲気良く仲が良い。進学学習の問いに対してクラス間で主体的・対話的に授業に取り組む様子が多々見受けられる。

〈指導観〉

歴史に対する興味・関心が強く自主的に学習を進めていく生徒がいる一方、「世界史」に苦手意識を持つ生徒もいるが、現代世界の国際政治、経済、語学、文化などと世界史を関連付けて意欲的に学習している。

05 単元計画 (全6時間)

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	タンザニア ESD 4 つのレンズ と5つの見 方	「ESD 4つのレンズと5つの見方」について世界史探究における多面的・多角的な視点を獲得する。	東京都市大学 佐藤真久教授 「正解がない問い/正解が複数ある問い」「世界を見る三つのものの見方」の話や ESD 持続可能性に関する諸課題と4つのレンズについて理解する。	
2	大交易の時代	動画を視聴して世界史探究における多面的・多角的な視点を獲得する。	東シナ海や南シナ海、それにインド洋沿岸の諸地域の間では、海を越えた人々の交流や交易がすでに紀元前後から行われていたことへの認識を理解するとともに、14世紀ごろの交易についても理解を深める。	NHK 高校講座 世界史探究 第12回 大交易の時代
3	Unconscious Bias against Tanzania -From TPL(Tanzania PhotoLanguage)	タンザニア(アフリカ)について、自分自身のアンコンシャス・バイアスを理解し、タンザニア(アフリカ)に対する「学びほぐし」や「捉え直し」をする。	(1)アンコンシャス・バイアスの定義を理解するとともに、自身や社会は様々な「バイアス」にかかっていることを認識する。 (2)自身が、タンザニア(アフリカ)に対してどのようなアンコンシャス・バイアスを持っていると思うか、想像する(勝手に思っている)「アフリカらしさ」を考える。 (3)タンザニアで撮影された写真とそうでないものを考え、なぜ「あなたはそう判断したか」を考える。	参照：一般社団法人アンコンシャス・バイアス研究所 アンコンシャス・バイアス(unconscious bias) https://www.unconsciousbiaslab.org/unconscious-bias/ 政府広報オンライン 「アンコンシャス・バイアスを減らす3つのポイント！誰もが活躍できる社会に」 https://www.gov-online.go.jp/tokusyu/unconsciousbias/
4	「50—Hamsini」	神経衰弱風ゲームを通して、なぜ	(1)スワヒリ語の語源となった50種類のカードを用いて同じ語源のペアを探して揃える神	「50—Hamsini」カード

本時		スワヒリ語の語源にはアラビア語が関係しているかを考える。	経衰弱を行う。(英語・ドイツ語・ポルトガル語・ペルシア語・アラビア語・ヒンドゥー語) (2)獲得したカードの語源はどの組み合わせが多かったか、またなぜその言語が多いかを考察する	
5	「Swahili ساحل」 1回目	「Swahili ساحل」を通し「海のシルクロード」における経済や言語のつながりを東南アジア、南アジア、中東、アフリカ、ヨーロッパなどの地域区分にとらわれず、世界の捉え直しを図る	「Swahili ساحل」海のシルクロードのゲームを行う ・イブン・バットゥータの旅した時代(1300年代)では、ボードゲームに示されている諸地域で、なぜアラビア語が用いられていたか考える。 イブン・バットゥータの旅行路はどのような経路をたどっているか考察する。	・「Swahili ساحل」ルールブック ・「Swahili ساحل」権利書一覧 ・「Swahili ساحل」ゲームボード ・サイコロ(3つ) ・権利書カード ・歴史書(4枚1セット) ・世界地図(白地図) ・翻訳アプリ
6	「Swahili ساحل」 2回目	上記と同じ	上記と同じ	上記と同じ

06 本時の展開(6時間目)

本時のねらい:「Swahili ساحل」を通してイブン・バットゥータが旅した「海のシルクロード」諸地域の交流を「東アフリカ海岸」と関連させながら構造的に理解できるようになる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点(支援)
導入 (5分)	●「Swahili ساحل」海のシルクロードの概観をつかむ。 「Swahili ساحل」のボード及び付属アイテムの準備を行う。	●14世紀のイスラーム世界の概観を理解できているかを各自確認するように促す。
展開 (40分)	※本時は前時の復習を兼ねて行っている。 ●「Swahili ساحل」海のシルクロードのゲームを行う。 ※ルールブックがあるので、適宜確認しながらゲームを進める。 その際、以下の内容を注意しながらゲームを進める。 ①「権利書」を獲得した場合、Google レンズを使用し、アラビア語で示されている以下の内容を確認する	①について(1)~(3)の学習を通して、現代社会で頻繁に用いられる「6つの州」の考え方を変容させ、「イスラーム世界」としての経済的・文化的なつながりが当時存在したことを意識させる。 ②について授業の既習事項である。思い出せない場合は、生徒間や教師からの助言を受け理解を進める。 ③について東アフリカとイスラーム

<p>まとめ (5分)</p>	<p>(1)都市名 (2)都市で取り扱われていた商品 (3)都市の説明</p> <p>②「フォルサ」や「奴隷市場」のマスに止まった場合、自身が入手したカードの本来の用語について理解する。</p> <p>③歴史書を獲得した場合、Google レンズを使用し内容を理解する。</p> <p>ゲーム終了後、以下を生徒間で共有する。</p> <p>つなぎの問い1</p> <p>Q イブン・バットウータの旅した時代 (1300 年代) では、ボードゲームに示されている諸地域で、なぜアラビア語が用いられていたか？</p> <p>つなぎの問い2</p> <p>Q 「Swahili ساحل」のボードゲームに示されている地域と、資料集 p 32～p33 に掲載されているものと見比べる。→イブン・バットウータの旅行路はどのような経路をたどっているか？</p> <p>つなぎの問い3</p> <p>・「つなぎの問い2」を踏まえて、なぜ東アフリカにはイスラーム文化がもたらされたか？</p> <p>→アラビア語で「海岸」とはどのような意味か？</p> <p><u>本時のまとめ</u></p> <p>本時の授業内容を踏まえ、14 世紀のアフリカのイスラーム化について考え、Forms でまとめる。</p>	<p>ム世界を理解するてがかりになるので、特に注力を入れて学習するように促す。</p> <p>つなぎの問い1 アラビア語がイスラーム世界における国際的な言語として、経済や文化的交流の役割を担っていることに気づかせる。</p> <p>つなぎの問い2：イスラーム世界の広がり、「6つの州」を越えて広く伝播していることを意識させるとともに、「海のシルクロード」を介し移動していることに着目させる。</p> <p>つなぎの問い3 中東から東アフリカ世界に向かう「海のシルクロード」の経路やゲーム内で登場する都市（モガディシュ、モンバサ、ザンジバル、キルワ）を意識させる。</p> <p>→中東のオマーン（ザファール・マスカット）とのつながりがあることを意識させる。</p> <p>→東アフリカの「海岸」に辿り着くように仕向け、「スワヒリ」との関係を考えさせる。</p>
---------------------	--	---

使用する資料・教材：

- ・「Swahili ساحل」ルールブック・「Swahili ساحل」権利書一覧・「Swahili ساحل」ゲームボード
- ・サイコロ (3つ)・権利書カード・歴史書 (4枚1セット)・世界地図 (白地図)・翻訳アプリ

07 評価規準に基づく本時の評価方法

- ①1300 年代のイスラーム世界における諸制度や文化が「Swahili ساحل」を通して、東アフリカ世界に流入した経緯について十分理解しているか。(知識・技能)
- ②「Swahili ساحل」を通し「海のシルクロード」における経済や言語のつながりを東南アジア、南アジア、中東、アフリカ、ヨーロッパなどの地域区分にとらわれず、多面的・多角的に考察し、表現しているか。(思考・判断・表現)
- ③イブン・バットウータが活躍した 1300 年代におけるイスラーム世界の情勢や「海のシルクロード」によって培われた経済や文化について、積極的に学ぶ態度を養っている。(主体的に学ぶ態度)

08 学びの軌跡 (※児童生徒の発言の変化など)

Q：今回の授業を通して、あなたは今回の内容をどのように考えましたか。(1)統合的レンズ(つなげる)(2)変容的レンズ(かえる・かわる)(3)批判的レンズ(見直す・捉え直す)(4)文脈的レンズ(グローバルな文脈)の視点から動画の内容を考えてみましょう。という問いに対して、

- ①統合的レンズ(つなげる)

・東アフリカのイスラーム化は、宗教に限った話でなく、季節風による貿易、それによる文化の交流、経済活動などが結びついて起こったもの。交易を通じてアラブの商人が訪れ、言語、文化、宗教が入り混じることで、地域社会が多文化的につながった。

・東アフリカのイスラーム化は交易、文化交流、政治の発展が全部つながって進んだもので、一つの要因だけでは説明できない複合的な変化だと感じた。

・今回の授業を通して、言語・宗教・経済が全部つながって歴史を作っていることに気づきました。ゲームで旅のルートを進みながら、アラビアやインド、アフリカがどのようにつながっていたのかが体験的に理解できて、ただの知識じゃなく「関係性」として捉えられるようになりました。

②変容的レンズ（かえる・かわる）

・イスラーム文化を受け入れたことによって、東アフリカの政治や文化が大きく変化したと思う。法律や習慣、交易のやり方までイスラーム的な価値観に変わっていき、社会全体が外部との繋がりの中で「変容」していることが目に止まった。

・イスラームを受け入れたことで、都市のしくみや商人の生き方、人々の文化まで変わり、東アフリカ社会そのものが新しい姿に変容していったことが印象的だった。

・私はアフリカの歴史にあまり興味がなかったけれど、この授業を通して「意外と奥が深くて面白い」と感じるようになりました。特に“交易を通して文化が混ざり合う”という視点は、これまでの自分の見方を変えてくれました。知らない分野でも、体験的に学ぶと見方が変わるんだなと思いました。

③批判的レンズ（見直す・捉え直す）

・イスラーム化を単に『広まった』として考えるのではなく、その裏で誰が得をし、損をし、どのような影響を受けたのかを考える必要があると感じた。東アフリカの支配層らは、交易で利益を得てイスラームを積極的に受け入れた一方、地域の中ではこの急激と言えるイスラーム化で戸惑う人は必ずいたと思うので、その点も考えるべきだと思う。

・今まで宗教が広がる＝強制的というイメージがあったけど実際は交易を通じた自発的で自然な受容もありその見方を見直す必要があると思った。

・授業前は「イスラーム＝中東の宗教」というイメージが強かったけど、実際はアフリカの沿岸地域にも深く関わっていたことを知り、今までのイメージが偏っていたと感じました。また「アフリカ」という一括りの見方がどれだけ雑だったかにも気づき、もっと地域ごとの歴史や背景を見ないといけないと感じました。

④文脈的レンズ（グローバルな文脈）

・アフリカのイスラーム化はグローバルな貿易ネットワーク（インド洋、アラブ）という大きな流れの中で起こったが、その受け入れ方は地域で異なり、独自の文化と混ざってローカルに発展していった。世界的なイスラーム化と独自の文化が相互して影響しあって進んだことだなと思った。

・インド洋世界という大きな国際交流の流れと地域ごとの言語、文化という現地の事情が重なった結果としてイスラーム化が進んだことを理解できた。

・14世紀の東アフリカはローカルな地域でありながら、インド洋を通してすでに“グローバルなネットワーク”につながっていたことが分かりました。現在の国際化と全く別世界のように思える時代でも、すでに人や物、宗教や言語が行き交っていたと知り、過去と現在のつながりを実感しました。歴史は遠いものではなく、今の世界にも続いている流れなのだと考えるきっかけになりました。

09 海外研修で何を学び、どの部分を見習いに伝えようと思ったか

タンザニアでは、初代大統領ニエレレ大統領が構想したウジャマー政策がタンザニア国内に浸透し、スワヒリ語の浸透やイスラームやキリスト教、土着信仰の宗教観や部族間を超えたつながりを自国民に意識させていることがわかりました。また、日本との関わりが多様に存在し特に JICA の 有償資金協力によるケニア・タンザニア連系送電線事業や JICA の技術協力 によるコメ振興能力強化プロジェクトは日本の国際貢献を象徴していると感じました。生徒には「アフリカ」・「自然が豊か」・「黒人がいる」・「植民地」など固執した断片的なイメージではなく、「タンザニアを多面的・多角的に俯瞰して見る」とことや、歴史や経済を通して、アジアや中東世界とのつながりを意識して考えることが大事だと伝えたいです。

10 苦労した点

自作でゲームを考えたことが大変でした。100冊ほど本を読み漁り、タンザニアに関わる歴史事象を1つ1つ考察しました。また海外の貴重な文献や資料なども集めたり、ChatGPTを駆使してゲームアイデアやイラストイメージを考えたりと、グローバルかつ生成AIが発展している時代だからこそ授業作成にもチャレンジしてみました。

11 改善点

作成したゲームに生徒が熱中してくれたのですが、授業のねらいに辿りつくように運営する必要があると感じました。

12 成果が出た点

アクティビティを多く取り入れることで、生徒が関連する授業項目について関心を持ち、内容の進化統合を図ることができました。また、世界に対する関心を「世界史」を通して広げることができました。

13 自由記述

教師海外研修での経験は自身の資質能力の向上に加え、全国の教職員との交流、生徒への還元が図られると感じました。今回の経験及び授業に限らず、今回のことを糧に今後も多くの国際理解教育の推進に努めたいと考えています。そして今回の研修及び授業を通じてお世話になりましたJICA関係者の皆様や、学校関係者、生徒の皆さんにこの場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

参考資料・使用教科書

- 『最新世界史図説タペストリー 二十三訂版』 帝国書院 2025
- 『ザンジバルの笛 一東アフリカ・スワヒリ世界の歴史と文化』 富永智津子 未来社 2001
- 『アフリカの過去』 著：バジル・デビッドソン 訳：貫名美隆 理論社 1990
- 『スワヒリ語のしくみ』 竹村景子 白水社 2016
- 『ニューエクスプレスプラス スワヒリ語』 竹田敏之 白水社 2019
- 『アフリカの過去』 著：バジル・デビッドソン 訳：貫名美隆 理論社 1990
- 『イブン・バットゥータの世界大旅行 14世紀イスラームの時空を生きる』 家島彦一 平凡社 2003
- 『タンザニアを知るための60章【第2版】』 栗田和明・根本利通 明石書店 2015
- 『スワヒリ世界をつくった「海の市民」たち』 根本利通 昭和堂 2020
- 『大旅行記1～8』 編イブン・ジュザイイ 訳：家島彦一 平凡社 1996
- 『鄭和の南海大遠征』 宮崎正勝 中央公論社 1942
- 『新・人と歴史 拡大版21 世界史航海史上の先駆者 鄭和』 寺田隆信 清水書院 2017
- 『復刻版 小説 海のシルクロード』 庄野英二 理論社 2010
- 『スワヒリ都市の盛衰』 富永智津子 山川出版社 2008
- 『アフリカ史の意味』 宇佐美久美子 山川出版社 1996
- 『地中海世界の旅人―移動と記述の中近世史』 栗山保之ら 慶応義塾大学出版会 2014
- 『プランテーションの人類学 タンザニア・ボンデイ社会とココヤシ栽培』 高橋美也子 風響社 2023

【文化・言語】

Let's widen your world! ～多文化共生社会を生きる私たち～

【実践者】

氏名	清水 欽奈	学校名	東京都立南多摩中等教育学校
担当教科等	英語	対象学年（人数）	3年A組（40名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年12月（2時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

英語、道徳

02 単元名と単元目標

単元名：Let's widen your world! ～多文化共生社会を生きる私たち～

単元目標：多文化について書かれた英語の会話文を読んだり聞いたりして、英文を引用したり内容に言及したりしながら、考えたことを英語または日本語で伝え合うことができる。

関連する学習指導要領上の目標：（1）聞くこと ウ、（2）読むこと イ・ウ、（5）書くこと ア

03 単元の評価規準

① 知識・技能	英語の会話文を読んだり、聞いたりする活動を通して、文化的、社会的な題材について理解することができる。
② 思考・判断・表現	会話文から読み取った文化的、社会的な内容について、英語または日本語を用いて適切に表現することができる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	バングラデシュをはじめとする発展途上国の文化や社会に対する理解を深め、主体的にコミュニケーションを取ろうとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

本単元の題材である Let's widen your world! は、授業者の教師海外研修での経験を見聞きし、バングラデシュをはじめとする開発途上国の文化や社会について知ることで、生徒自らが多文化共生について考え、多文化共生社会における自分自身の生き方を考える機会とする。

〈生徒観〉

本校の生徒は、知的好奇心を持ち、学習に意欲的に取り組んでいる生徒が多くいる。また、国際理解教育として海外の学校との交流会やオンライン英会話も行っているため、国際理解や国際交流への意欲関心は高い。3年生2学期に、ディベートやレシテーションコンテストの練習を通して文化的、社会的な題材について英語で扱うようになった。一定数英語を苦手とする生徒もいるため、英語を通して学ぶという経験をさせ、英語を通して「自分と世界がつながった」英語で「できることが広がった」などの有用感を感じてもらい、英語学習のモチベーション向上に繋げていきたい。

〈指導観〉

まず、授業者がバングラデシュで遭遇した「レストランのお手洗いで足を洗う男性従業員」の姿を共有し、自分だったらどのように受け取るかを考えさせる。次に、フォトランゲージで自分たちの暮らしとの共通点・相違点・想像したことを班で出し合う。他の班の写真を見たり気づきを聞いたりしながら、開発途上国の暮らしについて知見を広げる。そこで、

導入で聞いた「レストランのお手洗いで足を洗う男性従業員」は、礼拝前の手足を清潔に保つというイスラム教の教えに非常に忠実であったがゆえの行動であり、ムスリム（イスラム教徒）が9割を占めるバングラデシュではごく当たり前の光景であったことに気づかせる。導入では、「不潔である」、「受け入れられない」などという感想をもつ生徒が多く存在することが予想できるが、そこには、無意識的な偏見（Unconscious Bias）の存在があったということに気づかせたい。

また、知識構成型ジグソー法を用いて自分とは異なるアイデンティティをもつ人物の視点から英文を読みロールプレイングを行うことで、生徒に異なるバックグラウンドをもつ人について「自分ごと」として考えさせ、多文化共生の良さ、難しさ、またそれを実現する方法について考えさせたい。

05 単元計画（全2時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	バングラデシュについて知り、多文化共生について考えよう	<ul style="list-style-type: none"> ・バングラデシュへの興味、関心を高めることができる。 ・バングラデシュの社会が抱える課題について考えることができる。 ・無意識的な偏見の存在に気づくことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業者がバングラデシュで見た印象的な場面について考える。「レストランのお手洗いの洗面台で足を洗う男性従業員の姿」 ・バングラデシュ人がどんな暮らしをしているのか知る。フォトランゲージ、クロストーク ・気づいたこと、日本との違い、疑問点について共有する。（児童労働、縫製産業、ストリートチルドレン、食文化、学校給食の制度について、学校のように、交通、ダッカメトロのピクトグラム、イスラム教の教科書） ・無意識的な偏見の存在に気づく。 <p>導入で紹介したレストランの場面についてもう一度考える。そこに「無意識的な偏見（Unconscious bias）が存在するのではないか」ということを考える。</p> <p>資料・教材：フォトランゲージ用資料、PPT教材、ワークシート</p>
2 本時	多文化共生について考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・バングラデシュ人が大切にしていることについて学ぶことができる。 ・日本社会が抱える課題について考えることができる。 ・多文化共生社会において、自分なりに生きていく方法について考えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Warm up ・ことわざ4択クイズ ・知識構成型ジグソー法 エキスパート活動/読み合わせ活動 ・Jigsaw Activity “Let’s make a school or a company!” ・まとめ・振り返り <p>教材・資料：PPT教材、ワークシート 台本3種類</p>

06 本時の展開（2時間目）

本時のねらい：多文化共生について考える

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
Warm up (10分)	<p>○“Let’s learn about Bangladesh through proverbs!” ～言語からバングラデシュを読み解こう！四択クイズ～ バングラデシュのことわざ（Proverbs）から、自然の豊かさや国民性を知る。 また、日本の暮らしや国民性と比較する。</p> <p>① One’s harvest month is another’s complete devastation. （=Someone’s happiness is someone’s sadness.）</p> <p>② Can’t clap with one hand. （=There are always two sides to every story.）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・未習の単語については、単語の意味を補足して説明する。 ・boat や tiger などの単語から身近に河川や自然があること、温かく、

<p>導入 (5分)</p>	<p>③ The *Brahmin left the house, so put away the plough. (=When the boss is away, it's time to have party.)</p> <p>④ The boat of affection can overcome mountains. (=Love conquers all.)</p> <p>⑤ Tiger on the bank, crocodile in the water. (=Surrounded by danger from all sides.)</p> <p>⑥ Five fingers are never similar. (=You can never expect all members of a group to think alike.)</p>	<p>受容的な国民性の一部も読み取ることができるよう助言する。</p>
<p>展開 (30分)</p>	<p>○Let's review!～前時のふりかえり～ 前時では、フォトランゲージを通して、バングラデシュ人の生活について知り、誰もがもちうる「無意識的な偏見 (Unconscious bias)」の存在に気づいた人が多くいたことを共有する。</p> <p>○ Jigsaw Activity "Let's make a school or a company!" 知識構成型ジグソー法を用いて、ある学校や会社で、国外にルーツをもつ生徒や同僚と共生できる環境や規則づくりを行う。 3人一組のグループに分かれ、それぞれエキスパートになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Expert practice Expert A … Mr. Pon, Expert B…Mr. Desh, Expert C…Ms. Jam 日本人、バングラデシュ人、ジャマイカ人の3つの立場から、その国の人々が大切にしているもの、アイデンティティや日本での事例について書かれた英文を読み込む。 • Role Playing • Make a poster The name of the school / School rules / Lunch / How they stay について、英文や英単語を記入していき、お互いを受け入れながら、自分らしさを大切に過ごすことのできる学校、または会社について考え、校則や社則をポスターにして書き出す。 • Share posters 完成したポスターを共有し互いに学び合う。 	<ul style="list-style-type: none"> • グループの組み方に配慮する。 • ジグソー法のグループには介入しすぎず、全体の指導のみに控え、生徒たちの自発的な気づきを促す。
<p>まとめ (5分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 「多文化共生とはどのような社会か？」という問いに再度答え、前時からの自分自身の変容を捉える。 • 本時のふりかえり、感想をワークシートに記入する。 	

使用する資料・教材：写真、自作スライド、自作ワークシート

08 評価規準に基づく本時の評価方法

ワークシートの記述、発言

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

【前時の学習より】

「バングラデシュのレストランのお手洗いで従業員の男性が足を洗っている場面を見かけたらどう感じるか？」という導入の問いに対する生徒の感想

- 家に水道が無いのではないかな？

- ・不潔だと思ってしまった。マナーや行儀がなっていないな、と思う。
- ・衛生的によくない。あまり良い気はしない。
- ・驚く。そういう文化なのかな？と思う。

フォトランゲージの様子



※フォトランゲージ内で Bangladesh の公立の中学校のイスラム教の教科書（現地での道徳の教科書）「Islamic Studies」の表紙と、「Sidah（礼拝）の方法について」のページを共有。礼拝の方法を紹介し、手足を清潔にしなければならないことを補足した。

フォトランゲージ後の「Bangladesh のレストランのお手洗いで従業員の男性が足を洗っている場面を見かけたらどう感じるか？」という導入の問いに対する生徒の変容・感想

- ・宗教が原因であれば、その国の人々の特色として受け入れることができる。何も知らずに、「汚い」などと思ったのは失礼だった。
- ・その国の大切な文化を守っているのでありだと思えるようになった。
- ・事情がわかったら全然嫌じゃなくなった。
- ・自分たちの常識としていることと違うことが世界にはあるということを改めて認識した。
- ・足を洗面所で洗うのは日本人からしたら考えられないようなことであると思ったが、礼拝のために手足を綺麗に保つ必要があると知り、Bangladesh の人には意味がある行為で、拒絶するのは良くないと感じた。
- ・礼拝をするために、手と足を清潔に保つという教えを忠実に守っている国民性の表れだと思った

フォトランゲージを終えた後の生徒の感想

文化の違いで自分たちから見たら受け入れられないものがあるかもしれないが、それは意味があることだと思おう。自分の文化だけ正しいと思おうのはやめた方がいいと感じた。一見、受け入れられない文化でも、相手の国の文化の背景について知ることによって、受け入れられるようになると思おう。まずは知ることが大切だと思った。

Reflection 感じたこと、変化したこと、学んだこと 等

異なる宗教を信じている人や、経済格差など、個人に「汚い」というものが生じていても、それを否定せずに受け入れ、助け合おうと努力する姿勢は、本当に素晴らしいと思いました。また、自分の思いこみにとらわれ、色眼鏡でものを見るのは絶対いけない。またと思いました。自分と異なる宗教のことをしっかりと学び、受け入れて認められる人になりたいと思います。

Reflection 感じたこと、変化したこと、学んだこと 等

お手洗いの水道で足を洗うことなど知らなかったの思いをみて、現地の人の行動について悪い印象を持ってしまった。無知でいることの怖さについてよく分かったので、様々な考え方や文化について「知る」ことから始めていきたい。

Reflection 感じたこと、変化したこと、学んだこと 等

お牛洗いの水道で「足を洗うことなど知らないうちの思いこみで」
現地の人々の行動について悪い印象を持ってしまった。無知であ
ることの怖さについてよく分かったので、様々な考え方や文化
について「知る」ことから始めていきたい。

Reflection 感じたこと、変化したこと、学んだこと 等

様々な宗教文化を持った人々がいる中でお互いの生活を尊重し合っ
ていることが素敵だと思った。ゴミの分別や管理についてなど、動かし
けがなければ動けないような状況があるのを知り、発展していくと、その
手助けをすることはなかなか難しいことだと感じた。自分が「アンコンシャスバイアス
を持っているかも?」という視点を日頃から頭に入れておくことで、様々な文化
の人たちと共に生き合っていくようにしたい。

国際協力機構 (JICA) 九州センター「多文化共生ってなんだろう?」より

感じたこと、変化したこと、学んだこと 等

アンコンシャスバイアスは多くある。自分たちの生活と社会の発展の
どちらを優先してどう折衷し、どちらがよいのか、どちらもよくしようと
しているが、矛盾が生じているのは何かはわからない。文化を学ぶより
海外に行ったりしたいという気持ちが強くなった。

Reflection 感じたこと、変化したこと、学んだこと 等

バンラデシュの国の人々の優しさ、心のなさをとても強く学ぶことが
できた。国の中に貧しい人がいるが、国に来て人々のおもてなしの心を
忘れないところがとてもすごいなと思った。今私たちにできることは、
解決策が見つけられないとしても、自分たちなりにお助けするべきこと、
国の文化について考えつづけることなのかなと思った。


Reflection 感じたこと、変化したこと、学んだこと 等

文化の違いについて、私は今まであまり知らなかった(今もだけど)。
いろいろな文化を学ぶことの大切さか分かった気がする。
知らなければ、受け入れられない、それは当然だと思っ
ても自分も大切だし、みんなも大切。
違っていいんだ、みんなと同じようにならなくていいんだ、
ただ同じ世界を生きる人として、尊重できればいいんだ、
そんな姿勢を学びました。

【本時の学習より】

グループで作成した
学校のポスター


Let's widen your world! and
Classroom Activity: Let's make a school!

School name
W.S.M.S
(World see mihayama School) 

School rules
Uniform: free style (You can choose uniform or your clothes)
Lunch: buffet style. for example, rice or bread, chicken or pork.

Student should ...
① Study English. (And a lot of languages.)
② Learn other countries culture.
③ Take a lot of communication.
④ Have hospitality heart.

Let's widen your world! and
Classroom Activity: Let's make a school!

School name
Three Y 

School rules
Uniform: Free
Lunch: Traditional foods of many countries such as Japan, Bangladesh and Jamaica. ~~Pork~~ doesn't use pork in lunch.
This school

Student should ...
· respect each other
· study hard
· understand another countries cultures
· enjoy the school life

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

バングラデシュ人の言語や国を大切に思うアイデンティティに加え、若い力で国を動かし、自分の力で生活費を稼ぐ子供などを見て、たくましさを感じた。また、人をもてなして歓迎する、他人を思う温かい心など、滞在して初めてわかるものが多くあった。発展していく中で生まれる矛盾や歪みなど、国際協力、開発、支援をする上での課題も学んだ。10日間をバングラデシュで過ごし、私自身も、自分と異なる生活をする人々に対し、無意識のうちに決めつけや、偏見(Unconscious Bias)をもっているということに気づかされた。本校の生徒たちには、世界に視野を広げ、文化や宗教、歴史など、より多くのことを知ることによって、それを受容的に捉え、より豊かに生きることができるということを伝えたいと思った。

12 苦労した点

・事前研修では、テーマに「言語・文化」を設定していたが、現地で得られたものは道徳の教科書や読まれているイソップ童話、新聞など多くはなかったため、テーマに沿った授業案を考えることに苦労した。教科に関連付けて授業づくりを行うことに苦労した。

・知識構成型ジグソー法では、英語でのエキスパート原稿づくりを工夫した。その国の良さ・その国の国民がアイデンティティとしているものを大切にしながら、共生するという点について、葛藤（ジレンマ）を感じさせたいと考え、それぞれの国の国民の時間に関する捉え方の違いや、宗教的な文化の違いを原稿に盛り込んだ。また、自分が訪れたことのない国について、資料やネット上の情報だけを元に教材を作ることも難しく思っていた。そのため、本校のJETプログラムにジャマイカ出身の先生が在籍しており、その方にインタビューを行い、エキスパート原稿を作成した。

13 改善点

- ・知識構成型ジグソー法を取り入れる中で、英語での原稿によらない自由な発話を促すことが難しかった。
- ・台本を作成している中で、どうしても授業者側の意図があり、恣意的な文章になってしまうところ。論理的、客観的で自然な流れの会話を意識して作りたい。

14 成果が出た点

- ・生徒がバングラデシュの歴史や文化、国民性を知り、異国に親しみをもって考えるようになった。
- ・生徒が発展途上国の課題や開発援助の難しさについて知ることができた。
- ・導入に発問を設定し、授業のまとめにもう一度同じ発問をすることによって、授業を通して生徒に気づきや変容をもたらすことができた。
- ・授業後、大学進学後の進路について考えた際に、国際協力や、開発援助等の言葉が出るようになり、少なからず生徒の進路や影響を及ぼすことができたことがわかった。

15 自由記述

現地の生活を目で見て体感してきたこと、バングラデシュの人々や教師海外研修の仲間たちと出会い、学んだことと生徒に伝えたいことがたくさんありまとめ切ることができず、授業を計画、実践するまでに、たくさん悩みました。今では、現地で感じた「モヤモヤ」、帰国して悩んだ「モヤモヤ」した時間もとても意味のあるものだったのだと思います。これからも、自ら「モヤモヤ」を見つけて、考えて続けていきたいです。この機会を大切にしながら、今後も研修に努めていきます。二度とない素敵な経験と出会いの場を設けていただき、本当にありがとうございました。

参考資料・使用教科書：

- ・「だれもが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイディア BOOK 2022～」
(2022年、独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 広報部 地球ひろば推進課)
- ・『30 Bengali Proverbs And Idioms That Carry A Lesson For Everyone』 SCHOOP WOOP.COM
(最終閲覧日：2025/11/28 Bengali Proverbs: Wisdom and Insights from Traditional Sayings)
- ・フォトランゲージ：DEAR 開発教育ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>

【文化・言語】

母語について考えよう

【実践者】

氏名	大野 健一	学校名	埼玉県川口市立飯仲小学校 (兼務校の川口市立仲町小学校にて授業実践)
担当教科等	外国語・日本語指導	対象学年(人数)	4年生 (81名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年 10月 ~ 11月 (3時間)		

実施概要

01 実践する教科・領域

外国語、総合的な学習の時間

02 単元名と単元目標

単元名：母語について考えよう

単元目標：母語とは何かを考え、異なる母語(言語)を話す人たちへの理解を深めるとともに、普段一緒に生活をする友達との相互理解を深める。

関連する学習指導要領上の目標：探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。(総合)

03 単元の評価規準

① 知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・ALTやゲストティーチャー等が説明する他国の母語や文化について正しく理解している。・異なる言語や文化について、それぞれの違いに気づき、その多様性を理解しようとしている。
② 思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none">・母語や他の言語、その背景にある文化について疑問や好奇心を持ち、課題解決の見通しを持つことができる。・体験的に学んだり、調べたりしたことを基に、情報を整理・分析し、自分の意見を持つことができる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none">・異なる文化や言語に興味関心を高め、自分から質問をしたり、積極的に考えたりしようとしている。・自分自身の母語について考えたり、自ら進んで活動に参加しようとしていたりしている。・自分の母語ではない言語を使って、相手に分かりやすい自己紹介に取り組もうとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

本校の児童は、小さいころから、色々な国から来た友達がいる環境が当たり前の生活を送っている。クラスの半数近くが何らかの形で外国とつながりがあるのだが、それぞれがどのような母語（言語）を家で話しているのか、について互いに話す機会はほとんどない。違う言葉を話す、または、日本語が流暢ではない友達だが、日常の生活ではそれほど困らない、程度に捉えている子供たちが多く見受けられる。しかし、互いの母語（言語）を知らないことや、それに関心を寄せないことは、その背景にある他国の文化への無関心とも言える状況である。実際に、このような状況が、トラブルの原因になり、特定の国の名前を出して非難をしたり、〇〇人だから、のようにステレオタイプの非難をしたりすることにつながる事例も実際に起こっている。

本単元では、バングラデシュ独立のきっかけとなったデモの犠牲者を追悼する塔「ショヒド・ミナール」を導入に活用する。ショヒド・ミナールは、バングラデシュ人の母語であるベンガル語を守るために立ち上がり、パキスタンとの独立闘争で犠牲になった人々を弔う塔である。1時間目では、なぜ、バングラデシュの人々は母語を必死に守ろうとしたのかを考える。そして、そもそも母語とは何なのか、なぜ人々にとって大切なのかをALTの説話なども踏まえて考えていく。次に2時間目で、母語が突然奪われ、使えなくなるということはどのようなことなのかを、グループ活動を通じて体験的に学ぶ。最後は、友達の母語で自己紹介をし、母語の尊重やクラスの友達の多様性などを学ぶ活動を展開していきたい。

〈児童/生徒観〉

埼玉県川口市には外国人人口が約4万人おり、全人口の7.3%を占めている。これは全国的に見ても非常に高い数字である。本校の位置する西川口周辺は、市内の中でも外国籍の方が多く住んでいる地域にあたる。特に、学校周辺は中国人の集住地域となっており、学校にも多くの中国人児童が在籍している。しかし、近年はネパールやベトナムなど南アジアや東南アジアにルーツを持つ児童の数も増加している。（本校は、バングラデシュ出身の児童も2名在籍している。）

本校は、様々な文化・言語背景を持つ子ども達がクラスに混在している状況である。学校全体としての学年にも外国にルーツを持つ児童が多く、全校児童の4割は外国につながっている。転入してくる児童の多くが外国籍というのも大きな特徴である。今回授業を行う4年生も非常に多様であり、中国、韓国、ネパール、ベトナム、バングラデシュなど、学年全体の1/3以上が外国ルーツとなっている。

〈指導観〉

1時間目は、バングラデシュ独立の引き金ともなった、母語闘争、ショヒド・ミナールの学習を通して、なぜバングラデシュの人々は自分の命をかけてまで母語を守ろうとしたのかを考える。そして、自分の母語や母語の尊さを考える時間にしたい。この時間は様々な葛藤や状況が想定される。教える側は、非常にセンシティブな事例を扱っている、という意識も持たなくてはならない。例えばクラスには、親のどちらかが別の言語を話している場合や、国籍に関わらず、生まれ育った日本の日本語を母語と捉えているケースなどである。また、家庭内で複数の言語を使用しているので、母語を1つに決められない、というような児童もいる可能性がある。よって、それぞれの児童の状況に寄り添いながら、母語に優越はない、ということを強調しながら進めていきたいと考える。

本学年の子供たちは、様々な言語を母語とし、違った文化背景を持つ友達と共生して日々の生活を送っている。児童には、自分が何気なく生活をしている空間が、実は多様性に富んでいることに気づくとともに、それぞれの母語・文化を尊重することの大切さに気付かせたい。

05 単元計画（全3時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料 教材
1	母語とは何か？国際母語デーから考える	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の母語と友達の母語を知る ・母語の大切さを知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・ショヒド・ミナールとバングラデシュの独立について ・国際母語デーについて ・自分の母語について 	フ ォ ト ラ ン ゲ ー ジ
2 本時	母語が使えなくなる とはどういうことか	<ul style="list-style-type: none"> ・母語が奪われることを体験的に学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の復習 ・同化政策とアイヌ語のこと ・グループワーク（母語が全く使えない状況で他言語を使って課題解決をする） 	フ ォ ト ラ ン ゲ ー ジ
3	異なる母語を話す友達の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・異なる母語を話す友達の理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の母語ではない言語で自己紹介をする。 ・母語話者と自己紹介文の練習 	フ ォ ト ラ ン ゲ ー ジ

06 本時の展開（2時間目）

本時のねらい：母語が使えなくなる、とはどういうことなのかを知ろう

過程 時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・ 指導形態	指導上の留意点 (支援)
導入 (0分)	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の復習 (①ショヒド・ミナール ②国際母語デー ③自分の母語) ・バングラデシュ独立の時、母語は守られたが、 → もし母語が守られなかったとしたらどうなるのか？ ・同化政策によって母語を奪われたアイヌの事例 ・グループ活動：自分たちの母語（この活動では日本語を想定）がある日突然使えなくなったら…。 ・各班で課題の絵を完成させる活動。5人班の場合、4人は説明、1人は絵を描く。この活動を行う際は、<u>すべて英語を使い、それ以外の言語は使用禁止。(8分)</u> 	
展開 (0分)	<ul style="list-style-type: none"> ・描き終わったら、実際の写真と自分たちが描いた絵を見比べてみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史的な詳しい説明はしないで、事実のみ端的に伝える。 ・活動のルール説明

<p>まとめ (〇分)</p>	<p>・突然母語が使えなくなった体験を振り返る ◎ALT の説話（もし、母語であるビサヤ語が奪われたら） フィリピンはかつてスペイン、日本、アメリカなど様々な国の植民地だった。</p>	<p>① 使用言語は英語のみ ② ジェスチャーはOK ③ どうしても難しい場合は、挙手して教師を呼ぶ。許可を得てヘルプタイムを使うことができる(10秒間)。日本語・中国語で説明OK</p>
---------------------	--	--

**使用する資料・教材：フォトランゲージ（バングラデシュ滞在中の写真）、パワーポイント資料
ALT の説話用ピクチャーカード4枚（英語、日本語、タガログ語、ビサヤ語）
母語が使えない状況でのグループ活動時の絵+B4 白紙用紙**

07 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・主体的に取り組む態度：自分の母語ではない言語を使って、相手に分かりやすい自己紹介に取り組もうとしている。→ 母語ではない言語を使ってグループで絵を再現する活動
- ・知識/技能：・ALT が説明する他国の母語や文化について正しく理解している。→ ALT の説話

08 学校外との連携（※該当のある場合）

- ・外部講師（バングラデシュ人の知人にゲストティーチャーを依頼）

09 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

○・なぜ母語は大切なのか？について

- ① 昔から代々受け継がれてきた言葉だから
- ② 自分の家で話されている言葉（お母さんや家族から聞いて覚えた言葉 / 最初に使った言葉）
- ③ 自分の国の証だから
- ④ 日本語が無くなってしまったら、日本人ではなくなる
- ⑤ 大切にしないと、その言葉が無くなるから
- ⑥ その国の文化を残せるから
- ⑦ いつも家族や学校で使っていて、初めて知った大切な言葉 / 自分の出身地の言葉
- ⑧ 小さなころから話してきた世界に1つしかない大切な言葉だから
- ⑨ 今まで日本語を使ってきた思い出があるから

・母語が使えなくなる、とはどういうことか？について（母語が使えない活動後に）

- ① 突然日本語が使えなくなると大変だな、と思った
- ② 相手に通じなくて不便だった
- ③ 母語が使えなくなることを体験してみて、（バングラデシュ）戦争にまでなった理由が分かった
- ④ どうやって相手に伝えればいいのか、分からなかった
- ⑤ 言いたいことがあるのに伝わらなかった（何て言えばいいか分からなかった）
- ⑥ 母語が使えなくなったら、伝えたいことがうまく伝わらなかったりして、母語がないと生きていけないと思いました

- ⑦ 英語もあまり話せないのに、ずっと英語だけとか、中国語だけだったりすると、不便だし、生きていけなそう
- ⑧ 家族が家族でなくなってしまう
- ⑨ ジェスチャーを使って伝えようとしたけど、全部は伝わらなかった。
- ◆日本語を母語と答えた児童数53人 それ以外の言語を母語と答えた児童数21人
(中国語、ネパール語、韓国・朝鮮語、ベンガル語)

10 海外研修で何を学び、どの部分を見守る児童生徒に伝えようと思ったか

バングラデシュ滞在中「ショヒド・ミナール」を訪れる機会があった。私にとっては、運命の出会いともいえる場所になった。事前に資料で見ていた段階では、この場所に特に興味が沸いたという実感はなく、一つの訪問地でしかなかった。しかし、現地でもショヒド・ミナールを訪れた時に、このモニュメントの設立に至った歴史的経緯を聞き、この場所がバングラデシュの人々にとっていかに大切であるかを知った。何より、母語であるベンガル語を守るために人々が立ち上がり、多くの人々が命を落としたという事実が、自分自身にとって大きな衝撃であった。また、母語を守る闘争が後のバングラデシュ独立戦争、そして2月21日の国際母語デーを生んだ起点にもなっている、ということなど、ショヒド・ミナールを通して多くのことを学んだ。この経験から、普段当たり前に使っている母語について深く考えるようになった。母語とは人々にとってどのような存在なのか、母語を守ることにどのような意味があるのか、などを帰国後、児童たちに伝えたいと思うようになった。

地球上には約7000の言語が存在するという。しかし、グローバル化によって、英語のような大言語は拡大を続ける一方、少数民族の言語や、ある特定の地域でしか話されていないような小言語は消滅のスピードを加速させている。バングラデシュは、母語を守る戦いに勝利した国で、今でもバングラデシュの国の言語はベンガル語である。しかし、もし、バングラデシュが母語を守る戦いに勝利することができなかつたらどうなっていたらだろうか。児童には、自分たちの母語はこれまでの先人たちが守り、大切に受け継いできたことや、その国の文化や生活と密接に関連していることなども伝えられたらと考えている。

11 苦労した点

本授業で扱うテーマは、自分にとっての母語とは何か、母語消滅、絶滅危惧言語、また、母語を奪われる同化政策など内容が高度で難しく、抽象的である。よって、これらのテーマを小学校4年生児童にどこまで理解させることができるか不安であった。これらの題材が自分とは関係のない遠い話と捉えさせず、どれだけ「自分ごと」にできるかが大切と思い、彼らに身近なALTの説話を導入したり、アイヌの事例を扱ったりした。また、母語が奪われた状況を再現するため、母語を使わずに外国語のみを使って絵を仕上げるといった活動を入れてみた。

12 改善点

自分たちの母語を使わずにグループで絵を再現する活動は、児童の捉えでは母語が使えない不便さ、ばかりに目がいきがちであった。授業後の児童のワークシートからも、「言いたいことが伝わらなくて大変だった」、「日本語が使えなくて不便だと思った」などの意見が多く見られた。これは、本授業のねらいとする、母語を奪われた時に人々がどう感じるか、ではなく、言語の利便性の問題にすり替わってしまう恐れがある。しかしながら、小学4年生の発達段階を考えれば、現時点で代替案が思いつく訳でもなく、今後の課題であると考えている。

13 成果が出た点

- ①バングラデシュのショヒド・ミナルから、多くの学びにつながったこと。
- ②児童たちの母語に対する意識の変容が見られたこと。
- ③互いのルーツを知り、それぞれが話す言葉への尊重の気持ちが生まれたこと。

14 自由記述

現勤務校は、全体の児童の実に40%以上が外国につながっている。多くは中国の出身であるが、彼らの文化的、言語的なバックグラウンドは実に多様である。福建や四川など中国南方をルーツに持つ児童もいれば、大連や内モンゴル自治区など北部をルーツとしている児童もいる。彼らに自分の母語は何か、と聞くと中国語とは答えずに福建語と答えた児童が多かったことも興味深い。近年は、ネパールやバングラデシュ、ベトナムなど、アジアの広い範囲から児童が転入してきており、それらの子供たちが学校という場で共生している様子は、近い将来の日本の縮図のような感じがしてならない。そのような環境で日々生活をしている子供たちだからこそ、母語やお互いの言語について考えることは、多文化を尊重する心の醸成につながるのではないかと考え、この授業を作っていた。大人の世界に目を向ければ、連日のように外国人抑制、強制送還などの言葉を耳にするようになった。今の日本の現状は、多文化共生社会とは真逆の、外国にルーツを持つ人々が住みにくい閉鎖的な社会に向かっているような気がしてならない。そのような子供たちを取り巻く環境の変化、社会風潮へ一石を投じるような授業になったならば授業者として大変うれしく思う。

最後になるが、JICA 教師海外研修でバングラデシュに行っていなければ、このような深い学びには至らなかった。サポートしていただいたすべての関係者の皆様に感謝の意を表したい。訪問中、現地で病に倒れ、正直なところ苦しい研修ではあった。だが、それ以上に得たものは大きかったと実感している。私はこれまで、言語学習や言語そのものに興味を抱いてきたが、今回のバングラデシュ訪問は、私の言語観そのものを大きく揺さぶる経験となった。

今後のことであるが、本研修に行くことが決まってから学び始めたベンガル語は既に私のライフワークとなっている。これからも、ベンガル語の一学習者として長くバングラデシュおよび、ベンガル地域と付き合い続けていきたいと願う。また、今年度、私は2校で兼務しているので、両方の学校で本授業を実践し、より多くの子供と共有できたらと考えている。加えて、2月21日の国際母語デーに向け、母語のことをもっと考えられるような様々な取り組みを校内で行う準備をしているところである。

【参考】

フォトランゲージ：DEAR 開発教育ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>

【文化・食/環境】

上尾発・世界行き ータンザニアのごはんをのぞいてみようー

【実践者】

氏名	松本あゆみ	学校名	埼玉県立上尾特別支援学校
担当教科等	生活単元	対象学年（人数）	『1～4時』4・5・6年 （44人） 『本時』5年1・2・重複 （14名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年12月1・3・5日（6時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

生活単元学習

02 単元名と単元目標

単元名：上尾発・世界行きータンザニアのごはんをのぞいてみようー

単元目標：世界を身近に感じ、異文化や食文化について興味を持つことができる。

関連する学習指導要領上の目標：小学部生活科の目標「具体的な活動や体験を通じて、生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育てる」に基づき、本単元では「海外旅行に行こう」を導入として扱い、外国への行き方を学習した後、タンザニアへの模擬旅行を行う。さらに、食文化をテーマに調理実習を通じて、五感で異文化を体験し、身近に感じられるようにすることを目標にしている。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	外国についてイメージをもつことができる。
② 思考・判断・表現	日本とタンザニアの食べものの違いや似ているところに気づき、感じることができる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	教員や友達と一緒に楽しく取り組むことができる。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

本学級では、知的障害と自閉症を合わせ有する児童が在籍し、言語的な理解よりも、視覚的支援や実際の体験を通じた学びが効果的である。加えて、今年度の文化祭では「万博」をテーマに、海外の国旗

や挨拶を歌やダンスを通じて学ぶ活動に取り組んだ。その際、異文化に対して興味や親しみを示す児童の姿が多く見られた。この経験を踏まえ、児童の関心をさらに広げ“世界にはさまざまな文化がある”ことを五感で感じてほしいと思い、本単元を設定した。

〈単元の意義〉

本単元は、日常生活の中で身近な「食」を題材にしながら、異なる国や文化に触れる体験を通じて、児童が様々な世界へ興味関心を広げることをねらいとしている。加えて、知的障害を有する児童にとって、異文化や海外といった抽象的な概念は理解しにくい、「見る」「聞く」「触る」「嗅ぐ」「味わう」など五感を使った体験的な活動を通じて、異なる文化を具体的に感じるができる。本単元では、タンザニアの食文化を題材とし、映像や写真、実際の食材に触れる活動を中心に展開することで、児童が楽しみながら学び、世界の人々との共通点や違いを感じ取る機会を目的としている。

〈児童/生徒観〉

本学級の児童は、知的障害と自閉症を合わせ有する児童が在籍している。そのため、抽象的な概念の理解には困難さがみられる一方で、具体的な活動や体験を通じて学習に取り組んでいる。見たり、聞いたり、触れたりといった五感を働かせる活動に強い関心を示し、体験を通じて得たことを徐々に言葉や表情、しぐさなどで表現する姿が見られる。また、身近な人との関わりの中で安心感を得ることで、意欲的に学習に取り組むことができる。さらに、「できた」「わかった」といった達成感や、教師からの肯定的な声かけが学習意欲を高める要因となっている。加えて、外国の国旗やあいさつ、音楽、ダンスなどの活動にも関心を示す児童が多く、世界や異文化に親しみをもつ感性が芽生えつつある。本単元では、こうした児童の興味を生かし、五感を通じた体験的な学びを重ねることで、異文化への理解を深められるよう展開していく。

〈指導観〉

児童一人一人がもつ特性や感じ方を尊重し、「わかる」「できる」「楽しい」という実感を積み重ねることを大切にしている。知的障害や自閉症を有する児童にとって、学びは体験の中にあり、成功体験や肯定的な関わり合いができるよう指導している。また、五感を通じた体験的な活動では、児童の表情や反応を読み取りながら、一人一人の特性や理解度に応じた支援や工夫をしていく。

05 単元計画（全6時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	「海外旅行へ行こう！」	①海外旅行の行き方について知り、パスポートや飛行機の利用方法を理解する。 ②映像や絵資料を通して、海外旅行を身近に感じ、世界への関心を高める。	パワーポイントを使用し、飛行機が離陸・着陸する様子を見せたり、チケットやパスポートを模した冊子を受け取ったりする活動を行う。自分が実際に旅行をしているような体験を通じて、「海外に行ってみたい」という気持ちを高め、学習への興味を持つ。	・現地写真 ・模擬のパスポートと航空チケット ・パワーポイント
2	「タンザニアってどこだろう？」	①タンザニアへの関心を高め、国の位置や特徴についてイメージをもつことができる。	現地の撮影した写真や映像を見ながら、タンザニアの自然や人々の暮らしの様子を知る。映像や教師の説明を通して、児童が「遠い国にも自分たちと同じように生活している人がいる」と感じ、タンザニアに親しみや興味をもてるようにする。	・現地写真 ・パワーポイント

3	「タンザニアのごはんをのぞいてみよう」	①タンザニアの食文化にふれ、異国の食べ物や食習慣に興味・関心を広げる。	現地で撮影した魚市場の写真や実際に使われている食材を提示する。クイズ形式で写真や映像を見ながら、タンザニアの食文化の特徴を知り、異国の食べ物に対して親しみや関心を持てるようにする。	・現地写真 ・パワーポイント
4	「タンザニアのきゅうしょくをのぞいてみよう」	①児童に親しみのある給食を題材にして、タンザニアと日本の食文化の違いに気づき、異なる文化を感じ取ることができる。	日本の学校給食の写真と、タンザニアの学校で提供されている給食（おやつ）の写真を見比べる。食べ物の種類や食器、食べる環境などの違いを通じて、タンザニアの食文化に関心を持ち、「ちがい」や「共通点」を感じ取ることができるようにする。	・現地写真 ・現地で実施した食文化アンケート ・パワーポイント
5・6 本時	「ウガリをつくってみよう」	タンザニアの国民食であるウガリを実際に作り、五感を働かせて異文化の食を楽しむ。	ケニア出身のゲストを招き、ウガリがどのような場面で食べられているのか、またその作り方について教えてもらう。児童は講師の話や実演を見たり、実際に材料を混ぜたり、においや手ざわりを感じながら、五感を通して異文化の食を体験する。活動を通して、異なる国の食文化へ興味や親しみを持つことができるようにする。	・食材（現地で調達したウガリの材料：とうもろこし粉） ・調理器具 ・写真 ・ケニア出身のゲスト

06 本時の展開（5・6時間目）

本時のねらい：タンザニアの国民食であるウガリを実際に作り、五感を働かせて異文化の食に親しみをもつ。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ケニア出身のゲストを紹介する。 挨拶の言葉「ジャンボ」をみんなでする。 問「タンザニアやケニアの人たちは、どんなごはんをたべているのかな？」と問いをかける。ウガリの写真や動画を見せ「今からみんなで作ってみよう！」と活動の見通しを伝える。	<ul style="list-style-type: none"> イラストを用いて、ケニアについてイメージできるように提示する。 ウガリの実物を見せ、触ってもよい児童には触らせてみる。 作業手順を写真カードで提示する。（視覚支援）
展開 (35分)	材料（水・とうもろこし粉）や道具を確認する。 ゲストがウガリの作り方を実演する。	<ul style="list-style-type: none"> 無理なくできる役割を個別に提示する。（混ぜる・見る・応援するなど）
休憩		

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

海外研修では、現地の言語、食文化、価値観、歴史、文化など、さまざまな視点からタンザニアについて学ぶ機会を得た。中でも、食文化や性に対する考え方が日本とは大きく異なる点に強い印象を受けた。ザンジバル島において、JICA 海外協力隊として活動されている方から、「現地の人々は長生きを必ずしも美德として捉えていない」という話を伺い、長生きを重視する日本の価値観との違いを実感した。また、このような価値観が食文化とも影響していることを学んだ。これらの学びを踏まえ、児童に異文化を身近に感じさせる題材として、タンザニアの食文化を授業で取り上げることにした。食は児童の生活経験と結びつきやすく、異文化を具体的に捉えさせる手立てとして有効であると思った。

12 苦労した点

知的障害や自閉症のある児童に対して、どのように国際理解教育を進めていくかが課題であった。特に、障害の程度や認知特性が児童によって多様である中で、すべての児童が安心して参加し、楽しむことのできる授業をどのように構成するかについて苦労した。

13 改善点

今回は 1 時限目から 4 時限目までは小学部高学年を対象に全体で授業を行い、本時の調理実習については、場所や人数の制約により、学級単位での実施となった。こうした実施形態を踏まえると、今後は障害特性や理解度に応じてグループを編成し、授業内容を構成することで、より一人一人の児童にとって学びの深まる時間になったのではないかと考えられる。

14 成果が出た点

授業の導入では、「海外旅行に行こう」をテーマとして授業展開をした。世界への関心を高める手立てとして、児童一人一人が自分のパスポートや航空チケットを手にとることで、児童の興味関心を引き出すことができた。食文化に関する学習では、クイズ形式の活動を取り入れ、日本の食文化と比較したり、日常的に食べられている学校給食と現地の食文化を比較したりすることで、異文化をより身近に捉えられるよう工夫した。また、本校では文化祭の発表において「万博」をテーマにした取組を行っており、今回の授業に加えて、世界のあいさつの歌やダンス、国旗を描く活動などを通じて、横断的な学びへと繋がった。さらに、本時では、ケニア人留学生を講師として招き、ウガリ作りの調理実習を行った。外国人との交流や実際に調理実習を行う体験を通して、児童は五感を用いながら異文化について学ぶことができたのではないと思う。

15 自由記述

【授業の様子：導入「海外旅行へ行こう!」】



※授業で使した、パスポート
と航空チケット



【本時：調理実習「うがりを作ってみよう!」】



開こう！国際交流会

【実践者】

氏名	水島 一真	学校名	石川県白山市立東明小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	6年 1組（33名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年9月～12月（31時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な学習の時間

02 単元名と単元目標

単元名：開こう！国際交流会

単元目標：

- ・課題を解決するために、目的にあった情報を選択し、集めることや、友達と協力して金沢探訪のコースや見学場所について事前に調べ、計画することができる。世界の国々の食文化を調べ、交流することで、その多様性に気づき、日本の食文化と比べることで、自分たちの食生活の特色やよさを理解することができる。【知識及び技能】
- ・グループの友達と協力して、インタビューしたい相手に、尋ねたいことを考えたり、質問したり、見学や体験を通して、新たな発見や気づいたことを整理し、まとめたことを相手に分かりやすく工夫して発表したりすることができ、地域や日本の未来を考える活動を通して、自分の考えを構想し、仲間と意見を交流できる。【思考力、判断力、表現力等】
- ・学習を通して、分かったことや気づいたことを、自分の考えと生活を関連付けて考えようとする。【学びに向かう力、人間性等】

関連する学習指導要領上の目標：

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようになる。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようになる。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	①課題を解決するために、目的にあった情報を選択したり、集めたりしている。 ②世界の国々の食文化を調べ、交流することで、その多様性に気づき、日本の食文化と比べることで、自分たちの食生活の特色やよさを理解している。 ③課題を解決するために、友達と協力して金沢探訪のコースや見学場所について事前に調べ、計画している。
② 思考・判断・表現	①グループの友達と協力して、インタビューしたい相手に、尋ねたいことを考えたり質問したりしている。 ②見学や体験を通して、新たな発見や気づいたことを整理し、まとめている。 ③調べてまとめたことを、相手に分かりやすく工夫して発表している。 ④地域や日本の未来を考える活動を通して、自分の考えを構想し、仲間と意見を交流している。
③ 主体的に学習に取り組む態度	①学習を通して、分かったことや気づいたことを、自分の考えと生活を関連付けて考えようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

本校では、第6学年の総合的な学習の時間において国際理解学習に取り組んでいる。学習の中では、ALTの先生方との交流を通して、多くの生の声に触れ、日本以外の国や文化について理解を深める機会を設けてきた。しかし、ALTの先生方の母国は先進国であることが多く、発展途上国について学ぶ機会は限られているのが現状である。そのため、児童がもつ発展途上国のイメージは、貧困や不便さといった一面的で否定的なものに偏りがちである。

そこで、本教師海外研修を通して得たタンザニアに関する生の情報や現地の実情を児童に伝えることで、発展途上国に対する見方を広げ、より多面的な国際理解につなげたいと考え、本単元を設定した。

〈単元の意義〉

本単元では、児童がこれまでに体験した白山ろく少年自然の家での合宿やジオ学習を土台として、改めて地域の自然・文化・観光資源に目を向け、そのよさを主体的に探究し、他者に発信することをねらいとする。そこで、「自ら課題を見だし、主体的に調べ、仲間と協力して考えを深め、まとめ・表現する」という探究的な学びの過程を重視し、児童が興味や疑問を出発点にして地域のよさを調べ、それを新聞・パンフレット・スライドなど多様な方法で表現し、他国の人に発信する活動を通して、主体的・協働的に学ぶ力を育成する。さらに、自分たちが学んだ地域の魅力を「他者に伝える」経験を積むことで、児童がふるさとに誇りと愛着をもち、将来地域と関わりをもって生きていこうとする態度の育成につなげたい。また、単元の中で「食」を扱うようにする。「食」は誰にとっても身近で関心の高いテーマであり、児童が自らの生活と結び付けやすい学習素材である。他国の食文化を知り、日本や地域の食と比較することで、文化的背景や生活の違いに目を向けられるようになる。また、食を通して「自分の暮らし」と「世界の人々の暮らし」が繋がっていることを実感することができる。その学びを発信することによって、児童の国際理解を深め、主体的に学びを広げる態度を育むことができる。

〈児童/生徒観〉

本学級の児童は、1学期に白山ろく少年自然の家での合宿やジオ学習に取り組んだことを通して、白山の自然や文化について理解を深めている。その経験から、地域の自然環境の豊かさや魅力を肌で感じ、

自分の言葉で語ろうとする姿も見られる。一方で、金沢の兼六園や近江町市場、21世紀美術館などの有名な観光地については名称を挙げることでできる児童も多いが、実際に訪れたことのある児童は4割程度にとどまり、知識としては知っていても体験を伴った理解には至っていない。つまり、地域や県全体のよさについては部分的な理解にとどまり、比較したり、他者に伝えたりする際に具体性を欠く傾向がある。児童は調べ学習や発表活動への意欲をもっており、学んだことを深め、発信する活動を通して地域理解をさらに広げていくことが期待される。また、児童は市内全体で推進されている食育の取組の影響から、食に対する意識が高い。家庭科の学習では、健康や栄養に関心を持ち、自分の生活を振り返りながら学ぼうとする姿が見られる。

〈指導観〉

本単元では、児童が自分の暮らす地域や日本のよさを理解し、それを他者に伝えられる力を育成することを目標とする。そのために、「比較・体験・発信」の学習を大切にす。まず、タンザニアなどの他国の自然や文化、生活の在り方を学ぶことで、児童は自分たちの地域や国の特徴を相対的にとらえる力を養う。その後、金沢探訪を通して地域の歴史や文化、まちの魅力を直接体験し、知識を実感に結び付ける。これらの学びを基盤として、日本と他国の未来を考える活動を通して仲間と意見を交流する。そして、最後には市内のALTに向けて自分たちの思いや考えを発表する活動を設定することで、学んだことを社会に発信する実感を得る。このような学習過程を通じて、児童は「比較して考える力」「自ら体験し理解を深める力」「未来を構想する力」「他者に発信する力」を総合的に育むことを目指す。

指導にあたっては、児童の高い食への関心を生かし、「食」を国際理解の入口として位置付ける。他国の食文化を調べたり体験的に理解したりすることで、自分たちの食生活を振り返り、健康や持続可能性の視点にも目を向けられるようにする。また、「食」をテーマにすることで、児童が学びを自分ごととして捉えやすくなり、発信活動への意欲も高まりやすい。食から広がる学びを通して、地域や日本のよさ、さらには世界とのつながりを実感できる授業を展開することをめざす。

05 単元計画（全31時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	学習計画を立てよう	国際交流会に向けて、計画を立てることができる。	・学習計画を立てる	
2～8 本時	世界の国について知ろう	世界の国々の食文化を調べ、交流することで、その多様性に気づき、日本の食文化と比べることで、自分たちの食生活の特色やよさを理解することができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のまちのよさを確認する ・世界の国を知る ・タンザニアについて知る ・世界の食文化を比較する 	バングラデシュやタンザニアの写真 世界の国の食文化がわかる本 ウガリの粉（実物）
9～15	私たちのまちを知ろう	課題を解決するために、友達と協力して金沢探訪のコースや見学場所について事前に調べ、計画している。	<ul style="list-style-type: none"> ・金沢探訪のコースなどの計画をする ・金沢探訪を行う 	市の観光マップなど
16～31	発信しよう	見学や体験を通して、新たな発見や気づいたことを整理し、まとめることができる。 調べてまとめたことを、相手に分かりやすく工夫して発表している。	<ul style="list-style-type: none"> ・国際交流会に向けて資料の準備を行う ・国際交流会を開く 	

06 本時の展開（8時間目）

本時のねらい：世界の国々の食文化を調べ、交流することで、食文化の多様性に気づき、日本の食文化と比べることで、自分たちの食生活の特色やよさを理解する。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5分)	1. 問題をつかむ ○日本の食文化はどんなものがありましたか？ ・はしの正しい持ち方がある。 ・有名なのは寿司。	・前時に日本の食文化を確認しておくことで、本時で他国の食文化を調べる際の視点として活用できるようにする。
調べる (20分)	2. 見通しをもち、解決する <世界の食文化で日本と似ているところはどこかな> ○世界の国と日本の食文化の違いや似ているところはあるかな？ ・有名な食べ物は違う。 ・主食も米じゃないところがある気がする。 ○どんな食文化があるかな（3グループに分かれる） ・タンザニアの主食はウガリで、手でこねて食べるよ。 ・バングラデシュはカレーが有名だ。スパイシーなカレーが多いよ。 ・カナダはメープルシロップが人気だ。お肉をたくさん食べているよ。	・学習対象の自己決定ができるように、気になる国の食文化について調べるように声をかける ・写真・現地でのアンケート・インターネット・先生へのインタビューなど調べる方法を自己決定できるように資料などの準備をしておく。 ・3グループに分かれる際には、「次の活動で班の仲間に伝える」という目標を伝えることで、一人一人が目的意識をもって意欲的に取り組めるようにする。
交流 (15分)	3. 考えを交流し、深め合う ○他の国にはどんな食文化があったかな。 ・それぞれの国の食文化について知ることができ、日本と他国の同じところと違うところをみつけることができた。 ・日本にはない他国の食文化の良さが分かったよ。 ・日本の食文化は世界に誇れる部分があると分かったよ。 ○日本と似ているところはどこかな？ ・日本とタンザニアの似ているところは、日本はおにぎりを手で食べ、タンザニアはウガリを手でこねて食べるよところだ。	・目的（自分の調べた国の食について同じグループの友達に伝える）を明確にした話し合いの場の設定を行う。 ・（支援）世界の国々の食文化を調べる際には、調べやすい写真中心で文字が少ないものにし、視覚的に判断できるものにする。
まとめ (5分)	4. 学習をまとめ、ふりかえる 日本とタンザニアの似ているところは、日本はおにぎりを手で食べ、タンザニアはウガリを手でこねて食べるよところだ。	

使用する資料・教材：

バングラデシュやタンザニアの写真（市場での様子や給食の様子が分かるもの）

世界の国の食文化が分かる本（司書教諭にお願いし事前に準備）

ウガリの粉（実物）

07 評価規準に基づく本時の評価方法

発言やワークシートで行う

08 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

【授業はじめ】

〈バングラデシュの食のイメージ〉

甘いものが多い 手で食べている 豆を食べている ドロドロしたものを食べている

1日1食だけしか食べない 土器でご飯を炊いていそう 給食はない

〈カナダの食のイメージ〉

メープルシロップを何にでもかけている クッキーをいつも食べている ハンバーガーやパンが多い
ジャンクフードが多い 高級なものをたくさん食べていそう 甘いものが好きな人が多い

〈タンザニアの食のイメージ〉

給食はない 外で食べていそう 1日1食（食べる回数は少なそう） 手で食べていそう 辛いものが好きそう 豆が多そう 食べ物が豊富にありそう 肉が好きそう

【授業おわり】

〈バングラデシュの食について〉

日本と飲み物が似ていると思った 日本もおにぎりを手で食べているのでそこは似ていると思った

日本と同じ野菜を使っている 豚肉を食べてはいけない人がいると気づいた カレーをよく食べていて日本と似ているところがあると思った（味は少し違うそうなので、食べてみたい）給食があった

〈カナダの食について〉

音を立てて食べるのはダメだというマナーが似ていると思った 思ったより魚を食べていた 魚を生でも食べているところが似ている 日本食がある（寿司など） カナダは給食がなかった 主食は違うけど、パンも日本ではよく食べている よくあるお菓子が似ていると思った

〈タンザニアの食について〉

給食のようなものがある 食べる果物が似ていた ヤギ肉が美味しそうだったので食べてみたい 野菜も似ている 食べる前に手をよく洗うのは似ていると思った ウガリという主食をはじめて知ったウガリを食べてみたいと思った。

09 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

世界の国々には案外似ているところ・つながっているところがたくさんあることや、違った良さで溢れているということを学んだ。それを児童に身近な「食」の観点から伝えたいと思った。

10 苦労した点

自分一人では世界のことは伝えられないと感じた。

本時でも、タンザニアに同行した方や、教師海外研修でバンングラデシュコースに参加された方、バンングラデシュに JICA 海外協力隊で派遣されていた方、カナダ出身の ALT の方などたくさんの方に協力をしていただいた。

11 改善点

児童が調べ学習中に本を選ぶとき、一人では難しいと感じた。事前に図書館司書に授業中の協力をお願いしておくことで、児童が調べたい内容に合った本の選び方について助言をもらうことができたと思う。そうすることで、本を活用して調べていた児童がより思考を深められたのではないかと考える。

本時ではジグソー法を用いた授業を行った。その際、ホームチームでの活動時間が十分に確保できず、話し合いが途中で終わってしまうグループもあった。今後は、情報収集の時間に1時間、情報共有の時間に1時間確保することで、より余裕のある単元構成になると考える。

12 成果が出た点

苦労した点でも述べたように、自分一人ではなく、たくさんの人を巻き込むことでより子どもたちの意欲は増したと感じた。本やインターネットでの調べ学習も大切だが、実際に見たり食べたり感じたりしてきた人の生の声はより子どもたちの印象に強く残っていたように感じる。何よりも世界がより身近になり、他国への興味も増していたように感じた。

13 自由記述

児童の国際理解を深め、世界への視野を広げたいという思いから参加した教師海外研修は、結果として私自身の価値観や視野をも大きく広げ、学びを深める機会となった。先入観やイメージに左右されるのではなく、現地で暮らす人々の生の声や実際の姿に触れることの重要性を、体験を通して実感した。

また、研修期間中には志の高い多くの先生方と出会い、教育観や実践について語り合う中で、自身の教育に向かう姿勢やモチベーションも大いに高められた。この経験は、今後の教員人生を支える確かな土台になると感じている。これからも国際理解教育・開発教育に積極的に取り組み、研修で得た学びを児童一人一人の学びへと還元していきたい。

参考資料・使用教科書：なし

【文化・食/環境】

ともに生きるために ～多様な幸せを考え、つながりをつくる私～

【実践者】

氏名	鶴岡 美沙	学校名	千葉県八千代市立村上小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	6年1組（29名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年11月～12月（6時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

道徳、総合的な学習の時間

02 単元名と単元目標

単元名：ともに生きるために ～多様な幸せを考え、つながりをつくる私～

単元目標：バングラデシュでの現地経験や写真資料をもとに、世界の子どもたちや仲間の多様な価値観・幸せのあり方に気づき、互いを尊重しながらよりよい学級・社会をつくろうとする態度を育てる。

関連する学習指導要領上の目標：関連する学習指導要領上の目標：自分の生き方を考え、課題を解決しようとする資質・能力を育成すること。異文化理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚をもつこと。多様な文化や背景をもつ人と共に生きるために、互いの違いを理解し、尊重しようとする心情と態度を育てる。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	<ul style="list-style-type: none">世界や日本の多様な文化・生活の違いや背景について理解している。マイノリティ、児童労働などの概念を適切に捉えている。
② 思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none">写真やロールプレイを手がかりに、子どもの立場や背景を想像し、多面的に考え、自分の言葉で表現できる。自分の「当たり前」や「幸せ」の価値観を相対的に捉えられる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none">新しい価値観に興味をもって関わろうとする。他者の意見や考えを尊重しながら、対話的に学びに参加している。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

現代の子ども達は、インターネットやSNSなどを通して世界と容易につながる一方、自分とは異なる価値観や背景をもつ人々への理解が十分とはいえない現状がある。また、バングラデシュをはじめとした途上国の文化や生活に触れる機会も限られ、世界の多様な現実を想像することが難しい。そこで本単元では、教師が実際にバングラデシュで見聞きした児童労働や生活の様子、子ども達の表情や現地の文化に関する写真・動画を活用し、日本とは異なる価値観や「幸せ」の形にふれる学びを設定する。多様

な背景をもつ人々の生き方と自分自身の生き方を重ね合わせながら、「自分の普通はだれかの普通ではない。」ことに気づき、互いを尊重しようとする態度を育成するために、本単元を設定した。

〈単元の意義〉

本単元では、児童労働を単なる「かわいそう」「大変」という表層的理解にとどめず、その背景にある文化・経済・家庭環境などの多様な要因を捉えながら、自分の価値観を相対化することに意義がある。また、フォトランゲージやロールプレイなどの対話的な学習を通して、子ども達が主体的に他者の立場を想像し、自分の考えを再構築する学びを重視する。さらに、遠い国の問題を「自分とは関係のないもの」と捉えるのではなく、「自分の身の回りにも多様な立場や背景の人がいる」という視点につなげ、学校生活をよりよくする行動へ結び付けることを目指す。

〈児童/生徒観〉

本校の6年生は、外国籍の児童や日本語指導が必要な児童と日常的に関わってきており、文化や言語の違いが身近にある学年である。そのため、相手によって感じ方や伝わり方が異なることを知りつつも、その背景にある価値観や生活の違いまで深く考える機会はまだまだ多くない。また、6年生は自分と他者の違いを比較しながら考えられる発達段階にある。フォトランゲージやロールプレイなどの活動は、互いの「当たり前」の違いに気づき、多様な背景を理解する学びにつながる。また、教師の Bangladesh での体験談や現地の写真・動画は、児童の興味を引き出し、世界と自分を結びつけて考えるきっかけとなる。こうした学習を通して、「自分の普通は、だれの普通でもない。」という視点を深めていくことができる。

〈指導観〉

本単元の指導では、教師が一方向的に知識を伝えるのではなく、児童の気づきや疑問から学習が展開するように、問いを中心に捉えた授業づくりを重視する。特にフォトランゲージ、ロールプレイ、小グループ対話などの活動を通じて、互いの感じ方の違いに気づき、多様な価値観を尊重しながら学び合う場を丁寧に設計する。また、Bangladesh での実体験を教材化し、児童が臨場感をもって他者理解を深められるようにすることを大切にする。さらに、単元の最終では、学んだことを自分の学校生活や周囲への働きかけへとつなげるなど、学習の価値が児童の行動に現れるような指導を目指す。

05 単元計画（全6時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	世界の課題と価値観に気づく	SDGs から価値観の違いを知る	SDGs17 の目標ダイヤモンドランキング作成 (個人→グループ)	SDGs カード ワークシート JICA 教材『共につくる私たちの未来』
2	感じ方の違いから“幸せ”を考える	Bangladesh の子どもの思いに触れ、自分の価値観と比較する	フォトランゲージ ロールプレイ 対話活動	Bangladesh の写真・動画 役割カード
3	世界の“普通”を知る	児童労働やマイノリティの立場に気づく	ロールプレイ	JICA 資料・写真
4 本時	多様性と自分のクラス	クラス 29 人のそれぞれの背景の違いに気づく	「自分の当たり前」カードゲーム	アンケート
5	私ができること	身近な場で多様性を大切にする行動を考える	グループでアクションプラン作成	まとめシート

6	発信する私	学びを学校・家・地域に伝える	ポスター・スピーチづくり	紙・タブレットなど
---	-------	----------------	--------------	-----------

06 本時の展開（2 時間目）

本時のねらい： Bangladesh の子どもの生活や価値観に触れ、自分の“普通・幸せ”との違いに気づき、多様な幸せを考えることができる。

過程時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5分)	<p>1. 本時のねらいを示す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Bangladesh の人々の生活や価値観に触れ、自分の普通・幸せとの違いに気づく。 ○あなたにとっての「幸せ」って、どんなとき？ ・付箋に一つ書く。 ・ペアで交換・短い共有 ○みんなの幸せをグループ分けしてみよう。 ・心(気持ちの安定・リラックス・やる気)、社会的(人とのつながり・協力・支え合い)、身体的(健康・安全・安心)、経済的(生活の安定・必要なものがそろう)、自分らしさ(好きなこと・得意なこと・生きがい)のグループに貼る。 ○同じクラスでも、幸せの形が違うのはなぜだろう？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・発言が苦手な児童用に絵や短い単語でも大丈夫であると提示する。
展開 (12分)	<p>2. フォトランゲージ活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ○数枚の写真を提示する。 ○直感で気になった写真をグループで1枚選んで、その写真について次の3つをワークシートに書いてみよう。 ・①見たこと(事実)、②感じたこと(気持ち)、③想像するその子の願い・幸せについて書く。【グループワーク】 ○グループで話し合ったことを全体で共有してみよう。 ・グループで共通点や違いを話し合い、一つ「気づき」をまとめる。 ・グループごとに発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・写真は「かわいそう」という固定観を生まない言葉がけ(例:「どうしてそう見えるかな?」)で誘導する。 ・グループを巡回し、その気持ちになぜ出てきたのかを問い、思考を深める。
(15分)	<p>3. ロールプレイ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○役割カードを配布する。 A: 家の手伝いをしてから学校に来る子 B: 勉強が好きだが塾に行けない子 C: 家業で時々学校に来られない子 ・各児童がランダムに選び、「その子の朝～夜までの一日」を想像してワークシートに書く。 ・ペア→グループ活動 「あなたは今どんな気持ち？」 「今日の中で大切にしていることは？」 「この子の大切にしている幸せは何だろう。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ロールプレイは強制しない。演技たくない児童がいる場合は、観察者や書記役として参加させる。 ・児童が特定のクラスメイトを想起して発言しないよう、一般化した表現を促す。

<p>まとめ (10分)</p>	<p>「私たちの普通とどう違うのだろう。」</p> <p>○この子とクラスで互いに心地よく過ごすには？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・付箋に大切にしたい関わりを書く。 ・グループごとに役の子の語りとして発表する。 <p>4. まとめ</p> <p>○個人の振り返りをさせる。</p> <p>・「今日気づいたこと」「学級で大切にしたいこと」をワークシートに書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒板に付箋を貼り、分類する。 <p>○今日の学びを次の時間にどんな形で伝えられそうかな？</p>	<p>・発言の少ない児童の気づきも黒板で肯定的に扱い、教育的承認をする。</p>
----------------------	---	--

使用する資料・教材：バングラデシュで撮影した写真・動画、役割カード3種、
フォトランゲージ用ワークシート

08 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・バングラデシュの生活や人々の様子について、写真や話からポイントをとらえているか→ワークシートの記述で評価
- ・写真やロールプレイの役割の立場に立って、多面的に考え、言葉で表現できているか→グループ発言、ロールプレイの発表内容で評価
- ・積極的に対話する姿、他者の意見を尊重する姿→観察記録で評価

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

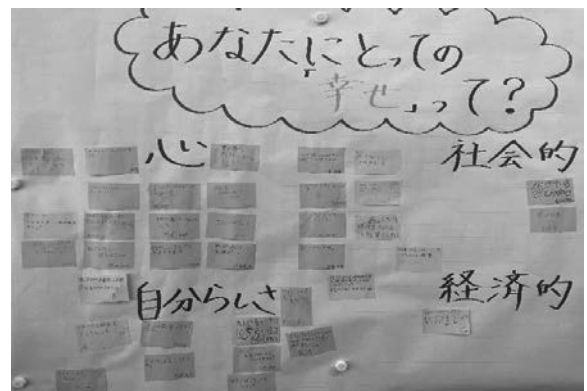
○第1時の記録

【選んだ利用は、なんだろう。】

◎1位→3番
<理由>
人が生きるためには、まずは健康が基盤となると思っ
たから。

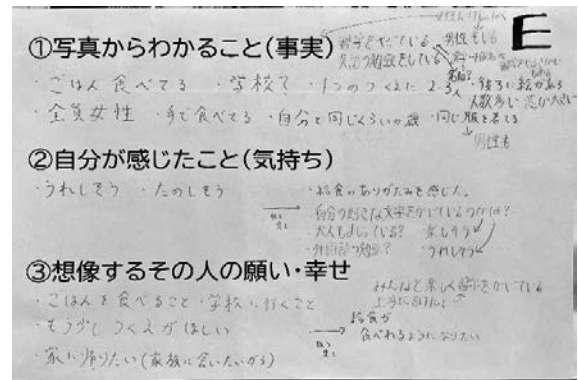
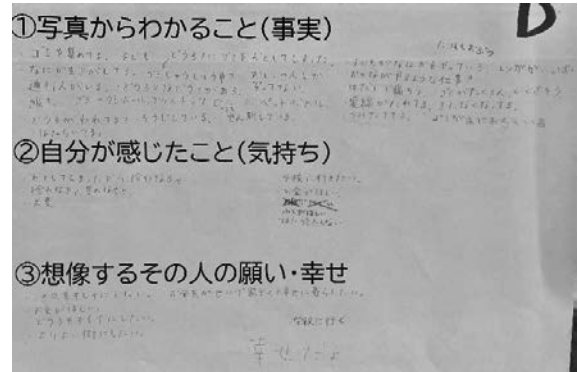
◎17位→9番
<理由>
他の目標は危機的だけれど、
9番は革新だから。

SDGsカードを用いてダイヤモンドランキングを作成し、児童が大切だと思う目標とその理由を記述した。健康や命、教育などを重視する意見が多く見られた一方、順位や理由には個人差があり、同じSDGsでも価値の捉え方が異なることに気付く姿が見られた。



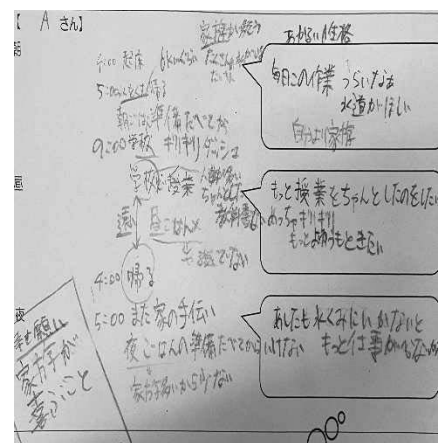
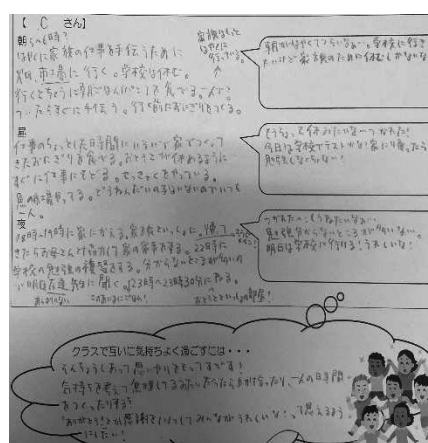
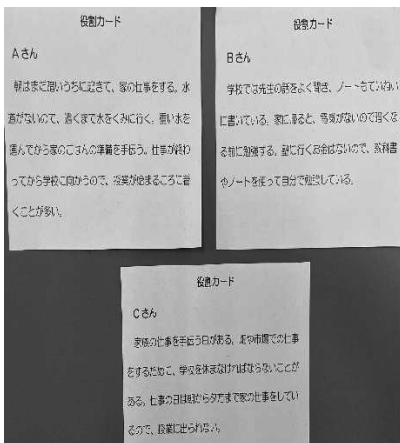
○第2時の記録

「あなたにとっての幸せ」について個人で書いた付箋(緑)と、フォトランゲージ後に他者の立場に立って書いた付箋(ピンク)を比較した。分類して掲示することで、立場や環境が変わると捉え方が変容する一方、家族との時間など共通する幸せがあることに児童が気付く姿が見られた。



↑ →
実際に使用した
写真の一部

写真から読み取れたことを個人で記述し、情報量を段階的に増やしながらフォトランゲージを行った。1回目が写真のみから感じたことを記し、2回目は背景や状況を知った上で再度考えを書き加えたことで、見方や考え方の変容が可視化された。



異なる立場や状況を設定した役割カードを基に、自分とは異なる立場から考える活動を行った。ワークシートには、その人の思いや願い、困り感が記され、児童が他者に立って考えようとする姿が見られた。

11 海外研修で何を学び、どの部分を見童生徒に伝えようと思ったか

海外研修で訪れたバングラデシュでは、日本とは異なる生活環境の中でも、人々が家族や仲間との繋がりを大切にしながら生活している姿が強く印象に残った。経済的な豊かさや便利さといった日本の基準だ

けで幸せを判断するのではなく、笑顔で過ごす時間や支え合う関係の中に幸せを見いだしている様子から、幸せには様々な形があると同時に、国が違って共通する幸せもあることを実感した。

本単元では、こうした研修での学びをもとに、「違い」に気づくだけでなく、「同じ」にも目を向けながら多様性を考えることを大切にしたい。バングラデシュの写真や出来事を通して、児童が自分達の生活や学級を振り返り、一人一人の背景や感じ方を尊重し、互いに支え合うことの大切さに気づけるようにしたい。

12 苦労した点

フォトランゲージの実施にあたっては、児童が写真から一面的に「かわいそう」「大変そう」と判断してしまわないよう、写真選定や提示方法に特に苦労した。情報を与えすぎず、しかし考えが止まらないよう、段階的に情報量を調整する必要があった。また、児童一人一人の感じ方を尊重しながら、偏見や先入観に気づかせる対話へと繋げることに難しさを感じた。

13 改善点

フォトランゲージやロールプレイを通して、児童は写真や役割カードから多様な価値観や立場に気づくことができた一方で、その気づきが自分自身の考えの変化として十分に整理されない場面も見られた。意見交換は活発であったが、時間配分の関係から考えの変容を振り返り、言語化する時間を十分に確保できなかったことが課題である。

また、SDGs やバングラデシュの事例について理解は深まったものの、知る段階に留まる児童もいた。今後は学習の終末に自分の生活やクラスの中でできることを具体的に考える問いを設定し、学びを行動に繋げたい。さらに、マイノリティの視点を扱う際には、役割理解に差が生じないように資料提示や問いを工夫し、より深い対話を促していく必要がある。

14 成果が出た点

本単元を通して、児童が幸せや普通を一つの基準で捉えるのではなく、多様な価値観の存在に気づき、見方を更新していく姿が多く見られた。バングラデシュの人々の生活や写真資料に触れた当初は「かわいそう」「大変そう」と捉えていた児童も、学習が進むにつれて背景に目を向け、「異なる環境下でも同じ幸せをもっている」「不幸だと決めつけることはできない」と考えを深めていった。フォトランゲージでは、同じ写真を段階的に扱うことで、表面的な判断から人物の思いや生活に目を向けるようになり、「見方は一つではない」「知ることで考えが変わる」という気づきに繋がった。話し合いの中で、自分の考えの変化を言葉にする児童も見られた。

また、ロールプレイや対話活動を通して、他者の立場に立って考えようとする姿勢が育まれた。役割になりきって考える中で、「自分だったらどう感じるか」「どんな支えが必要か」といった視点で意見を出し、単元後半には学びをクラスの間関係に引き寄せて捉える姿も見られた。

15 自由記述

本実践を通して、児童だけでなく、自身もまた「当たり前」や「普通」を問い直す学びとなった。今後は、海外研修で得た視点を生かし、児童一人一人の背景や思いに丁寧に向き合いながら、学びを行動や発信に繋がられる授業づくりを追究していきたい

参考資料・使用教科書：

・金沢工業大学 SDGs センター.(n.d.) SDGs 学習教材(教員用).金沢工業大学.
https://www.kanazawa-it.ac.jp/sdgs/education/support/material_teach.html (2025/11/5 閲覧)

・フォトランゲージ：DEAR 開発教育ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>

【文化・食/環境】

出会いがつなぐ未来 ～よりよく生きるために大事なこと～

【実践者】

氏名	西家 久美子	学校名	新潟魚沼市立湯之谷小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	5年2クラス（41名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年10月～11月（5時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な学習、道徳、特別活動

02 単元名と単元目標

単元名：出会いがつなぐ未来～よりよく生きるために大事なこと～

単元目標：日本とバングラデシュの共通点や相違点を探し、考えながら他国に興味関心をもつ。ストリートチルドレンの実態を知り、自分たちが身近にできることは何か考え実行する気持ちを育てる。

関連する学習指導要領上の目標：

総合的な学習の時間：

（1）探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解しようとする。

（3）探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

道徳科：【主たる内容項目：D(22)よりよく生きる喜び】

外国の人々や文化を大切にする心をもち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	日本とバングラデシュの共通点や相違点を探し考えながら、他国に興味関心をもつ。バングラデシュの現状や渡辺さんの生き方を知り、自分たちの生活と世界がつながっていることを理解している。
② 思考・判断・表現	日本とバングラデシュの生活・文化・環境の違いや共通点を比較している。渡辺さんの原動力や生きる喜びについて考え、多角的な視点から自分の生き方について深めている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	バングラデシュを例とした世界や他者の生き方に向き合い、自分の生活と結び付けて考えている。仲間の意見を尊重し、共感的な姿勢で受け止め、活動できる

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

世界や身の回りの問題・現状を知ることが目的に設定した。その中で、自分の生活と関係している事ながらに気づき、一人ひとりが課題を見つけ、探究的な見方考え方を働かせて学び合うことができるようにしたい。

ストリートチルドレンを支援する NGO 団体代表である渡辺大樹さんを取り上げ、多様な生き方を知ることで価値観を広げる。日本を離れ支援している経緯を知り、日本とは異なる環境や文化の中で、どのように現地の人々と関わり、関係を築いてきたのか考え、自己を見つめ「よりよく生きる」ことにつなげたい。

〈単元の意義〉

国際的な課題を具体的な人との出会いを通して捉え、自己の生き方や価値観を見つめ直す力を育てる。ストリートチルドレンや彼らを支援する日本人に触れることで、世界の厳しい現実とその中で行動する人間の強さや希望を知る。話し合いや振り返りを通じて多様な考えに触れながら、「よりよく生きる」とは何か自分事として考え、国際社会の課題と自分の生活を結び付けて主体的に行動しようとする態度を養う。

〈児童/生徒観〉

本校の5年生は、様々なことに興味関心を持ち、分からないことがあれば積極的に調べる。国際理解について、道徳で学習した際には外国の生活に興味を示したり、差別についても自分の意見を述べたりしていた。子どもたちは授業で世界の国の事を学んだり、日々のニュースや記事などからたくさんの情報に接していたりしている。しかし、他の国の出来事を知っていても自分事として捉えることがなく、画面越しや別世界の出来事で終わってしまいがちになっている。

〈指導観〉

国内でも国際化が進む中でバングラデシュという一つの国を取り上げ、教師が体験したことをもとに考えたい。自分で考えて言葉にする力、相手の立場になって考える力、自分の生活と繋げて行動を考える力を育む。ストリートチルドレンの現状を知り、もし自分がその立場ならどう感じるか想像し、その気付きから身近な行動に結びつけていきたい。渡辺大樹さんという日本人の生き方を知り、「自分にできる何か」を考え、行動する力を養いたい。

05 単元計画（全5時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材
1	見つけよう！ 外国から来たモノ	身近なところに外国から来たモノがたくさんあることを知り、世界と繋がっていることを知る。	・外国から来たモノを持ち寄って、気づいたことを話し合う。	外国製品 衣類、文房具
2	バングラガクシュウ①	バングラデシュと日本の共通点、相違点を見つけ興味関心をもつ。	・フォトランゲージに挑戦 ・共通点や相違点、疑問点を見つけ話し合う。 ・気づいたことを振り返る。	現地の写真
3	バングラガクシュウ②	子どもの貧困、ストリートチルドレンについて知る。	・フォトランゲージに挑戦 ・バングラデシュの貧困について知る。	現地での写真 現地の新聞
4	バングラガクシュウ③ 本時	NGO 団体の渡辺さんについて話し合い、考える。	・ストリートチルドレンを支援している日本人について知る。 ・渡辺さんの生き方について話し合う。 ・「よりよく生きる」とは何か考える。	現地の写真 渡辺さんの写真、活動写真 インタビュー映像
5	自分たちにできることは？	共通点から何かできることを考える。	・自分たちが学習してきたことを生かして何ができるか考える。 ・SDGs について調べる。	SDGs カード

06 本時の展開 (4・5 時間目)

本時のねらい：よりよく生きようとする人間の強さや気高さを理解し、人間として生きる喜びを感じることができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態
導入 (10分)	<p>○今日の学習のテーマを聞く。 T：実際に目の前に路上で生活している子どもたちを助ける？ 君たちと同じくらいの年の子どもたちがいるとして… C：助けたいと思う。 C：ちょっと迷うかな。 ○西家が経験したバングラデシュでの出会いを紹介する</p> <p>○今日の学習のテーマを聞く。 T：実際に目の前に路上で生活している子どもたちを助ける？ 君たちと同じくらいの年の子どもたちがいるとして… C：助けたいと思う。 C：ちょっと迷うかな。 ○西家が経験したバングラデシュでの出会いを紹介する。 ○渡辺さんがバングラデシュで支援活動を始めた経緯について知る。</p>
展開 (30分)	<p>○自分だったら助けるのか考え紹介し合う。 ・心情円盤を用いて、気持ちを考える。 T：なぜ遠い国の見知らぬ人を助けたいと思ったのだろう？ C：かわいそうだから。人助けをしたかったから？</p>
まとめ (5分)	<p>C：何かしたいと思った？助けてあげたいと思った。 C：お金がもらえる？ T：「かわいそう」だけで命を危険に晒して助けたいと思いますか？ C：命かけてまではかけないかも。 T：なぜ命を懸けても助けたいと思ったのだろう。 ○渡辺さんの行為行動について考え、話し合う。 T：ストリートチルドレンを助けるにしてもいくつかの困難に直面しています。それでもこの活動を続けて子どもたちを救おうとしたのはなぜだろう。 ・班になりブレインストーミングをする。</p> <p>○全体で共有する。 C：ストリートチルドレンの笑顔を見たいから。 子どもたちの将来の姿に期待しているから。 家族の支え。情熱。感謝された時の気持ち。 支援してくれた人たちのため。お金のため。 ○振り返りをする。</p>

	<p>T：渡辺さんの生き方からどんなことを学びましたか。</p> <p>C：人のために働くこと、頑張れることはすてきだな。</p> <p>T：今日の学習で学んだこと、気づいたこと、思ったことを書きましょう。</p> <p>渡辺さんの行動力やエネルギーは偉大だが、「何かしたい」という思いはみんなにもあることを伝え、次時に繋げる。</p>
--	--

使用する資料・教材：SDGs カード ・ 現地の新聞 ・ 心情円盤

07 板書計画

○板書計画

写真

写真

写真

渡辺さん

自分だったら子どもたちを

○助ける

●助けない

助けたい！
何とかしたい！

出会いがつなぐ未来

◎ 渡辺さんが頑張れる理由は何だろう。

子どもたちの笑顔 成長した子どもたちの姿

やりがい 助けたい子どもたちがいるから

家族の支え 勇気 支援してくれ人のため お金のため

感謝 気持ちがよいから 豊かになるから 認められたい

必要とされているから

○振り返り 渡辺さんらしさは

渡辺さんの生き方から学んだこと

08 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・ ワークシートの記述
- ・ 心情円盤の変化
- ・ グループ活動での関わり

09 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

- ・ 日本と少し違うところもあったし、同じところもあった。男の人もスカートみたいなものを着ていてびっくりした。
- ・ 日本と違う服や食べ方を知ってバングラデシュを知れた気がする。
- ・ 日本とバングラデシュは全然文化が違うけど、お互いの文化を知り合えばもっと仲良くできると思った。バングラデシュについて調べてみたい。

（以下、3時間目の振り返り）

児童労働もやりたくないでやらないっていうことができない家庭もあるんだなと思った

👍9

パレット・ビジョイさんは、大阪万博にいけなかったけどまた依頼が来るよとまっていたことが、凄いなと思った

👍9

学校に行ったり家があることが当たり前じゃないことを知りました。ストリートチルドレンの子たちは、路上で生活しているのにここにすごいなと思いました

👍10

バングラの人たちは、家がなくとも笑顔ですごしているし子供たちが仕事しているのがすごい。

👍10

路上生活をしている子供達を見て、とてもかわいそうだと思ったけれど子供たちは笑っていてすごいなと思いました


👍8


自分はこんなだったらもうだめだと思っちゃうけど、この子達は頑張っているすごいと思った。


👍9


「かわいそう」「お金のために働いてつらそう」など児童労働やストリートチルドレンについての子どもの率直な感想を述べていた。
(以下、本時道徳での授業での振り返り)

心の矢印 その矢印にした理由、感じたこと、やってみたいことを書きましょう。

 渡辺さんについて思ったことは渡辺さんは人の笑顔が好きなのかなと思ったので、すきな人になんかと思った。自分もそんな人になりたい。

 殺人されそうにしているのにその仕事を20年続けられているのはすごいと思った。ストリートチルドレンの人たちを見て行動に移させるのもすごいと思った。

 渡辺さんのフラに、いのちをかけたことをいふことができずに、少しでも、だれかの助けにたすけたいと思った。

 渡辺さんのしていることは、いつか世界もよくなることをしているんじゃないかなと思った。人助け、というのはむづかしいことだけれど、人助けをした時のうれしさはわからないかなと思った。

10 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

バングラデシュの様々な教育施設を回り、教育という視点からそれぞれを比較することができた。バングラデシュの「良さ」と日本のつながりを伝えたいと思った。また、世界の課題を知り、自分にできることを考えさせたかった。そのために特に印象に残った、ストリートチルドレンの現状と支援する日本人を題材に授業を行った。小学5年生と同じ歳くらいの子たちがどのような暮らしをしているのか、なぜそのような生活をしているのか伝えたいと思った。NGO 団体の代表の渡辺さんを取り上げ様々な生き方をしている人がいることに気づき、多様な価値観を理解する心を育てる。

11 苦労した点

実際に見たバングラデシュが色濃く、情報量も多く、どこを切り口に授業を構想していくか迷った。小学5年生に対して自分事として考えるためにどのような流れが考えやすいか、また専門的用語の解説や説明にも悩んだ。

学んだことを授業するにあたり、実際に体験してきた自分と自分の目で見ていない児童との差をどのように埋めるのか悩んだ。教師の体験に子どもたちも熱心に聞いていたこともあり、自分たちで何かできることはないかまで意識を維持できていないように感じた。

12 改善点

教師が体験したこともあり、教材に気持ちが入り込み、児童と教師間で差ができた。教師からの説明や強い思いをどこまで伝えられるか難しさがある。

ストリートチルドレンや Ekmattra の渡辺さんについて子どもたちの捉えが浅く、自分事として考えるには難しかった。

互いの思ったことを言って終わりになる場面が多かった。教師が子どもをつなぎ、子ども同士で議論できる授業展開の工夫が必要だと感じた。

正解は一つではない。何を言ってもよい雰囲気づくりできたが、前提となる情報や知識が少なく、話し合いが円滑に進まなかったことがあった

13 成果が出た点

授業をする前はバングラデシュがどこにあるのか、どのような国であるか知らなかった児童が、学習をしていく中で「貧困」「児童労働」などと同年代の子どもが違う場所でどのような暮らしをしているのか知ることができた。

フォトランゲージを通して、子どもたちが興味関心をもちバングラデシュについて考えることができた。普段発言しない児童が写真の限られた情報の中でも気付いたことや考えたことを伝えようとする姿が見られた。

Ekmattra の渡辺さんの生き方から「少しでも誰かの助けになることをしたい」という振り返りから身近なことからやってみよう意識付けができた。

自分たちの身の回りには外国のものが多く知ったり、それだけ輸入に頼っていたりと関連付けて考えることができた。「この服がバングラデシュ製だった。」「家のごはんにも〇〇産があった。」「今朝のニュースで、アメリカが〜。」など日常的に世界の国について話す機会が増えた。

栄養教諭にも協力してもらい「バングラデシュメニュー」を給食で出してもらい。実際に同じ食べ方で食べることもできた。「手で食べるなんて汚いと思ったけど、食べてみたら意外と難しかった。」「慣れてないからいつもの給食よりも時間がかかる。」など声があった。



14 自由記述

今回の研修では常にモヤモヤと対話に囲まれていた。現地の移動中は頭をフルに活用させていた。車窓風景や訪問した先について、参加した先生方と互いの感想や考えを常に伝え合う中でさらに考えることが多く有意義な時間となった。校種や専門教科が様々な先生方との話は自分に新たな気付きや視点をもたらし、勉強になった。考えを他者と共有することの大切さを改めて実感した。たくさんの経験や発見をくれたバングラデシュは、帰国後にはもう地図上の国としてのバングラデシュはなくなっていた。

今年だけに終わらず、この先の海外研修で学んだことを子どもたちに伝えていきたい。そして、子どもたちとどんなことができるのか考えていきたい。

参考資料・使用教科書：開発協会 DEAR「開発教育基本アクティビティ集 1ー世界とのつながり」
フォトランゲージ：DEAR 開発教育ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>

4章 データを活用する

39 データ分析の流れ 40 目的に合わせたデータの利用

【実践者】

氏名	山本 有起	学校名	千葉県立 犢橋高等学校
担当教科等	情報Ⅰ	対象学年（人数）	1年2組（39名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年 11月～1月（5時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

情報Ⅰ

02 単元名と単元目標

単元名：4章 データを活用する 39 データ分析の流れ 40 目的に合わせたデータの利用

単元目標：さまざまなデータから課題解決に向けデータを利用できる

関連する学習指導要領上の目標：目的に合わせたデータの利用をすることができる

03 単元の評価規準

① 知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> ①さまざまなデータの形式とその分析方法について理解している。 ②データベースがどのように活用されているか、仕組みについても深く理解している。 ③データモデルを理解し、データベースの操作ができる。 ④データを収集して可視化するさまざまな技能を身につけている。 ⑤データ分析の際に注意し、データを解釈する技能を身につけている。
② 思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> ①データの性質を適切に判断してアンケートに表現し、結果に基づき分析している。 ②電子マネーで支払ったときの利点について、客側、店側だけでなく、システムの仕組みについても深く考えることができる。 ③関係データモデルの利点を、仕組みを基にして深く考えることができる。 ④データを多角的に分析して表現することができる。 ⑤集めたデータに欠損値や外れ値が含まれていたらどのような分析結果になるか、どのように対応したらよいか考えることができる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> ①身近にあるデータに興味を持ち、社会で活用していこうとしている。

	<p>②蓄積したデータを活用し、データの集計、必要な情報の検索、書き換えを効率よくしようとしている。</p> <p>③データモデルに興味を持ち、身近な問題に活用しようとしている。</p> <p>④問題解決のために、データを収集し、分析し、結果を表現し、その過程を振り返り、次の問題解決に活かそうとしている。</p> <p>⑤分析の目的とデータの関係について興味を持ち、データの解釈に役立てようとしている。</p>
--	--

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

本校生徒は、興味関心があることについては、積極的に情報に触れようとする主体性がある一方で、関心がないことについては深く考えること、その背景について考えようとする主体性に欠けていることがあるため、この単元を通して国際理解について考えを深め他教科とのつながりを考えるきっかけとするため。

〈単元の意義〉

この単元は、データを分析し解釈する単元である。データを可視化することでデータの表す意味を捉えやすくすること、また、その数値の背景にある社会的要因も絡めて考えさせることで国際理解に興味・関心を向けることができる。

〈児童／生徒観〉

本校生徒は、授業に対して前向きに取り組む生徒が多い。ただ、情報に関する知識を持ち合わせている生徒も見られるが、そうでない生徒も一定数いる。また、物事に対して素直に受け入れることはできるがその背景にまで考えが至っていない。一方、近年の SNS の普及により、自分自身の関心のあることは検索をかけるなど積極的に情報に触れようとする意欲を持っている。このような特徴から教員がどの生徒も意欲的に学習に取り組み、問題の背後にある問題を読み解ける力を培うこと、道筋を立てながら思考プロセスを確立できる力を培っていく必要がある。また、個人の意見のみではなくクラス内や学年内での意見交換を行い改めて自分の考えを深められる授業を行う。

〈指導観〉

本授業では、生徒がデータ分析をすることで問題に主体的に向かう力へとつなげていくことを目指す。問題解決に向かっていく際に、必要な力である「見つける、計画する、分析する、振り返る」という過程を授業の中で行っていくことで社会に出たときに求められる問題解決能力を身につけようとする姿勢を通し、情報の取捨選択や解決能力を培う。

05 単元計画（全5時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	データの形式	データの形式を理解し、身近に使われている尺度を考える。	データの分類について学習する。データによって、どの分類が見やすいのか考えさせる。	東京書籍「新編 情報Ⅰ」、基礎からはじめ
2	データベースの活用	データベースの活用事例を考える。	データベースの活用事例と今後使用できる事例を発見する。	

3	さまざまなデータモデル	関係データモデルの利点を考える。	データモデルの例とともに、身近な例を挙げる。	る情報リテラシー
4	データ分析の流れ	データ分析の流れについて考えられる。	Excelを使い、データの分析を行う。データの分析方法を確立する。	
5 本 時	目的に合わせたデータの利用	与えられたデータからデータ分析を行い可視化するとともに課題を発見する。	データ分析で得られた結果から課題の発見をする。	

06 本時の展開（5時間目）

本時のねらい：数が表す意味について社会的背景を踏まえ考察できる

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (9分)	<ul style="list-style-type: none"> ・出席確認（1分）。 ・パソコンの起動（1分）。 ・タイピング記録を行う（2分）。 ・Teamsにログインし、スクリーンをサブモニターに投影できるようにする（2分）。 ・検索練習を行う（3分）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・出席確認の際、生徒の授業準備の状況を確認する。 ・パソコンに不具合が生じていないか確認する。 ・タイピング測定を行うためのPC環境が整っているか確認する。 ・机間指導を行い、Teamsにログインできているか確認する。 ・検索練習として、1枚の写真を提示し、検索させる。
展開 (35分)	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの復習（3分）。 ・データを可視化しグラフから考えられることを班で共有する（6分）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・データの傾向をつかむための工夫について説明する。前時までに作成したグラフを使用する。 ・Excelを用いて可視化させたグラフから考察したことを共有させる。その際、机間巡視を行いグラフの種類について助言をする。

<p>まとめ (6分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 班で考えた結果を全体に共有する (12分)。 ・ グラフから増減のメリット・デメリットを考える (検索エンジンを使用しても良い。) (11分)。 ・ 他教科 (地理) との関連について理解する (3分)。 ・ 実際には、どのようなデータなのか数値以外からも考察する (5分)。 ・ 本時の振り返りを Forms で行う (6分)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 班の意見を班ごとに全体に共有させる。 予想される発言 <ul style="list-style-type: none"> ・ 経過を見るために折れ線グラフ ・ 数が多いから円グラフ ・ ばらつきを見るためにヒストグラム ・ グラフを提示し、グラフの考察を考えさせる。(人口増加のメリット・デメリット) ・ T2 から地理分野における内容について説明する。 ・ 数値以外から考えられる背景について説明する。(数値に含まれないストリートチルドレンが存在することを伝える) ・ 本時の授業で学んだことや気づいたことを Forms に記入させる。
---------------------	---	--

使用する資料・教材：

- ・ 東京書籍「新編 情報I」、基礎からはじめる情報リテラシー
- ・ バングラデシュで撮影した写真

07 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・ データを収集して可視化するさまざまな技能を身につけている。(知識・技能)
- ・ データを多角的に分析して表現することができる。(思考・判断・表現)
- ・ 問題解決のために、データを収集し、分析し、結果を表現し、その過程を振り返り、次の問題解決に活かそうとしている。(主体的に学習に取り組む態度)
- ・ 身近にあるデータに興味を持ち、社会で活用していこうとしている。
(主体的に学習に取り組む態度)

08 学びの軌跡 (※児童生徒の発言の変化など)

2学期に入ってから、毎時間授業の中で海外研修について話す時間を作った。その1つが授業の始めに取り入れている検索練習である。本校の生徒の実態として、SNS を利用する時間は長いもののスマートフォンを使用してニュースを読む時間、気になったことを深く検索する時間は短いという実態がある。そのため、検索する練習を通して普段触れることの少ない情報に触れる時間を確保している。その1つが、検索練習であり、海外研修で撮った写真を使用した。初めは、バングラデシュという国に対して関心

が薄かったものの様々な写真を使用していく中で他国の実態に関する感想が振り返りで得られるようになったため、生徒も国際理解を意識するようになったことがわかった。○○○○○○○○○○○○○○○○

09 海外研修で何を学び、どの部分を見習うに伝えようと思ったか

海外研修で、私たちが思っている「当たり前」が「当たり前」ではないということを実感した。電気のあ
る場所で毎日勉強できることは、私たちにとっては日常であるかもしれないが、バングラデシュの子ども
たちにとっては奇跡でもあるということを感じた。家族と一緒に過ごすことができない子どもたち、今日
生き延びることに必死なストリートチルドレン、私が見たバングラデシュでの日々を生徒にどう還元でき
るか考えたときにバングラデシュの日常を伝えたいと思った。もちろん、私が見たバングラデシュはほん
の一部に過ぎないが、そこから日本の子どもたちが何か1つでも今の幸せに気づいてくれることがあった
ら良いと思い授業を行った。また、私たちが「大変だ」とバングラデシュを見て思うことがあっても、必ず
しもバングラデシュの人々も同じように感じているかはわからないということも伝えようと思った。彼ら
には彼らの生活があり、私たちが感じるものが全てではないということである。

10 苦労した点

情報科の視点から授業をしていくことが難しかった。情報の授業は、モラルや技術を教える授業にな
ることが多い。そのため、情報科の視点から授業にどのように落とし込んでいくのか考えることに苦労
した。そこで、情報科とT2（地歴公民科）の教科横断的な授業を行った。生徒には、毎回の授業で「今
日の1枚」から写真について検索させることでバングラデシュに触れさせる機会を設けた。そして、授業
においても日本とバングラデシュを題材として用いバングラデシュを身近に感じられるようにした。授
業作成の中で、情報と他教科の融合を考えることに苦労した。

11 改善点

今回の授業では、グラフの作成から、その社会的背景について考えさせる授業を行った。社会的背景
は、様々な要因がある。生徒から出た意見を拾い、それも社会的要因の1つとして授業中に議論でき
るような授業にしていくことが必要であると考えた。また、生徒の考える時間をもっと確保する必要があ
った。テンポよく授業を進めてしまったが、立ち止まって考える時間をとることで、生徒自身が深く考
えるきっかけづくりにもなるということを感じた。また、授業内ですぐ検索をさせるのではなく、一度
自分自身で考えさせてから検索をさせることが必要であった。さらに、検索機能を使用すると意見が偏
ってしまうというリスクがある。それは、どの生徒も検索をかけAIが回答したことをプリントに書き込
んでしまっていることが多いからである。そのため、いくつかの検索サイトから情報の取捨選択を行うこ
とが必要であるということの日頃の授業から気づかせていくことが重要であることを再認識した。

12 成果が出た点

T2（地歴公民科）との教科横断的な授業から生徒に社会的背景を考えさせることができたことである。
生徒は、情報の授業のみの内容だった場合、バングラデシュの現状について深める時間は少なかったと思
う。しかし、地理の観点で見たときにどのような考え方・見方があるのか授業をしたことで多角的な見方
から1つの国について考えることができたことが良かった。また、1人で考える時間とグループで考える
時間を作ることで対話的な授業になったことが良かった。

13 自由記述

Bangladesh に研修に行かせていただき、生徒が少しでも Bangladesh に目を向ける機会になっていると感じられたことが良かった。生徒が日常で Bangladesh の話をするようになったことは私の中での大きな成果であるように感じる。 Bangladesh に興味を持ってもらうこと、私が見たものを伝えること、そして情報科として情報の観点から伝えることが私の役割の1つではないかと考えた。研修中、心が動かされる瞬間が何度もあった。それは、人々の温かさはもちろん、子ども達の頑張っている姿を見たときである。同じ子ども達であるが国を超えても変わらないものがあった。それは、一生懸命何かに打ち込む姿である。ただ、日本の子ども達は、将来の夢を恥ずかしがって言わなかったり、何をやりたいかわからなかったりする生徒が多くみられる一方で、 Bangladesh の子ども達は、将来の夢を自信を持って発言する姿が印象的であった。 Bangladesh で得たこの経験をこれからも日本の子ども達に還元したい。



参考資料・使用教科書：東京書籍「新編 情報Ⅰ」、基礎からはじめる情報リテラシー

【文化・つながり】

The world begins here ～From Local to Global～

【実践者】

氏名	執行 稜	学校名	千葉県 市川市立宮田小学校
担当教科等	総合的な学習の時間	対象学年（人数）	5学年（63名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年4月 ～ 2026年3月（70時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な学習の時間

02 単元名と単元目標

単元名：「The world begins here ～From Local to Global～」

単元目標：

- 自分の生活や身の回りのことと世界の国々・人々との関係に目を向け、世界は身近な存在であることに気づくことができる。
- 異なる文化や世界の課題について、相手の立場に立って考えたり、自分との共通点・違いを見いだしたりしながら、多文化共生の必要性について考え、自分の言葉で表現することができる。
- 世界に目を向け、多様な価値観を尊重しながら、自分にできることを考え、身近な行動に結びつけようとするすることができる。

関連する学習指導要領上の目標：

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

03 単元の評価規準

①知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・ゲストティーチャーの話や体験談を聞いて、他国の特徴や文化について理解している。【概念的な知識の獲得】・異なる文化や多様性について、自国とは違う良さがあることに気づき、他国を尊重したり深く学んだりしている。【探究的な学びの良さの理解】
--------	--

②思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> ・体験したり調べたりしたことをもとに課題を設定し見通しをもって学習の計画を立てている。【課題設定力】 ・目的を考えて、自分の力で目的に合った情報を収集している。【情報収集力】 ・収集した情報を整理・分析し、次の活動に生かしている。【情報活用能力】
③主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化や国際問題に積極的に関心を持ち、自分から調べたり、考えたりしようとする。【主体的に取り組む力】 ・異なる文化や多様性について様々な人の意見を共感的な姿勢で受け止め、仲間と協力して活動することができる。【協働して取り組む力】 ・学習を通して自分にできることを考え、身近な行動に結びつけようとする意欲がある。【社会とつながる】

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

グローバル化が進む現代社会では、人・物・情報が国境を越えて行き交い、多様な文化や価値観をもつ人々と共に生活する場面が増えている。その中で、他者を理解し尊重しながら共生する力を身に付けることは、子どもたちが社会の一員として生きていく上で欠かせない。日本でも外国人入国者数や在留者数が大幅に増加しており、国際化は身近な問題となっている。こうした状況を踏まえ、国際理解教育は、世界と自分とのつながりを実感させ、国際的な課題を自分事として捉える視点を育むうえで重要である。本単元では、社会の変化を背景に児童が多様性の存在を理解し、調べ学習や交流活動を通して自分の考えをもち、それを表現する力を育てる。そして、他者を尊重し共に生きる姿勢を身に付け、日常生活の中で共生を意識した行動へとつなげることを目指している。

〈単元の意義〉

日本社会の国際化が急速に進む中、児童が多様な文化や価値観を理解し、互いを尊重して共に生きる力を身に付けることがますます重要になっている。外国人入国者や在留者の増加は、国際化が私たちの身近な生活へ強く影響を与えていることを示しており、こうした社会の変化を踏まえた学びが求められている。本単元では、児童が世界と自分との深いつながりを実感しながら、国際的な課題を自分事として捉える姿勢を育むことを目指す。さらに、調べ学習や交流を通して多文化への理解を深め、共生社会の一員として主体的に行動しようとする態度を育成する内容となっている。

〈児童/生徒観〉

本学年には、ネパール、タイ、中国など多国籍の児童が約一割在籍しており、多文化が身近に存在する環境にある。児童は日常的に外国籍の友達と関わりをもつことで、異文化との出会いを特別なものではなく、自然なものとして受けとめている。また、これまでにエジプト、フィリピン、パキスタン、ペルーなどの外部講師から他国の文化や暮らしを学んできた経験を通して、外国への関心や理解を深めてきた。児童の多くは「外国に行ってみたい」「もっと知りたい」という意欲をもち、担任による万博のオンラインツアーを見たことをきっかけに、実際に会場を訪れる児童もいた。このように、児童は既に多様な文化に対して興味・関心をもち、知識を自らの行動へと結びつけていく姿が見られる。

〈指導観〉

現代の日本では外国にルーツをもつ人が増え、児童も日常的に異文化と触れ合うようになっている。そのため、文化の違いを理解し尊重しながら共に生きる力は、これからの社会で不可欠な資質である。本単元では、多文化共生の必要性とその意義を自ら考えることをねらいとし、①異文化の存在を知る段階、②違いと共通点に気づく段階、③「なぜ共生が必要か」を探究する段階へと学び

を深める構成としている。そのための手立てとして、①**日本とタンザニアの比較** 歴史や地理の違いから文化や生活様式が生まれることに気づけるよう、学校生活・食生活・お金の使い方など児童の身近な内容で比較し、興味が高まりにくい児童も主体的に考えられるようにする。②**これまで学んだ国との比較・探究** 日本と外国の違い・共通点を探り、各国の歴史的背景や文化の良さを理解するとともに、日本の良さにも気づけるようにする。そして学びを「宮田 EXPO」で全校に発信し、理解と関心をさらに広げる。本時では、「共生するために何が大切か」を考え、その根拠や順序に目を向けることで、これからの学習への関心を高めることをねらいとする。

05 単元計画（第二次 25 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	世界とのつながりを感じよう	外国と自分たちのつながりに気づき、多文化や国際協力への理解を深めることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 海外につながりがある人の話を聞いて、日本や他国との共通点や違いについて知ろう パラグアイのアミーゴからの贈り物、大豆を育てよう JICAとはどんな組織なのか知ろう JICA地球ひろばへ行ってみよう 大阪・関西万博国連パビリオン「アフリカウィーク」に参加しよう（オンラインツアーに参加しよう）
2 本時	タンザニアについて知り、異文化・多文化への理解を深めよう	タンザニアの文化や日本との共通点・違いを知り、多文化共生の必要性を考え、多文化共生についての自分の考えをまとめ、国際社会の一員としての意識を高める。	<ul style="list-style-type: none"> タンザニアってどんな国？（担任が夏季休業中に訪問したタンザニアについての話を聞く） 日本との共通点や疑問をまとめよう タンザニアを通して、共生する必要性について考えよう 「自分ならどうするか？」「なにができるか？」という視点で考えよう 「多文化共生」とはどのようなことか、考えをまとめよう
3	自分たちができる多文化共生・多様性の尊重について考え、まとめよう	これまでの学習を通して世界とのつながりや学んだことを「宮田 EXPO」で全校に向けて発信する力を育てる。また、身近な人との考え方や感じ方の違いに気づき、「認め合う」とはどのようなことを考えて伝え合う姿勢を身に付けることをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> パラグアイの大豆から日本での食品を作り、食で世界とつながろう 自分たちが知った世界との関わりや考えを発信しよう 宮田 EXPOを開催して、多文化共生について広げよう 自分の周りの人たちの考え方や捉え方の違いについて知り、「認め合う」とはどのようなことか考え、伝え合おう

06 本時の展開（2/25 時間目）

本時のねらい：異文化の学校生活を想定して友達をつくる方法を考え、友達の考えと比較しながら自分の考えを深めることを通して、異なる文化をもつ人々と共に生きることへの理解を深める。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5分)	1 これまでの学習を振り返る。	

	<ul style="list-style-type: none"> ・日本とタンザニアとの文化の違いについて、それぞれの国の背景や歴史が大きく関係していること、そのどちらにも良さがあることを押さえる。(言語、部族、生活様式など) <p>2 実際に自分がタンザニアに行ったとしたら…と仮定して考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化や生活様式の違いから自分がタンザニアで生活するとしたらどんな問題や良さがあるか想像する。 	<p>◎これまで学習してきたことをスライドと掲示物にまとめ、想起できるようにする。</p> <p>※周りの友達と話し合い、友達の意見を参考に考えられるようにする。</p>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> ◎タンザニアの学校に転校生として行ったら…？ </div>	
<p>展開 (30分)</p>	<p>3 「自分ならどうするか」という視点を持ち、そのためにできることについて考える。</p> <p>①全体共有 (5分)：まず何をするか？ <予想される児童の反応></p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達を作る。 ・学校探検をする。 ・誰かに話しかけてみる。 ・言葉が通じないから黙って過ごす。 <p>*この中から「友達づくり」というテーマで次の課題について考えられるようにする。</p> <p>②個人ワーク (10分)：そのためにあなたは どうしますか？</p> <p>ワーク1 書き出す。</p> <p>ワーク2 ピラミッドチャートにする。</p> <p><予想される児童の反応></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分から英語で話しかける。 ・日本語を教える。 ・スワヒリ語を教えてもらう。 ・休み時間に一緒に遊ぶ。 ・放課後家に遊びに行く。 ・一緒にゲームをする。 ・日本の遊びを教えてあげる。 ・タンザニアの遊びを教えてもらう。 <p>③グループワーク (10分)：「友達づくりのために大事なこと」について話し合い、ピラミッドチャートにまとめる。</p> <p><予想される児童の反応></p>	<p>◎タンザニアの学校生活のイメージがつくように、教室の写真を提示する。</p> <p>◎各グループにファシリテーターをつけ、思考を深掘りできるようにする。</p> <p>◎ピラミッドチャートにする際、やること(手段)ではなく、大事なこと(目標)を一番上に書くように伝える。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・まずは話しかけてみよう。何語で？ ・一緒に遊ぶのも良いね。日本の遊びを教えたり，タンザニアの遊びを教えてもらったりできるね。 ・ジャンケンなら世界共有かもしれないよ。 	<p>※日本ではどうする？それはタンザニアだったらどうなる？など日本での生活を起点に考えられるように声をかける。</p>
<p>まとめ (10分)</p>	<p>4 学級全体で共有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピラミッドチャートの一番上にした項目とその理由をグループごとに発表し，学級全体で共有する ・質問や気づき，感想を発表する。 <p>5 まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言語や文化が違って交流，交友する方法があること，またそのためにできることが今の自分たちにもある。 ・次回は，なぜ国や文化を超えて共有していく必要があるのかについて考える。 	<p>◎自分では考えつかなかった方法について知ることで，多様な考えがもてるようにする。</p>

使用する資料・教材：

- ・タンザニアと日本を比較するための資料（パワーポイント）
- ・タンザニアの学校の様子の写真

07 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・異文化の学校生活を想定し，友達をつくるためにどうすればよいかについて考えることができる。（ワークシート・グループワーク）【思考・判断・表現】
- ・友達の考えと比較し，自分の考えをより深めることができる。（ワークシート・グループワーク）【思考・判断・表現】
- ・友達を作る方法を考えることを通して，異なる文化を持った人々と共に生きていくことについて理解する。【知識・技能】

08 学校外との連携（※該当のある場合）

- ・長野県長野市立浅川小学校 他 新潟県，群馬県，東京都，埼玉県，大阪府の小中学校
- ・特定非営利活動法人ワールドビジョンジャパン
- ・千葉県多文化共生出前講座 ・市川市多文化共生出前講座
- ・大阪・関西万博国連パビリオン「アフリカ・ウィーク」

09 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

児童は「自分がタンザニアに転校したら」という設定をきっかけに，これまで学んだ文化や生活の違いを生かして具体的に考えることができた。はじめは言語の違いにとらわれていたが，「日本ならどう友達をつくるか」という視点を加えることで，さまざまな関わり方を発想できるようになった。また，海外からの転入児の実体験を聞いたことで，友達づくりの難しさや工夫を身近に感じ，自分事として考える姿が見られた。さらに，グループ発表を通して他の考えに触れ，視野を広げながら多様な考えを受け入れる大切さに気付くことができた。

10 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

海外研修を通して、他者との距離感や接し方、思いやりの持ち方といった人間関係の在り方は、日本が世界の中ではマイノリティであることを感じた。また、文化や価値観の違いは「違って当たり前」であり、互いを認め合うという概念そのものが存在しない地域さえあること、そして助け合いが日常の中で自然に行われている社会があることを学んだ。こうした多様な文化の在り方が世界には存在することをまず児童生徒に知ってほしい。その上で、自分たちには何ができるのか、どのように他者と関わっていくのかを主体的に考えられるようになってほしい。

11 苦労した点

本時では、思考ツールであるピラミッドチャートの使い方に児童が戸惑い、どのように思考を整理すればよいか理解しにくい場面が見られた。

12 改善点

上記の改善点として、下段から順に考えを積み上げていく方法を提示する案や、一番上に「友達をつくる」という共通の目標を置き、そのために必要な行動を下位に整理していくという思考の流れを示す案など、児童が使いやすくなる工夫が必要であった。

13 成果が出た点

各グループにファシリテーターを配置したことで、理由付けや思考が深まった。さらに、中国・ネパール・インドから転校してきた児童の存在が実例として共有され、言語や文化の違いに悩む仲間が身近にいることを学級全体で実感できた。グループ発表を通して多様な考えに触れ、視野が広がった。



14 自由記述

本単元は、昨年度のテーマである「ジブンゴト」から発展させ、「共生」へとつなげる構成で実施した。「共生」とは、文化や歴史の異なる国同士だけでなく、日常生活の中でも互いの違いを認め、尊重し合うことが求められる。その力を育てるため、まず世界の国々との違いに目を向けて視野を広げ、第三次では学びを自分たちの生活に結びつけて考える計画とした。11月にはタンザニアの学校とオンラインで交流し、児童は自分たちの考えを実際の相手に向けて実践する貴重な経験を得ることができた。本物に触れ、体験を通して学ぶことで、「共生」の意義を実感をもって理解することにつながった。こうした経験は国際理解教育として大きな成果であり、その後の授業でも国際に関わる話題が出るたびに、自然とタンザニアの例を挙げて考える姿が見られるようになった。

本単元を通して、児童がこれからの生活の中で、国だけでなく身近な人との間にも考え方や感じ方の違いがあることを認め合い、互いを尊重して関わろうとする姿を育てていきたい。

参考資料・使用教科書：地図でスッと頭に入るシリーズ（昭文社）
世界のともだちシリーズ（偕成社）

【文化・つながり】

「つながりをつなぐ」—JICA 海外協力隊員の活動から“支援”のかたちを考える—

【実践者】

氏名	南沢青和	学校名	長野県 千曲市立屋代小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	5年 松組（26名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年11月（2時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

道徳

02 単元名と単元目標

単元名：「つながりをつなぐ」—JICA 海外協力隊員の活動から“支援”のかたちを考える—

単元目標：世界で行われているさまざまな支援の姿を通して、「支援」とは一時的な行為にとどまらず、相手の将来や地域の発展につながるものであることに気づく。その考えを、自分たちの身近な生活や学級・学校での関わりに重ねて考えることで、支援を自分ごととして捉え、相手の立場に立って考えようとする態度を育てる。

関連する学習指導要領上の目標：B（7）思いやり・共感

・協力隊員の活動や困っている人々の立場を通して、他者への思いやりや共感の心を育てる。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	協力隊員の活動を通して、支援には「今すぐできる支援」と「未来につながる支援」など、さまざまな形があることを理解している。
② 思考・判断・表現	協力隊員の活動や身近な生活場面を基に、「今すぐできる支援」「未来につながる支援」の違いについて、相手の立場に立って考え、自分の考えを話し合いや記述を通して表現している。
③ 主体的に学習に取り組む態度	話し合いやワークシートの活動を通して、相手の立場に立ちながら、今だけでなくこれからにつながる、相手にとって本当に力になる関わり方を考えようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

世界にはさまざまな課題があり、それに対して多くの支援が行われているが、児童にとっては遠い国の出来事として感じられることが多い。そこで、JICA 海外協力隊員の活動を教材として取り上げ、さらに身近な生活とつなげて考えることで、支援を身近に感じられるようにした。「今すぐできる支援」と「未

来につながる支援」という視点で考えることで、児童が自分の生活と結び付けながら支援について考えられると考え、本単元を設定した。

〈単元の意義〉

本単元では、協力隊員の活動を通して、支援には目の前の困りごとを助ける関わりだけでなく、その先の生活や将来につながっていく関わりがあることを扱う。世界で行われている支援を、学級や学校生活の場面と重ねて考えることで、児童は「助ける」とは何かを自分なりに考え、相手の立場に立った関わり方について考えを深めていく。また、学んだことを日常の行動と結び付けて捉えようとする点に、本単元の意義がある。

〈児童/生徒観〉

本学級の児童は、困っている人を見ると「助けない」「何かしてあげたい」という気持ちを素直にもっていた。一方で、「助ける」ことを、その場ですぐにできる行動として捉えることが多く、その先のことまで考える機会はあまり多くなかった。

しかし、話し合いやワークシートを通して自分の考えを出したり、友だちの意見を聞いたりすることには前向きに取り組み、自分の経験と結び付けながら考えを広げる姿が見られた。そのため、支援の形を比べて考える活動を通して、相手にとって本当に力になる関わり方には、「今」だけでなく「これから（未来）」という視点も大切であることを、児童なりに考えを深めることができた。

〈指導観〉

指導にあたっては、協力隊員の具体的な活動をもとに、児童が「支援」について自分の言葉で考えられるよう、クイズや話し合い活動を取り入れた。クイズの場面では、全体で黒板を使いながら意見を出し合い、児童の素直な考えを共有した。はじめから「今すぐできる支援」「未来につながる支援」という分類を示すのではなく、出された意見をもとに考えを深めていく中で、児童自身の言葉としてこれらの表現が生まれるようにした。

その後、ロイロノートを活用し、班の話し合いの中で「今すぐできる支援」「未来につながる支援」「どちらにもあてはまる支援」を表に整理する活動を行った。また、学校生活の中にある身近な場面を取り上げることで、学んだことを自分の生活と結び付けて考えられるようにした。全体での共有や意見交流を通して、相手の立場に立ちながら、「相手にとって本当に力になる関わり方とは何か」を考える姿が見られた。


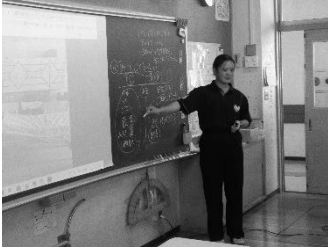
05 単元計画（全2時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	世界とつながる	世界にはさまざまな課題があり、それぞれに「支援」が必要であることに気づき、JICA海外協力隊の活動を通して世界とのつながりを考える。	1. フォトランゲージを通して、世界のさまざまな場面や課題の様子を見て感じたことを交流する。 2. 写真から、世界にはどんな困りごとや課題があるかを話し合い、気付きを共有する。 3. 「JICA」や「JICA 海外協力隊」で多くの日本人が支援のために海外にいることを知る。	写真 ワークシート
2 本時	つながりをつなぐ	協力隊員の活動を通して「今すぐできる支援」と「未来につ	1. 協力隊員の活動をクイズで知り、支援の多様な形に気づく。	写真 ロイロノート

	<p>ながる支援」の違いに気づき、自分の生活の中での支援のあり方を考える。</p>	<p>2.ワークシートで「今すぐできる支援」「未来につながる支援」に整理する。</p> <p>3.自分たちの身の回りでも「今支援する」ことと「未来のために支援したほうがいい」ことがないか考える。</p> <p>4.気づいたことを共有し、支援のあり方について考えを深める。</p>	
--	---	---	--

06 本時の展開（2時間目）

本時のねらい：前時に、世界にはさまざまな課題があり、それぞれに支援が必要であることを学んだ子どもたちが、協力隊員の活動を知り、「今すぐできる支援」と「未来につながる支援」、「どちらにもあてはまる支援」に分ける活動を通して、支援の違いに気づき、自分の生活でも相手にとって本当に力になる関わり方は何かと考えようとする態度を育てる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点	評価
		(支援)	
<p>導入 (5分)</p>	<p>1 前時にふりかえり 前時に扱ったタンザニアの医療現場の写真を再度提示し、前回の考えを振り返る。</p>  <p>【この協力隊の人は一人でも多く助けたいと思って活動していると思う】</p> <p>【日本のやり方（技術）を教えてあげるために行っていると思う】</p>	<p>・前時の学び（医療現場の現状や協力隊の存在）を想起させる発問を行う。</p>	
<p>展開① (15分)</p>	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">【学習課題】「助ける」ってどんなこと？</p> <p>2. クイズ 『この現場に“今”必要な「助け」は何でしょう?』というクイズを出す。</p> <p>【「薬」「お金」「医者」「医療機器」など、目の前の課題を解決する答え。】【「建物」「教育」「技術」など、少し先を見た答えも出始める。】</p>  <p>3.現地の課題や求められる「助け」について考える。 助けるには「今」と「これから」があることを確認する。 【薬とかお金があればすぐ助けられるよね。】 【でも、使える人がいないとダメなんだ。】</p>	<p>子どもの発言を受け止め、「まだ他にも考えられるかな?」と問い返し、次の学習（支援の在り方の違い）への関心を高める。</p> <p>・協力隊員の発言を示し、子どもが「教育＝これからにつながる助け」と捉えられるように支援する。</p>	

展開② (15分)

4.相手の立場に立ち、「今すぐできる支援」や「未来につながる支援」が身近にないか考える。

【友だちに教えてあげるのは今の支援かな。】

【勉強のやり方を教えるのは未来のため？】

【やり方が分かるまで一緒にとくのが未来のためになるんじゃない？】

【掃除を手伝うのも今すぐできること、みんなで決めるルールを作るのは未来につながるかも。】

まとめ (5分)

5.本当に相手のためになる「助ける」について考えたことをまとめる。

【「今」助けることも大事だけど、「これから」につながる助けるも大事だと思った。】

【今とこれから、両方を考えて行動したい。】

【学校生活で友だちとかかわるときにも、これからにつながる助けについて考えて行動したい。】

6.友だちと考えを共有する。

【「助ける」には「今」と「これから」があることを具体例で示しながら確認し、両方の支援が大事であることに気づかせる。

・学校生活や家庭生活の具体例（掃除、勉強、遊び、片付けなど）を提示し、考えやすくする。

・個人で考えた後、グループで話す時間をとり、複数の視点に触れられるようにする。

・子どもの言葉を受け止めながら、支援には「今」と「未来」の両方の視点があることを押さえる。

・協力隊の人たちの活動も「今だけでなく未来につながる助ける活動」であることを確認する。

話し合いやワークシートから、相手にとって本当に力になるかわかり方を考えているか。

↑例えば、 (委員会、掃除、勉強、授業、交流など?)	いろんな「たすける」を考えよう。		
	今の「たすける」	どっちにも当てはまるorどちらかわからない	これからの「たすける」
例) 三角形の面積の求め方が分からなくて困っている。	公式教える	なし	覚えるまで一緒にとく
ゆいともつりで1年生が自分のペアが選べなくなり	「名前を覚えていれば」その人はこんな人だよといっしょに探す。	なし	ペアと一緒に手をつないでほぐれないようにする。
委員会で自分の役割がわからなくなっている	「委員会の委員長の名前を知っていた」その人がいる学年へ行って、その人にやり方を聞く。	なし	その教えてもらった人に教えてもらったらそのことをメモする。

使用する資料・教材：・第一時 フォトランゲージで使用した写真



07 評価規準に基づく本時の評価方法

話し合いやワークシートから、相手にとって本当に力になるかわかり方を考えているか。(思考・判断・表現)

08 学びの軌跡 (※児童生徒の発言の変化など)

本時の振り返り (抜粋)

本当に相手のためになる「助ける」について授業で考えたこと、わかったことを書きましょう。

助けるときにも時と場合があって、その時に必要なものや、やることが違うと考えた。
助けるためには、ものだけじゃなく、教え合うことなどが大切だと思った。

本当に相手のためになる「助ける」について授業で考えたこと、わかったことを書きましょう。

前は、今助かったりすることしか考えていなかったけど、今は今だけじゃなくて、未来までのことを考えられた。
相手のことを考えるためには、今だけのことを考えるのではなくて、未来のことまで考えるといいなと思った。

本当に相手のためになる「助ける」について授業で考えたこと、わかったことを書きましょう。

「助ける」には、「今助けるためにはどうするか」だけではなく「そのためにこれからはどんなことをしたらいいか」という「未来の助ける」というのも考えるのが大切だと思った。

本当に相手のためになる「助ける」について授業で考えたこと、わかったことを書きましょう。

助けるにはいろんな助けるがあって、今を助けるとき、これから助けるがあった。
今を助けるは、いつか無くなるものや、今だけ覚えられるものがあるけど、これから助けるには、いろんな技術や、これからも覚えていられるようなこと。今助けるのは、もちろん大事だけど、これから助けることも、とても大事。今までの考えは助ければよかったけど今は、これからのことも助けたほうがいいと思った。

本当に相手のためになる「助ける」について授業で考えたこと、わかったことを書きましょう。

『助ける』には「今」と「未来」の『助ける』があって、「今」助けるのも大事だけど「未来」も助けることが大事なんだなと思った。
私は「今」のことばかり考えていたけど、「未来」・「これから」を考えることも大切なんだなと思った。

本当に相手のためになる「助ける」について授業で考えたこと、わかったことを書きましょう。

「助ける」には、「今助けるかどうするか」より、助けるために、「どうすればいいか」とか、助けたとして、「その人のためになるか」とかを考えたほうが良いと思う。
私が助けるときには、「今」の助けるのことしか考えてなくて、「未来」の助けるがあることも、それが大事だということも、知らなかった。

09 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

私が教師海外研修で様々な価値観に出会い、多くの経験をする中で、最も心に残っている言葉が、看護師隊員の方が語っていた「教育はすべての源である」という言葉である。研修中、私たち研修員が「もし、日本から物資や薬、機械など、何でも持ってくる事ができるとしたら、何が一番必要か」と質問したところ、「教育である。どれほど高価な機械があっても、管理できる人や使い方が分かる人がいなければ意味がない。まずは人を育てる教育が必要である」と答えてくださった。さらに、「先生方はとても素晴らしい仕事をしている。これからもがんばってほしい」と言葉をかけていただき、この言葉を通して、教育の意味を改めて自らに問い返すきっかけとなった。

授業づくりを進めるにあたり、教師海外研修では多くの学びがあったため、どの経験を教材化するか、また、どのように児童の学びへとつなげるかについて大いに悩んだ。そこで、研修の中でも特に自分の心に強く残っているこの出来事を授業の題材として扱うことにした。しかし、「教育」という言葉は、小学校5年生の児童にとっては抽象的であり、自分事として捉えることが難しいと感じた。そこで本時では、「教育」という言葉をそのまま扱うのではなく、「今の支援」と「これからの支援」という表現に置き換え、児童が自分の生活と結び付けながら考えられるように授業を構成した。

10 苦労した点

本実践では、教材を0から作り上げることに、思っていた以上に時間がかかった。タンザニアでの経験の中でも、協力隊のお話を授業で扱いたいと考え、言葉を教材にしようと考えてからも、それをどのように子どもたちの学びにつなげるか、何度も考え直した。

「支援」や「教育」といった言葉は、子どもたちには少し難しく感じられるため、そのまま伝えるのではなく、生活に引きつけて考えられるよう、問いの出し方や授業の流れを工夫した。

また、「助けるとは何か」という問いにははっきりとした答えがなく、私自身も迷いながら子どもたちと一緒に考える時間となり、授業の進め方の難しさを感じた。

11 改善点

今回の授業では、子どもたちの考えを大切にしたいと思いつつも、結果的に教師側の意図に寄せた、やや誘導的な進め方になってしまったと感じている。子どもの発言に対して、問い返して考えを深める場面よりも、先に次の問いを示してしまうことがあった。また、「今すぐできる支援」や「未来につながる支援」という考えについても、子どもたちの言葉から自然に生まれるような関わりを、十分に行うことができなかった。

今後は、考えをまとめることを急ぐのではなく、子どもたちの迷いや立ち止まる時間を大切にしながら、子ども自身の言葉を起点とした授業づくりを心がけていきたい。

12 成果が出た点

協力隊員の活動を通して、「助ける」とはどのような関わりなのかを、子どもたちが自分なりに考え、話し合う姿が見られた。授業の中で、目の前の困りごとを助けるだけでなく、その先につながる関わり方があることに気づいていった。

また、「今すぐできる支援」「未来につながる支援」という言葉を子どもたちの発言から整理して共有したことで、学校生活や友だちとの関わりに話題をつなげ、身近な場面で考えようとする姿が見られた。

13 自由記述

今回の授業実践は、教師海外研修での経験をもとに、「自分の経験から授業を生み出す」という、私にとって大きな挑戦であった。現地で感じたことや心に残った言葉を、どのように子どもたちの学びにつなげていくのか悩みながら授業づくりを進めてきたが、その過程そのものが、自分にとって大切な学びの時間となった。

このような経験ができたのは、教師海外研修の機会を与えてくださった JICA の皆様をはじめ、現地で出会った協力隊員の方々、研修に関わってくださった多くの方々の支えがあったからこそである。また、日頃から相談に乗ってくださった先生方や、授業をともにつくってくれた子どもたちの存在も大きく、多くの人とのつながりの中でこの実践が形になったことに感謝している。

今回の学びをこの授業だけで終わらせるのではなく、今後も自分自身の経験や学びを大切にしながら、子どもたちや地域の人たちと共有し、次の学びへとつなげていきたい。タンザニアでの経験から始まった学びを、これからも「つながりをつなぐ」授業づくりへと生かしていきたい。

【参考】

フォトランゲージ：DEAR 開発教育ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>

【文化・つながり】

バングラデシュを知ろう ～バングラマスターを目指して～

【実践者】

氏名	吉元 恵那	学校名	千葉県立桜が丘特別支援学校
担当教科等	各教科等合わせた指導	対象学年（人数）	中学部1・2・3年（10名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年10月27日～11月12日（18時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

各教科等合わせた指導 生活単元学習

02 単元名と単元目標

単元名：バングラデシュを知ろう～バングラマスターを目指して～

単元目標：

- ・バングラデシュの言語や食事などの文化について、視覚的・体験的な活動を通して基本的な知識を得ることができる。
- ・バングラデシュの人々の生活や文化を日本と比較し、感じたことや考えたことを表現することができる。
- ・バングラデシュの文化や人々に親しみをもち、外国の人々とのつながりに関心をもって学習に取り組むことができ

関連する学習指導要領上の目標：

社会・中学部1段階 カ外国の様子－（ア）

- ㊦ 文化や風習の特徴や違いを知ること。
- ㊧ そこに暮らす人々の生活などに着目して、日本との違いを考え、表現すること。

・中学部2段階 カ外国の様子－（ア）

- ㊦文化や風習の違いを理解すること。
- ・中学部2段階 カ外国の様子－（イ）
- ㊧人々の生活の様子を大まかに理解すること。

美術・中学部1段階 A表現－ア

（ア）経験したことや思ったこと、材料などを基に、表したいことや表し方を考えて、発想や構想をすること。

外国語・中学部 イ 日本と外国の言語や文化に慣れ親しむこと

（ア）体験的な活動を通して日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知ること。

家庭・中学部1段階 B衣食住の生活－イ

（ア）簡単な調理の仕方や手順について知り、できるようにすること。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	手順に沿って日本とバングラデシュの米を炊飯することができたか
② 思考・判断・表現	日本とバングラデシュの米の種類や炊き方の違いに着目し、感じたことや気付いたことを表現することができたか。

③ 主体的に学習に取り組む態度	バングラデシュの食文化に親しみをもち、外国の人々の生活に関心をもって学習に取り組むことができたか。
-----------------	---

04 単元設定の理由・単元の意義

令和7年度より推進されている第4期千葉県教育振興基本計画では、「郷土と国を愛する心とグローバル化への対応能力の育成」（施策6）が掲げられており、直接外国の文化に触れたり国際交流を行ったりすることを通して、国際理解を深め、国際社会の一員としての自覚を高めることが求められている。

本校においても、ユネスコスクールへの認定を契機にESD教育（持続可能な開発のための教育）が積極的に推進されている。世界や外国の文化を身近に感じ、具体的な体験を通して理解を深める学習の設定が必要であると考え、本単元を設定した。

本単元では、バングラデシュを取り上げ、食文化・言語・宗教など日本との違いを学習した。生徒が実感を伴って外国の文化や人々の暮らしを理解できるように、すごろく、現地で調達した米を用いた調理学習など体験的な学習を多く取り入れた。これらの学習を通して、国際理解を深めるとともに、ESDの視点から世界と自分とのつながりに気付き、持続可能な社会の担い手としての基礎的な資質・能力を育成することが本単元の意義であると考えられる。

〈児童/生徒観〉

本学習グループは、男子3名女子7名で構成されており、知的障害教育の教育内容を取り入れた教育課程で学んでいる。国籍は、日本国籍の生徒が9名、スリランカ国籍の生徒が1名となっており、スリランカ国籍の生徒は、宗教的な理由から弁当を持参している。コミュニケーション面については、日常会話が可能で生徒が6名、言葉が不明瞭であるが簡単な会話ができる生徒が2名、発声や挙手、○×などの簡単なサインで答える生徒が2名いる。生徒は、移動の困難さなどの障害特性に起因して、遠方へ出かけたり、異年齢・異校種の生徒と関わって自身とは異なる考え方や価値観に触れたりする経験は少ない。このような理由により、国ごとに異なる文化や言語があることへの理解は十分とはいえず、具体的に体験的な学習を通して視野を広げていく必要があると考えられる。

〈指導観〉

外国について初学者である生徒が多い実態を踏まえ、親しみのある日本から段階的に学習内容を国外へ広げてきた。渡航経験のない生徒でも、異文化への関心をもつことができるように、挨拶・食事など現地の文化を体験的に学ぶ活動を通して、学習を行った。また、生徒が学習の達成感を味わうことができる手立てとして授業の終わりにはバングラデシュの国旗シールを学習カレンダーに貼る活動を取り入れた。

本時では、バングラデシュ産の米を用いて、日本とバングラデシュそれぞれの国の米の種類や炊き方について学習する。食は生徒たちにとって日常的に親しみのあるものであり、両国の主食が米であるという共通点を通して、異文化への理解を深めることができると考える。更に、生徒の興味関心を高めるため、学校栄養士の協力を得て、10月31日の給食献立にバングラデシュ料理を取り入れた。視覚だけでなく、手触りや嗅覚などを活用した体験的な学習を通して、生徒が外国の人々に思いを馳せ、親しみをもって活動に取り組むことをねらいとした。

05 単元計画（全18時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材など
1	日本について知っている？	<ul style="list-style-type: none"> クイズや、遊びの体験に興味関心をもって参加することができる。 日本の国旗や文化について、気付いたことを発表できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本クイズ（文化、場所）に取り組む。 日本のかきたりを体験する。 日本国旗を描き、国旗に込められた意味を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> パワーポイント 国旗かるた ワークシート 国旗シール
2	バングラデシュは	<ul style="list-style-type: none"> 地図を確認してバングラデシュの位置を知ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> バングラデシュの場所を地図から探す。 	<ul style="list-style-type: none"> パワーポイント 世界地図

	どこにある？	<ul style="list-style-type: none"> ・Made in Bangladesh 探しに進んで参加することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Made in Bangladesh の物を身近な服のタグ等から探す 	<ul style="list-style-type: none"> ・服、ズボン ・ワークシート ・国旗シール
3	バングラデシュはどんな国	<ul style="list-style-type: none"> ・国旗の違いや特産品を知り、感じたことを発表することができる。 ・「Amra Korbo Joy」に親しみを持ち、歌うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・バングラデシュクイズ(国旗・特産品)に取り組む。 ・バングラデシュの特産品である服やジュートのバッグを触る。 ・バングラデシュの歌「Amra Korbo Joy」を聴く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント ・現地で購入した服 ・ジュートのバッグ ・「Amra Korbo Joy」動画 ・ワークシート ・国旗シール
4	バングラデシュの暮らし	<ul style="list-style-type: none"> ・気候や文化について知ることができる。 ・バングラくらしすごろくに友達と一緒に取り組むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・バングラデシュクイズ(気候・文化)に取り組む。 ・バングラくらしすごろくに取り組み、イスラム教の人々の生活を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント ・バングラくらしすごろく ・ワークシート ・国旗シール
5	バングラデシュの食べ物①	<ul style="list-style-type: none"> ・食べ物について、日本との相違点を考えたり、発表したりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・写真を見比べて、日本との食の相違点を見つける。 ・マンゴーバーを触ったり、チャイのにおいを嗅いだりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント ・マンゴーバー ・紅茶（ブラック、マサラ） ・ワークシート ・国旗シール
6	バングラデシュの食べ物②	<ul style="list-style-type: none"> ・バングラデシュの米の炊飯方法を知り、炊飯を行うことができる。 ・炊飯方法や調理した米を見て、日本との相違点を発表できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・バングラデシュの米の炊き方を知り、炊飯をする。 ・日本の米とバングラデシュの米を炊飯して、相違点を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミニケット米（バングラデシュ） ・ジャポニカ米（日本） ・パワーポイント ・炊飯動画 ・手順表 ・ワークシート ・国旗シール
7	バングラデシュの文字	<ul style="list-style-type: none"> ・かるたの札を作成するなどの活動を通して、ベンガル語に親しみをもつことができる。 ・「バングラデシュ言葉かるた」に意欲的に取り組むことができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・現地の教科書（社会科）を見て、何の教科書であるか予想する。 ・かるた札作りを行いながらベンガル語について知る。 ・作成したかるたを使って、ゲームに取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント ・現地の教科書（Grade4 社会科） ・かるた札 ・国旗シール
8	バングラデシュの友達に手紙を送ろう！	<ul style="list-style-type: none"> ・現地の生徒（Dream School）へ向けて伝えたい気持ちを、イラストで表現できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Dream School の写真や、生徒が描いたイラストを見て、感じたことや考えたことを発表する。 ・現地校の生徒へ向けて手紙を作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント ・Dream School の生徒からもらったイラスト ・紙

		・現地の人に思いを馳せ、親しみや関心を持つことができる。		・色鉛筆 ・色ペン
9	バングラデシュまとめ	・食文化、言語など今まで学習してきたバングラデシュと日本の相違点について発表することができる。 ・異なる国の人々について興味をもち、積極的に活動に取り組むことができる。	・これまでの学習を、スライドを通して振り返る。 ・バングラデシュクイズ(单元の中で実施したもの)に取り組む。 ・バングラマスター認定証授与式を行う。 ・世界地図を見て、様々な国の挨拶について知る。	・パワーポイント ・バングラマスター認定証 ・地図(世界のことばでこんにちは)

06 本時の展開 (11・12 時間目)

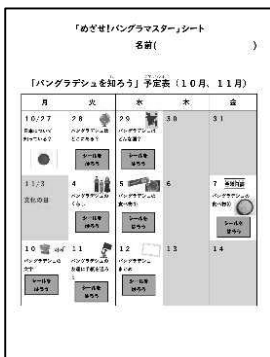
本時のねらい：手順に沿って日本とバングラデシュの米を炊飯し、違いや気付きを表現しながら、バングラデシュの食文化に親しみ関心をもって学習に取り組む。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点(支援)
導入 (20分)	○始めの挨拶 日本語とベンガル語で挨拶。 ○「Amra Korbo Joy」を歌う。 ○今日やることを確認 ○前時までの振り返り パワーポイントの写真をしながら、マンゴーバー・紅茶について振り返る。 ○バングラデシュの食 バングラデシュの主食や食べ方についてクイズ形式で出題する。	・日直に挨拶を依頼する。 ・ベンガル語の挨拶をする。 ・「Amra Korbo Joy」を動画で流す。 ・スライドを提示する。
展開 (53分)	○始めの挨拶 日本語とベンガル語で挨拶。 ○「Amra Korbo Joy」を歌う。 ○今日やることを確認 ○前時までの振り返り パワーポイントの写真をしながら、マンゴーバー・紅茶について振り返る。	・チャイやマンゴーバーを見ながら振り返る。 ・バングラデシュ料理の画像を提示する。 ・10月31日の給食を振り返る。 ・バングラデシュの食クイズを行う。
まとめ (7分)	○バングラデシュの食 バングラデシュの主食や食べ方についてクイズ形式で出題する。	・米の炊飯工程が書かれたカードをグループごとに配る。 ・発表者に注目できるよう MT は声をかける。 ・炊き方の手順を確認する。 ・安全に調理を行うことができるように必要に応じて支援を行う。 ・休憩時間にそれぞれの調理台に鍋を設置する。

<ul style="list-style-type: none"> ○日本のお米の炊き方 <ul style="list-style-type: none"> ・日本の米の炊飯工程の手順をグループで考え、発表する。 ○お米を炊こう① <ul style="list-style-type: none"> ・炊き方の手順を確認する。 ・日本の米を炊飯器で炊く。 ○終わりの挨拶 ○トイレ・水分休憩 ○始めの挨拶 ○バングラデシュの米の炊き方 <ul style="list-style-type: none"> ・日本の米の炊飯工程の手順をグループで考え、発表する。 ○お米を炊こう② <ul style="list-style-type: none"> ・炊き方の手順を確認する。 ・バングラデシュの米を鍋で炊く。 ○炊いたお米を確認しよう <ul style="list-style-type: none"> ・日本の米とバングラデシュの米にはどのような違いがあるかグループで話し合う。 ○活動の振り返り <ul style="list-style-type: none"> ・日本の米とバングラデシュの米を比べて感じたこと、炊いた感想を発表する。 ・学習カレンダーにシールを貼る。 ○終わりの挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・米の炊飯工程が書かれたカードをグループごとに配る。 ・バングラデシュの米の炊き方動画をテレビで流す。 ・事前に炊いた米を提示する。 ・触ったり、匂いを嗅いだりして確かめられるようにする。 ・比較が難しい生徒には個別に言葉かけをする。 ・グループで話し合う機会を設ける。 ・発表者に注目できるように MT は声をかける。 ・バングラデシュの国旗シールを配る。
--	--

使用する資料・教材：

○学習カレンダー



○手順表

番号	説明	写真
①	お米をはかる	
②	お米をすいはんきのかまにいれる	
③	お米をあらって、水をきる	
④	目もりにあわせて水をいれる	
⑤	すいはんきのスイッチをおす	

○手順カード



○ジャポニカ米・ミニケット米



07 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・手順に沿って日本とバングラデシュの米を炊飯することができたか。【知識・技能】
- ・日本とバングラデシュの米の種類や炊き方の違いに着目し、感じたことや気付いたことを表現することができたか。【思考・判断・表現】

・ Bangladesh の食文化に親しみをもち、外国の人々の生活に関心をもって学習に取り組むことができたか。【主体的に学習に取り組む態度】

08 学校外との連携（※該当のある場合）

単元の中で現地校 Dream School の生徒へ宛てたイラストを作成。メールにて送付。



09 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

- 【日本のお米】・べたべた ・もちもち ・ねちょねちょ ・いいにおいだった ・やわらかい
- 【Bangladesh のお米】・パラパラ ・べたべたしない ・かたい ・きいろだった
 - ・いろがちがう ・おいものにおい
- 【感じたこと】・日本のお米はしろい、Bangladesh のお米はきいろい。
 - ・お米をたくのがたのしかった。おうちでもたいてみようかなとおもった。
 - ・お米のちがいがわかった

10 海外研修で何を学び、どの部分を見習うように思ったか

Bangladesh は、社会的・経済的に複雑な課題を抱える一方で、人々の温かさや豊かな自然に支えられた暮らしがあり、日本とは大きく異なる歴史的・文化的背景の中で社会が成り立っていることを、現地で直接学ぶことができた。

これらの経験を通して、生徒には Bangladesh の多様な文化を伝えるとともに、異なる文化や価値観を尊重する姿勢を育むきっかけにしたいと考えた。

11 苦労した点

体験的な活動を取り入れた内容を授業ごとに実施したため、授業準備に多くの時間を要した。特に教材作成においては、幅広い生徒の実態に配慮しながら、Bangladesh の暮らしや文化を忠実に再現する必要があり、苦労した。

12 改善点

知識の定着に時間を要する生徒の実態を踏まえると、よりゆとりをもった授業計画とするべきであった。また、前時の学習内容を振り返る時間を十分に確保できないことも多く、改善が必要であったと考える。

13 成果が出た点

体験的な授業を積極的に取り入れたことで、生徒の日常的な会話の中で Bangladesh に関する話題が出るなど、学習内容の定着に一定の成果が見られた。

14 自由記述

世界の国を扱う授業は本校では前例が少なく、不安を感じる面もあった。しかし、授業準備の段階から多くの先生方に支えていただき、実践を行うことができた。給食で Bangladesh の献立が提供されるなど、想像以上に広がりのある取組みとなった。



【文化・つながり】

つながる世界☆ひとりひとりが地球市民

【実践者】

氏名	田中 利奈	学校名	群馬県 伊勢崎市立赤堀南小学校
担当教科等	複数教科	対象学年（人数）	5年生（26名×3クラス）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年10月～2026年3月（18時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な学習の時間・道徳

02 単元名と単元目標

単元名：つながる世界☆ひとりひとりが地球市民

単元目標：日本と他国の共通点や相違点を捉え、多様性を尊重しながら、世界の国々の課題を批判的に問い直す中で自分事として向き合うことを通して、世界の人々と共に生きるために自分には何ができるか考えることができる。

関連する学習指導要領上の目標：

総合的な学習の時間：（1）探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。

道徳：18国際理解、国際親善 他国の人々や文化に親しみ、関心をもつこと。

03 単元の評価規準

①知識・技能	資料を用いて調べることを通して、SDGs 17目標に関する課題を抱えている国や地域を知り、そこでどんな問題があるのか、またその原因や解決策の概要を捉えている。
②思考・判断・表現	日本と他国の共通点や相違点を捉え、多様性を尊重しながら、物事を批判的に問い直し、自分事として課題に向き合い判断することを通して、世界の人々と共に生きるために自分にできることを考えている。
③主体的に学習に取り組む態度	問いをもち、学習を見通して、意欲的に調べたり話し合ったりすることを通して、協働的に学ぶよさを感じながら、自分事として世界の課題に向き合っている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

本校は、5年生の「総合的な学習の時間」でSDGsをテーマに扱っている。本児童は、昨年度、SDGsとは世界の人々が「こうなったらいいな」と思うことの表れであることとして捉えた。世界の人々が大変な思いをしていたり、不自由なくらしをしていたりするその課題が、SDGsと結びついていることを把握した。

本単元を通して、児童が世界に目を向け、課題についてより自分事として、また児童それぞれが自身への問いをもち、自分には何ができるのか一緒に考えていきたかった。そして、地球上に住む一人として、協力し合おうとする態度を育成したい。

〈単元の意義〉

本単元は、大きく以下の4つの展開で構成している。①児童が自分自身の興味をもったSDGsについて調べる、②児童が自分事として世界の課題に向き合う、③JICA 海外協力隊について学ぶ、④自分、また自分たちには何ができるか考える、である。この構成により、「自分たちには何ができるか」考え、アクションするゴールに向かうために、現地の様子を知り、そこに住む人々の気持ちになって考えることの大切さを学んでいく。日本で生きていくと、学校に通うことは当たり前で、「学校に通った方がよい」と思うであろう。しかし、「本当にそうなのだろうか」と批判的に物事に向き合い、自分事として課題について問い直すことは、現地の人々の気持ちになって考えることとして有意義であると考えられる。また、実際に国際協力に携わるJICA 海外協力隊の方に現地の様子や価値観の違いで葛藤していることを聞いて学びを進めていくことも貴重な体験になるであろう。児童が自分の「アクション（SDGs 解決に向けた取り組み）」を考えたときに、何が本当に必要なことなのか、またそれに関わる人々がどう感じるのか、自分で問いながら模索していくきっかけとなるであろう。

〈児童/生徒観〉

昨年度は主に、バングラデシュの「情勢」「国民性・食文化」「災害」「子どもたち」をテーマに、日本と他国を比較しながら共通点や相違点を考えた。その中で、異文化を認め、多様性を尊重することの大切さや、大変な生活をしている子どもたちに寄り添い考えることの大切さに気付き始めた。児童は、異文化については「認め合うことが大切」と捉え、もし子どもたちが仕事をしなくてもよかったら、「もっと家族や友達と楽しく過ごしたい」「もっと学びたい」だろう、と気持ちを想像することはできた。しかし、学校に行けない、仕事をしなければならない現状について「かわいそう」という共感的理解には至らない考えや、大変な国を救う人がたくさん「いてほしい」など、どこか遠く、人任せで他人事という感覚が残った。

〈指導観〉

児童が自分自身の興味をもったSDGsについて調べる段階では、児童の興味関心に委ね、調べるSDGsやそれに関連するSDGs、また気になった国や事柄について自由に選択して調べ学習を進めていく。その中で、何が課題になっているのか明らかにし、その原因となるもの、また今行われている解決策を調べる。

児童が自分事として世界の課題に向き合う段階では、海外研修で得た写真や情報を用いて、児童がタンザニアのある小学5年生になったつもりで、学校に「通う」か「通わない」か判断する。「通う」理由としては、将来の就職に繋がることを主に扱い、「通わない」理由としては、設定として与える家庭状況や学校環境を主に扱う。

JICA 海外協力隊について学ぶ段階では、JICA のオンライン出前講座を活用し、現地の協力隊と繋がり、児童が自分たちには何ができるかを考えるためのきっかけづくりをする。

自分、また自分たちには何ができるか考える段階では、「自分には何ができるか」と「みんなでは何ができるか」を分けて考えていく。後者については「みんなでは何ができるか」として、学校で取り組めることを計画し、実行していく。

05 単元計画（全時 18 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料・教材
1	問いをもとめる	「自分たちには何ができるのか」という問いをもつことができる	・世界のSDGs 達成状況を知る。 ・日本の達成状況も知る。 ・「自分たちには何ができるのか」という問いをもつ。	・地球ひろば 展示物
2 3 4	世界の国々の問題を知ろう	自分が興味をもったSDGs に関わる世界の国々の課題や原因、今行われている改善策を調べることができる	・1学期に調べたSDGs と同じ番号について、どこの国や地域で問題が起きているのか、課題、原因、解決策、関連するSDGs を調べる。 ・他のSDGs についても同様に調べる。 ・気になった国について、また気になった事柄について、さらに追究する。	・JICA 冊子教材
5	世界の国々の問題を共有しよう	調べたことを共有して、視野を広げることができる。	・他のSDGs について調べた児童同士で調べたことを共有する。	

6	SDGs 目標4: タンザニアの学校 ※以後、SDG4	タンザニアの学校でうまくいっていきそうなことや、課題を見つけ、関連するSDGsを考えることができる。	・【フォトランゲージ】タンザニアの学校について気づいたことを共有する。 ・達成できていること、できていないことの両方の観点から関連するSDGsを考える。	・ムワンバオ小学校 ・SDGs シール
7	もしもタンザニア人だったら①	タンザニアで生きる小学生の立場になって、「もしも自分がタンザニア人だったら、学校に通う？通わない？」について、自分の立場とその理由を明確にすることができる。	・はじめの自分の立場を考える。 ・タンザニアの就学率、暮らしの様子、タンザニアで働く人々、中学校への進学率、タンザニアの学校の現状などを知った上で再考する。 ・自分の立場を理由とともに明確にする。 ・同じ意見の友達と意見を共有する。	・海外研修で学んだこと ・現地の協力隊の方から伺ったお話 ・協力隊の方の質問回答内容
8 本 時	もしもタンザニア人だったら②	タンザニアで生きる小学生の立場になって、他者と話し合いながら、自分事としてSDG4の課題に向き合うことができる	・「もしも自分がタンザニア人だったら、学校に通う？通わない？」の立場で分かれたグループを組み、ディベート形式で話し合いをする。 ・相手を変えて2回話し合いをする。 ・話し合いを経て考えたことを振り返る。	・海外研修で学んだこと ・現地の協力隊の方から伺ったお話 ・協力隊の方の質問回答内容
9	協力隊を知ろう	協力隊とは何か知る。	・JICA資料で協力隊を知る。 ・協力隊の方への質問を考える。	※JICA オンライン出前講座申し込み
10	協力隊のタンザニアエピソード	協力隊の方の思いを知り、SDGsの達成に向けて、価値観の異なる国の人々と協力していくために大切なことを考えることができる。	【知識構成型ジグソー法】 ・協力隊の方が葛藤したエピソードから、価値観の異なる国の人々と協力していくために大切なことを考える。 ○学校…先生たちの態度、体罰の許容 ○病院…緊急事態でもスマホをいじる ○米作り…KAIZENプロジェクトを行うことへの不満	・協力隊の方の質問回答資料（現状、葛藤、願いなど
11	自分にできること①	これまで調べたことや学んだことをもとに、自分には今何ができるのか考えることができる。	・自分で調べたSDGsなどについて、座標軸を用いて、横軸に「自分が1人でできること」「みんなのできること」縦軸に「今すぐのできること」「長期間のできること」に分類しながらできることを考える。 ・協力隊の方に聞きたいことを考える。	
12	JICA オンライン出前講座	協力隊が世界の国々で活躍する様子や葛藤を知り、自分たちには何ができるか考えようとする意識を高める。	・協力隊の方の現地の様子や大変なことなどの話を聞く。 ・質問をして、「自分に、自分たちにできること」について考えを深める。	

13	自分にできること②	協力隊の方の話から、自分にできることについてアップデートすることができる。	・「自分アクション」を決定し、実行する見通しをもつ。	
14 -18	自分たちにできること 「みんなでアクション」	「自分たちにできること」を一緒に取り組むグループを決め、グループ毎に学校でできる解決策を1つにまとめることができる。 実際に活動をして振り返り、これから継続していくことについて意識を高める	・「自分たちにできること」の考えが似ている友達とグループを作る。 ・学校で取り組むことができるSDGs解決策「みんなでアクション」を具体的に決めていく。 ・改善に向けての活動などを実行する。 ・各アクショングループの取り組みの成果と課題を共有する。 ・これからも意識し、継続していくためにどうしたらよいか考える。	

06 本時の展開（8時間目）

本時のねらい：タンザニアで生きる小学生の立場になって、他者と話し合いながら、自分事としてSDG4の課題に向き合うことができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (2分)	めあて:「タンザニアのあの子の気持ちになって、学校に通うことについて考えよう。」 1. 前時で考えた自分の意見を確認する。 ・タンザニアのある小学5年生の立場になって、学校に通うか通わないか、またその理由。	
展開 (33分)	2. ディベート形式で、「通う」か「通わない」か意見を述べたり、質問や反論をしたりする。 ○2、3人のチームを組み、ディベートをする。 ・ディベートの手順 ①はじめの意見を互いに述べ合う。 ②相手チームへ質問や反論をする。 ③最後の意見を述べ合う。 ・相手チームを変えて話し合う。 ○全体交流（意見についての質問・反論を全体で行う。） 例)・「通う」チームへの反論：学校の様子を見ると、クラスの数も多いし、黒板を写したり教科書を読んだりするだけの授業なら、学校に通っていても結局自力で頑張らなければならないと思うので、通っても意味がない。 ・「通わない」チームへの反論：去年勉強した「児童労働」は、雇用主の意見として、低賃金で雇えるから子どもを働かせるということがあった。子どもが働いても家族が楽になるとは限らない。	・「通う」「通わない」それぞれのチームが様々な視点から意見を述べるように、質問や反論が滞っているグループには、教師から質問や反論を投げかけるようにする。 ・各グループで討議した内容を共有したり、振り返ったりすることができるように、意見を全体で共有し、それらについて、児童に質問や反論をしてもらうようにする。児童から出なければ教師が行う。

<p>まとめ (10分)</p>	<p>3. 教師がタンザニアの研修で感じたことを聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タンザニアに行く前は、開発途上国に学校をつくれればよいと思っていた。でも、学校という場所があるだけでは通う意味がないのではないかと感じた。だからと言って通わなくてよいわけではない。と悩んだこと。 ・今回、授業で見たこと聞いたことがタンザニアの全てなのか、と投げかける。 <p>4. 振り返り</p> <p>T: タンザニアの小学生の気持ちになって、学校に通うことについて考えてみて、タンザニアのくらしや学校がどうなっているとよいと思いましたか。</p> <p>C: 環境を整えることが大切だと思った。</p> <p>C: 貧しいくらしをしている人たちが、ご飯が食べられて少しでも楽なくらしになっていけるとよい。</p> <p>C: みんな将来なりたい職業を選べるとよい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ディベートの際に、児童が教師の考えに影響されないように、最後に話をする。 ・考えをもつために与えた資料や情報は、タンザニアの一部でしかなく、教師が知り得たものでしかないことを押さえる。 ・JICA 海外協力隊について学習する次時以降の授業について見通しをもつことができるように、最後に支援に繋がることを振り返るようにする。
----------------------	---	--

使用する資料・教材：

海外研修で学んだこと、現地の協力隊の方から伺ったお話、協力隊の方の質問回答内容

07 評価規準に基づく本時の評価方法

タンザニアで生きる小学生の立場になって、他者と話し合いながら、自分事として SDG4 の課題に向き合っている。(発言・ワークシート)

08 学びの軌跡 (※児童生徒の発言の変化など)

*もしもあなたがタンザニア人で、タンザニアに暮らす小学5年生だったら学校に通う？通わない？
(選択するにあたり、家族構成や家庭環境を設定した。)

「通う」理由	「通わない」理由
<p>正しい知識が得られる/頭がよくなる/ 中学、高校と進学できる(したい) / 将来やりたいことが選べる/就職して稼げる/ 就職してもっとタンザニアを発展させたい</p> <p>→将来のことを考えた理由が多かった</p>	<p>学校環境(1クラス120人、教科書や文房具が揃わない、10人に4人しか中学に進学できない、運動ができない(体育がない)給食がおいしくなさそうなど)/少しでも自分が稼いで家族を楽しみたい/ご飯が食べられるようにしたい/弟たちを学校に通わせたい</p> <p>→今の生活をなんとかしたい理由が多かった</p>

【ディベート後の振り返り】タンザニアのくらしや学校がどうなっていくとよいか。

○くらしについて

食べられない人が減る、みんなが平等に食べられる/お金や衣食住が揃う/もっとたくさんお金が稼げる/
子どもが働かない/子どもたちがお金や将来に困らない/子どもたちが本当にしたいことができる

○学校環境について

募金で学校をきれいに/1人1人に机がある/給食をもっと安く/学校、クラスが増える/みんなが幸せ、平等に、楽しく、笑顔で学校に行ける

○就職について

みんながちゃんと就職できる/(学校に通えない人も)農家や大工以外の選択肢がある

○国際協力について

日本、他国、自分が寄付をする/先生がたくさんいる国から先生を派遣する/ノートや鉛筆を配布する

<児童の意見や振り返りから感じたこと>

5年生3クラスを通して、「通わない」を選択する児童の方が圧倒的に多かった。「今、家族を養うこと」を最優先に考える傾向が見られた。興味深かったのは、「通う」を選んだ児童はほとんど男子だった。将来を見据えて、家族を養うために働くのは男性だという固定観念が、今の時代においても児童の意識の中には潜在しているのだろうか。また、「通わない」を選択した児童も、振り返りでは「みんなが学校に通える」とよい、「みんなが自分で選択した職種に就職できるとよい」「学校環境が整うとよい」と「通えない・学びにくい現状」をこのままにしてはいけないと捉えている様子が見られた

09 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

現地の協力隊の方のお話を伺う機会がたくさんあった。どの方も、現地の方とともに働いている中で、日本人として正しいと思うことと、現地の方の思考、行動とのギャップに葛藤している姿があった。その中で、自分にできることを模索し、奮闘している姿は本当に格好良かった。これからの未来を担う子どもたちに、協力隊の存在と魅力を伝えたいと思った。

特に、自分が一番衝撃を受けたのが学校の現状だった。子どもたちが学びを得るには難しい環境を目の当たりにして、どうすればよいのかとても悩んだ。施設、設備、用具などをはじめ、現地の教員の考え方や依然として当たり前根付いている体罰。卒業後の進路、就職の問題。子どもたちを取り巻く課題が多すぎた。この現状で、子どもたちはどんな思いで暮らしているのか、現地の子どもの立場をなるべく自分事として、日本の児童にも考えてもらおうと思った。そして、その現状に立ち向かう協力隊の存在を知り、その思いにも触れ、支援の立場としても一緒に考えたいと思った。

10 苦労した点

授業で扱う題材を決めること。自分にとって新たな発見や得た知識が多すぎて、どれも子どもたちに伝えたいことばかりだった。そして、今回自分がしたかった授業が、「児童が自分事として考え、正解のない問いについて子どもたちが思いをぶつけ合いながら議論するもの」だったので、たくさんある題材の中から何をどのように与えればよいかとても悩んだ。

11 改善点

児童の発達段階を踏まえ、与えていない情報がある。その情報の有無で子どもたちの考えを180度変えることもあるかもしれない。伝えるべき情報かは、発達段階によって異なるが、情報の扱いについては、今後もよく検討していきたい。

12 成果が出た点

「学校に通うこと」について、日本人として「通うのが当たり前で、通う方がよい」という視点をもちながらも、「本当にそうなのだろうか」と、タンザニア現地の子どもの視点に立つことで、「学校に通うか通わないか」自分事として議論することができた。自分自身の学力を考え「通う」と判断するなど、タンザニアの家庭環境・学校環境から考え選択しつつも、自身の特徴も考慮しながら議論している姿があった。また、タンザニアや他の国について家庭学習で自主的に調べてきた児童がいた。国語で自分の生き方について考え作文に書いたときに、「将来タンザニアやバングラデシュのような国に行ってみたい。世界の子どもたちのためにできることを考えたい。」という思いを書いた児童がいた。

授業内容や扱うワークシートを先生方にも体験してもらうことで広めることができた。たくさんの先生方が興味をもって回答に協力してくださった。タンザニアの学校の実態を伝えることで、日本の教育について改めて考えるきっかけにさせていただくこともできた。

13 自由記述

これから重要なことは、この研修で実践した授業を、自分以外の先生も、児童へ伝えていけるカリキュラム、教材、指導ガイド作りだと思う。また、それを求めてくださる先生方がいらっしゃることも幸せなことだと感じる。「自分には何ができるのか」漠然としか考えていなかった自分が、教師として「この経験を繋いでいくこと」と現時点での最適解として、昨年度からも更新している。

参考資料・使用教科書： JICA 冊子教材「学校に行けない世界の子どもたち」

フォトランゲージ：DEAR 開発教育ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>

〈文化・つながり〉

行動で世界を変えるぼく・わたしの論文 ～SDGs に目を向け、考え、動き、伝える～

〈実践者〉

氏名	萩原 英輝	学校名	埼玉県 私立 開智所沢小学校
担当教科等	全科	対象学年（人数）	6年 2組（31名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年4月～3月（35時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

探究

02 単元名と単元目標

単元名：行動で世界を変えるぼく・わたしの論文～SDGs に目を向け、考え、動き、伝える～

単元目標：SDGs の目標に向け世界の諸問題の現状を知り、自分たちにできることを共に考えて行動し、1年間の学習の成果をまとめ、エキシビションで発表することができる。

関連する学習指導要領上の目標：

総合的な学習の時間

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解できるようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見出し、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	世界規模の問題について調べたり話を聞いたりすることを通して、それらの問題の原因や背景について理解している。
② 思考・判断・表現	世界規模の問題が起きている原因や背景を理解し、それらの事実を相互に関連付けながら、自分達にもできる有効なアクションを考えることができる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	世界規模の問題について知り、自分たちが考えたアクションプランを進んで社会の一員としてできることを実行しようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元設定の理由〉

本校は IB 教育と日本の学習指導要領を融合したカリキュラムを組んでおり、各学年年間探究のテーマを定めている。6年生が SDGs を年間探究テーマにした理由としては、IB が大切に考えている

「Action」や「Agency」を発揮しやすいこと、昨年度学習したイノベーションや科学技術といった探究テーマで学んだ知識を関連付けて考えやすいことから設定した。

〈単元の意義〉

SDGs は規模の大きな問題であるが、自分たち、特にこれからの時代を生きる子どもたちにとっては重大な問題である。そしてこの問題は誰か一人の力で解決できるものではなく、地球上の全員が同じ方向を向いて自分にできることを考えていくことが大切である。

開智所沢のミッションとして「**世界の人々や文化を理解、尊敬し、平和で豊かな社会を創るために貢献できるリーダー・スペシャリストの育成**」という言葉を掲げている。

将来国際社会に出てリーダーとして活躍することを目指している子たちにとって、小学校期から貢献していこうとする姿勢を身に付けたり、自分にもできることを考えたりすることはとても貴重な体験となると考える。

〈児童／生徒観〉

私立小学校の6年生。本校は開校してまだ2年目で、6年生は全員が昨年度に編入してきている。中等教育学校も同時に開校しており、現在の最高学年は中学2年生。6年生は小学校では実質1期生で、初代卒業生になろうとしている学年である。学年は2クラス、62名。中学受験に向けて準備してきた子がほとんどで、子どもたちの学習に対するポテンシャルやモチベーションは非常に高い。どんな教科の課題に対しても興味をもち、すすんで学習をしたり、班で話し合ったりして活動することができる子がほとんどである。また、クラス替えはあったが2クラスしかないので、少人数で和気あいあいと過ごしている。学習に対して高い目標を掲げて取り組んでいる子もおり、毎日のように自主学習に取り組んで提出する子もいる。そうでない子たちも基本的な読み書き計算等の基礎的な学習は学年以上のものを持っている子がほとんどである。多くの子が自分の考えをしっかりともち、それを言葉で表現することができるので、楽しんで授業することができる。

〈指導観〉

SDGs は教科書にも頻繁に出ており、普段からニュースなどでも見聞きするため、ほとんどの児童がその概念自体は知っている。一方でどこか他人事のようなところがあったり、あまりにもスケールの大きな話なので身近に感じられていなかったりするところがある。本校は「個人探究発表会」「エキシビジョン」などの探究発表の行事もあり、普段からアウトプットする機会は非常に多く、子どもたちも慣れている。昨年度は「開智所沢新聞」を探究の学習で作成し、学校説明会や保護者会などで販売をして完売をした。このような好奇心旺盛で行動力の高い子どもたちなので、今回の学習でも Agency を発揮して自分たちの Action を起こしてくれると期待している。

05 単元計画 (全 35 時間)

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料 教材など
1-3	The world now and in the future	SDGs について知り、関心をもつことができる。	UNICEF の動画等の資料から SDGs について知り、自分が深掘りしたいテーマを絞る。	・ UNICEF ホームページ
4-6		17 のテーマの中から自分が興味関心のある問	自分が深掘りしたいテーマについて調べて分かったことをまとめ、問題が生まれている背景を考え、アクションに対する仮説を立てる。	・ ロイロノート

		題を見つけることができる。		
7・8		夏休みに調べた書籍を要約文にまとめ、発表することができる。	個人探究発表会にて、自分が調べたいテーマについて調べたことを発表する。	・Google ドキュメント ・各自が読んだ本
9・10	Thinking about world SDGs	SDGs 問題について改めて考え、問題解決の意欲を高める。	SDGs がなぜ必要なのか、問題の背景にあることを、調べてきたことを通して改めて考え表現する。	・Google ドキュメント ・ロイロノート
11		フェアトレード、エシカル消費について知り、理解することができる。	フェアトレード認証という概念について知る。	Canva プレゼンテーション
12		Bangladesh の写真から、日本とは異なる国の問題について考えることができる。	Bangladesh の SDGs の達成状況についてフォトランゲージを通して考える	
13		エクマッタの活動について知り、フェアな社会をつくるために大切なことを考えることができる。	エクマッタの活動について知り、「公正」の概念 や実現のために個人で考えたアクションプランをもとに、グループごとにアクションプランの計画を立てる。必要なことを考える。	
14・15		世界各国の方の SDGs についての話を聞き、日本とは異なる国の問題について考えることができる。	JICA 短期留学生との交流会	Google ドキュメント
16	Let's Action	今まで学習した知識を関連付け、自分たちができるアクションプランを考えることができる。	今まで学習したり調べたことをもとに、アクションプランを考える	・アクションの例の本 ・ロイロノート
17 本時		個人で考えたアクションプランをグループで持ち寄り、個人で行うこと、複数で行うことを整理することができる。	個人で考えたアクションプランをもとに、グループごとにアクションプランの計画を立てる。	
18		各自が考えたアクションプランをもとに、グループとしての方向性を決めることができる。	グループごとに立てたアクションプランを他のグループに発表し、改善する。	
19-21		アクションプランを実行するために必要なことを整理し、実施の準備を整えることができる。	アクションプランの準備をし、実践する。	

22-30	Field work	企業が行う第四次産業の取組について見学し、分かったことをまとめることを通して。	フィールドワークで企業や行政が第四次産業で SDGs へ向けて取り組んでいることを調査する。	ワークシート
31-33	Summary and presentation	1年間の取組を項目ごとに整理し、論文形式でまとめることができる。	今までの取組を個人で論文にまとめる。	Googleドキュメント
34・35		まとめた論文をもとに、聞いている人にわかりやすいように発表することができる。	エキシビションで1年間の取組を発表する。	Googleドキュメント

06 本時の展開 (17 時間目)

本時のねらい：各自が考えたアクションプランをもとに、グループとしての方向性を決める。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)
導入 (3分)	1 前時までを振り返る。	・児童が常に学習したことを振り返れるように、学びの軌跡を掲示する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 考えたアクションプランについて話し合い、グループとしての方向性を決定しよう。 </div>		
展開 (20分)	2 各自が考えたアクションプランをもとに、グループで話し合う。	・個人や家族で行うこと、グループや大人数で行うことを分けて考える。 ・グループで行うことを最優先に話し合い、座標チャートを用いて考える。
まとめ (20分)	3 グループで出た意見について発表する。	・グループで行うことはなくてもよいが、その場合は個人や家族で行うことを発表し合い、お互いに意見を言うようにさせる。

使用する資料・教材：

- ・SDGs アクションに関する書籍、ロイロノート(ワークシート)

07 評価規準に基づく本時の評価方法

世界規模の問題が起こっている原因や背景を理解し、それらの事実を相互に関連付けながら、自分達にもできる有効なアクションを考え、グループで話し合うことができる。【ロイロノート】【話し合いの様子】

08 学びの軌跡 (※児童生徒の発言の変化など)

10. 学びの軌跡 (児童生徒の反応・変容、感想文、作文、ノートなど)

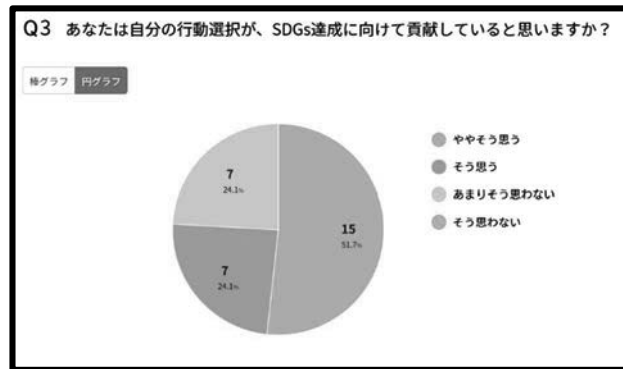
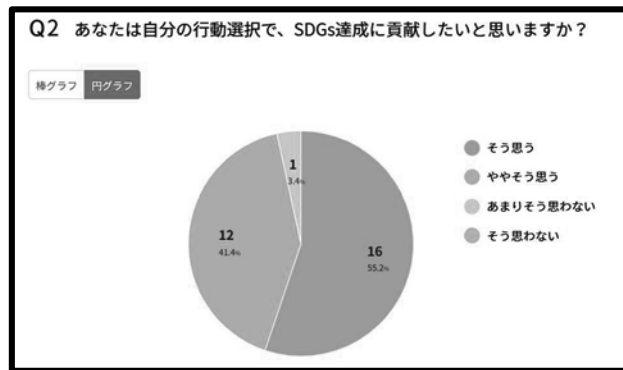
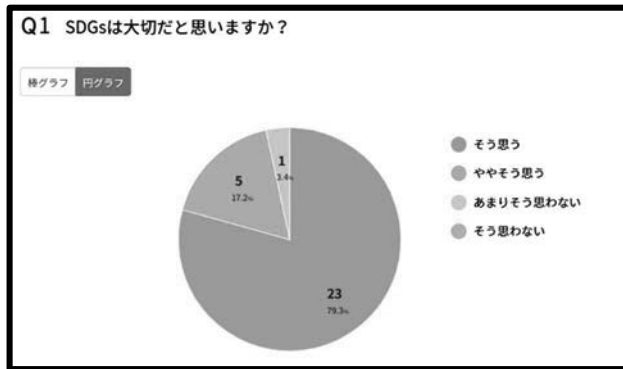
A 児の本時の授業のワークシート↓

10月16日(木) 探究 行動で世界を変えるべく・わたしの論文 ～SDGsに目を向け、考え、動き、伝える～

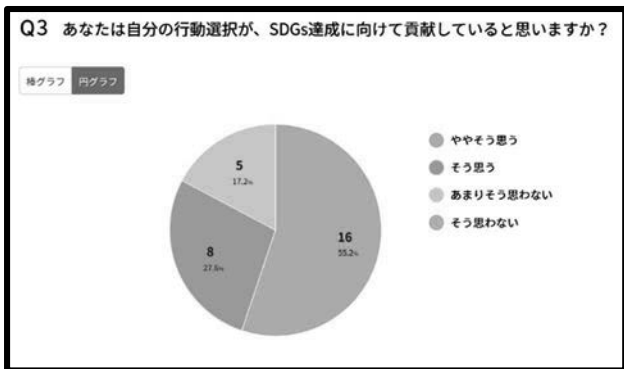
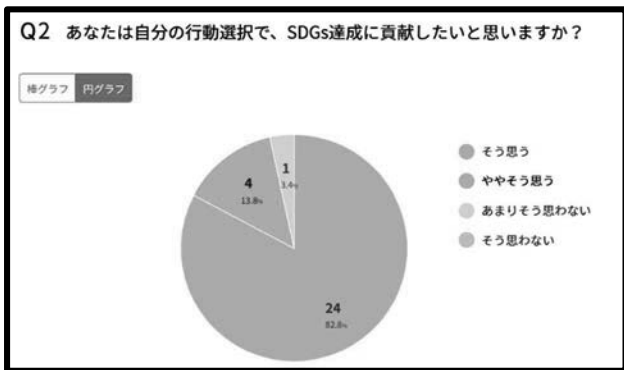
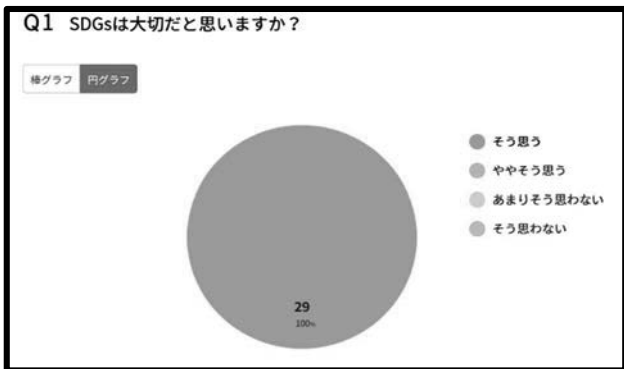
1. なぜ、物乞いをする子供にお金をあげないのか
→大人が物乞いするよりも、子供が物乞いをした方が恵みを受けられる確率が上がるという現状があります。しかし、それに即して考えたときにそこでお金や物をあげてしまうと、「やっぱり、子供の方がいいんだ」というふうに大人がどんどん子供を物乞いのために動かすという新たな課題が生まれてしまいます。これは「児童労働」にもつながる大きな問題のものになってしまいます。それを止めるためにも、子供に物乞いの恵みをあげないことが子供の輝ける未来のためにもなるのだから渡辺さんは物乞いを求める子供に恵みをあげないのではないのかなと思います。
→物乞いで輝けると子供が思ってしまうと、少しは生きられるけど教育・健康が整った生活での安定した収入を得られる仕事に将来就けなくなってしまい、悪循環へとつながってしまうからだと思います。

2 今日の授業で感じたことを書きましよう。
フェアな社会をつくるためには、相手を尊重して思うことが大切だと思います。「ストリートチルドレンだから」、「ホームレスだから」という理由で見える目を変えたり偏見がおこってしまうと、バングラデシュのような教育・福祉をまともに受けられないような環境がさらに生まれてしまうのだと思います。そんな社会をこれ以上作らないためにもこれ以上状況を悪くしないためにも、SDGsは達成されるべきであり、私たちが何か小さな行動でもいいから動いて、知って、発信していく必要があるのだと思います。SDGsが達成されたら、もっとみんなが輝いていける未来が待っていると思います。
私たちがどれだけ恵まれているのかを改めて痛感しました。私の個人のテーマは「目標4質の高い教育をみんなに」です。なので、今回の渡辺さんの「エクマツラ」としての活動のお話にはとても興味を持ちました。最初、路上生活をしている方達に信用されていなかった渡辺さん。それでも次の日も次の日も支援に行っていたそうです。それでも諦めずに信用を得るため、毎日支援に行っていた渡辺さんを知って「こんな人がたくさんいれば、国際協力でもなんでもみんなの問題として捉えられるのにな」と思いました。人ごとの遠い国の問題だといって、他人事として考えず、困っている人の立場に立って考えることが大切なんだなと思いました。解決するために自分には何が出来るのか、常に考えることが小さな行動から大きな行動に変わっていくことを渡辺さんの大学を卒業してからいきなりバングラデシュに行ったという体験談をもとに知ることができました。

事前アンケート結果↓



事後アンケート結果↓



09 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

年間探究で SDGs のことを学習している関係で、開発途上国の現状を指導者自身が見て、感じたことや考えたことを子どもたちに伝える形で教材化しようと考えていた。具体的にはフェアトレードやエシカル消費の文脈で、今まで商品を味や値段、デザインといった要素でしか購入するものを選んでいなかった児童にも、他にも考えるべき要素があることを知る授業づくりを考えていた。

実際にバングラデシュを訪問する中で、バングラデシュの縫製工業の様子を見ることができたのは貴重な体験となり、子どもたちにフェアトレードの概念を伝える授業で映像や写真を用いて伝えることができた。

それ以外では、NGO エクマットラの活動がとても印象に残った。貧困や教育の機会均等、平和と公正など SDGs の様々なところに関わってくる問題をレスキューするために、日本人の方が設立した団体が異国の地でこんなにも奮闘されていることを知り、私にも何かできないかという思いが自然とわいてきた。私が教師としてできることは、このエクマットラの活動を教材化し、授業にして子どもたちに伝えること、そして学級通信等で保護者にも伝えていくことだと考えた。

10 苦労した点

探究の授業は学年で行っていることもあり、現地に行った者(私)と参加していない者(他の教員)との間で温度差が出てしまい、そこをどう埋めていくかということを考えることが難しかった。

また、本時をどの授業で実践するかということが1番の悩みどころであった。本来考えていたのはフェアトレードの授業であったが、児童がアクティブに活動するというよりは座って話を聞いて考えることがメインになってしまうため、本時を自分たちができるアクションを考えグループで話し合うところに変更した。結果的にバングラデシュ色が薄いところが本時となってしまい、教師海外研修の研究授業としてこれで本当によかったのかは未だに結論が出ない。

11 改善点

- ・校内への事前周知及び事後の還元
- ・子どもたちのアクションに対するフォロー

12 成果が出た点

10の「学びの軌跡」にグラフがあるが、子どもたちの「自分たちも何か行動を起こしたい」という意欲が高まったのが大きな成果と考えている。規模の大きなテーマだけに自分1人の取組が果たして本当に意味があるのかと考えてしまうこともあるが、1人の行動が2人、3人とつながっていくことでやがて大きな動きとなっていくこともあることを体験してほしかった。

どの教科の学習にも意欲的に取り組み、学びたい、高めたいという欲求が強い子たちなので、とても熱心に話を聞いたり、自分たちにできることを考えたりすることができた。

参考資料・使用教科書：

バングラデシュを知るための66章【第3版】

エクマットラホームページ

フォトランゲージ：DEAR 開発教育ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>

【文化・つながり】

世界と仲良くなるための一歩を踏み出そう ～バングラデシュ編～

【実践者】

氏名	渡辺 和宏	学校名	東京都青梅市立第七小学校
担当教科等	音楽・外国語活動・図書	対象学年（人数）	1～6年全校児童（46名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年11月～12月（7時間）		

実施概要

01 単元目標

多文化理解を通して相手の背景や境遇に目を向け、他者と仲良くなるために積極的に相互理解をしようとする姿勢、相手（の心情）を想像しようとする態度を養い、多様性に気付くと共に、地球市民として他者や社会とよりよく関わろうとする態度を養う。

02 単元の評価規準

① 知識・技能	①バングラデシュという国を通して、その人たちが大切にしている文化や価値観があることを理解している。 ②世界へ目を向ける視点をもち違いを超えて共に生活していく必要性を理解している。
② 思考・判断・表現	①他国や他者の良いところを見つけ、何のために違いを認め合い、互いを尊重し、異文化共存をしていくのかを意識し、課題解決のための見通しをもっている。 ②共に地球市民として生きる仲間として他者と接する際にどう関わろうとするか自分の考えをまとめて表現している。 ③文化体験を通して、歌や言語を用いて積極的に相手と繋がろうとコミュニケーションをし、気持ちや思い表現している。
③ 主体的に学習に取り組む態度	①先入観や偏見をもち、共感的な態度で国や地域の異なる文化や価値観を受け入れ、異文化への理解を深めようとしている。 ②世界の出来事を「他人事」ではなく地球市民の一員という立場をもって「自分事」として捉える視点をもち、それらに向き合い、関わりを深めようとしている。

03 単元設定の理由・単元の意義

全校児童46名、1学年3～11名の小規模校である。学区域が比較的広区域で車がないと児童同士で会うことが難しいような地域で、近くに店や娯楽施設はあまり多くなく、学校と家庭、近所と非常に狭いコミュニティの中だけで生活している傾向にある。外の文化と触れ合うことが少ない環境にある児童たちにとって、世界は身近ですぐそこにあるということ、自分と違う価値観を大切にしている人がいるということに気づき、これから出会う様々な人との関係づくり、繋がりがづくりに役立てていけるきっかけとなって欲しい。大人になるにつれ様々な人と出会っていく中で、国際色豊かになりつつある情勢に溶け込んでいけるよう、この授業を通して他者と仲良くなるための一歩を踏み出そうとするきっかけとなるよう、本単元を設定した。

〈児童観〉

自然豊かで過剰な情報が子供たちに入ってきてこないこともあってか、穏やかで優しく素直な児童ばかりである。現代の流行りに振り回されることがない一方で、地域の外に出ることも少ないせいか、ものごと、できごと、社会情勢など知っていて欲しいようなことが知識として備わっていない児童も多い。小規模校なので児童同士のトラブルは少ない方で、平和そのものとてもよい雰囲気である。しかし校内での交友関係に限られてしまうこともあり、自分中心、友達のことを考えた行動や発言が見られない場面があり、自分のしたいことだけをするといい傾向も見られる。そこで、いろいろなことに挑戦したり探求しようとしていたりする気持ちをもつことと共に、相手の立場に立って物事を考える力をもっと身につけさせたい。

〈教材観〉

バングラデシュという国を通して、自分たちの暮らしと他国の暮らしを比較することができるものとなっている。国際理解教育として他国の日常を知ることにとどまらず、自分たちとは違う暮らしをしている人々の様子を知ってい

くなかで、相手のことを思う機会を何度も持てるようにした。自分とは違う価値観を持っている人たちの生活を知り、すでに間接的にもっている世界の人々との繋がりや、現在直接関わっている身近な人との共生のなかで、よりよく関わり合う方法を考えることができるようにさせていきたい。

〈指導観〉

1・2時は全校児童縦割り班で授業を行い、3・4・5時は低学年（図書）、中学年（外国語）、高学年（音楽）と絡めて授業を行い、6時は再び全体で学んだことを発表するという形式で授業を行う。年齢や経験が異なる学年で授業を行うことで、下学年は上学年の深い洞察や表現に触れることで刺激を受け、上学年は下学年の純粋な疑問や視点にハッとさせられることがあり、多様な視点や価値観の共有ができると考える。

まず、フォトランゲージで自分たちの暮らしとの共通点・相違点・疑問点・想像したことを班で出し合う。同じ写真を見てもそれぞれ異なる解釈や感想を持つため多様な視点や価値観があることに気付くことができる。他の班の写真を見たり気付きを聞いたりしながら、想像を存分に働かせ、視野を広げる。次にPPTを見ながらバングラデシュについて学ぶ。国を知ることが目的ではなく、今回はバングラデシュという国を見ていながら、そのなかで「自分はどうか受け止め、どう動くか」という自分と相手の立場を行き来しながら考える機会を与え、明確な答えが出せないモヤモヤを体験させることで、答えがでないもの、すぐに解決には至らないことがあるということに気付かせたい。

学年別の授業では、文化体験として低学年には絵本の読み聞かせ、中学年はベンガル語での自己紹介や会話、高学年ではベンガル語の歌を取り入れる。どの学年にも共通して「ストーリーチルドレン」「ロヒンギャ難民」に関して触れ、自分がその立場で生活をしていたら、「周りの人たちとどのように仲良くしていこうとするか」ということをいくつかの場面を考えさせる。また、ベンガル語で名前を書く体験も行う。

上記に加え、低学年は絵本の読み聞かせから登場人物の気持ちを考えたり、本からバングラデシュや外国の生活を見つけ出したりする活動を行う。これらの活動によって、低学年なりに自分たちとは違う暮らしをしている人たちがいること、外国という存在に気付かせたい。また、絵本を通して世界で起きている困ったこと、地球のためにできる身近なことは何かを考えさせる（SDGsの導入）

中学年は既習の英語での挨拶・自己紹介・好きなものを尋ねるやりとりをベンガル語で行い、日本語・英語・ベンガル語の言葉の響きの違いやよさや面白さに気付かせ、多言語のコミュニケーションを通して外国を身近なものに感じさせたい。好きなものの単語や、路上生活や難民のことを自分でもった問いをもとに調べ学習をし、調べたことをスライドでまとめる。ここではバングラデシュとミャンマーの2国間で起きている出来事を取り扱うことで、互いに仲良く共生していくための方法を考える。その考えは今隣にいる友達にもできていくか、世界を通して自分ゴトに戻し、社会での共生に役立てさせたい。

高学年はバングラデシュでは誰もが知っている歌をベンガル語で歌うことで文化体験を行う。一度覚えた歌は頭に残りやすく、大人になっても忘れないという音楽の特性を生かし、将来バングラデシュの人と出会った際に仲良くなるための手段として児童にとっての良い武器としたい。また、路上生活や難民のことだけではなく、フェアトレードの視点で縫製産業や児童労働を取り上げ、「自分が働かなくてはいけなかったら暮らしはどうなるだろうか」「低賃金での暮らしを強いられたら周りとうどう協力して過ごすか」などを考える。服が手元に届くまでの仕組みを考える活動を通して、自分たちのモノの消費の仕方、買い方などを考え、見えないところで第三者と消費者が関わり合い、どうしていくことで共生していけるかの視点を持たせたい。

04 単元計画（全7時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	写真から見つかり想像したりして自分たちの暮らしと比べよう。	同じ地球に住む人々と自分たちの暮らしの様子を比べることで視野を広げ、本国中心のものを見方ができる。	【出会う】全学年 ・フォトランゲージでバングラデシュと出会う。共通点、相違点、疑問点、想像したことや感じたことを班で話す。（フォトランゲージ用写真） ・各班の写真を見ながら互いの気付きを発表し合い、他の写真や友達の考えから自分の視野を広げる。
2	バングラデシュやそこでの人々の暮らしを知り、相手に想いを馳せながら考えよう。	バングラデシュの概要を通して、自己と人との繋がりを見出し、国際的なもの見方ができる。立場を変えて相手のことを考える視点に立つことができる。	【知る】全学年 ・PPT資料を見ながらバングラデシュの基本的な概要、文化、日本との関わりなどを知る。 ・違う文化に対して、「自分はどうか受け止めどう動くか」を考え、まずは「自分と相手」という視点でものごとを考える。（PPT資料・ワークシート）
3	バングラデシュやそこでの人々の暮らしを知り、相手に想いを馳せながら考えよう。	バングラデシュと日本との関わりを通して、自己と国や人との繋がりを見出し、国際的なもの見方ができる。立場を変えて相手のことを考える視点に立つことができる。	・日本とバングラデシュとの関わり、乗り物、特産品、現地の様子を写真で知る。 ・チョコレート为例にフェアトレードについて知り、失われていくものや人々の苦労があることを知り、このような生活が続くと、子供たちがどうなっていくかを考える。（教育が受けられないことによる負の連鎖） ・離れていても自分たちにもお手伝いできる方法はどんなことかを考える。 （PPT資料、ワークシート、JICAワークショップ資料）

4	異文化体験を通して感じたことを共有し、他国や相手への理解を深めよう。	<p>バングラデシュの文化に触れ、異文化体験を通してバングラデシュを味わい、国際的な視野を広げることができるようにするとともに、自分の思いや考えを表現しようとする。</p>	<p>【触れる】 低学年…バングラデシュの民話の読み聞かせを通して、感じたことや思ったことを発表し合う。国旗の塗り絵や文字をなぞることで文化を体験する。 中学年…現地の文字に触れ、自分の名前をベンガル文字で書いたり言葉の発音を聞いたりし、日本語とベンガル語を比べながら言葉の響きを楽しむ。既習の英会話をベンガル語に置き換え、自己紹介や挨拶、好きなものを尋ねる表現を学ぶ。 高学年…現地の文字に触れ、自分の名前をベンガル文字で書いたり、言葉の発音を聞いたりし、日本語とベンガル語を比べながら言葉の響きを楽しむ。現地の子供や大学生と共に歌った映像を見て、「Amra Korbo Joy (আমরা করবো জয়) 」の練習をする。 (PPT 資料・ワークシート、JICA ワークショップ資料)</p>
5	バングラデシュで起きている問題に目を向けて、自分が手伝えそうなことを考えよう。	<p>バングラデシュの文化、またはバングラデシュで起きている現象と自分たちの生活との関わりを捉え、国益を超えた地球益の発想から物事を捉えようとする可以尝试。</p> <p>グローバルな見方で多様な文化的対立・緊張を、国境を超えて捉えようとする可以尝试。</p>	<p>【触れる・考える・調べる】 低学年…絵本の読み聞かせを通してバングラデシュで暮らす子供たちのことを知り、自分の暮らしと照らし合わせながら、比べたことや感じたことを発表する。登場人物の気持ちを考え、自分がもしその暮らしをすることになったら周りの人とどう仲良くするかの方法を考えたり、もしその子と出会ったらどんな声かけをしたくなるかなどを考えたりして発表する。 中学年…会話の練習をし、自分の好きなものをベンガル語では何と言うか学習用端末を用いて調べ、好きなものを答える文章を完成させる。エクマツラの取り組みや市民権を得られない路上生活者や孤児がたくさんいることを知り、これまで触れてきたことを含めて「もっと知りたいこと」など問いをもつ。 高学年…ベンガル語の響きを楽しみながら「Amra Korbo Joy (আমরা করবো জয়) 」の練習をする。「じゅんびはいいかい？ 名もなきこざるとエシカルな冒険」の絵本を用いてフェアトレードについて振り返る。縫製産業の労働環境とラナ・プラザ崩壊事故のことを知り、フェアトレードの問題は縫製産業でも起こっていることを学ぶ。自分が着ている服がどのように作られ手元に届くのか時間軸を遡って考える。労働者がいるところまで行き着いたら、その過程ではどんな苦労や問題点があるのかを考える。丸久の写真を通して、これまで触れてきたことを含めて「もっと知りたいこと」など問いをもつ。 (ストリートチルドレンやエクマツラの映像・ロヒンギャ難民についての映像・絵本・丸久縫製工場の写真・PPT 資料)</p>
6	バングラデシュで起きている問題に目を向けて、自分が手伝えそうなこと、自分だったらどう行動するかを考えよう。	<p>多文化共生・多様性というものに気付き、それらの視点で自分ならどうするか、何ができるかを考える可以尝试。</p> <p>グローバル／グローバルな見方との往復の中で、「自身と他者」の人間居住や「地域と世界」の捉え方及び相互の関連性に関する理解(最適解)を更新することができる。</p>	<p>【考える・調べる】 低学年…絵本の読み聞かせを通して世界で起きている困ったこと、地球のためにできる身近なことは何かを考え発表する。(SDGs の導入) 外国の学校の様子や食べ物、遊びや生活など本から知ったことや気付き、相違点を見つけて発表する。 (絵本、市の図書館の本、現地の商品) 中学年…ロヒンギャ難民のことを知り、自分の問いをもとに班で調べ学習をし、1枚のスライドにまとめる。自分の生活と照らし合わせ「自分ならどうするか」「誰のために何ができるか」を考える。自分がバングラデシュの生活をするようになったらどう思うか、どうしたらバングラデシュの人となかよくなるか考える。(ロヒンギャ難民についての映像) 高学年…自分の問いをもとに班で調べ学習をし、1枚のスライドにまとめる。自分の消費の仕方を振り返り、モノの買い方・使い方を考える。自分の生活と照らし合わせ「自分ならどうするか」「誰のために何ができるか」今の自分の解決策を考える。(縫製業に関する動画、丸久工場・ラナプラザ崩壊事故の写真)</p>
7	これまでの学習と発表を通して、世界の人と仲良くなるために自分ができることは	多文化共生・多様性という視点を持ち、世界と仲良くなるための一歩としてできることは何かという考えをもつ可以尝试。	<p>【見直す】 全学年 ・全体で学んだことを発表し合う。 低学年…「本から見つけたバングラデシュ + α」(見つけたことや興味を持ったことなど)</p>

導入 (5分)	○先ほどの写真はバングラデシュという国だということを知る。	バングラデシュの民族衣装で登場。
展開 (45分)	○班で協力し、世界地図を用いてバングラデシュを探す。 ○人口・面積を日本と比べる。 ○バングラデシュの5つの世界一を予想する。 ○バングラデシュで使われている数字や文字について知る。クイズで予想する。 ○バングラデシュの食べ物について紹介する。 ○食文化の違いから、相手が用意してくれたよくわからない料理を自分だったら食べるか、断るか、どう相手に反応し伝えるかを考える。違う文化に対して、「自分はどう受け止めどう動くか」を考え、まずは「自分と相手」という視点でものごとを考える。 ○自分たちが普段食べているものでも、外国の人からは嫌厭される食べ物があることを知り、相手に自国の食べ物を嫌そうにされている場面を想定し、自分の気持ちを考えるとともに、相手の思いを想像し、自分がしてあげられることは何かを考える。	・見つかリそうになかったら、おおよその位置を提示する。 ・情報を提示するだけでなく、予想したり考えさせたりしながら能動的に知識や情報を得ていけるようにする。 ・児童が「食べてみたい!」「おいそう!」など前向きな反応をするか、遠慮気味な反応かを見る。ファシリテーターの先生にも反応を見てもらい、次の活動のアドバイスに繋げる。 ・相手は好意的に進めてくれているが、自分だったらどんな反応をするか、自分の気持ちと相手の気持ちの間に立って考えさせ、ジレンマを感じさせる。 ・一般的にという話で、例外もあることを伝える。自分たちの食文化を否定されたような気持ちを味わわせ、互いを理解することの難しさを感じさせる。
まとめ (5分)	○次回からペア学年で一緒に活動すること、このあと勉強する内容を知り、次の活動の見通しをもつ。	・ワークシートの記入は宿題でやってくることを伝える。

06 評価規準に基づく本時の評価方法

【知技】 発言、ワークシート 【思判表】 発言、ワークシート、観察 【主体的】 観察、発言、ワークシート

07 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

第1時で行ったフォトランゲージは児童にとってとても面白かったらしく、同学年での活動よりも異学年での活動にしたことで活発に意見が飛び交い、結果的に有意義な時間になった様子であった。

第2時では「あなたならどうする?」として相手が自分のために作ってくれた見たことのない食べ物に対して①あなたは食べるか食べないか②そうした時の相手の気持ち③どんな言葉で相手に思いを伝えるかということについて話し合った。また逆の立場で「あなたはどうしたい?」として外国の人に彼らが知らない日本の料理を紹介した時に①食べてもらいたいかわかなくても良いか②相手が知らない食べ物に出会った時の気持ちを想像する③食べたそうにしていない時どんな声掛けをするかを話し合った。43人中【食べる】が37人、【食べない】が6人、【食べてほしい】が30人、【食べてもらわなくてもいい】が13人だった。それぞれの理由として【食べる】には「食べてみないと分からないし、自分のためにせっかく作ってくれた気持ちを考えて相手を悲しませたくない」、【食べない】には「食材の衛生面や見た目が気になる」などの意見があった。【食べてほしい】という児童は「無理しなくても大丈夫だよ、一口でも食べてみてほしいけど、苦手だったら残してもいいよ」、【食べてもらわなくてもいい】という児童は「相手の気持ちを気にして何を食べたいのかを聞く」「別の料理をその相手と見ながら、相手が食べられるものを一緒に探す」などいずれも相手のことを気にしながら対応しようとする児童が多かった。しかし、【自分は食べない】けど【相手には食べてほしい】という児童も3人いた。自分の立場と相手の立場をどう優先させ、どう想像を働かせ相手を知るか、仲良くなるための第一歩として初めて考える場面になった。

「自分が路上生活や難民の生活をするようになったら、周りとうどう仲良くしていくか」

- ・捨ててあるものを使って家を作る、畑を作って野菜を育て、作り方を教えて分け合う
- ・喧嘩をしないで協力しながら暮らす、皆が笑顔になる遊びをする、小さい子になるべく譲るようにする

- ・自分が大変でも他の人にも食べ物を分け、一緒に楽しく暮らしたい、スポーツで絆を深めて仲良くなる「世界と仲良くなるためにできること」
- ・まずは身の回りの人と仲良くすることから始める
- ・互いの言葉を覚え、国のことを教え合って助け合う、争いをしないで仲良くするために話し合うことが大事

「相手を知るとどんなよいことがあり、知らないままだとどうなるか」

- ・互いに信頼が生まれ、国ごとに様々な暮らしや人がいることを理解でき、助けようという気持ちになる
- ・相手を知ることによって自分をしるることにつながる。他国と比較するから、自国がどうかも分かる
- ・知らない相手の大変さを知ることができず、その国に行ったときにもその大変さを知らないままになる
- ・孤独が生まれて、そのせいで命を落とす人がいるかもしれない

上記の問いに対してはこのような考えが個々の中で生まれ、これまでに考えたことのない間に多く出会った。相手のこと、外国のことを自分ゴトとしてとらえ、自分とは違うが同じ地球市民として今の時点でできることやしていきたいことを考える視点を持つことができた。

また、家にある服などからバングラデシュ製品を見つけたり、フェアトレード商品を探したり買いに行ったりする児童もおり、さっそく自分ができる行動を起こしている児童がいた。

08 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

旅行で訪れた印象ではなく、普段訪れることのできない場所や研修プログラムでの体験を通してバングラデシュという国を深く知り、バングラデシュのありのままの現状・魅力を極力そのまま見せたかった。1つの国を知ることによって児童の世界観を広げたいということはもとより、自分たちとは違う生活様式や暮らし方をしている外国の友達を通して、相手を知ることの必要性、知らないままだと世界がどうなっていくのかを考えさせ、これから出逢う様々な人や世界と仲良くなるために自分ができること、すべきことは何かという思いの種をもたせ、児童一人一人が自分の心の中でその芽を育てていける、そんな時間になる授業にしようと思った。

09 苦労した点

縦割り班で全校授業→ペア学年→全校授業という流れにしたので、全教員の理解と協力を得ること、自分と同じ温度で授業のサポートをしてもらうことができるよう事前の説明以外にもワークショップを開き、先生たちにも国際理解教育の必要性を感じてもらいながら楽しんでもらう機会を作ること。もっと時間をかけて丁寧に進めていきたかったが、授業回数数の確保が難しかった。

10 改善点

フォトランゲージで児童が見つけたことを全班に発表してもらった後に教師が全ての写真の解説をしたが、写真1枚につき児童の発表→解説とした方がより記憶に残り考えが深まったと思う。児童がせっかく考え思いを馳せていたことや記憶を薄れさせてしまった。調べたいことや調べる時間をもっとじっくりとってあげたかった。

11 成果が出た点

児童の外国や外国人に対するイメージが変わった。外国には「〇〇がないから～」という自分の生活を中心にしたものから何かを引き算した考え方から、外国には「〇〇があるから～」という自分たちの日常や当たり前を超えたブラスのものが外の世界にはあるんだな、ということに気付かせることができた。バングラデシュを通して自分と同じ年の子たちの暮らしや文化を知ることによって視野が広がり、3～6年生において多くの児童が外国に興味を持ち始めた。

世界と仲良くなるために自分が今いる場所からできることは何か、そして自分が考えたことが今現在、近くにいるクラスの友達にできているのかを振り返り、まずはそこからスタートしていくことが大切なのだということを実感させることができた。

12 自由記述

12月にバングラデシュを再訪した。研修をもとに興味を持った場所を訪れ、現地の縫製工場へ赴き話を聞き、エクタラやタブラ、ドゥグドゥギ（ドゥムル）、コモク（カマック）等の民族楽器を購入し、世界遺産であるシュンドルボンのマングローブを訪れた。研修を通して児童への還元だけではなく、自分への知識や経験、興味を与えていただいた。ローカルな雰囲気の中の生活体験ができたことだけでなく、エクマツラの渡辺さんと再会し、支援事業やこれからのビジョン、子供に対する熱い想いを伺った。インターンに来ていた大学生とも話をさせていただき、自分にとって刺激を受ける貴重な時間となった。3回目の訪問も考えており、ハルモニウムなどの楽器も購入し、子供たちと一緒にこれらの楽器を用いてバングラデシュの音楽をベンガル語で演奏する音楽活動をしたいと計画している。

今回の研修で得てことを生かし続け今後出会う子供たちにバングラデシュを題材にした様々な授業を教科の枠を超えて展開してける教員になれるよう邁進していく。

【参考】

フォトランゲージ：DEAR 開発教育ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>



授業実践報告会

参加者の各都県で実施された国際理解教育セミナーやグローバルセミナーにおいて、地域の方々に教師海外研修の経験を生かした授業実践についての報告を行いました。

■ 長野県

イベント名 「探究する先生」

日時 2026年1月17日(土) 14:30～17:30

場所 まちづかいの拠点 R-depot 2階大会議室

主催 探究する先生実行委員会

プログラム JICA 教師海外研修・授業実践報告を含む、
長野県内で活躍する教員からの発表



■ 新潟県

イベント名 深めよう！国際理解と教育実践

日時 2026年1月31日(土) 13:00～16:30

場所 Sea Point Niigata MOYORe:

主催 JICA 協力：新潟NGOネットワーク国際教育研究会RING

プログラム (第1部) 教師海外研修 授業実践報告会

(第2部) 教材体験ワークショップ

「カンボジア紛争から考える意外と身近な戦争のこと」



■ 富山県・石川県・福井県

イベント名 2024年度教師海外研修報告会および
開発教育指導者研修

日時 2025年2月7日(土) 10:00～17:00

場所 JICA 北陸4階会議室

主催 JICA 北陸

プログラム (第1部) 開発教育指導者研修

(第2部) 教師海外研修報告会



■ 埼玉県

イベント名 2025年度JICA東京教師海外研修授業実践報告会 in 埼玉+まなVIVA!
セッション「再び、世界へ。そして教室を動かす。From Global Learning
to Local Impact. ～海外での学びを、教育現場の変化へつなぐ～」

日時 2025年2月8日(日) 13:00～17:00

場所 RaiBoc Hall (市民会館おおみや)

主催 JICA 協力：任意団体「まなVIVA！」

プログラム (第1部) 教師海外研修 授業実践報告会

(第2部) 参加者交流会&

まなVIVA！ワークショップ



■ 群馬県

イベント名 **ぐんまグローバルセミナー 2024**

日時 2026年2月14日(土) 13:00～16:30

場所 群馬県生涯学習センター

主催 JICA 東京、群馬国際理解教育研究会、
(公財)群馬県観光物産国際協会

プログラム (第1部) 教師海外研修及び授業実践報告会
(第2部) 群馬国際理解教育研究会
日本人学校帰国教師実践報告会



■ 千葉県

イベント名 **2025年度国際理解セミナー**

日時 2026年2月15日(日) 13:30～15:50

場所 千葉市文化センター

主催 (公財) ちば国際コンベンションビューロー、JICA 東京

プログラム (第1部) 講演「アフリカ紛争地域で生きる子どもたち
～紛争地ジャーナリストのアフリカ取材より」 下村 靖樹氏
(第2部) 教師海外研修 授業実践報告会



各県のチラシ

いつでもどこでも楽しんで
World Language Life
探究する先生
まなび方は自由

令和8年
1月17日(土)
14:30～17:30 ※オンラインあり
会場: RUCPOT (群馬県庁南東地区庁舎1012)

定員: 会場30名、オンライン20名、要予約

主催: 探究する先生実行委員会

第49回RINGセミナー
深めよう!
国際理解と教育実践
2025年度 JICA 教師海外研修報告会

2026年1月31日(土)
13:00～16:30

第一部 研修参加・授業実践報告
(英語版・日本語版あり)

第二部 教材研修ワークショップ
カンパシ給食から学ぶ国際と
食文化のつながり

会場: Sea Point Niigata MOYORÉ
(新潟県中央区長瀬1丁目21 CICAビル 南館1階)

定員: 会場30名、要予約

主催: JICA 新潟、新潟国際理解教育研究会

アクティブで探究的な
開発教育のススメ

～あなた自身の仕事・時間・得意と向き合えるための学び～

2/17(土)
10:00～17:00 (開場 9:45)

2025開発教育研修者
および教師海外研修報告会

会場: JICA 千葉 (開場 9:45)

定員: 会場30名、要予約

主催: JICA 千葉、千葉国際理解教育研究会

JICA 教師海外研修報告会 in 埼玉+まなVIVA!
ワークショップ

2026.2.8(日)

会場・受付開始: 13:00
開始 13:15～17:00 幹7子室

場所: RaiBoC Hall レイボックホール (市長会館内) 高崎市

対象: 教員、教員志望の学生、
教育関係者、その他国際理解・
国際協力などに関心のある方

本報告会は、埼玉の教員を中心に構成される
「まなVIVA!」を協賛での運営です。
報告会の後には、参加者同士の交流や、異文化理
解を促進するワークショップを開催いたします。

海外での教育活動の経験を持つ/これから挑戦したい、
それぞれの思いを交流しませんか? 新しい気づきに出
会える時間になりたいと思います。
同じ「思い」を持つ仲間と、新しいひと時を過ごして、
明日からのエネルギーをチャージしましょう!

申し込みQR

お問い合わせ
JICA 高崎支店: jicadod-deak-saitamaken@jica.go.jp

2026.02.14(土)
ぐんまグローバルセミナー 2025
(参加無料、対面開催)

日時: 2026.2.14(土) 13:30～16:30
会場: Gメッセ群馬 中会議室201
住所: 370-0044
群馬県高崎市岩押町12-24
(高崎駅より徒歩15分)

・会場定員: 50名

第一部: JICA 教師海外研修 & 授業実践報告
第二部: 日本人学校帰国教師実践報告会
(参加者懇話会・交流会あり!)

参加申し込みはコチラ↓
https://forms.office.com/r/CPskf05Qmp

主催: JICA、群馬県国際理解教育研究会 共催: (公財)群馬県観光物産国際協会
後援: 群馬県教育委員会

国際理解セミナー

2026年2月15日(日) 13:30～15:50
会場 千葉市文化センター 5階 セミナー室

第1部 講演会
13:30～14:30
「アフリカ紛争地域で生きる子どもたち
～紛争地ジャーナリストのアフリカ取材より」
紛争ジャーナリスト 下村 靖樹氏

第2部 報告会
14:40～15:50
教師海外研修 in カンパシ/バングラデシュ

報告者: 藤原 美穂、藤原 美穂、藤原 美穂、藤原 美穂、藤原 美穂

主催: (公財) ちば国際コンベンションビューロー 千葉県国際文化交流センター
JICA 東京 千葉支店 043-297-0245 event@ccb.or.jp

東京都報告会 2/22(土) 気づきが育ち、学びが動く。午後は探究で、思考をひらく

時刻

プログラム

● 10:00

挨拶、教師海外研修とは

● 10:10

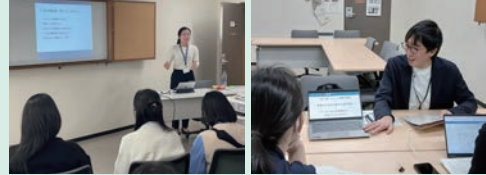
教師海外研修
一般コース実践報告

校種や教科の2グループに分かれて実践発表

- グループ1：
小学校_全学年、中学・高校_英語
- グループ2：
中学・高校_社会(公民・地理)

第1部 教師海外研修報告会

今年、東京都から教師海外研修に参加した12名の先生達が、研修の様子やその後の実践について報告をしました。教師海外研修・国際理解教育に関心のある方などが参加くださり、1年間に渡る研修や授業実践に耳を傾けていました。



● 12:10

休憩

● 13:10

海外研修OBOGの実践紹介&学校/
団体の探究的な取り組み紹介

- 教海研 OGOB 会
陣野 俊彦氏 中村 太郎氏
- 新潟 NGO ネットワーク
国際教育研究会 RING
小黑 淳一氏 池亀 元喜氏
- ち〜ば国際教育ネットワークCIEN
鈴木 良壽氏 佐藤 朋氏
- まな VIVA!
澤田 将智氏 吉田 大輔氏

第2部 ネットワークの構築

4つの団体にご協力いただき、団体紹介や活動内容、授業にいかせる実践のヒントなどを共有いただきました。これまでの教師海外研修での学びの継続や各県でのつながりの大切さが感じられました。



● 14:50

休憩

● 15:00

【講義・ワーク】「探究の質とカリキュラムデザイン」
国立教育政策研究所 松原 憲治氏

第3部 「探究」について考える

松原先生の講義では、改めて「探究」の定義から考えました。『「探究」は“やらせる活動”ではなく、学習者が問いを自分のものとしていく学びのプロセスであり、その質は、生徒に何を自由にさせるかではなく、どの段階で何を任せるかを教師が意図的に設計することによって高まる。』という報告がありました。



● 16:30

閉会、写真撮影





総括研修 2/22(日)

共有→考察・整理→次年度へのヒント

時刻	プログラム
9:30	開会挨拶・プログラム説明
9:35	総括研修のゴールに対するプレ課題及び本日の進め方について 国立教育政策研究所 白水 始先生
	今日の目的は、「持続可能な社会の創り手となる児童・生徒の育成」のための授業づくりの原則(デザイン原則)を創り出すこと。 国立教育政策研究所の白水先生、教育環境デザイン研究所(CoREF)の畑先生ファシリテーションのもと、協議を重ねました。
	
9:50	【ワークショップ】授業実践報告
	● 国、校種別に分かれて授業実践報告を行う
	【ポイント】 『民主的で持続可能な社会の作り手』を育てることに対して・・・ ①役立ったこの授業の良かった点(役立ちそうだった点でもよい)と改善点(ねらいは良かったはずだが、児童生徒に合わなかったなどもあり) ②次も全く同じ授業や単元をやるとしたら、どうしたいか ③自分の実践だけでなく仲間の実践良かったところや、これらに向けた工夫をまとめる
	
11:00	【セッション】アレンジ授業体験 教育環境デザイン研究所 畑 文子先生
	授業は自分でゼロから作るだけでなく、他の方の続きやアレンジでつくることができるということを掴む。
	
12:00	昼休憩
13:00	『民主的で持続可能な社会の創り手』を育てるためにどんな授業をすればよいかの教材集作成
	「私の授業、絶対やってみた方がよいよ」「こうやってアレンジしてやってみると面白いかも」「さっき聞いた話を生かす授業もできそう」「グループで新しいこういう授業をやるとよさそう」などをマップ化してポスターづくり
	
14:00	【クロストーク】 テーマにわかれて、マップを紹介しあったうえで『民主的で持続可能な社会の創り手』を育てるために小学校まではどんなことを学び、中学校や高校ではどこまで学べるとよいか、特支ではどうかを考えて、気づきを全体発表

- 15:10 研修振り返り
東京都市大学教授 佐藤 真久先生
- 16:50 休憩
- 15:55 終了証書授与、諸連絡、個人・チーム・全体写真



民主的で持続可能な社会の創り手を育てるために、どのような学校教育を行うべきか

先生方の意見

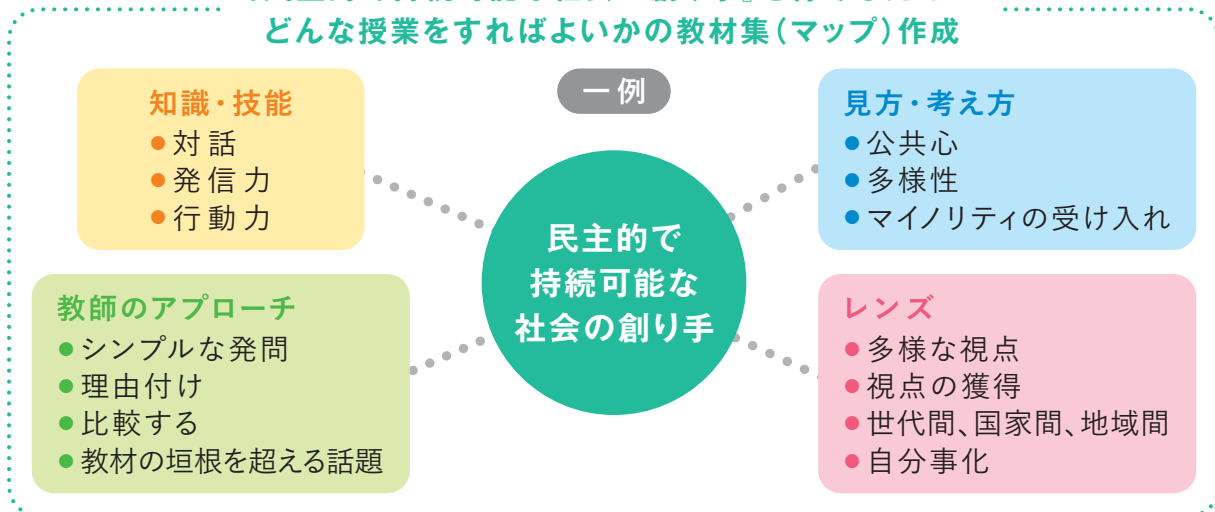
- 民主主義を「多数決」だけでなく、多様性や対立を引き受ける営みとして学ぶ教育
- 社会課題を「自分ごと」として捉えられる学校づくり
- 多文化理解・国際理解を通して、他者を知ろうとする姿勢を育てる
- 正解を教えるより、考え続ける力・対話する力を大切にする
- 失敗や挑戦が認められ、互いに価値づけ合える安心な学習環境
- 教科を超え、学校全体で一つのテーマに取り組むプロジェクト型の学び
- 自己肯定感・自己有用感を育む人間関係づくり

民主的で持続可能な社会の創り手を育てるために、どのような授業を行うべきか

先生方の意見

- 「自分ならどうするか」「自分はどうか考えるか」を問う授業
- 社会の課題を身近な生活と結びつけて考える授業
- 正解のない問いに向き合い、モヤモヤを大切にする授業
- 生徒が話し合い、考え、決め、行動する時間を多くもつ授業
- 多様な意見や価値観に触れ、対立や矛盾も経験する授業
- 他者の立場に立って考える比較・分析・対話のある授業
- 教師は教える人ではなく、対話を支えるファシリテーターとして関わる授業

『民主的で持続可能な社会の創り手』を育てるために どんな授業をすればよいかの教材集(マップ)作成



派遣国を混合にし、
校種別に分かれて、
マップを作成しました!

2025 年度 JICA 教師海外研修メンバー



[タンザニアチーム]

研修をふりかえって



有賀 早也香

もともと私は、自信のないことには挑戦しない性格でした。しかし今回のタンザニア研修で、モチベーションの高い仲間や現地で活動する方々と出会い、大きな刺激を受けました。自分の考えや価値観の違いに触れる中で、挑戦することそのものに意味があり、そこから多くを学べるのだと気づきました。今は、自分で限界を決めてしまうのではなく、まずは一步踏み出してみようと思っています。たとえ失敗しても、その経験から学び、次につなげていく姿勢を大切にしたいです。この研修は、自分の可能性を広げ、挑戦することの楽しさを実感できた貴重な機会でした。これからも新しいことに挑戦し続け、その過程を楽しめる自分でありたいと思います。

井土 恵美里

国に対する先入観や固定観念が変化し、より俯瞰的に社会を見られるようになりました。また、生徒の発言を通して、国語科として、新しく「社会を捉える視点」や「作品を読解する視点」を手に入れることができたと思います。それにより、1つの教材をより多くの視点から見るができるようになったと感じています。

小説を読解する際には、「時」と「人」と「場」が異なれば、同じ出来事を経験しても感じ方は異なるので、「自分なら」という視点を捨てましょう」と伝えています。国際理解をする上で同様に、自分の視点にとらわれることなく、国・個人を理解する姿勢が必要であると学びました。



北村 望

初回の研修から、現地タンザニアでの経験、そして最後の研修までを通して、自分の考えは積み上がり、壊され、また積み上がることを繰り返してきたように感じています。研修や現地での体験、そして他の先生方の意見に触れる中で、せっかく自分なりに考えて積み上げたものが崩され、「別の視点もあったのではないか」と気づかされる場面が何度もありました。しかし、一度壊されたあとに積み上げ直すときには、それまでにはなかった新しい視点や価値観が加わっていたように思います。こうして壊し、積み上げ直す過程こそが、「その時々最適解を更新していく」ということなのだと感じました。これからも変化を恐れず、学びながら自分の考えを更新し続けていきたいと思っています。

澤田 将智

昨年度の研修を踏まえて、現時点で自分の変化をあまり実感できていない節があります。なるほどなるほどそういう考え方もできるなあっていう感じです。昨年度は教え込む授業から教え込まない授業にシフトしたことが大きな変化だと考えています。考えさせる授業の重要性は改めて現在も感じているところです。

今年度も多くの先生方から学びを得て、新しい考え方を吸収しながら、自分が変わる材料を集めています。夏の時点で、自分は変わりたいけれども変わらなくてもいいかもしれない、と話した記憶があります。まだまだ柔軟な思考力が足りないの、これが正解！と考えすぎるところを見直して自由な発想で教育に向き合えたら良いのかもしれない。





執行 稜

日々の生活の中で世界が身近になった。何事も「自分ならどうするか?」と変換して考えることができるようになったおかげで、他者理解をしようとする気持ちが強くなった。

松本 あゆみ

変容途中であると思う。今回の研修を通じて様々な学びを得ることができた一方で、自分の変わらない価値観に気づくことができた。



田中 利奈

タンザニアは遠い国だと思っていた。実際に行ってみて、確かに2日かかって遠かったけれど、遠く感じなかった。また、他国の人と日本人は違うと思っていた。でも、実際にタンザニアの人々に会って、話して、何が違うのか分からなかった。そこにいたのは「同じ人」だった。そういうことを児童に伝えたいのに、授業にするといつも「課題」に目を向けてしまい、それを題材にした授業にしてしまう。これからは、研修でみなさんから学んだように、もっと体験的な授業を取り入れ、児童を外国と近づけて、児童が実感をもって「知る」種まきをしていきたい。

堀越 日南子

教師というキャリアに思い悩み始めたタイミングで、本研修に参加する機会をいただきました。そのような中で、タンザニアの人々や国際協力に情熱溢れる方々との出会いのお陰で、教師・授業という正解のない姿・形に対して最適解を更新し続けることは、楽しい!面白い!と実感できる日々に移り変わりました。教師だからこそ生徒とともにできることを今後も追い求め続けたいです。



水島 一真

この一年間で、私の価値観や世界との向き合い方は大きく変わりました。JICA の研修で多様な考えに出会い、子どもや教材との向き合い方を見つめ直す中で、変わることを楽しさを感じました。そして何より、「一人ではない」と思えたことが大きな支えでした。

これから北陸でも、自分から中心となり、周りを巻き込みながら歩んでいきたいと思えます。

渡邊 大介

みんなでやってみる、みんなで行ってみる、みんなと話してみることで、一人では得られなかった思考があったと感じました。



南沢 青和

わからないことやモヤモヤはすぐに解決しなければいけないものではなく、経験を通して楽しむものだという認識に変わりました。

自分だけで悩むのではなく、子どもと授業を通して一緒に悩んだり、先生たちと教材作りで悩んだりを積み重ねていくことも意味のある時間で、答えが出るまで悩み続けていいんだなと思えるようになりました。

綿貫 誠

自身の変容(これまで、これから)言語グループの活動を通して、国際理解教育において「言語」の重要性を痛感した。これまでは、他教科ではあるが、英語の優位性を学校教育の中で生徒に問うてきた。しかし、この1年間の中で様々な言語と触れ合うことができた。特にタンザニアではスワヒリ語を用いて現地で心のもった交流を行うことができた。歴史の授業でも言語を取り扱った授業展開を行った。これからも言語を取り扱った授業と地歴公民科の授業をブレンドして興味深い授業をつくっていきたい。



研修をふりかえって



浅野 恭子

自身の中に潜んでいたアンコンシャスバイアスやマイクロアグレッションに気づき、対話が相互理解だけでなく、安心感の醸成や多様な視点の広がりを生むことを実感した。正解が一つに定まらないからこそ、迷いや疑問が生じたときには相手を尊重しながら尋ね、互いを思いやって「どうしたの？」と声をかけ合える関係性を大切にしたい。学び続ける姿勢を軸に、教えこむのではなく生徒と一緒に考える機会のある授業を行い、思考や感情がゆっくり育つ余白のある時間を意識的に築いていきたい。



太田 祥子

みんなで議論して、共同作業をする楽しさと大変さを体験できた。この面倒な過程は、民主的な社会を大人として創ることに、そのままつながっていくと思う。

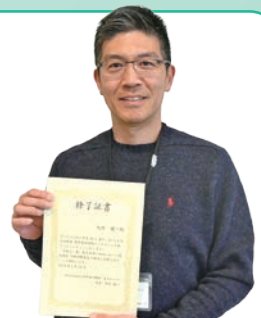
木谷 隆太郎

地域を見て感じたことを共有すること、協力して授業を作り上げること、生徒を信じて任せること。今後も好奇心を持って学んでいきたいと思います。



大野 健一

単なる一過性の旅行経験では得られない重要な1年間になりました。現地では病に倒れましたが、そのことからイスラムの考え方、人と人とのつながりなども学ぶことが出来ました。また、私は行くことが決まって6月からベンガル語を勉強し始めました。ベンガル語を学び、多くをベンガル語に学びました。これからも一学習者としてバングラデシュおよびベンガル地域とつながっていかれたらと思います。



清水 歓奈

校種、教科の異なる先生方と同じゴールに向かって対等に議論することの難しさ、楽しさを感じることができました。そしてその過程を経るすばらしいものができあがる喜びを感じました。「正解のない問いをともに生きる」これからの社会で求められる力そのものを、この教海研で養ってきたように思います。もやもやを常にもって自分の価値観、授業をブラッシュアップしていきたいです。

鶴岡 美沙

この一年を通して、一番の変容は見方・考え方が広がった事だと思います。多文化共生とはどこか遠い国の話ではなく、明日私達の目の前にいるクラスの子供達と一緒に考えていくべき身近な課題であり、今後もずっと考え続けていく必要があることだと感じました。この研修を通して、問い・モヤモヤを持ち、考え続けることが楽しいと思えるようになりました。





大槻 研

自分自身の考えや想いを素直な言葉にすることで、相対化し、自身のエゴに気付くことができた。普段学校で公民科は自分一人だけ、アドバイスをもらったり議論したりする機会はなかなかない。素直に意見をぶつけ合い想いをさらけ出すことで、最適解を更新し続ける土壌を持てた。

萩原 英輝

時間の使い方は自分の命をどう使うかということ。正解のない問いについて考え、議論しあうことで自身の最適解を更新し続けることができる。自分が今まで培ってきたやり方を1度崩して再考、再構築することができる。ある程度経験値のある教員にとっては、このような機会は貴重だと感じました。

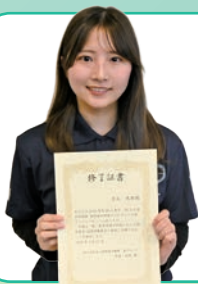


西家 久美子

研修でバングラデシュを訪れ、これまで知らなかった世界に触れる貴重な経験をしました。分からないことにすぐ答えを求めてしまいがちだった自分も、考え続けながら経験そのものを楽しむ大切さに気づきました。他校種や専門知識を持つ先生方との話し合いを通して、自分の考えを深め、多様な視点や新たな学びに出会える楽しさを実感しました。また、現地の教育や生活の現実を知ることで、子どもたちに伝えたい世界の広さや多様性についても考える機会になりました。今後は、こうした経験や気づきを子どもたちや教職員と共有し、互いを尊重しながら学びを広げていきたいです。さらに、同じ思いを持つ仲間存在に心強さを感じ、学び続ける姿勢を大切にしていきたいです。

山本 有起

初めに感じていたモヤモヤ・ワクワクを通して、自分自身の世界への見方の変化を改めて感じました。1年前、私は途上国は貧しい、大変だという考えを持っていました。ただ、その中に支援が必要であるという考えが頭の片隅にありました。実際に事前研修、現地での研修、事後研修を通して「何を豊かさと感じるか」はその国や人によっても決して一緒ではないということを感じました。私が、固定概念で思っていることはただ私の主観であり、その現状に置かれている人からしたら全く異なった考え方を持っているのだと思いました。他者理解をすることこそが、異文化理解そして国際理解教育に結びついているのだと感じる1年となりました。



吉元 恵那

特別支援学校に勤務していると、生徒の障害特性に合わせた特別支援教育としての専門性が求められます。「特別支援学校における国際理解教育」という視点で実践を考え、実施していた部分が大きかったのですが、実際に様々な校種の先生方の授業実践例を聞き、特別支援教育だけでなく視野を広げて国際理解教育について学ばなければならないと感じました。来年度は他校種の国際理解教育、探究での実践も含め幅広く勉強したいです。

渡辺 和宏

この研修に参加して、自分で考えていたことをいい意味で揺すられたり崩されたり、壊されたりしました。そのたびに考え直し、自分を見つめ直すということをしてきました。長らくこのようなことをしてこなかったなとふと気がつき、錆びていた自分にここのメンバーや関係者の方が潤いを与えてくれたように思います。それが原動力となって1年間走り続けてこられたんだと思います。このことによって生活のなかでも今までの見方や考え方をもう一度見つめ直し、新たな捉え方をするようになったり、考える時間が増えました。また、子供達から、外国には「〇〇がないから」と、自分の生活を中心にしたものから何かを引き算した考えだったものが、外国には「〇〇があるから」という、自分たちの日常や当たり前を超えたプラスのものが外の世界にはあるという変容が見られると同時に、自分も明確には気づけていなかった視点を教えられハッとさせられました。



11

アドバイザーの先生達から

佐藤 真久

東京都市大学教授（JICA 東京 教師海外研修アドバイザー）



「正解のない問いは解くのではなく、問いを抱えながら状況を見続け、自分の考えを検証し続け、他の人たちとコミュニケーションし続け、時々最適解を更新し続けることが求められます。」という言葉の意味を、1年の研修プログラムへの参加を通して理解を深めたことと思います。関わる仲間を異質な他者として認識し、活かすことができれば、正解のない状況を愉しみ、自分の正解にこだわることから生じる分断を乗り越えることにつながるでしょう。これからもアンテナとコミュニケーションを大切に、VUCA 社会に向き合っていっていただきたいです。

白水 始

国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 部長



教育には光が必要です。どれだけ暗い世の中／暗くなりそうな世の中でも、教育は人々の心に光をともしものになってほしいと願っています。それは学校という場—あるいはそこがどこであれ学びの場—が、ほっとできる明るい場所であってほしいというだけでなく、そこで学んだ子供たちが将来、明るく素直にたくましく考えることができる大人に育ってほしい、ということでもあります。海外研修は、日本と外国の文化や社会、人々の違いを見つけに行く旅でした。そして、先生方の授業は、その違いを知らない子供たちと知った後の子供たちの違いをつくり出す旅でした。でも、その先にはきっと、人々の考え方や感じ方がこれだけ違えども、何か共通するもの、共有できるものが人々の心にはあるのではないかと探しに行く旅が始まると思います。それが世界を善い方向へと導く光であってほしいと願っています。

畑 文子

教育環境デザイン研究所 研究員



現地での出来事や思いは、計り知れないほど大きいものなのだろうと、毎年先生方を世界各国へ送り出しながら、頼もしくも羨ましくも感じていました。そして今年は、先生方がガッツリ持ち帰ってきた宝物を少し分けていただいて、授業のデザインの種を蒔く研修が出来たことをうれしく思います。地域、校種が異なるそれぞれの土壌で、さまざまな授業の「型」を経由して、先生方の感動が芽を出し茎を伸ばし、教室中に広がる大きな花となることを信じています。



JICA 開発教育教材案内

JICA 開発教育教材一覧

子どもたちが世界の現状や課題、国際協力などについて知り、考え、自分たちにできることを探するために役立つ開発教育・国際理解教育のための JICA 教材をご紹介します。HP からダウンロードしたり、ものによってはご提供するなど、無料で活用いただけます。詳しくは、各ホームページをご覧ください。

地球ひろば

<https://www.jica.go.jp/cooperation/learn/material/index.html>



SDGs (持続可能な開発目標) を学べる教材



カードやすごろく、実践集など授業に活用できる教材やヒントがたくさん!



SDGsを学ぼう、SDGsで学ぼう!



JICA地球ひろば作成のSDGs関連教材を1冊にまとめた教材ガイドブック (DVD付)



授業で使えるショート映像集



授業でそのまま活用できるアクティブラーニング用の映像教材



「共につくる 私たちの未来」



SDGsの基本を、日本の国際協力や各国の子どもたちの紹介



つながる世界と日本



途上国と日本とのつながり、世界共通の目標「SDGs」や国際協力について、クイズを交えながら分かりやすく紹介



JICAで学ぶ世界の課題

—JICA広報誌を活用して—



JICA広報誌を活用しやすいパワーポイント教材化
テーマは「水」「栄養」「DX」
※活用の手引き有



国際理解教育実践資料集



学習のポイントや内容等を分かりやすく解説する員用ページと、コピーして配れる生徒向けページ有り
★SDGsワーク掲載



学校に行きたい!



学校に行きたいけど行けない開発途上国の子どもたちの問題を知り、国際協力について考えることができるパンフレット



ぼくら地球調査隊(漫画で学ぶ、地球規模の課題)



16,000校の小・中学校で掲載された「産経ペイドン」プリシティ(通称:壁新聞)をマンガ教材
【テーマ】
環境、教育、食料、水、保健医療



集まれ!地球の教室



世界の様々な地域や課題について、クイズやワークシートを使って子どもたちにも分かりやすく説明



JICAの仕事



中学生や高校生向けに、JICA/国際協力の仕事内容を分かりやすく紹介しているパンフレット



栄養ワークショップ教材 買い物ゲームで学ぶ



世界の栄養問題に対する意識を高めていただけるよう、楽しみながら世界の栄養問題が学べる「買い物ゲーム教材」



JICA 東京センター オリジナル

JICA は全国に 15 の拠点を持ち、国際理解に関わる教員研修や、途上国からの研修員受入れ、市民の皆さまが国際協力を知り、一歩近づくためのプログラム等実施していますが、東京センターは東京・埼玉・千葉・群馬・新潟・長野を管轄する国内最大の拠点です。皆さまに国際協力を伝える活動の一つに、国際協力関係者の協力を得て作成したオリジナル教材があります。

その中でも特に人気の四つを紹介します。他のものは以下サイトをご覧ください。
明日の授業に使えるネタに出会えるかも!?

<https://www.jica.go.jp/domestic/tokyo/activities/kaihatsu/material/index.html>



総合的な学習(探究)の時間のアイデア集



総合的な学習(探究)の時間で、国際理解教育・開発教育・ESDをどう進められるか、学習指導案・ポイントをまとめたアイデア集です。



世界の教室から



JICA海外協力隊として世界中のさまざまな「教室」で活動してきた隊員の皆さんからよせられた写真とメッセージが掲載されています。



逆さ地図



見慣れている世界地図、いつもと違う視点で逆さから見ると、何か新しい発見があるかも...



モノはどこからきている?カードゲーム



途上国との相互依存を楽しく実感できる教材



13

フォトランゲージの実施法

「フォトランゲージとは」

「フォトランゲージ」とは、写真を題材に写された土地や人々の様子から、その土地の文化的特徴や暮らしの様子をグループで想像し、話し合うなどして、写真を「読み解く」なかから気づき・発見を得る参加型のアクティビティです。

実施の手順と留意点

STEP 1

写真を観察する

まずは一人ひとりが写真をじっくり観察し、写っているものに関して気づいた点や、疑問に感じた点などを書き出します。観察は十分に時間をとりましょう。

STEP 2

観察結果の共有

写真に写った国や、写った人が何をしているかなどには一定の答えがありますが、答えが間違っている場合でも、その背景にあるものを深掘りすることで無意識の先入観に気づきます。

「フォトランゲージ」の効果

- ① 共感的な理解や想像力を高める
- ② ものごとの多様な捉え方に気づく
- ③ 無意識のうちに持っている偏見や固定概念に気づく
- ④ メディアに対し批判的な見方ができるようになる

参考：DEAR 開発教育協会ホームページ <https://www.dear.or.jp/activity/1730/>

おわりに

2025年度は、2024年度の引き続き JICA 東京と JICA 北陸の合同開催となり、1都7県から多くの志高い現職教師とともに、タンザニア国、バングラデシュ国への派遣研修を組み入れた1年間のプログラムを実施することができました。

アメリカ第一主義への回帰（トランプ・ドクトリン）や、ウクライナや中東情勢の悪化、対中対立の激化など、大きく変わるグローバル社会は、私たちに大きな経験と学びをもたらしました。グローバル感染症、ロシアによるウクライナ侵攻、気候変動、高齢化、エネルギー問題などに共通して言えることは、多くの要因が複雑にからまった“複雑な問題”であるということです。そして、地球環境問題、貧困・社会的排除問題、人間居住、グローバルな経済、健康、地政リスク、技術リスクなどの多くの問題が相互に作用しながら深刻化してきており、先進国と途上国の相互作用も深まりつつ、国の文脈を超えたグローバルな視座・視点で捉えることができます。ますます重要となってきました。

このような状況のなかで、本年度は、多様な世界のものの見方、グローバルなものの見方（境界とまたぐ、境界がなくなる、世界と地域がつながる、グローバルリスクの連動性、画一化、普遍化、多様化など）に関する研修を強化しました。さらには、グローバルな視点を養うために、地域、校種、派遣国を超えた参加教員の議論を通して、横断的テーマとした混成チームを編成しました。

幸いにも、今年度実施された、タンザニア国、バングラデシュ国への派遣経験もさることながら、関係する団体や学校の協力を受けることができただけでなく、これまでに増して相互に議論をする時間を増やしたことにより、大変充実した研修となりました。地域・校種・派遣国を超えた横断的テーマに基づく混成チームは、帰国後の授業づくりについても議論をし合い、授業実践にも互いに参加することを通して、学び合いを継続しました。新学習指導要領では、「持続可能な社会の創り手」という用語が多々明記されているだけでなく、「何ができるか」や「知っていること・できることをどう使うか」といった資質・能力の重視、主体的・対話的で深い学びやカリキュラム・マネジメント、社会に開かれた教育課程について強調がなされています。近年のグローバル化の時代、これからの地球市民性と混成文化の時代、VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代において、本研修プログラムに参画された教員自身がこの経験を活かし、思い先行・びっくり体験報告に終わらない取組として、同僚の教員らや地域の方々とともに、新たな次元で、学校現場における授業実践、学習活動の充実に役立てていただけることを切に願う次第です。

2025年度教師海外研修アドバイザー

東京都市大学大学院 環境情報学研究所
研究教授 佐藤 真久